

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第3集

古稻荷遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管埋設工事地内

平成5年9月

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会
関城町教育委員会

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第3集

こ いな り
古稲荷遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管理設工事地内

序

西に鬼怒，東に小貝の二大河川に挟まれ，小貝川の後方に聳える紫峰筑波を仰ぎ見る我が関城町は，水と緑に恵まれ気候温暖な環境に育まれた郷土であります。さらに祖先より受け継いだ町民の誇りともいえる埋蔵文化財にも恵まれた地域でもあります。代表的なものとして国指定史跡の関城跡をはじめ県指定史跡の船玉古墳などがあり，このほかにも100方所以上の遺跡が確認されております。この度発掘調査をおこなった古稲荷遺跡も，これらの貴重な埋蔵文化財のひとつであります。

現在，水資源開発公団が工事をおこなっている霞ヶ浦用水基幹線水路埋設事業に伴う一連の埋蔵文化財発掘調査のうち，関城町域においては，仲道遺跡，井上城遺跡がすでに終了し，今回の古稲荷遺跡が3ヶ所目の遺跡で，霞ヶ浦用水事業関連の発掘調査では最後の遺跡でもありました。

発掘調査の成果としては，奈良時代から平安時代の初期にかけての集落遺跡であることが確認され，これらの年代に該当する遺構と遺物が多数検出，出土しました。また，この年代以外では縄文土器片や石器類も出土し，貴重な埋蔵文化財を得ることができました。

今回の発掘調査は，送水管理設という目的から調査区域が限定されていたため，遺跡の全容を完全に把握するまでには至りませんでした。発掘調査の成果から古稲荷遺跡の重要性を新ためて認識するとともに今後の保存，活用をはかっていきたいと思っております。

最後になりましたが，今回の発掘調査にあたりまして，全面的なご理解とご支援をいただきました水資源開発公団をはじめとする関係諸機関各位と現場において猛暑の中砂塵とたたかいながら，発掘作業をおこなっていただいた玉井輝男遺跡発掘調査団長をはじめ団員の方々，さらに地元関本地区，河内地区，黒子地区の協力員各位の労を多とし心から感謝申し上げますとともに挨拶といたします。

平成5年9月1日

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会長
関城町教育委員会教育長

館野俊夫

例 言

- 1 本書は、水資源開発公団の委託を受けた関城町教育委員会が、関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会および古稲荷遺跡発掘調査団を組織し、関城町関本下字若宮・古稲荷に所在する古稲荷遺跡のうち、霞ヶ浦用水事業送水管理設工事区域内の発掘調査結果をまとめた報告書である。
- 2 発掘調査は、平成4年4月23日より平成4年10月13日まで野外調査作業を実施し、整理作業は平成4年12月1日より平成5年3月31日までおこなった。
- 3 発掘調査は玉井輝男が担当し、報告書の執筆は第1章から第6章および終章は玉井がおこない、遺物観察表は滝坂滋が執筆した。
- 4 図面資料と出土品の整理及び報告書の作成は以下のメンバーがおこなった。玉井輝男、滝坂滋、福田宏、小島栄子、森幸三、勝沼賢、国府田君子。
- 5 発掘調査から報告書作成に至るまで次の諸機関ならび諸氏の御協力、御指導を賜った。記して感謝の意を表したい。

茨城県教育庁文化課、茨城県立歴史館、茨城県西教育事務所、水資源開発公団、猿島町教育委員会、千代川村教育委員会、青木武文氏、赤井博之氏、大谷昌良氏、金子哲男氏、瓦吹繁氏、坂入正夫氏、土生朗治氏。

- 6 調査会、調査団の組織と発掘調査作業に従事した諸氏は以下のとおりである。(敬称略)

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会役員

会 長	齊 藤 昭 館 野 俊 夫	前関城町教育委員会教育長 (平成4年9月30日退任) 関城町教育委員会教育長 (平成4年10月1日就任)
副会長	箱 守 重 造	関城町文化財保護審議会長
理 事	大 木 辰 夫 玉 井 輝 男 青 木 武 文 水 見 隆 一 坂 入 正 夫 佐々木 隆 之 鏡 日 出 夫 上 形 秀 夫 中 川 郁 夫	関城町教育委員会教育次長 古稲荷遺跡発掘調査団長 関城町文化財保護審議委員 関城町文化財保護審議委員 関城町文化財保護審議委員 水資源開発公団霞ヶ浦用水建設所副所長 水資源開発公団霞ヶ浦用水建設所用地課長 若宮区長 関城町産業課長
監 事	大 木 辰 夫 鏡 日 出 夫	関城町教育委員会教育次長 水資源開発公団霞ヶ浦用水建設所用地課長
幹 事	築 健 司 猪 瀬 操 大 木 修 一	関城町教育委員会生涯学習課長 関城町教育委員会生涯学習課長補佐兼社会教育係長 関城町教育委員会生涯学習課社会教育係

古稲荷遺跡発掘調査団員氏名

調査団長 玉井 輝男

調査員 滝坂 滋

補助調査員 福田 宏, 井坂 英雄, 小島 栄子, 森 幸三

事務 国府田君子

作業協力員

飯島 大三, 糸沢 文二, 植木 定吉, 鶴川 重雄, 小貫 常知, 勝沼 賢, 菊池 桂治

佐藤もと子, 杉山 虎三, 瀬川てる子, 滝田 芳雄, 津久井米子, 長沢 基夫, 箱守 照也

林 千恵子, 星野 鈴子, 山口 恒男, 山口 藤子 (敬称略)

7 写真図版の遺物写真(土器)の番号は遺構番号と実測図の整理番号とが対応する。(P L 69～P L 88)

石製品, 石器, 鉄製品の写真で遺物の番号を示す数字は実測図の図版番号と遺物の整理番号を示す。(P L 89～P L 99)

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 調査方法	13
第1節 発掘調査地区の設定	13
第2節 遺構確認	13
第3節 遺構調査	14
第4節 基本土層	14
第3章 遺構・遺物の記載方法	17
第1節 遺構の記載方法	17
第2節 遺物の記載方法	18
第4章 位置と環境	23
第1節 遺跡の概観	23
第5章 調査成果	25
第1節 遺構と遺物	25
(1) 竪穴住居跡 (S I)	25
(2) 掘立柱建物跡 (S B)	137
(3) 溝遺構 (S D)	139
(4) 横列遺構 (S A)	140
(5) 土坑遺構 (S K)	140
(6) 不明ピット群 (S X)	156
第2節 遺構外出土遺物	
(1) B・C区出土土師器、須恵器	162
(2) B区出土鉄、石製品	162

(3) B・C区出土石器	165
(4) C区出土鉄、石製品	166
(5) B・C区出土縄文土器	166
(6) B・C区出土陶器、磁器	173
(7) 出土遺物観察表	174
第6章 まとめにかえて	200
第1節 遺構について	200
第2節 竪穴住居跡の掘り方面について	200
終章 むすび	203

挿 図 目 次

第1図	B調査区基本土層図	15	第40図	S I - 07出土遺物実測図(1)	60
第2図	C調査区基本土層図	15	第41図	S I - 07出土遺物実測図(2)	61
第3図	(a) 遺構の実測部位と名称	18	第42図	S I - 07出土遺物実測図(3)	61
	(b) 遺物の実測部位と名称	19	第43図	S I - 07掘り方面実測図	62
	(c) 遺物の実測部位と名称	20	第44図	S I - 08実測図	63
第4図	間城町城遺跡分布略図	21	第45図	S I - 08カマド実測図	64
第5図	古稲荷遺跡周辺の遺跡分布図	24	第46図	S I - 08遺物分布図	65
第6図	S I - 01実測図	26	第47図	S I - 08出土遺物実測図(1)	66
第7図	S I - 01カマド実測図	27	第48図	S I - 08出土遺物実測図(2)	67
第8図	S I - 01遺物分布図	28	第49図	S I - 08出土遺物実測図(3)	68
第9図	S I - 01出土遺物実測図(1)	29	第50図	S I - 08出土遺物実測図(4)	68
第10図	S I - 01出土遺物実測図(2)	30	第51図	S I - 08掘り方面実測図	69
第11図	S I - 01出土遺物実測図(3)	31	第52図	S I - 09実測図	70
第12図	S I - 01出土遺物実測図(4)	32	第53図	S I - 09カマド実測図	71
第13図	S I - 01出土遺物実測図(5)	32	第54図	S I - 09遺物分布図	72
第14図	S I - 02実測図	34	第55図	S I - 09出土遺物実測図(1)	73
第15図	S I - 02カマド実測図	35	第56図	S I - 09出土遺物実測図(2)	74
第16図	S I - 02遺物分布図	36	第57図	S I - 09出土遺物実測図(3)	75
第17図	S I - 02出土遺物実測図(1)	37	第58図	S I - 09出土遺物実測図(4)	76
第18図	S I - 02出土遺物実測図(2)	38	第59図	S I - 09掘り方面実測図	77
第19図	S I - 03実測図	39	第60図	S I - 10実測図	78
第20図	S I - 03カマド実測図	40	第61図	S I - 10カマド実測図	79
第21図	S I - 03遺物分布図	41	第62図	S I - 10遺物分布図	80
第22図	S I - 03出土遺物実測図(1)	42	第63図	S I - 10出土遺物実測図	80
第23図	S I - 03出土遺物実測図(2)	43	第64図	S I - 10掘り方面実測図	81
第24図	S I - 03出土遺物実測図(3)	44	第65図	S I - 11実測図	82
第25図	S I - 04実測図	45	第66図	S I - 11遺物分布図	83
第26図	S I - 04遺物分布図	46	第67図	S I - 11出土遺物実測図(1)	84
第27図	S I - 04出土遺物実測図(1)	47	第68図	S I - 11出土遺物実測図(2)	85
第28図	S I - 04出土遺物実測図(2)	48	第69図	S I - 11出土遺物実測図(3)	86
第29図	S I - 04出土遺物実測図(3)	49	第70図	S I - 11出土遺物実測図(4)	87
第30図	S I - 04出土遺物実測図(4)	50	第71図	S I - 11掘り方面実測図	88
第31図	S I - 05・06実測図	51	第72図	S I - 12実測図(1)	90
第32図	S I - 05カマド実測図	52	第73図	S I - 12実測図(2)	91
第33図	S I - 05・06遺物分布図	53	第74図	S I - 12カマド実測図	92
第34図	S I - 05出土遺物実測図(1)	54	第75図	S I - 12遺物分布図	93
第35図	S I - 05出土遺物実測図(2)	55	第76図	S I - 12出土遺物実測図(1)	94
第36図	S I - 06出土遺物実測図	56	第77図	S I - 12出土遺物実測図(2)	95
第37図	S I - 07実測図	57	第78図	S I - 12出土遺物実測図(3)	96
第38図	S I - 07カマド実測図	58	第79図	S I - 12出土遺物実測図(4)	97
第39図	S I - 07遺物分布図	59	第80図	S I - 12掘り方面実測図	98

第81図	S I-13実測図・カマド実測図……………99	第116図	S I-19実測図・遺物分布図……………133
第82図	S I-13遺物分布図……………100	第117図	S I-19出土遺物実測図……………134
第83図	S I-13出土遺物実測図(1)……………101	第118図	S I-20実測図・遺物分布図……………135
第84図	S I-13出土遺物実測図(2)……………102	第119図	S I-20出土遺物実測図……………136
第85図	S I-14実測図……………103	第120図	S B-01実測図……………138
第86図	S I-14遺物分布図……………104	第121図	S D-02実測図……………139
第87図	S I-14出土遺物実測図(1)……………105	第122図	S A-01実測図……………141
第88図	S I-14出土遺物実測図(2)……………106	第123図	S K-01・02実測図、 S K-01出土遺物実測図……………142
第89図	S I-14出土遺物実測図(3)……………106	第124図	S K-03・04実測図……………143
第90図	S I-15実測図(1)……………107	第125図	S K-05・15・06・07・08実測図、 S K-08出土遺物実測図……………145
第91図	S I-15実測図(2)……………108	第126図	S K-09・10実測図……………147
第92図	S I-15遺物分布図……………109	第127図	S K-11・12・13・14実測図……………149
第93図	S I-15出土遺物実測図(1)……………110	第128図	S K-16・17・19実測図……………151
第94図	S I-15出土遺物実測図(2)……………111	第129図	S K-21・22・23・24実測図……………153
第95図	S I-15出土遺物実測図(3)……………112	第130図	S K-25・26・27実測図、 S K-27出土遺物実測図……………155
第96図	S I-15出土遺物実測図(4)……………113	第131図	S K-28実測図……………156
第97図	S I-15掘り方面実測図……………114	第132図	S X-01実測図……………157
第98図	S I-16実測図・遺物分布図……………115	第133図	S X-02実測図……………158
第99図	S I-16出土遺物実測図(1)……………116	第134図	S X-03実測図(1)……………160
第100図	S I-16出土遺物実測図(2)……………117	第135図	S X-03実測図(2)……………161
第101図	S I-16出土遺物実測図(3)……………118	第136図	B・C区出土土師器、須恵器……………163
第102図	S I-17実測図……………119	第137図	B区出土鉄・石製器……………164
第103図	S I-17カマド実測図……………120	第138図	B・C区出土石器……………165
第104図	S I-17遺物分布図……………121	第139図	C区出土鉄・石製品……………166
第105図	S I-17出土遺物実測図(1)……………122	第140図	縄文土器(1)……………167
第106図	S I-17出土遺物実測図(2)……………123	第141図	縄文土器(2)……………168
第107図	S I-17掘り方面実測図……………124	第142図	縄文土器(3)……………169
第108図	S I-18実測図……………125	第143図	縄文土器(4)……………170
第109図	S I-18カマド実測図……………126	第144図	縄文土器(5)……………171
第110図	S I-18遺物分布図……………127	第145図	縄文土器(6)……………172
第111図	S I-18出土遺物実測図(1)……………128	第146図	縄文土器(7)……………173
第112図	S I-18出土遺物実測図(2)……………129		
第113図	S I-18出土遺物実測図(3)……………130		
第114図	S I-18出土遺物実測図(4)……………131		
第115図	S I-18掘り方面実測図……………132		

付 図 目 次

付図1	古稲荷遺跡周辺地形実測図	付図4	古稲荷遺跡C調査区遺構全体図
付図2	古稲荷遺跡グリット図	付図5	S D-01実測図
付図3	古稲荷遺跡B調査区遺構全体図	付図6	古稲荷遺跡時期別遺構図

写真図版目次

- P L 1 発掘調査区域全景
 P L 2 B調査区全景, S I-01・02全景
 P L 3 S I-03全景, S I-04・05全景
 P L 4 C調査区全景, S I-07・08全景
 P L 5 S I-08・09・10・13全景, S B-01・S A-01・S D-02
 P L 6 S I-11・15・16・S A-01全景, 上空よりみた古稲荷遺跡
 P L 7 (1)発掘前の古稲荷遺跡, (2), (3)
 P L 8 (1)発掘前のB調査区, (2), B調査区の試掘調査坑
 P L 9 B調査区の試掘調査坑, 表土除去後のB調査区, C調査区の試掘調査坑
 P L 10 (1)B調査区の遺構確認作業, (2), (3)
 P L 11 (1)B調査区遺構確認後, (2), S X-01確認状況
 P L 12 C調査区(梨畑)抜採後の状況, C調査区試掘作業, C調査区試掘後の状況
 P L 13 (1)C調査区遺構確認後の状況, (2), (3)
 P L 14 (1)S I-01完掘状況, (2), S I-01調査区域内の確認部分
 P L 15 S I-01掘り込み作業, S I-01・02拡張部分, S I-01拡張後の掘り込み作業
 P L 16 S I-01遺物出土状況, S I-01カマド遺物出土状況, S I-01遺物出土状況(1)
 P L 17 S I-01遺物出土状況(2), (3), (4)
 P L 18 (1)S I-02完掘状況, (2), S I-02調査区域内確認状況
 P L 19 S I-02掘り込み作業風景, S I-02調査区域外拡張作業, S I-02拡張後の作業風景
 P L 20 S I-02カマド, S I-02貯蔵穴のセクション, S I-03完掘状況
 P L 21 S I-03調査区域内の確認状況, S I-03掘り込み作業, S I-03拡張部分の確認状況
 P L 22 (1)S I-03遺物出土状況, (2), (3)
 P L 23 S I-03カマド内の遺物出土状況, (2), (3)
 P L 24 S I-04完掘状況, S I-04掘り込み作業, S I-04遺物出土状況
 P L 25 S I-05完掘状況, S I-05確認状況, S I-05遺物出土状況
 P L 26 S I-05カマド完掘状況, (1)S I-05貯蔵穴遺物出土状況, (2)
 P L 27 S I-07完掘状況, S I-07南壁から検出したピット, S I-07セクションベルト設置状況
 P L 28 S I-07遺物出土状況, S I-07カマド切開状況, (1)S I-07遺物出土状況
 P L 29 (2)S I-07遺物出土状況, (1)S I-07掘り方面, (2)S I-07掘り方面
 P L 30 S I-08完掘状況, S I-08セクションベルト設置状況, (1)S I-08遺物出土状況
 P L 31 (2)S I-08遺物出土状況, (1)S I-08掘り方面, (2)S I-08掘り方面
 P L 32 S I-09完掘状況, S I-09セクションベルト設置状況, S I-09覆土内に掘り込まれたS K-20
 P L 33 S I-09内S K-20の掘り込み状況, S I-091号カマドと遺物出土状況, S I-092号カマド
 P L 34 S I-09貼り床セクションと掘り方面, (1)S I-09掘り方面, (2)
 P L 35 S I-091号カマド出土の差, S I-09遺物出土状況
 P L 36 S I-10確認状況, S I-10セクションベルト設置状況, S I-10完掘状況
 P L 37 S I-11とS I-15の完掘状況, (1)S I-11遺物出土状況, (2)
 P L 38 (3)S I-11遺物出土状況, S I-11カマド出土の差, S I-11カマド内の遺物出土状況
 P L 39 S I-11カマド完掘状況, (1)S I-11掘り方面, (2)

- PL 40 S I-12完掘状況, S I-12セクションベルト設置状況, S I-12遺物出土状況
- PL 41 S I-12カマド切開状況, (1)S I-12カマド内の遺物出土状況, (2)
- PL 42 (1)S I-12遺物出土状況, (2), S I-12掘り方面
- PL 43 S I-13カマドの切開状況と竪穴の完掘状況, S I-13カマド内遺物出土状況, S I-13完掘状況
- PL 44 (1)S I-14完掘状況, (2), S I-14遺物出土状況
- PL 45 S I-15確認状況, S I-15完掘状況, S I-15遺物出土状況
- PL 46 (1)S I-15とS I-11の切り合い状況, (2)
- PL 47 S I-16確認状況, S I-16完掘状況, (1)S I-16遺物出土状況
- PL 48 (2)S I-16遺物出土状況, (3), S I-17完掘状況
- PL 49 S I-17セクションベルト設置状況, S I-17遺物出土状況, S I-17カマド切開状況
- PL 50 S I-17貯蔵穴, (1)S I-17掘り方面, (2)
- PL 51 S I-18完掘状況, S I-18セクションベルト設置状況, (1)S I-18遺物出土状況
- PL 52 (2)S I-18遺物出土状況, (3), (4)
- PL 53 (1)S I-18掘り方面, (2), (3)
- PL 54 S I-19・S K-28完掘状況, S I-19完掘状況, S I-19遺物出土状況
- PL 55 S I-20完掘状況, S I-20確認状況, S B-01
- PL 56 (1)S B-01, (2), S D-01周辺
- PL 57 S D-01・S I-08を切っている状況, S D-01確認状況, S D-01試掘坑内
- PL 58 S D-02完掘状況, S D-02確認状況
- PL 59 (1)S A-01, (2)S A-01, (3)S A-01
- PL 60 S K-01, S K-01-02, S K-02
- PL 61 S K-03, S K-04, S K-05, S K-06, S K-07
- PL 62 S K-08, S K-09, S K-10, S K-11, S K-12, S K-13
- PL 63 S K-14, S K-15, S K-16, S K-20
- PL 64 S K-21, S K-23, S K-26
- PL 65 S X-01, S X-03
- PL 66 泉崎遺跡, 切掛遺跡, 南館内東遺跡
- PL 67 南館内西遺跡, 専行寺古墳石室跡, 専行寺古墳石室跡 (右)
- PL 68 東郷遺跡, 桜塚古墳
- PL 69 01-1, 01-4, 01-6, 01-5, 01-8, 01-7
- PL 70 01-10, 01-17, 01-18, 01-19, 01-20, 01-22, 01-23, 01-25
- PL 71 02-1, 02-2, 02-4, 03-1, 03-3
- PL 72 03-2, 03-4, 03-5, 04-1, 04-2
- PL 73 04-3, 04-10, 04-25, 05-1, 05-3
- PL 74 05-4, 05-6, 06-1, 06-3, 07-1, 07-2
- PL 75 07-3, 07-4, 07-5, 07-6, 07-10, 07-11, 07-14
- PL 76 08-1, 08-4, 08-5, 08-10, 08-12, 08-14, 08-17
- PL 77 09-1, 09-5, 09-6, 09-8, 09-9, 09-10
- PL 78 09-12, 09-13, 09-15, 09-17, 09-24, 09-26, 09-27, 09-28
- PL 79 10-1, 10-2, 11-1, 11-5, 11-11
- PL 80 11-7, 11-8, 11-10, 11-14, 11-15, 12-1, 12-2
- PL 81 12-6, 12-10, 12-11, 12-13, 12-18, 12-19
- PL 82 12-22, 12-26, 13-1, 13-4, 13-9, 13-10
- PL 83 13-12, 14-1, 14-2, 14-3, 14-4, 14-5, 14-8
- PL 84 15-3, 15-4, 15-7, 15-12, 15-16, 15-18

- P L 85 16-1, 16-2, 16-3, 16-4, 16-5, 16-7
- P L 86 17-1, 17-2, 17-4, 18-1, 18-3
- P L 87 18-4, 18-5, 19-1, 19-5, 19-6, 19-7, 19-8
- P L 88 20-2, 20-3, 20-4
- P L 89 調査区内出土の石製品・石類(1), 調査区内出土の石製品・石類(2), 調査区内出土の石製品・石類(3)
- P L 90 調査区内出土の石製品・石類(4), 調査区内出土の砥石, 調査区内出土の石製品, 砥石
- P L 91 調査区内出土の石器類(1), 調査区内出土の石器類(2), 調査区内出土の土製品
- P L 92 調査区内出土の貨幣, 調査区内出土の鉄製品(1), 調査区内出土の鉄製品(2)
- P L 93 調査区内出土の鉄製品(3), 調査区内出土の鉄製品(4), 調査区内出土の鉄製品(5)
- P L 94 調査区内出土の刀子, 調査区内出土の鎌, 調査区内出土の斧
- P L 95 第1群, 縄文土器片(1), 縄文土器片(2), 第2群縄文土器片(3)
- P L 96 第3群, 縄文土器片(4), 縄文土器片(5), 第4群縄文土器片(6)
- P L 97 第4群, 縄文土器片(7), 縄文土器片(8), 縄文土器片(9)
- P L 98 第4群, 縄文土器片00, 第5群, 縄文土器片01, 縄文土器片02
- P L 99 第6群, 縄文土器片03, 調査区内出土の陶器・磁器(1), 調査区内出土の陶器・磁器(2)
- P L 100 調査区内出土の陶器・磁器(3)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

当域は、東京から75km圏内にあり、耕地のうち畑地が52%を占める一大畑地帯で、かつ優良農業地域である。しかし、地理的条件に恵まれる反面、年間降水量は約1200mmと少なく、しかも降雨分布が不均一なため、台地上に発達した畑地は粗放で、不安定な生産体系となっている。さらに、水田は地区内河川による水源が乏しくしばしば用水不足を生ずるほか、過湿田が広く分布し、土地基盤の悪条件から土地生産性を低くしている。

これら用水不足を解消するため、昭和38年に茨城県は「県西用水事業計画」を樹立し、本格調査に入った。昭和45年に農林水産省においても、国営直轄調査地区として調査に着手した。さらに、昭和46年には首都圏地域の開発にそなえ、県・市町村の要望によって、水道用水・工業用水を含めた総合用水計画に改められた。昭和50年4月に国営霞ヶ浦用水事業として全体実施計画に着手、また並行して、茨城県が昭和53年7月に「県西用水基本計画」を発表した。昭和54年12月には、「霞ヶ浦用水土地改良区」の設立が認可された。昭和55年3月、水資源開発基本計画区として閣議決定され同年9月19日に事業実施方針が指示され、同年11月14日に事業実施計画が認可された。

霞ヶ浦用水事業は、茨城県西南地域22市町村の経営耕地約75,000haのうち30%にあたる耕地21,600haに対し、畑地かんがい及び水田補水として最大17.76m³/sを補給するとともに、15市町村に対し、最大0.58m³/sを補給するための水道用水供給事業と、13市町村に対する最大1.06m³/sを供給する工業用水供給事業から成っている。

上記の計画を達成するため、公団は、霞ヶ浦湖岸に揚水機場を建設し、霞ヶ浦から鬼怒川に至る基幹線水路として、送水路約21.2kmトンネル14.1km、管水路18.4km、計53.7kmを霞ヶ浦用水事業の一環として施工するものである。このうち、当閘域町において、水資源開発公団は霞ヶ浦水基幹線水路管理設工事としておよそ10.23kmを計画し、昭和63年7月7日付霞ヶ浦水第41号で閘域工区内の路線に係る埋蔵文化財等について照会が閘域町教育委員会に提出された。

これを受けて、閘域町教育委員会は昭和63年8月9日付閘域教委発第343号で、水資源開発公団霞ヶ浦用水建設所長宛てに、同路線計画地に周知の遺跡として、①伸道遺跡、②井上城跡、③裏原遺跡、④古稻荷遺跡の4遺跡が所在しており、その取り扱いについては協議を必要とする旨回答した。

以後、閘域町教育委員会は文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため、起業者の水資源開発公団霞ヶ浦用水建設所と協議を重ねた結果、伸道遺跡、井上城跡、古稻荷遺跡の3遺跡については現状保存が困難であるため、発掘調査による記録保存の措置をとることで合意に達した。

その後、平成元年10月24日に「閘域地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会」が結成され、同年12月18

日から仲道遺跡発掘調査を開始し、同遺跡の調査終了後、平成2年9月10日からは井上城跡の発掘調査に着手し、平成3年10月に終了した。そして、平成4年4月23日から霞ヶ浦用水建設事業開城工区内の3ヵ所目の遺跡である古稲荷遺跡発掘調査に着手した。

第2節 調査経過

古稲荷遺跡の発掘調査は、平成4年4月23日(休)から平成4年10月13日(休)まで実施し、整理作業は平成4年12月1日(休)から平成5年3月31日(休)まで行った。発掘調査(野外調査)の経過は調査作業の進行状況に応じて記述する。

4月23日(休)

本日より古稲荷遺跡発掘調査の準備作業を開始する。現地においてプレハブ事務所、トイレ等を設置し、発掘用機材および遺物類を収蔵するための収蔵庫(納屋)の建築作業を開始する。

4月24日(金)～5月2日(土)

準備作業。収蔵庫建築作業、発掘用機材の運搬(河内公民館より)。B調査区および古稲荷遺跡の発掘前の現況写真を撮影する。調査区域設定のためのグリット杭を設置する。この期間に以上の準備作業をおこない終了する。

5月6日(休)

本日より本調査を開始する。地元作業協力員に対し作業内容の説明と教育委員会担当係長猪瀬操氏のあいさつの後、B調査区の土層確認のための試掘調査を開始する。試掘調査は1辺が2mの正方形区画内を掘り下げ、B調査区には16ヵ所に試掘坑を設置した。

5月7日(休)

午前10時30分より現地において地鎮祭をおこなう。参加者は調査会役員、水資源開発公団職員、調査団メンバー、町教育委員会担当諸氏。

午後の作業は昨日の継続作業で試掘調査をおこなう。

5月8日(金)～5月15日(金)

午前は試掘作業および試掘坑の撮影を実施する。午後はB調査区東側から荒掘り作業を開始する。荒掘り作業はすべて人力による作業をおこなった。荒掘り作業と並行して基準レベル杭を設定する

ための水準測量も同時に実施し、B区およびC区の任意地点に基準杭を設置した。試掘作業および荒掘り作業中に土師器、須恵器の細片が序々に出土しはじめ、とくにB区東側に集中していることが確認された。

5月16日(出)

雨天のため野外作業中止。室内にて実測用紙下図作製（グリット配置図）。

5月18日(閉)

雨天のため野外作業中止。遺物洗浄作業。注記作業、その他必要備品の製作。

5月19日(休)

昨日の雨で地面がぬかっているため野外作業は中止し、昨日同様室内作業をおこなう。

5月20日(休)

午前中、野外作業（遺構確認）をおこなっていたが、途中から雨のため室内作業に切り換える。

5月21日(休)

B区東側の遺構確認作業をおこない、住居跡遺構5軒のほかピット遺構、土坑遺構等を確認する。

5月22日(金)

B区全体の遺構確認作業を終え、清掃の後写真撮影をおこなう。

午後からはS1-01, 02, 03, 05の掘り込み作業を始める。

5月23日(出)

S1-01, 02, 03, 04, 05の掘り込み作業の継続。S1-05の東端より住居跡遺構の一部を確認し、S1-06のナンバーを付番する。S1-01, 02, 03, 04, 05はいずれも半分ほどが調査区域外にわたっていたため完掘できず、資料性を考慮すると部分拡張をおこなうことが好ましいため、水資源開発公団に部分拡張の許可を申請することにした。

5月25日(閉)

S1-04, 06の掘り込み作業および精査をおこなう。B区中央から西側にかけての小ピット群の掘り込み作業をおこなう。

5月26日(火)

S I-01~05までの調査区域外にあたる部分の拡張の許可を得て、拡張部分の荒掘り作業を実施する。午後よりS I-03拡張部分の確認段階の写真撮影をおこなう。

5月27日(休)

S I-01,02の区域外部分の写真撮影をおこない掘り込み作業に入る。S K-01~05まで確認後、付番する。

5月28日(休)

昨夜からの雨のため室内作業。C調査区のグリット杭の設定測量をおこなう。

5月29日(金)

C調査区試掘調査開始。試掘坑および試掘状況の写真撮影。午後からはC区西側から荒掘り作業開始。

5月30日(土)~6月1日(月)

荒掘り作業終了後、遺構確認作業をおこない住居跡はS I-07~16で、溝はS D-01, 02を確認する。

6月2日(火)

B区S I-01~06の精査。C区遺構確認と確認後の写真撮影。S I-01セクション実測。町産業課によるビデオ撮影(ビデオ版町勢要覧)。

6月3日(休)

S I-04精査, S I-01セクション実測, S K-08, 09付番。S I-02セクション実測, B区西側S X-02, 01のピット掘り込み作業をおこなう。

6月4日(木)~6月6日(土)

S I-01, 02セクション実測の後撮影, 記録。C区S I-07, 08, 11の掘り込み精査開始。S I-03, S K-02, 03セクション実測。S I-01, 02セクションベルト除去作業。S I-07掘り込み精査等の作業に終始する。

6月8日(月)

雨天のため野外作業中止。室内作業をおこなう。(遺物洗浄, 注記, 図面整理, 写真整理, 遺物・写真・図面台帳作成)。

6月9日(火)

B区, S I-04, 05セクション実測終了後, 記入および写真撮影。B区西側より遺構全体図の測量作業。S I-04, 05セクションベルト除去作業をおこなう。

6月10日(水)

B区西側の遺構平面実測作業。S K-05, 09セクション実測。S K-11~14まで付番。S I-04, 05撮影。S I-03セクションベルト除去作業。

6月11日(木)

雨天。室内作業 (図面, 遺物, 写真の整理および台帳記入)。

6月12日(金)

S I-02, 03遺物出土状況撮影。S I-03, 05精査。

6月13日(土)

S I-02~06の遺物取り上げ実測をおこなった後, S I-02, 03のビット検出作業。S K-14セクション実測。S I-05の貯蔵穴掘り込み作業およびセクション実測。

6月15日(月)

S I-01遺物取り上げ作業の後雨のため野外作業中止。室内作業に切り換える。

6月16日(火)~6月18日(木)

S I-01~05の遺物取り上げ後の精査およびエレベーション実測各遺構の完照状況写真撮影。

6月19日(金)

遺構全体図作成のための測量 (平板実測)。S I-05カマド切開調査。S K-16付番。

6月20日(土)

雨天のため野外作業中止。室内作業（遺物洗浄，遺物復元，図面整理，写真整理）。

6月22日(月)

B区平板実測。空中写真撮影のための清掃（B区）。

6月23日(火)

B区，空撮実施。

6月24日(水)

雨天のため室内作業。

6月25日(木)～6月27日(土)

B調査区の全域測量。基本土層確認のためのテストピット掘り下げ作業。26日，町文化財審議委員会会員の現地見学。

6月29日(月)

B区，S I—01～03カマド平面実測。C区，S I—07，08掘り込み作業開始。

6月30日(火)

雨天のため野外作業中止。室内作業。

7月1日(水)

B区，S I—01～03カマド精査。土層テストピットセクション実測。C区，S I—07～09掘り込み作業。

7月2日(木)

雨天のため室内作業。

7月3日(金)

C区，S I—07～09掘り込み作業。

7月4日(土)

S I-07~09区域外部分拡張。

7月6日(月)~7月8日(水)

S I-07, 09セクション実測。S I-08とS D-01の切り合状況確認。S I-10, 12, 15の掘り込み作業。S I-15の東側に位置する住居跡をS I-11と付番する。S D-01局部的に掘り込みを開始する。S D-01の東側端部より住居跡を確認し, S I-13と付番する。S I-07のピットを検出する。

7月9日(木)

S I-07, 08遺物出土状況の撮影。撮影後, 遺物取り上げ測量。

7月10日(金)

S I-10遺物取り上げ測量。S I-09セクション実測。S I-12遺物出土状況撮影およびセクション実測。S I-07ピット検出作業。S D延長部分確認のため1, 2号トレンチを設定し掘り込む。S I-12セクション実測。

7月11日(土)

S I-07, 10ピット検出作業。S I-12セクション実測の継続。

7月13日(月), 7月14日(火)

雨天のため野外作業中止。室内作業(遺物洗浄, 遺物復元, 図面整理, 台帳整理)。

7月15日(水)

C区, S I-08ピット検出作業。S I-B, S D-01の検出作業。S I-12セクションベルトの除去。S I-09遺物出土状況撮影。

B区, S X-01, 02のエレベーション実測。

7月16日(木), 7月17日(金)

S I-07カマド切開。S I-09遺物取り上げ実測。S I-13掘り込み作業。S I-07カマドセクション実測。S I-12遺物取り上げ実測。

7月18日(土)

雨天のため室内作業。

7月20日(月)～7月22日(水)

S I-12の床面検出作業。S I-08～10カマドセクション実測。S D-01とS I-13の重複部分の精査。S I-09貼り床部の精査。S D-01西延長部確認のための2号トレンチ内より住居跡が検出され、S I-14と付番する。

7月23日(木)～7月25日(土)

S I-14、15掘り込み作業開始。S I-09掘り方面確認作業。S I-09 2号カマドセクション実測。S I-16掘り込み作業。S I-10エレベーション実測。

7月27日(月)

S I-09掘り方面検出作業。S I-14～16掘り込み作業。S I-13、09遺物取り上げ実測。S I-12カマド部遺物取り上げ実測。

7月28日(火)

S I-14の精査。S I-15、11の掘り込み作業。S I-14遺物出土状況撮影および取り上げ実測。S K-22付番する。

7月29日(水)

S K-23、24付番する。S I-14ピット確認作業。S I-22セクション実測。S I-12カマド実測、S I-11掘り込み作業。S I-15、16精査。

7月30日(木)

S I-14平面実測、S I-15セクション実測。S I-11掘り込み作業。C区、各住居跡遺構の写真撮影。

7月31日(金)

C区、平面実測作業。S I-12エレベーション実測。S I-15、16ベルト除去作業。S I-16遺物取り上げ実測。

8月1日(土)～8月4日(火)

S I-16遺物取り上げ実測。C区平面実測 (S I-08周辺域)。C区土層確認テストビット掘り下げ作業。S I-11カマド検出作業。テストビットセクション実測。S I-09掘り方面コンター実測。

S K-25付番。S X-03ビット群検出作業。

8月5日(木)

S I-09掘り方面コンター実測。S X-03, 04エレベーション実測。S B-01を確認する。S K-26, 27確認。

8月6日(木)

平面実測 (S I-09, 10域)。S I-15, 16エレベーション実測。S I-12掘り方面検出作業。

8月7日(金)～8月9日(日)

S I-11カマドセクション実測。S I-15エレベーション実測。

S B-01ビット検出作業。S I-12貼り床除去作業。S I-07, 08貼り床除去作業。S I-11, 15平面実測作業。S I-10, 11, 15貼り床除去作業。平面実測 (S B-01周辺域)。C区全域清掃。

8月10日(月)

C区、空中写真撮影。午後からは平面実測 (S I-12～S B-01周辺域)。

8月11日(火)～8月21日(金)

C区平面実測。S I-07～10エレベーション実測 (掘り方面)。S I-11, 15エレベーション実測 (掘り方面)。S I-07, 08コンター実測。S I-10, 12コンター実測。S I-11, 15コンター実測。C区の掘り方作業、実測作業の全てを終了する。(ただし、一部、梨畑部分は収穫後に実施する。)

8月22日(土)～9月2日(木)

古稲荷遺跡周辺の地形測量を実施し、遺跡の立地環境を明確にした。

9月4日(金)～9月26日(土)

案内作業 (整理作業)。

9月28日(月)

本日よりC区架畑部分の発掘調査を開始する。樹木の伐採および現況写真の撮影。グリットセンター杭の設置測量。荒掘り作業。

9月29日(火)

遺構確認作業。住居跡を4軒確認し、S I-17~20と付番する。

9月30日(水)

雨天のため室内作業をおこなう。

10月1日(木)

S I-17, 18掘り込み作業開始する。S I-19, 20も掘り込み開始する。

10月2日(金)

雨天のため野外作業中止。室内作業。

10月3日(土)

S I-17, 18セクション実測の後セクションベルト除去作業。S I-19, 20掘り込み作業の継続。

10月4日(日)

S I-17, 18遺物取り上げ実測。S I-19, 20セクション実測。S I-19, 20出土遺物取り上げ実測。S I-17~20遺物出土状況写真撮影。

10月5日(月)

雨天のため野外作業中止。室内作業。

10月6日(火)~10月9日(金)

B, C区の清掃。S I-17~20ピット検出作業。S I-20遺物取り上げ測量。S I-18カマド切開およびセクション実測。S I-17, 18エレベーション実測。S K-28掘り込み作業。S I-17カマド実測。S I-19, 20エレベーション実測。S I-18カマド実測。S I-17~20完掘状況撮影。S I-18貼り床除去作業。

10月10日(土)

S I—17掘り床除去作業。S I—18掘り方面コンター実測およびエレベーション実測。

10月11日(日)～10月12日(月)

S I—18掘り方面コンター実測図。B、C区全域の清掃（空撮のため）。

10月13日(火)

午前中、空中写真撮影（3回目）を実施し、本日をもって古稲荷遺跡の野外調査を全て終了する。以後10月16日(金)まで現地事務所内の遺物、工具等の移動運搬（整理事務所・河内公民館内）をおこなう。

古稲荷遺跡の整理事業は12月1日より平成5年3月31日までおこない、4月1日より執筆作業に入る。

第2章 調査方法

第1節 発掘調査地区の設定

本遺跡の調査地区は、霞ヶ浦用水送水管埋設部分の総延長約180メートル、幅4.5メートルの規模にわたって設定した。ただし幅を4.5メートルの規模に限定すると、検出した遺構の一部あるいは大部分を末掘部分として残す可能性を有すると思われたため、必要に応じて部分拡張することを念頭に置き、起業者である水資源開発公団にもその旨の御理解を求め、許可および協力をお願いした。

調査地区は、工事区域のセンター杭の方向を軸方向とし、グリットの主軸方向とした。主軸方向は磁北に対して33度東に振れて設定し、グリット区画は1辺を4メートルとし基準になる杭は8メートルおきに設置した。

グリット画の呼称は、主軸方向を数字、主軸方向に直交する方向をアルファベットで呼称した。すなわち、「1A、2B、3C」……とした。なお、「1A～Fから25A～F」までを〈B調査地区〉、「26A～Fから46A～F」までを〈C調査地区〉と区分し、それぞれを“B区、C区”と略称した。調査計画の事前踏査の段階では工事区域全体を遺跡比定地の南西側から北東側に向かって、A調査地区、B調査地区、C調査地区、D調査地区と設定していたが、A、D調査地区においては遺物の表面採取ができず、検土杖調査でも遺構と思われる掘り込みが確認されなかった。したがって、この両地区の調査は実施せず、B、C調査地区の発掘調査のみに限定した。

第2節 遺構確認

本遺跡では、調査区域内にグリット杭を設定したのちセンター杭を中心に1辺4メートル四方の試掘坑を8メートルおきに設置し、遺構面までの層位を確認した。その結果、調査区域内の堆積土層は浅い所で25センチメートル、深い所でも40センチメートルほどであったため、表土除去のための荒掘り作業は人力による手掘りでおこなった。この荒掘り作業中に出土した遺物類はグリット単位で取り上げをおこなった。

表土除去後、遺構が確認できる面まで削り込み、遺構の範囲、切り合い状況などを確認した。さらに遺構が部分的に調査区域外までおよんでいた場合は、その遺構が完掘できる部分まで拡張作業をおこなった。

第3節 遺構調査

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直行する方向に土層観察用のベルトを設置し、四分割された部分の掘り込み作業を実施した。土坑、ピット等は基本的に二分割して掘り込み土層観察をおこなった後に完掘した。その他の遺構については最も効果的と思われる位置にセクションベルトを設定したのち掘り込み作業を実施した。

土層は、色相、含有物、粘性、締り等の記録と、堆積状態を明確にすることに心がけた。

遺構測量は、平板測量でおこない、必要に応じて水系を用いた地張り測量をおこなった。土層断面、エレベーション実測は、水系を設置したのち標高を測定し基準とした。

記録作業の過程は、土層断面撮影→土層断面図作成→遺物出土状況撮影→遺物分布状況図作成→遺構完掘状況撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成→(カマド土層断面撮影→カマド土層断面図作成→カマド完掘状況撮影→カマド平面図作成)以上の過程を基本としたが、遺構の性格および遺存状態によっては適宜な方法によったものもある。

なお、図面、写真以外には記録カード、調査日誌等に個別記載をおこなった。

調査区域の拡張については、原則として本来の調査区域内より遺構の一部が確認された場合、その遺構を完掘するための一次拡張のみを基本とし、一次拡張の結果さらに別遺構が確認された場合には確認された部分だけを検出することにとどめ、二次拡張はおこなわなかった。ただ、遺構の種類によって、局部的に確認が必要と思われたものについては、調査規模を最小限にとどめたくて、調査成果を最大にあげられる方法をとることを原則とした。

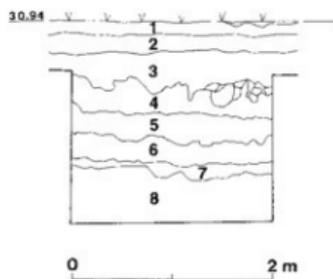
第4節 基本土層

本遺跡の基本土層は、第1～3のテストピットで作成した土層図のとおりである。第1図はB調査区、第2・3図はC調査区の土層で、基本的な層序は一致しているが、局部的な差異が若干認められる。

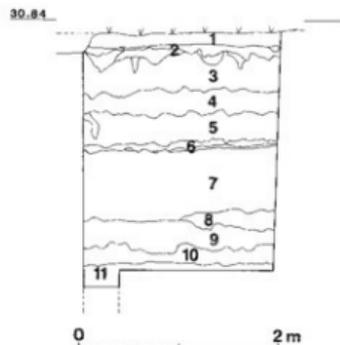
(B調査区) (第1図)

1は耕作土であり、暗褐色が主体である。2も耕作土で、天地返しをおこなった土で黒褐色土が主体で全体的に締りのある土層である。3は2と同質の黒褐色土であるが耕作の痕跡は認められず、本調査区の自然堆積土であり、全体的に硬質で締りがあり遺物片等も本土層中にかなり含まれている。遺構の掘り込みも本土層の下位部から掘り込まれている。4は褐色ローム土で、全体的に軟質で締りの少ない土層である。本土層の上位部は風化ローム土である。

5は黄褐色ローム土で、全体的に硬質な締りのある土層である。6は明褐色ローム土で、硬質な



第1図 B調査区基本土層図



第2図 C調査区基本土層図

締りのある土層であり、層中には鹿沼バミス粒が断片的に含まれている。7も明褐色ローム土であるが6の層土よりもやや黒味がかかったローム土で粘性があり、層全体に鹿沼バミス粒が多量に含まれている。8は明褐色ローム土で非常に硬質な土層であり粘性および締りのある層である。

(C調査区) (第2図)

1は暗褐色土で耕作土でもある。2は暗褐色土である。本層は全体的に乱れており、いずれも軟質で締りの少ない土であることと、本テストピットの左側すなわち調査区域内にはS A-01の柱穴列が検出されていることから、この柱穴列の一部が断面に露出したものと思われる。3は明褐色ローム土で全体的に軟らかく風化ローム土である。4は明褐色ローム土であるがわずかに黒味をおびており、若干、粘性を有しているが、全体的には軟質である。5は黄褐色ローム土で層全体が硬く粘性をおびており、下位には断片的に鹿沼バミス粒が含まれている。6は暗褐色を呈したローム土で5から7の層への漸移層でもあり、層中には多量の鹿沼バミス粒が含まれているが、非常に粘性が強い。7は黄褐色ローム土で全体的に締りの強い土層である。8は明褐色ローム土でやや黒味をおび、わずかに粘性をもっている。9は黄褐色ローム土でわずかに赤味をおびた硬い土層である。10も黄褐色ローム土で粘性が強く、下位は灰白色気味となる。11は灰白色粘土層で上部には褐色ローム粒が若干含まれている。

第3章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本遺跡で検出された遺構の記載方法は下記の要領で統一した。

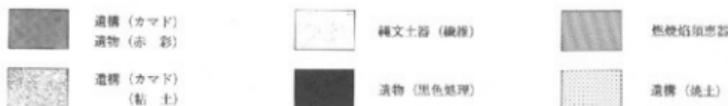
1 使用記号

竪穴住居跡——S I 掘立柱建物跡——S B

溝遺構——S D 構列遺構——S A 土坑遺構——S K

不明ピット群——S X

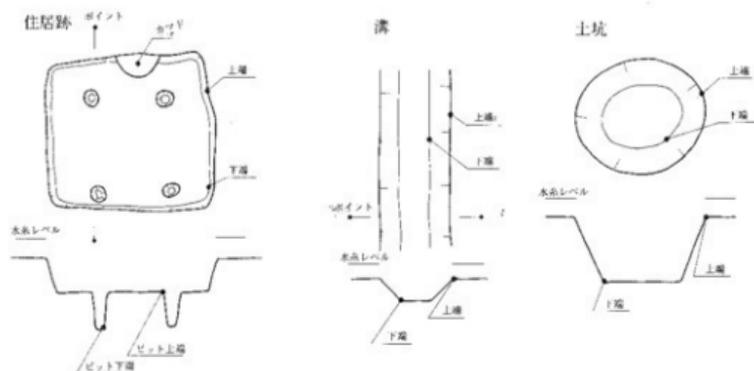
2 遺構に伴う表示方法



3 土 層

土層観察は、『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著，財団法人日本色彩研究所）を使用し，その使用した土色の記号は下記のとおりである。

1	暗褐色土	3/3	7.5Y R	a	ローム粒子	イ	軟質
2	黒褐色土	2/2	7.5Y R	b	ロームブロック	ロ	硬質
3	黒褐色土	3/2	7.5Y R	c	砂粒	ハ	締り有
4	褐色土	4/6	10Y R	d	粒土塊	ニ	締り無
5	黒褐色土	2/3	10Y R	e	粘土粒		
6	暗褐色土	3/4	10Y R	f	焼土		
7	暗褐色土	3/3	10Y R	g	小礫		
8	極暗褐色土	2/3	7.5Y R	h	炭化物		
9	暗褐色土	3/4	7.5Y R	i	灰		
10	黒色土	2/1	7.5Y R				
11	黄褐色土	5/8	10Y R				
12	明褐色土	5/6	7.5Y R				
13	褐色土	4/6	10Y R				
14	褐色土	4/6	7.5Y R				
15	褐色土	4/3	7.5Y R				
16	褐色土	4/4	7.5Y R				



第3図 (a) 遺構の実測部位と名称

4 遺構実測図の作成方法

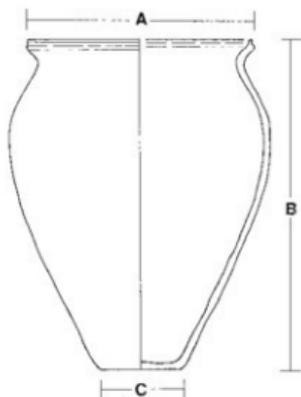
- 各遺構の平面図、セクション図、断面図（エレベーション図）はすべて縮尺20分の1で測定したものを原寸でトレースしたのち、原則的にはすべて3分の1に縮小して掲載した。
- 出土遺物は、遺物分布図として平面図、断面図に出土位置を記して、接合できたものは実線で結んだ。付記した番号は遺物実測図の番号を示す。
- 断面図中の水糸レベルは、基本的には統一してあり表示は1ヶ所のみに表示してある。しかし、エレベーション、セクションなど種類の異なるものについては2ヶ所に表示してある場合もある。

第2節 遺物の記載方法

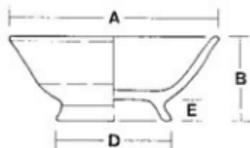
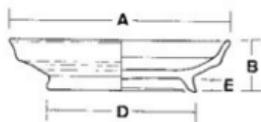
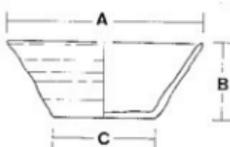
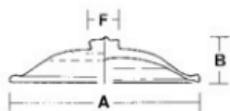
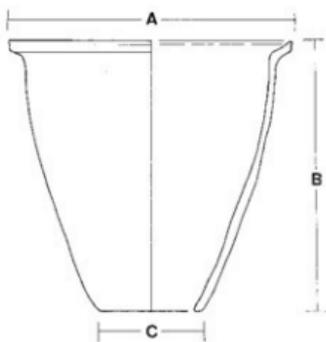
遺物の図示表示は以下のとおりである。

1 土器

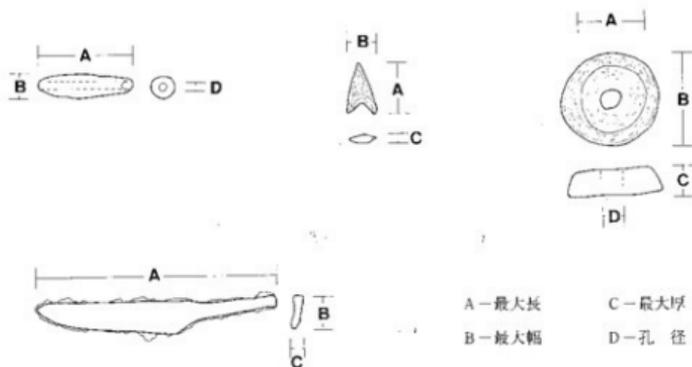
- 図上復元可能な土器は、中心線を挟んで右側が土器の内面と断面の状態を表示し、左側は外面の状態を表示している。



- | | |
|-------|-----------|
| A-口 径 | D-台 部 径 |
| B-高 さ | E-台 部 高 さ |
| C-底 径 | F-つ ま み 径 |

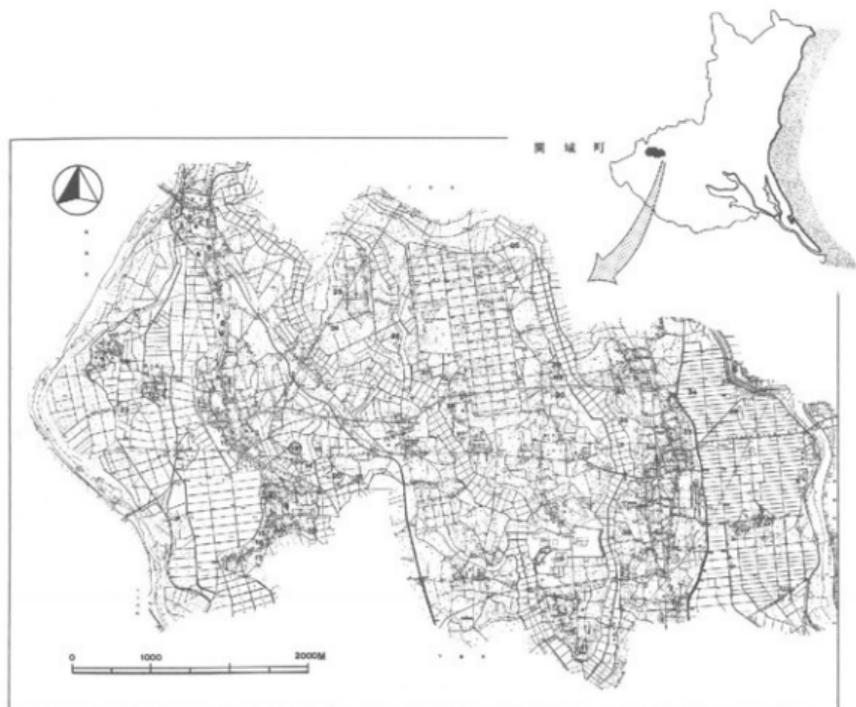


第 3 図 (b) 遺物の実測部位と名称



第3図(c) 遺物の実測部位と名称

- 断面の表示で白抜きの場合は、土師器、縄文土器、その他を示し、ベタ（黒塗り）の場合は須恵器を示している。なお、断面に斜線のスクリーントーンを貼ったものは燃焼焔によって焼成された須恵器を表わす。縄文土器で胎土内に繊維を含んでいるものはスクリーントーンを使用した。
 - 土器の内外面に色彩が塗布されている場合もスクリーントーンを使用した。
- 2 土器片
- 土器の破片については右側に断面を表示し、左側に外面の実測表現あるいは拓本を用いた。
- 3 その他の遺物
- 土製品、鉄製品、石製品は基本的には展開図法を用い、その他必要と思われる部分の実測をおこなって表示した。
- 4 ○ 遺物観察表の中で法量と遺存度の（備考）の項目の数値で（ ）で表わされているものは推定数値である。



第4図 関城町域遺跡分布略図

- | | | | |
|-----------|-------------------------|-------------|-----------|
| 1. 明神遺跡 | 12. 切掛遺跡 | 23. 上木有戸A遺跡 | 34. 打木崎遺跡 |
| 2. 下宿古墳 | 13. 茶焙山古墳 | 24. 上木有戸B遺跡 | 35. 丸山A遺跡 |
| 3. 船玉古墳群 | 14. 泉崎遺跡 | 25. 下木有戸遺跡 | 36. 仲道遺跡 |
| 4. 南原遺跡 | 15. 新宮東遺跡 | 26. 西原遺跡 | 37. 東裏遺跡 |
| 5. 源次郎遺跡 | 16. 新宮西遺跡 | 27. 裏原遺跡 | 38. 宮田A遺跡 |
| 6. 弁天山古墳 | 17. 八龍神遺跡 | 28. 宅地前B遺跡 | 39. 宮本遺跡 |
| 7. 三道北遺跡 | 18. 専行寺古墳 | 29. 桜塚B遺跡 | 40. 井上城跡 |
| 8. 三道南遺跡 | 19. 五郎助A遺跡 | 30. 福根遺跡 | 41. 関城跡 |
| 9. 北台遺跡 | 20. 五郎助C A遺跡 | 31. 本田遺跡 | |
| 10. 古稲荷遺跡 | 21. 坂塚南1号墳又は
茶焙山南2号墳 | 32. 塚田遺跡 | |
| 11. 西館遺跡 | 22. 西勝遺跡 | 33. 井上高田遺跡 | |

第4章 位置と環境

第1節 遺跡の概観

古稲荷遺跡は、関城町域のほぼ南西側、関本下字若宮・古稲荷に所在し、鬼怒川東岸の台地で船玉から南側に延びる洪積台地の東側に谷戸を一本隔てた台地に本遺跡が遺存している。本遺跡の立地する台地は、標高30メートル前後の海拔を測れる関東ローム層土を地山としている野方台地の典型で、遺跡地周辺の低湿地との比高差は4～5メートルである。

遺跡の立地する台地は、舟生集落の南側からほぼ南北方向に派生する洪積台地の南側に位置し、台地南端部から北側へ300メートル前後、東西方向が400メートル前後の範囲を遺跡地として推定している。

遺跡地の東、西、南側には台地を取り巻く状態で低湿地である谷戸が深く侵食しており、時代によっては壘田開発の中心として活用されていたことも想像に難くない。

現在遺跡地の南側には、県道明野間々田線がほぼ東西に縦貫し、南西側200メートルの位置には県道結城下妻線が接していることから交通の要衝となっている。周縁の台地部は主に畑地と宅地からなり特に関城梨の主要産地域としても注目されている。また台地周辺の低湿地部は水田利用が中心であったが、現在では部分的に転作が進み畑地化している場所も目立つようになってきた。

本遺跡の辺にも多数の周知遺跡が存在していることが確認されている。本遺跡に最も隣接した遺跡としては、南東側すなわち本遺跡の立地する台地南端部200メートルの位置に泉崎遺跡があり、須恵器片、土師器片が採取されている。そのうち土師器片は奈良時代のものと比定されている。さらに、本遺跡の東側の谷部を挟んで対岸に位置する畑地からも須恵器、土師器が採取された切掛遺跡の存在も確認されており、年代的には泉崎遺跡同様、奈良時代の遺物に比定されるものである。また、南側から南西側に通る県道結城下妻線の対岸の台地には、遺跡が集中している桜塚地区、上野地区があり、特に大小の古墳が点在した古墳群が形成されていた。『町史』によれば、茶焙山古墳、茶焙山西古墳、桜塚古墳、専行寺古墳、茶焙山南1号、2号古墳、桜塚南1号、2号古墳についての記述がある。現在でも部分的に、墳丘の一部およびその痕跡がみられるものとして、桜塚古墳、茶焙山古墳、桜塚南1号墳などの遺存を紹介している。古墳以外の遺跡としては、南館内東遺跡、南館内西遺跡、東郷遺跡などが確認され、土師器、須恵器、縄文土器、中世土器などが採集されている。

本遺跡地内で、今回発掘調査の対象地となった部分とその周辺部からは、土師器片および須恵器片、縄文土器片などの遺物類が広く散在し、採取できたことから発掘調査前の段階で、遺構遺物が相当数検出、出上ると予想できた。そして発掘調査の結果、20軒の堅穴住居跡、掘立柱建物跡1

棟、溝遺構2条、土坑遺構26基、欄列遺構1本、ピット群遺構3ヶ所から検出され、遺物類は収納箱20箱分の成果を得ることができた。

参考文献

- 【関城町史】通史編 上巻 関城町
 【関城町史】別冊の史料編 関城町の遺跡 関城町
 【茨城県遺跡地図】 茨城県教育委員会
 【関城町の文化財】 関城町教育委員会
 【角川・日本地名大辞典】8 茨城県 角川書店
 【仲道遺跡発掘調査報告書】 関城町教育委員会

1	古稲荷遺跡	10	茶焙山古墳
2	泉崎遺跡	11	茶焙山西古墳
3	切掛遺跡	12	桜塚南1号墳
4	専行寺遺跡	13	茶焙山南2号墳
5	東郷遺跡	14	桜塚古墳
6	茶焙山南1号墳	15	西館遺跡
7	桜塚南2号墳	16	金比羅塚古墳
8	南館南東遺跡	17	歓喜院古墳
9	ク西遺跡	18	安塚2号墳



第5図 古稲荷遺跡周辺の遺跡分布図

第5章 調査成果

第1節 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(SI-01)(第6~13図)

B区、D15・16グリット面を中心に検出された。本住居跡の北西側半分ほどが調査区域内より確認され、残存部の南東側も区域拡張をおこなって完掘することができた。

重複遺構はなく単独検出である。形状は方形を呈している。規模は東西410cm、南北410cm。主軸方向はN-5°-Wを指している。

壁面は、東側62cm、西側53cm、南側51cm、北側53cmの高さを測れた。壁溝はなかった。壁質はローム土で全体的に凹凸がみられ、各埠面とも軟質でもろい状態であった。

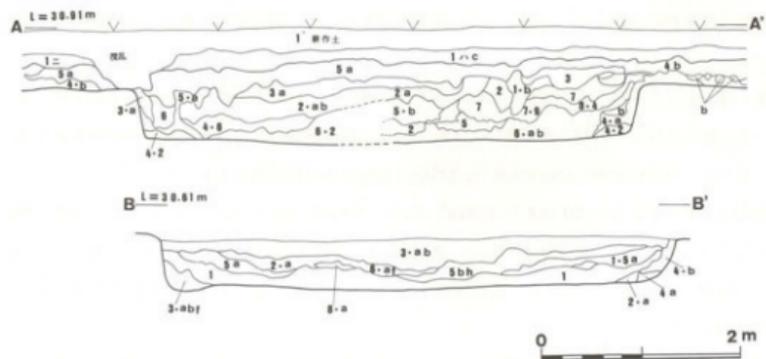
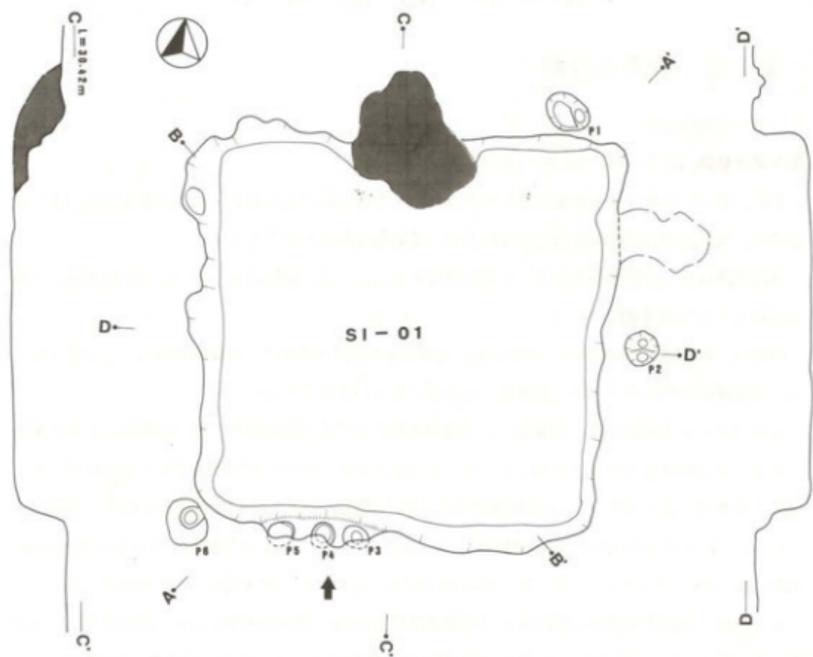
床面はローム土を踏み固めた床で、とくに中央部およびその周辺部が堅緻で全体的に平坦な床面である。貼り床は施されていない。ピットは6ヵ所から検出されたがいずれも主柱のピットとは考えられず、とくにP₂-P₃は本住居跡の出入口の構造に関連するものと考えられる。規模および形状は、P₁-47×35×13~20cm、楕円形。P₂-36×35×12~15cm、不整形。P₃-30×22×31cm、円形。P₄-25×22×28cm、円形。P₅-25×23×27cm、円形。P₆-22×19×25cm、楕円形である。

カマドは、北壁中央部から検出され、規模は両袖間100cm、焚口奥壁間120cmで現存高さは57cmであった。カマド内は、粘土粒および粘土塊が焼土粒と黒褐色土の中に混在した状態で堆積していた。火床部は床面レベルより10cmほど掘り込まれている。奥壁部は大きく切り込まれており、わずかに煙道部の痕跡がみられたが、形態としては明確ではなかった。構築材は両袖部に灰白色粘土を用いている。

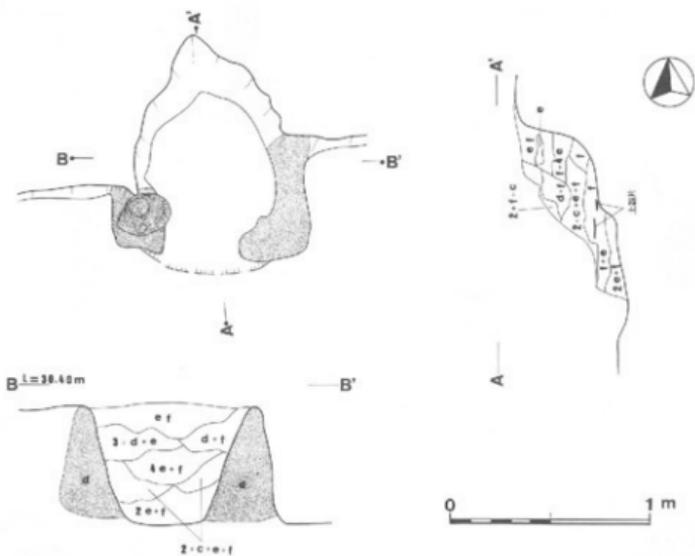
覆土は、表土とその下層の堆積土が暗褐色土を主体とし、竪穴内の覆土は黒褐色土が主体となっている。層中にはローム粒子が多量に含まれており、堆積状況としては自然堆積の層序を示している。しかし、竪穴の南側には局部的に人為堆積の土層とみられる部分もあった。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片672点、須恵器片293点が出土している。土師器片の内訳としては、坏片13点、高台付坏片2点、甕片241点、器種判別不能な破片が416点であった。須恵器片の内訳としては、坏片185点、高台付坏片7点、甕片75点、蓋片6点、器種判別不能な破片が416点であった。

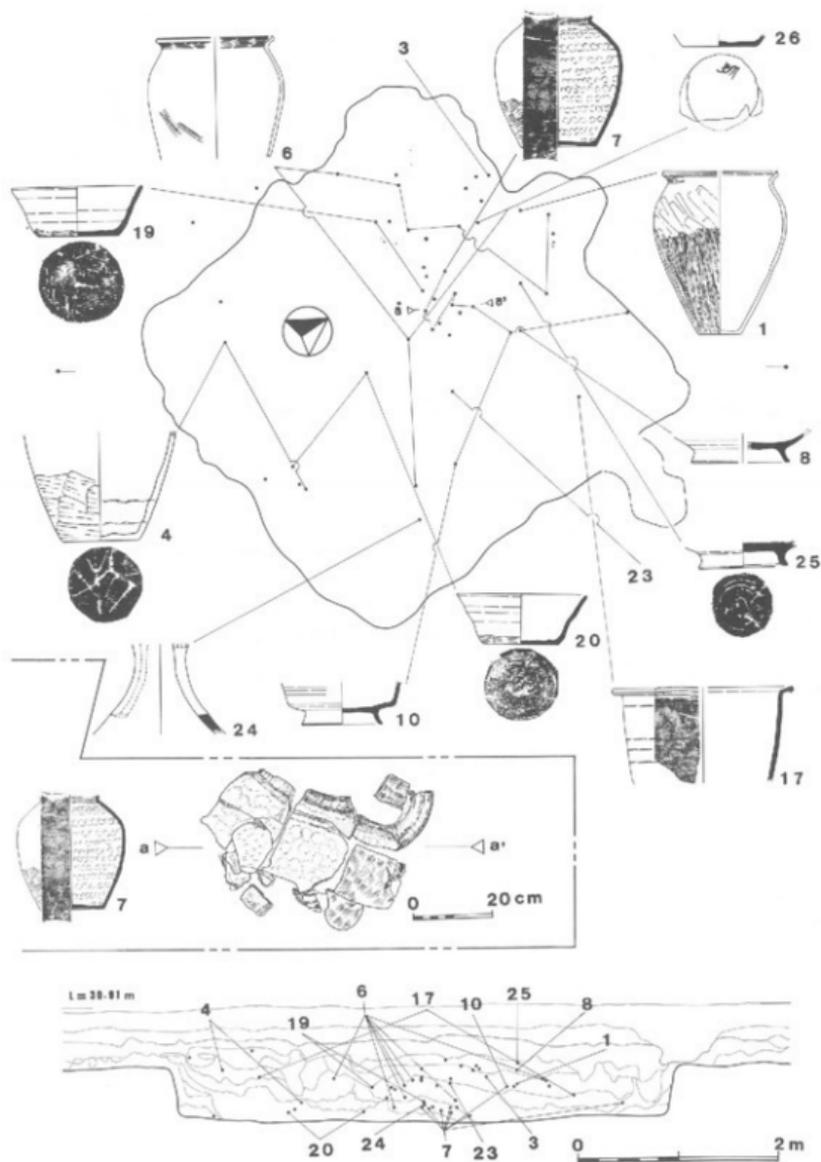
図化可能な遺物は全部で29点でこのうち4点は鉄製品(第13図)である。第9図の1は甕でカマドの袖(西側)部内に逆さに埋設されていたものである。第10図の7は須恵器の甕でカマド前面の床面に押しつぶされた状態で出土し、破片の一部はその周辺に散乱していたものである。



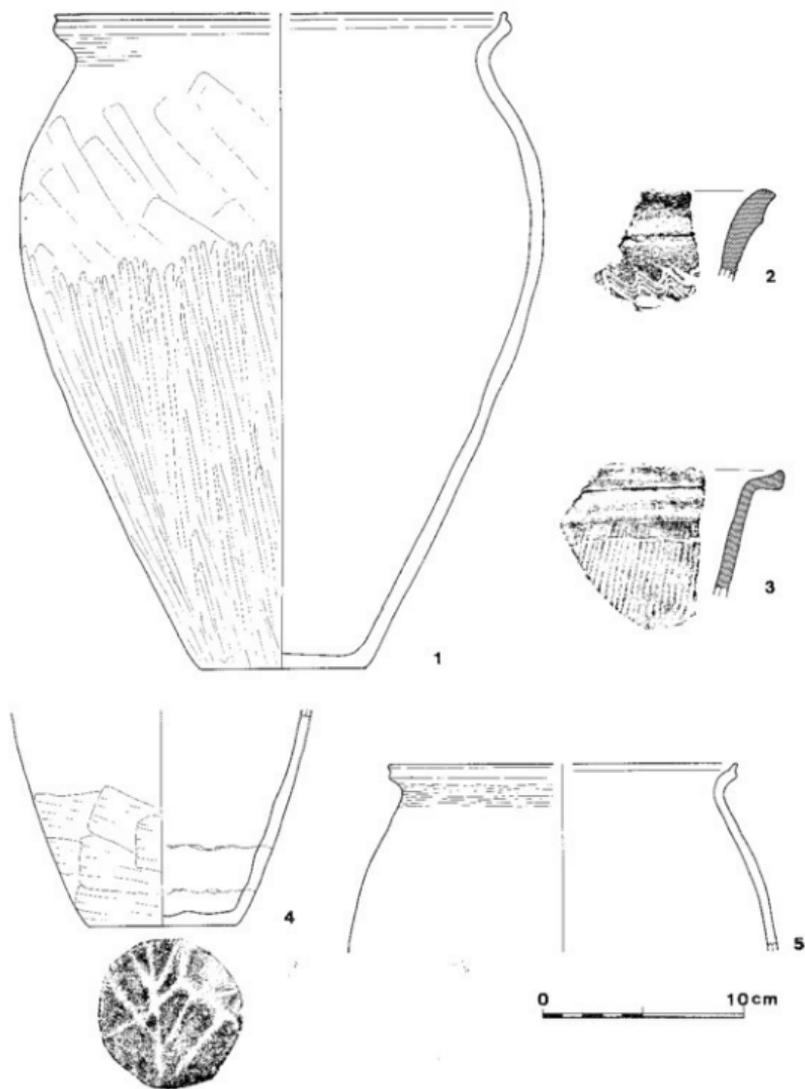
第6图 SI-01实测图



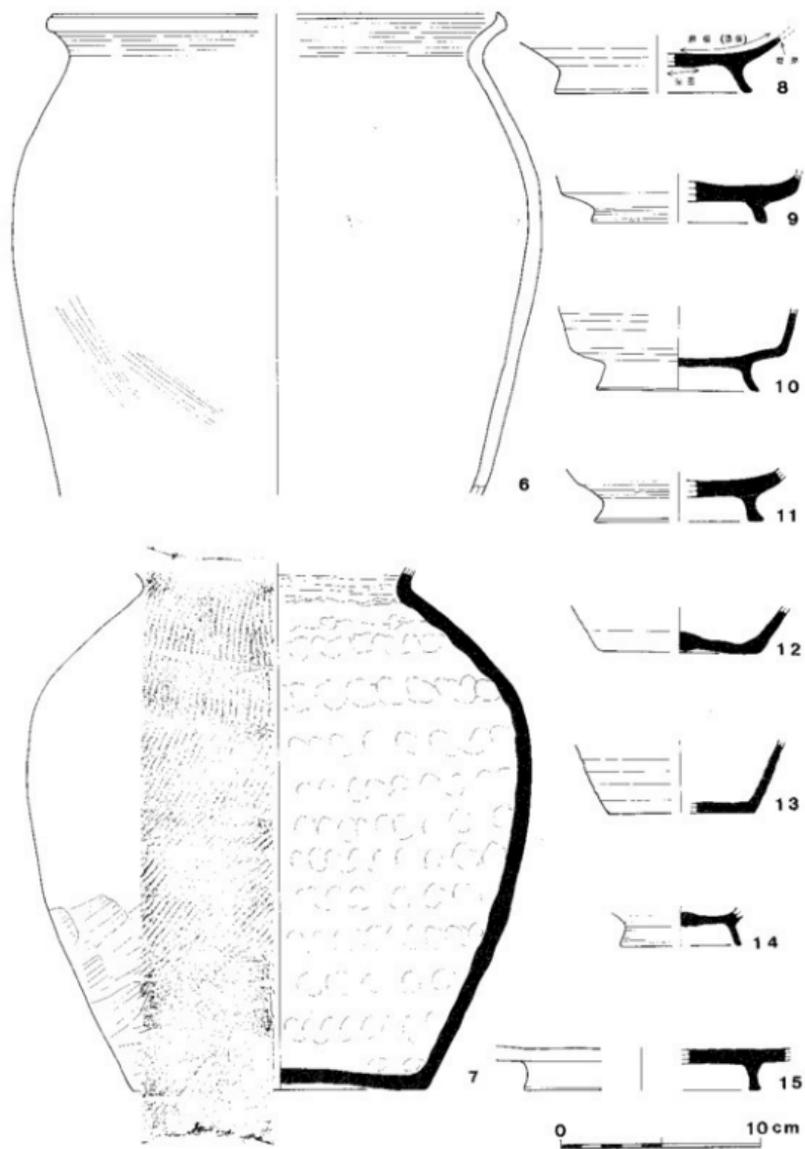
第7図 S1-01カマド実測図



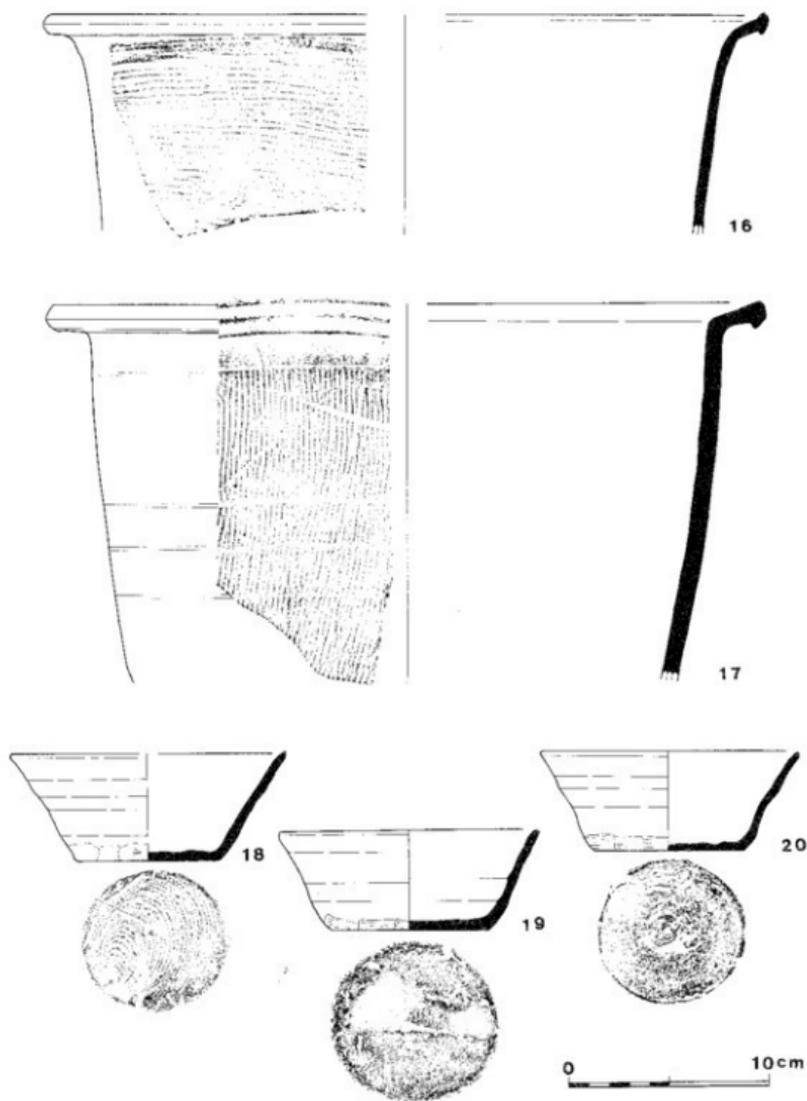
第8圖 S1-01遺物分布圖



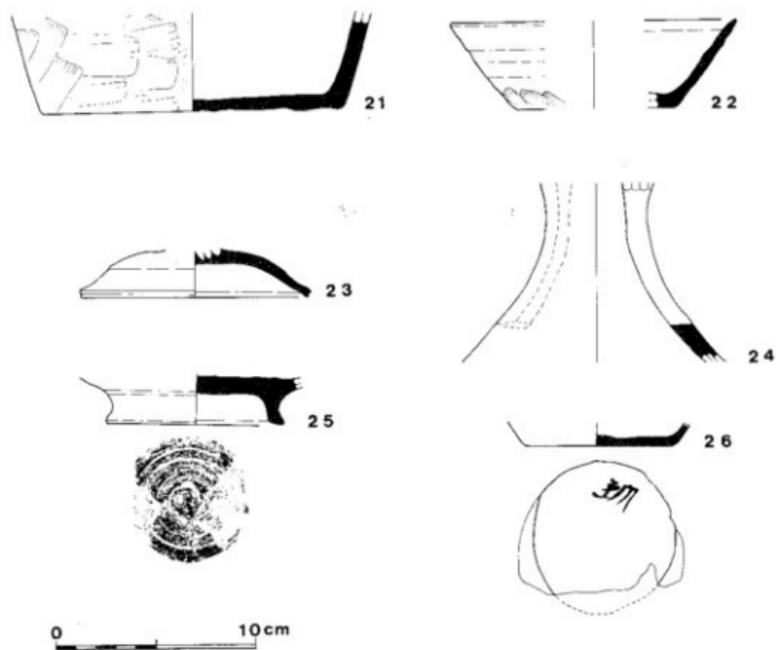
第9图 S1-01 出土遗物实测图(1)



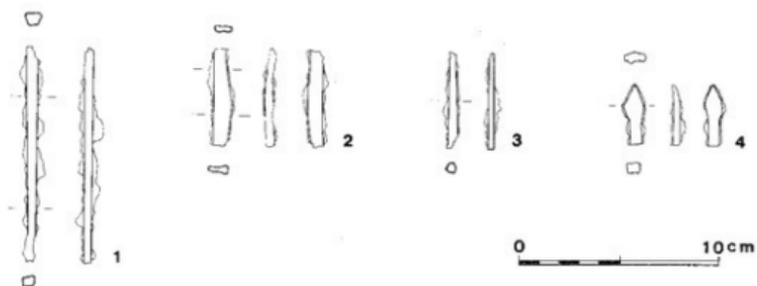
第10图 S I—01 出土物实测图(2)



第11图 S I - 01 出土物实测图(3)



第12图 S1-01出土遗物实测图(4)



第13图 S1-01出土遗物实测图(5)

第2号住居跡（S I-02）（第14-18図）

B区、D17・18グリッド画を中心に検出された。本住居跡は、S I-01の東側に位置し、北西側半分ほどが調査区域内から確認され、残存部の南東側も区域拡張をおこなって完掘することができた。

重複遺構はなく単独検出である。形状は方形を呈している。規模は東西434cm、南北340cm。主軸方向はN-8°-Wを指している。

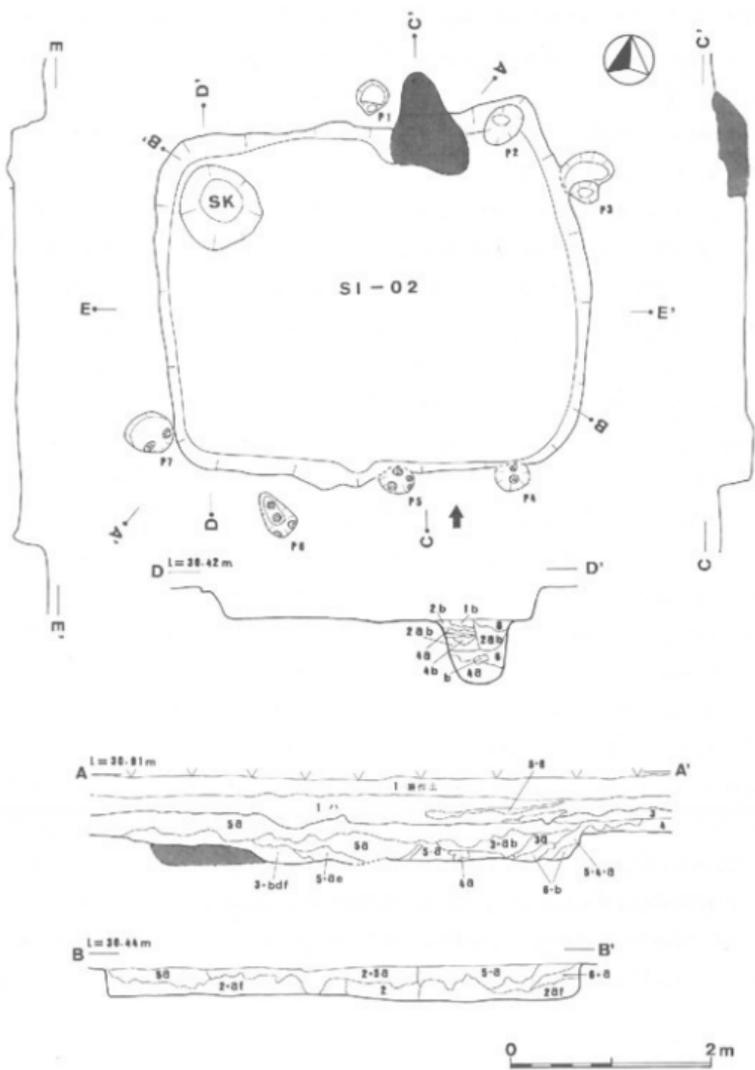
壁面は、東側29cm、西側37cm、南側33cm、北側32cmの高さを測れた。壁溝はなかった。壁質はローム土で各壁面は全体的に凹凸がみられ、壁面はいずれも軟質であった。なお、東壁はわずかに湾曲している。床面は、ローム土上の床で中央部には若干の踏み固めがみられた。ピットは7ヶ所から検出され、その規模および形状はP₁-35×34×10cm、不整形円形。P₂-46×34×25cm、楕円形。P₃-29×23×20cm、不整形円形。P₄-35×26×18cm、円形。P₅-35×27×11cm、不整形円形。P₆-49×28×14cm、楕円形。P₇-50×41×13cm、不整形円形である。

貯蔵穴は、竪穴北西コーナー部に1基確認できた。口縁部の形状は不整形円形を呈し、断面形は逆台形で底部は丸底形を呈していた。規模は東西82cm、南北85cmで最深部は64cmを測れた。カマドは、北壁の中央より東側に寄って付設されていた。規模は両袖間は88cm、竪口奥壁間は90cm、現存高さは40cmであった。カマド内は、黒褐色土と粘土粒、粘土塊、そのほかに焼土粒なども多量に含まれていた。火床部は、10cmほど掘り込まれた状態であった。煙道部は壁面を大きく深く切り込んでおり硬質な焼土塊が断片的にみられた。構築材は黄褐色粘土、灰白色粘土の混合土で、かなり明瞭に遺存している。

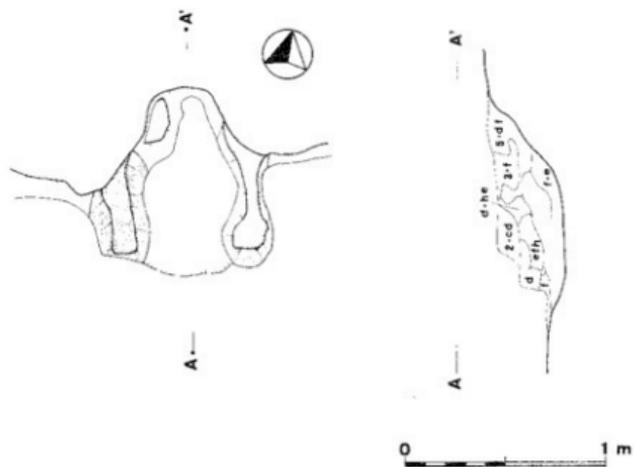
覆土は、表土の耕作土部分とその下層は暗褐色土で、竪穴内は黒褐色土が主体となっている。堆積状況は自然堆積の状況を示している。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片645点、須恵器片204点が出土している。土師器片の内訳は、坏片57点、高台付坏片10点、甕片148点、器種判別不能なもの430点であった。須恵器片の内訳は、坏片146点、高台付坏片2点、甕片48点、蓋片8点であった。

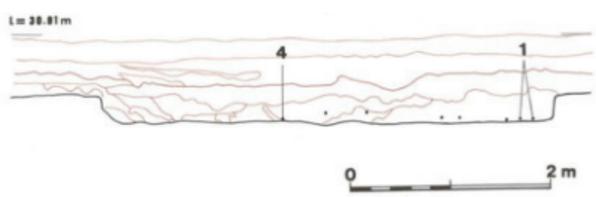
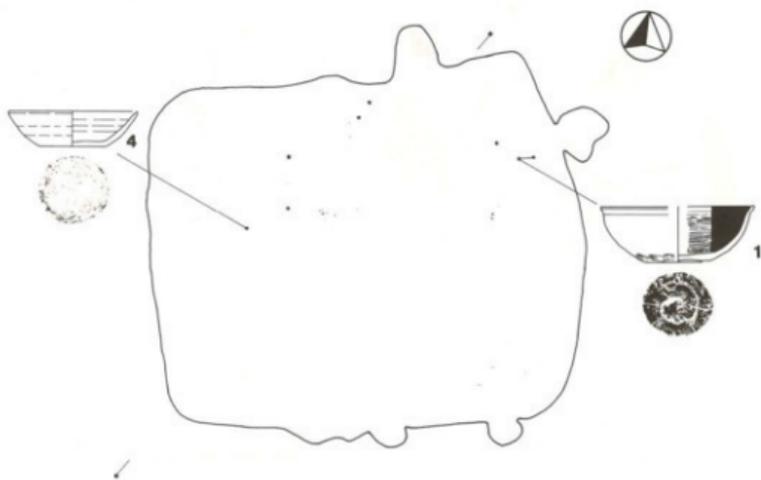
図化可能な遺物は全部で16点出土している。第17図のうち、7は瓦片でカマド前の覆土中より出土したものである。第18図の1～3は鉄製品で竪穴中央の覆土中より出土したものである。4は砥石で、5、6は石製品で、いずれも覆土中より出土している。



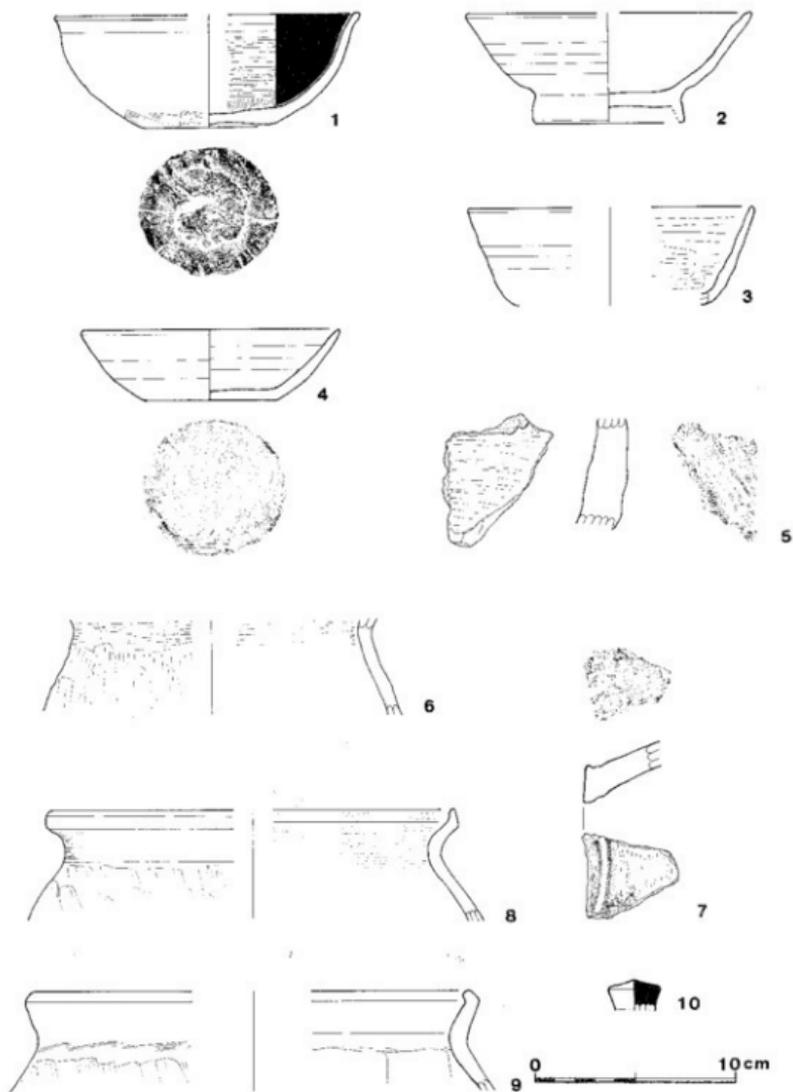
第14图 SI-02实测图



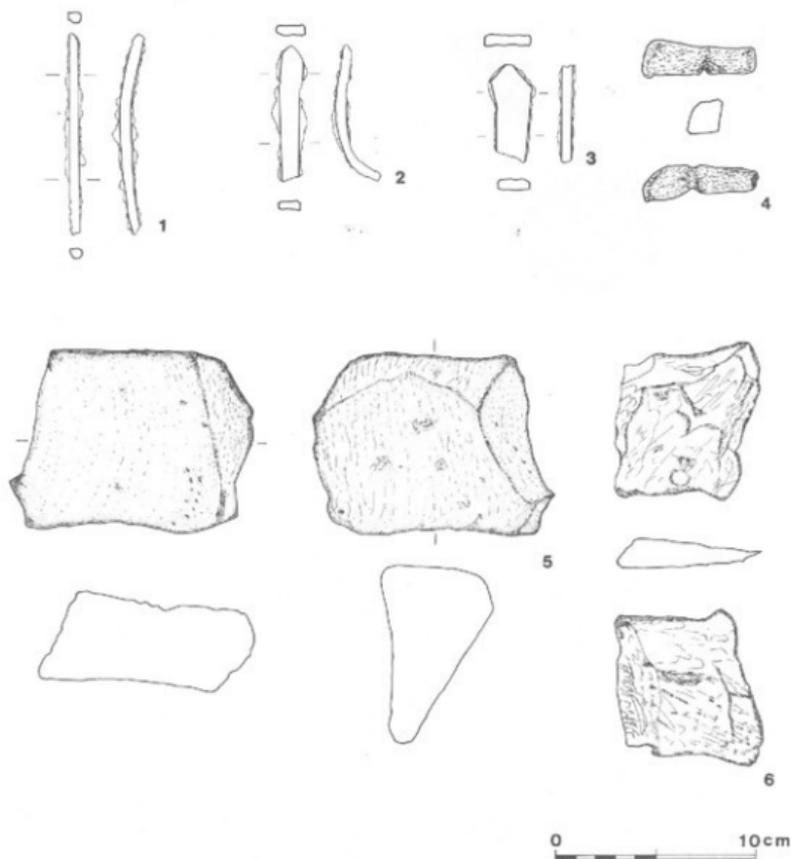
第15図 S I - 02 カマド実測図



第16図 S I - 02 遺物分布図



第17图 S I - 02 出土物实测图(1)



第18図 SI-02出土遺物実測図(2)

第3号住居跡 (SI-03) (第19~24図)

B区, C19・20グリット画を中心に検出された。本住居跡は南東側の半分ほどが調査区域内より確認されたため, 残りの北西側部分を検出するため部分的に拡張した。

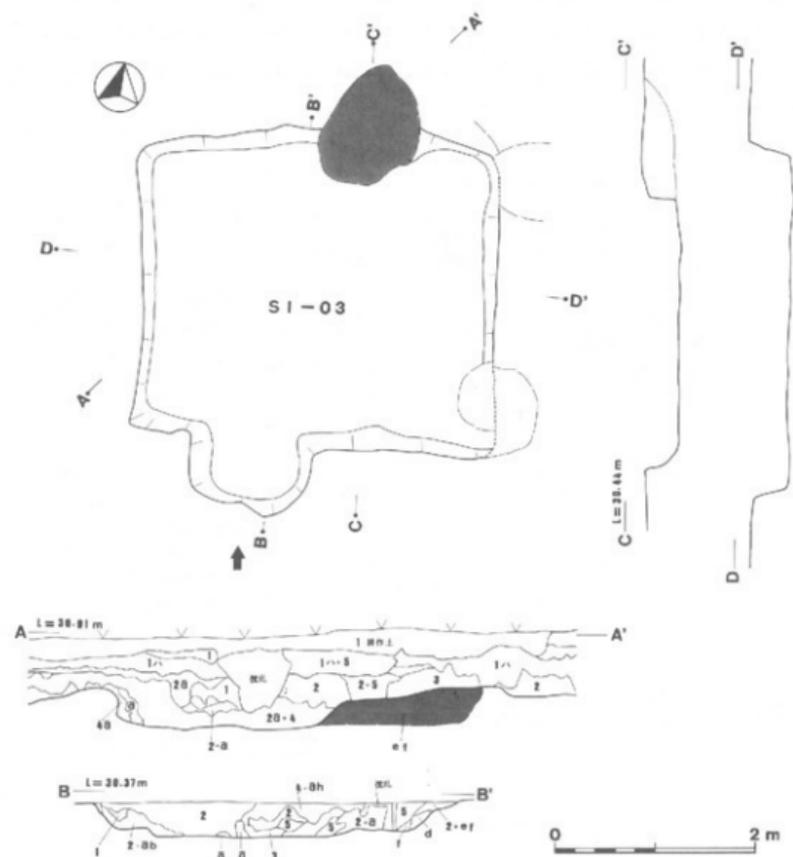
重複遺構は, SK-16があり同遺構は本住居跡を切っていることが確認された。形状は方形を呈している。規模は東西362cm, 南北330cm。主軸方向はN-10°-Wを指している。

壁面は, 東側43cm, 西側34cm, 南側34cm, 北側36cmの高さを測れた。壁溝は認められなかった。

壁面は各方向ともほぼ直立した状態で立ちあがっており、局部的に凹凸がみられ、全体的に軟質である。

床面は、ローム層を掘り込んだ掘り方面上に暗褐色土を主体とした土を入れた貼り床で、その厚さは20cm前後の厚さで全体的に堅緻に踏み固められていた。ピットおよび貯蔵穴などは検出されなかった。

カマドは、北壁の中央よりやや東寄りの位置から検出された。規模は両袖間110cm、焚口奥壁間120cm、現存高さ40cmであった。内部には、褐色土、極暗褐色土、ローム粒、ロームブロック土が

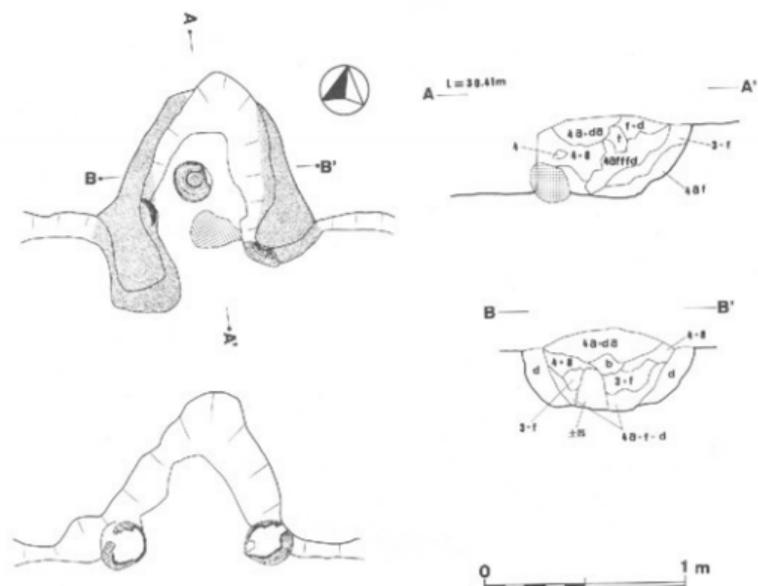


第19図 S I-03実測図

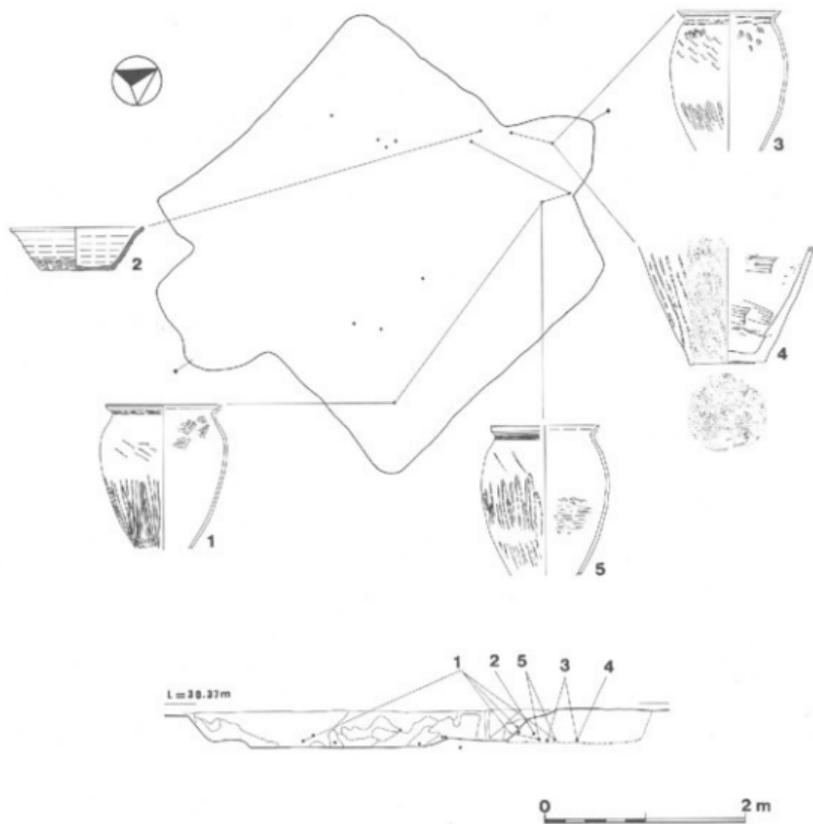
主体で、焼土粒が各層中に多量含まれている。火床部および煙道は壁面を大きく切り込んだ外側に設けられており、両袖の先端部のみが北壁面のラインよりも内側に設けられていた。構築材は灰白色粘土を用いている。覆土は、局部的に自然堆積の部分があるが、覆土の大半は人為的に埋めもどされた状態であった。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片387点、須恵器片146点が出土している。土師器片の内訳としては、坏片14点、高台付坏片1点、甕片171点、判別不能なもの201点であった。須恵器片の内訳としては、坏片114点、高台付坏片4点、甕片23点、蓋片5点であった。

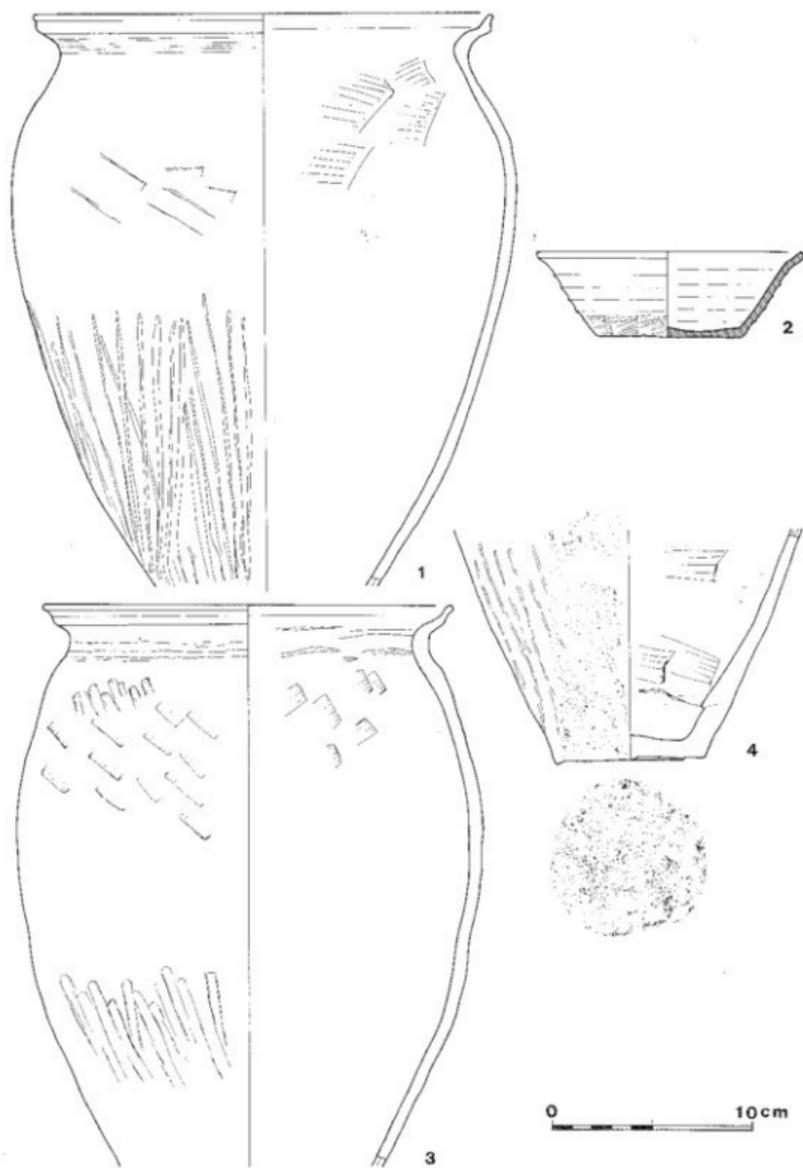
図化可能な遺物は全部で16点出土している。第22図の1、3、4と第23図の5の甕はカマド内から出土し、4は火床面中央に逆さになった状態で、1、3、5は袖部の粘土内に埋め込まれた状態でカマドの補強材として用いられていた。第24図の1は鎌で竖穴中央の床面より出土したものである。



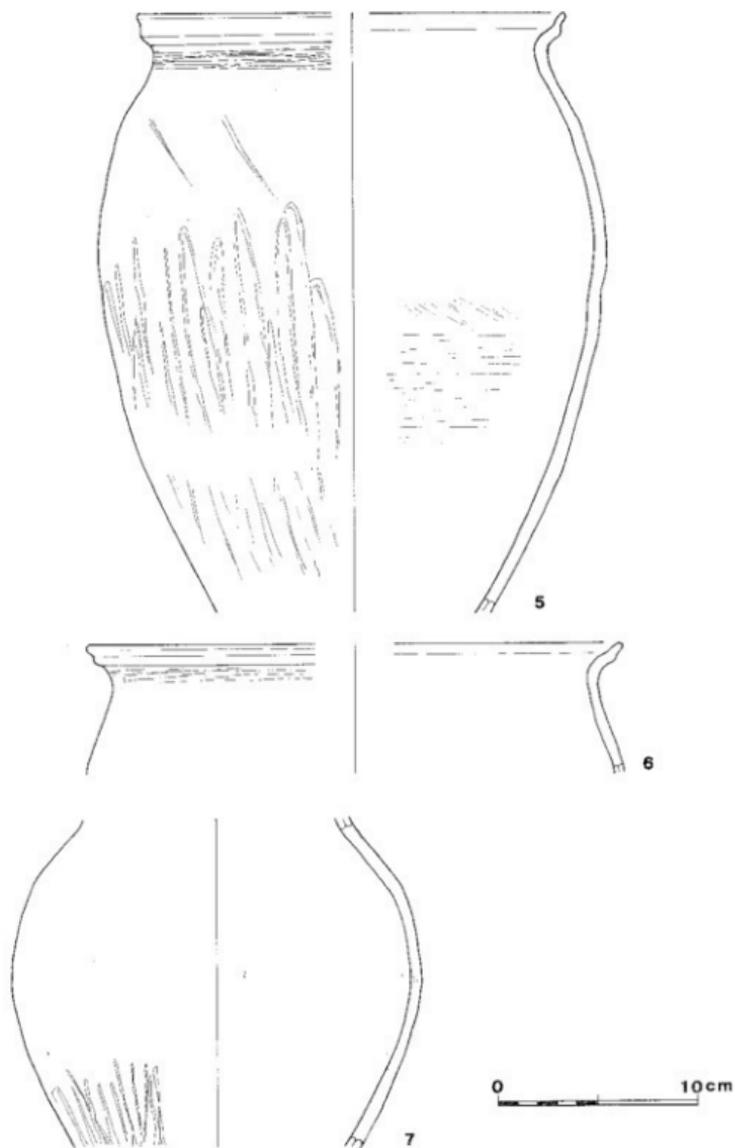
第20図 S I - 03 カマド実測図



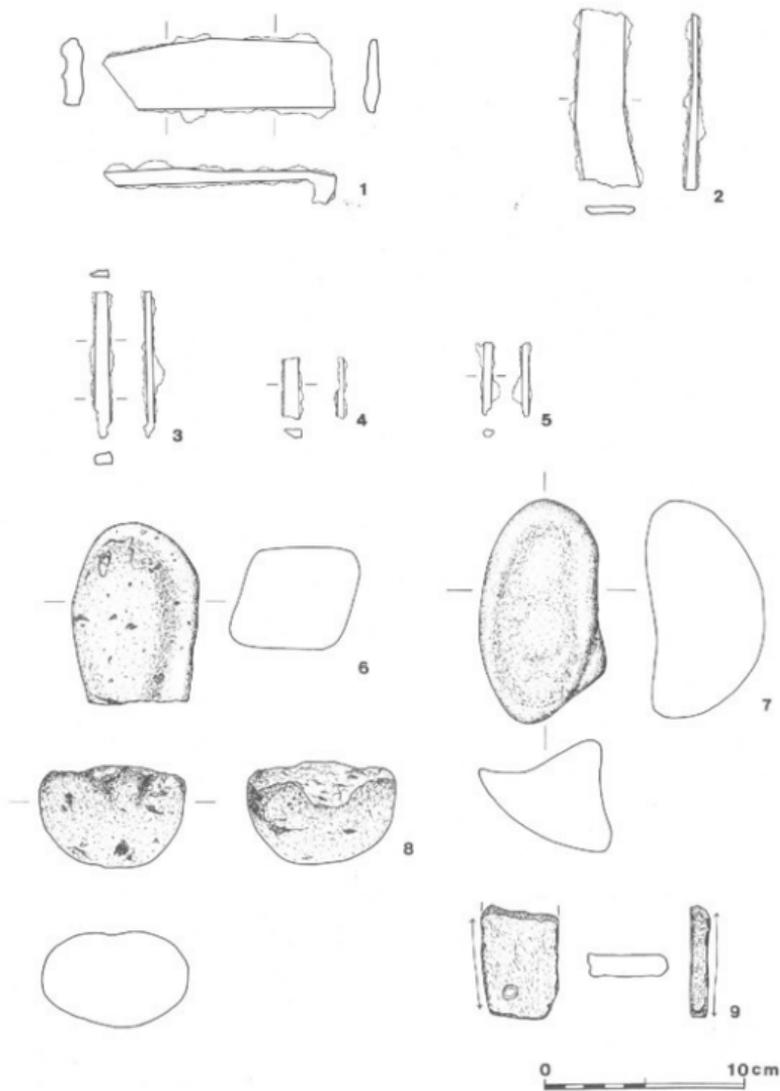
第21圖 S I - 03 遺物分布圖



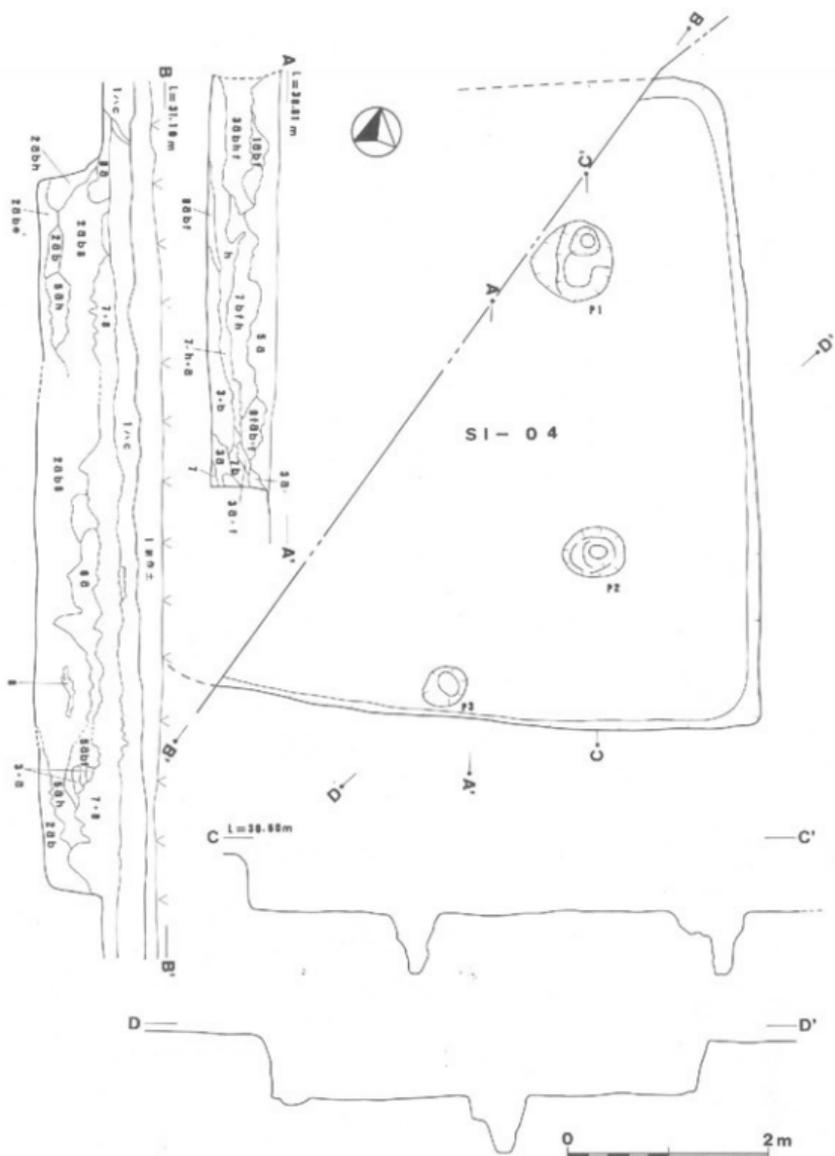
第22图 S 1—03 出土遗物实测图(1)



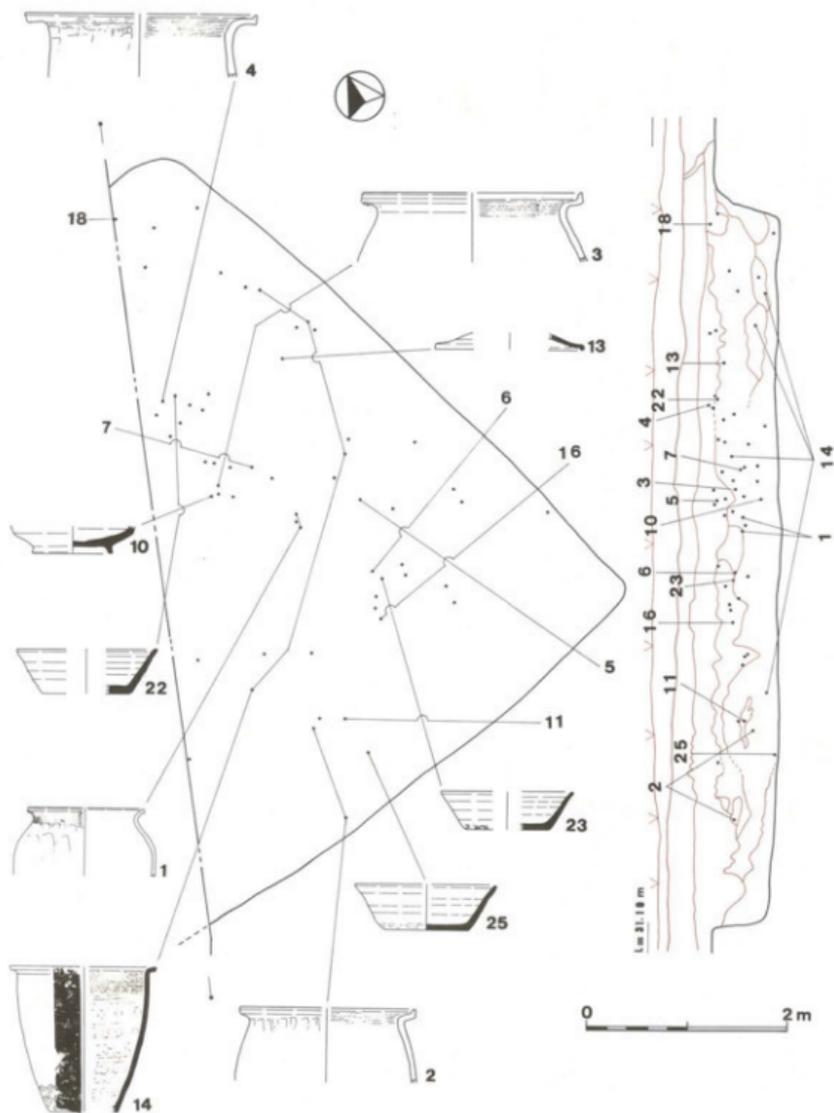
第23图 S1-03出土遺物実測図(2)



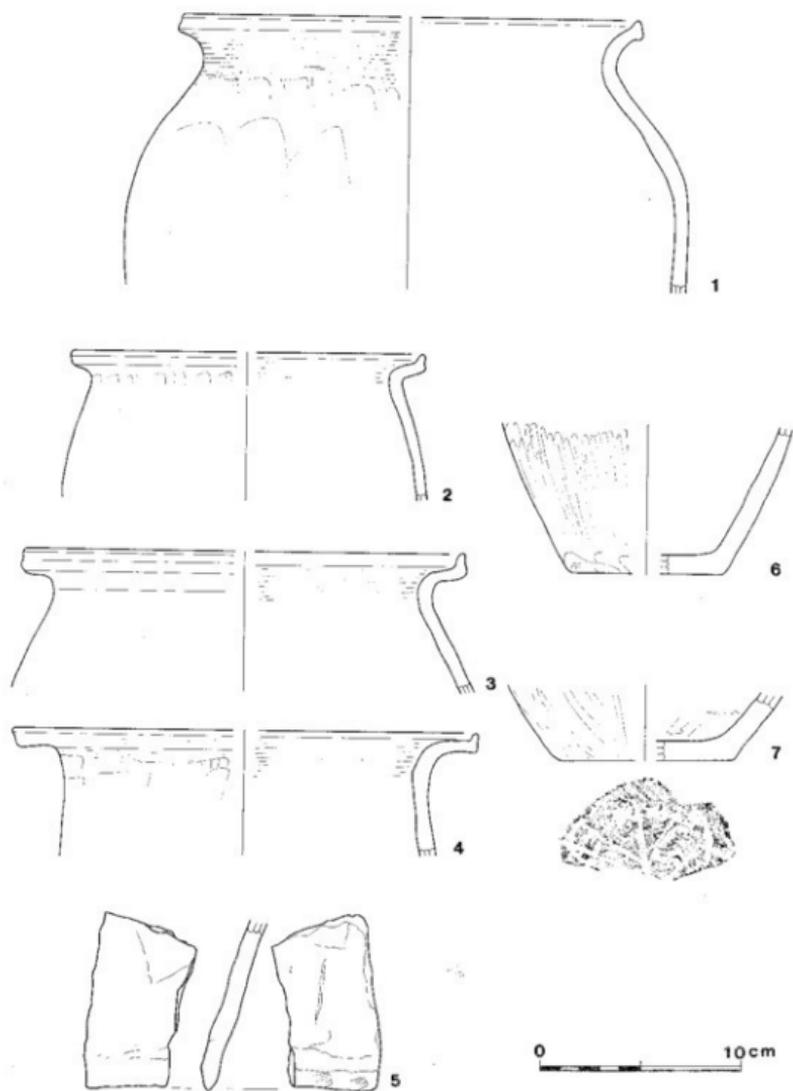
第24图 S1-03出土文物实测图(3)



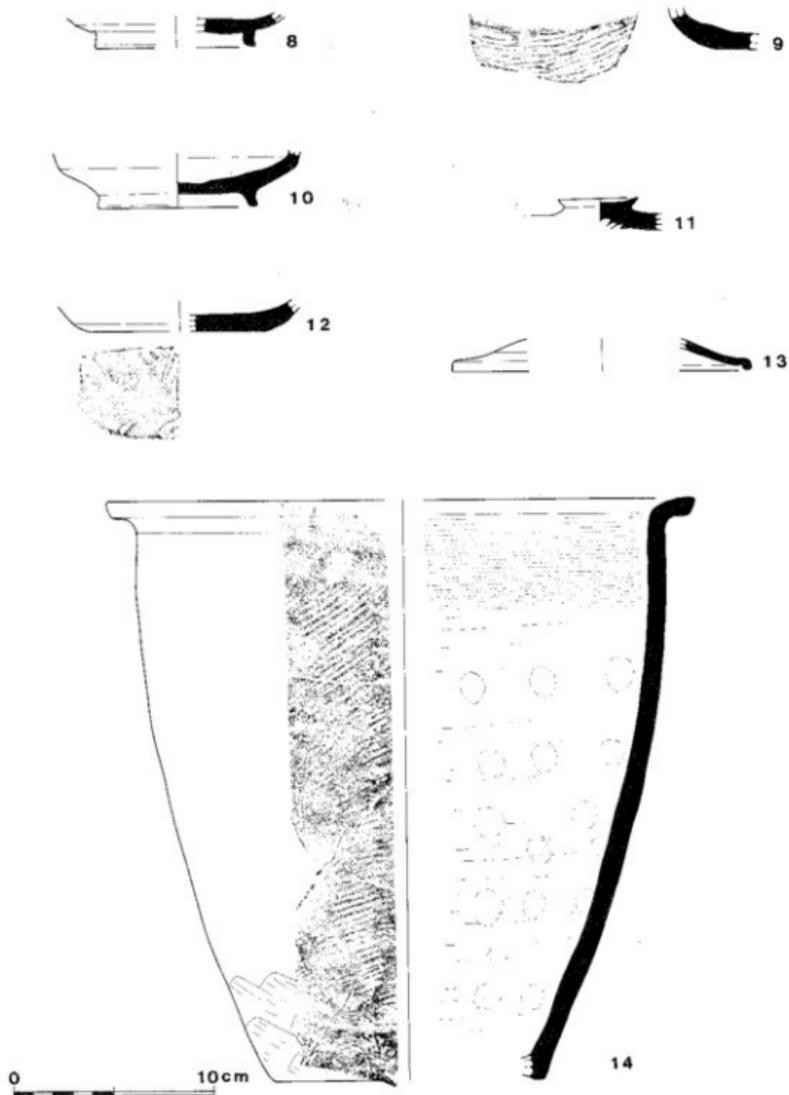
第25图 SI-04 实测图



第26图 S I - 04 遺物分布图



第27图 S I - 04 出土遺物実測図(1)



第28图 S I - 04 出土遗物实测图(2)

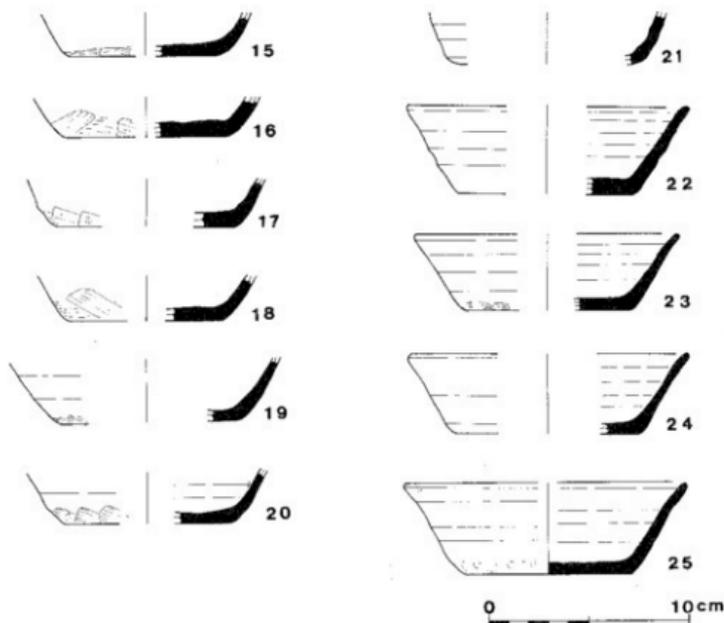
第4号住居跡 (S I-04) (第25~30図)

B区、C22・24グリット画を中心に検出された。調査区域内からは南東側半分ほどが検出できたが、北西側は区域外であったため未掘である。

重複遺構は検出部分においてはなかった。形状は方形と推定できた。規模は、東西は不明、南北は650cm。主軸方向はN-12°-Wを指している。壁面は、東側56cm、西側不明、南側65cm、北側不明であった。壁溝は認められなかった。壁面は各方向ともほぼ直立して立ちあがり、かなり硬質なローム土で全体的に平坦であった。

床面は、ローム土上を踏み固めた堅緻な床で貼り床は認められなかった。ピットは3ヵ所から検出された。規模および形状は、P₁-82×82×61cm、不整形。P₂-64×52×60cm、楕円形。P₃-48×42×8cm、不整形で、P₁、P₂は主柱のピットと考えられる。貯蔵穴の存在は不明。カマドの有無も未調査部分があるため不明であった。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土が主体で自然堆積上の状態を示している。



第29図 S I-04 出土遺物実測図(3)

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片677点、須恵器片310点が出土している。土師器片の内訳は、坏片22点、高台付坏片3点、甕片300点、判別不能なものが352点であった。須恵器片の内訳としては、坏片266点、高台付坏片5点、甕片25点、甌片5点、蓋片7点、盤片2点であった。

図化可能な遺物は全部で31点出土している。

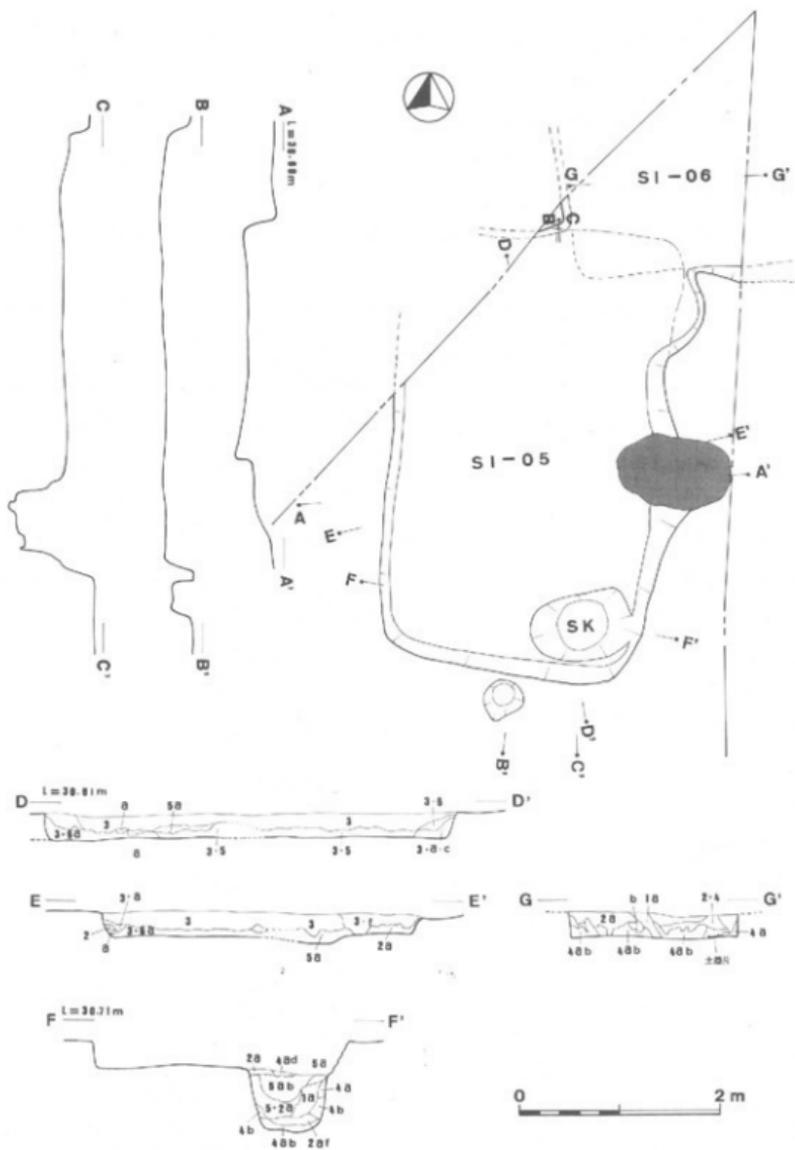


第30図 S I - 04 出土遺物実測図(4)

第5号住居跡 (S I - 05) (第31~35図)

B区, C24・25グリット画を中心に検出された。本住居跡の北西コーナー部は未調査区域であったため一部未確認である。

重複遺構は、北側に S I - 06 が重複しており、新旧関係では本住居跡が S I - 06 を切っている状態であった。形状は長方形を呈している。規模は、東西280cm, 南北は450cm。主軸方向は N - 84°



第31圖 SI-05・06実測図

-Wを指している。

壁面は、東側33cm、西側32cm、南側26cm、北側23cmの高さを測れた。壁溝は検出されず、壁質はローム土で全体的に硬く締っていた。

床面は、ローム層中を掘り込んだ掘り方面上に暗褐色土を主体とした貼り床が10cm前後の厚さで敷き詰められており、全体的に堅緻に踏み固められている。とくにカマドの焚口前面の床上面は粘土粒、焼土粒などが混在して踏み固められている。

ピットは1ヵ所から検出されたが本住居跡との関連は明確ではなかった。規模および形状は、P1-46×42×20cm、楕円形である。

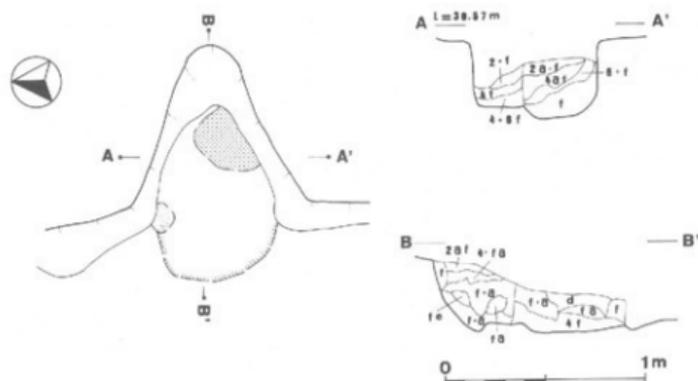
貯蔵穴は、壁穴の南東コーナー部より1基検出した。口経部の形状は不整形長方形を呈し、断面形は逆台形で底部は凹凸を有する形状である。規模は東西100cm、南北64cmで最深部38-54cmを測れた。

カマドは、東壁の中央より1基確認できた。規模は両袖間90cm、焚口奥壁間120cm、現存高さ35cmであった。カマド内部は、黒褐色土、褐色土粒、粘土粒、焼土が堆積しており、ほぼ自然崩落の状態を示していた。構築材は粘土粒が若干みられたため粘土質土を用いたと思われるが、残存土からみると明確ではない。

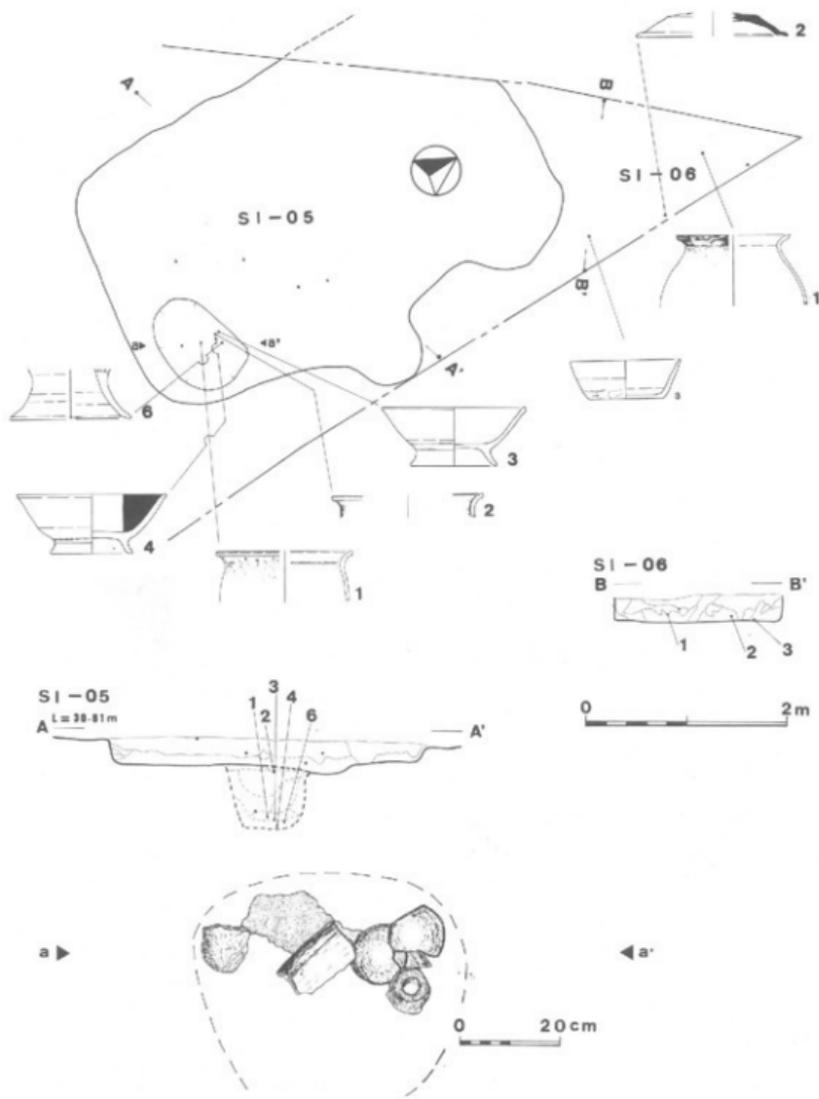
覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒、砂粒が主体で、堆積状況は自然堆積である。

遺物は、覆土中あるいは床面から出土したもののほかに貯蔵穴内からも出土している。土師器片174点、須恵器片48点で、土師器片の内訳は、坏片20点、高台付坏片1点、甕片45点、判別不能なのが108点であった。須恵器片の内訳は、坏片35点、甕片11点、蓋片2点であった。

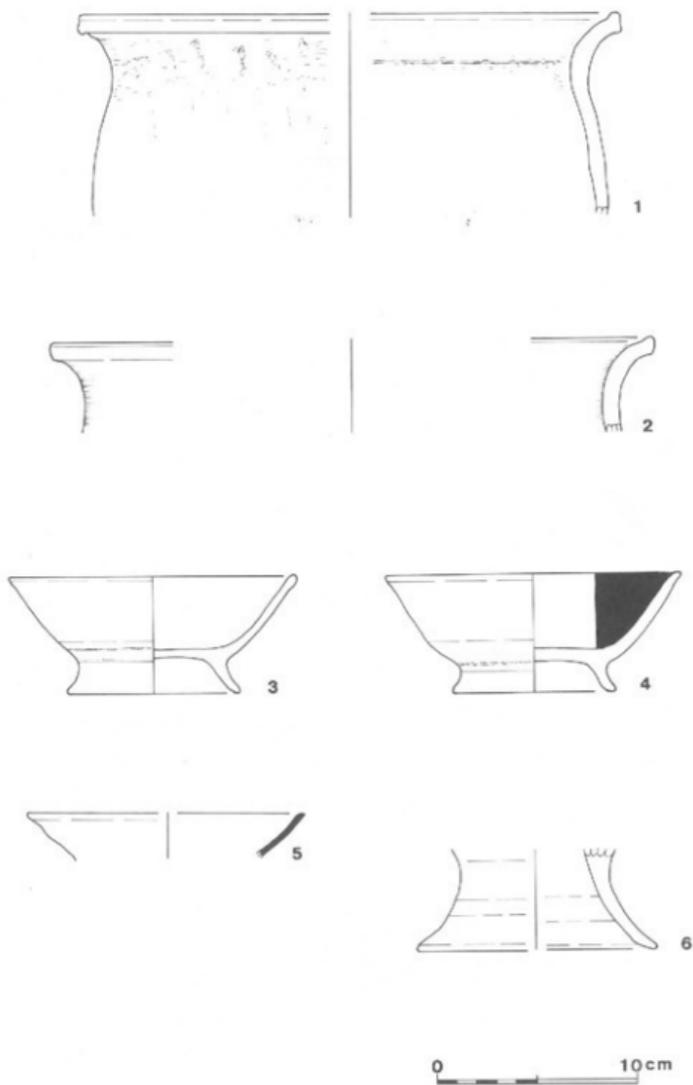
円化可能な遺物は全部で9点出土しており、第34図の1-4、6は貯蔵穴の底部に重なった状態で出土した。第35図の1-3は石製器でいずれも壁穴内の覆土中より出土している。



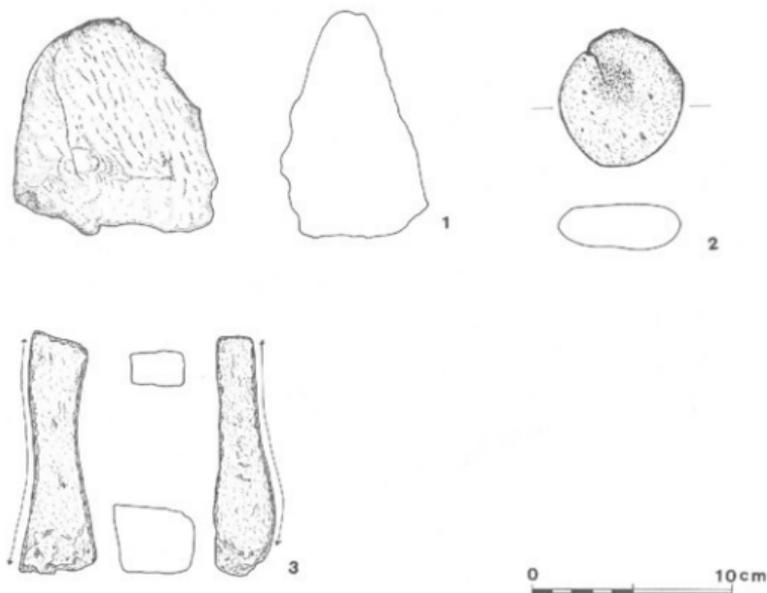
第32図 S1-05カマド実測図



第33图 SI-05·06 遺物分布图



第34图 S I - 05 出土遺物実測図(1)



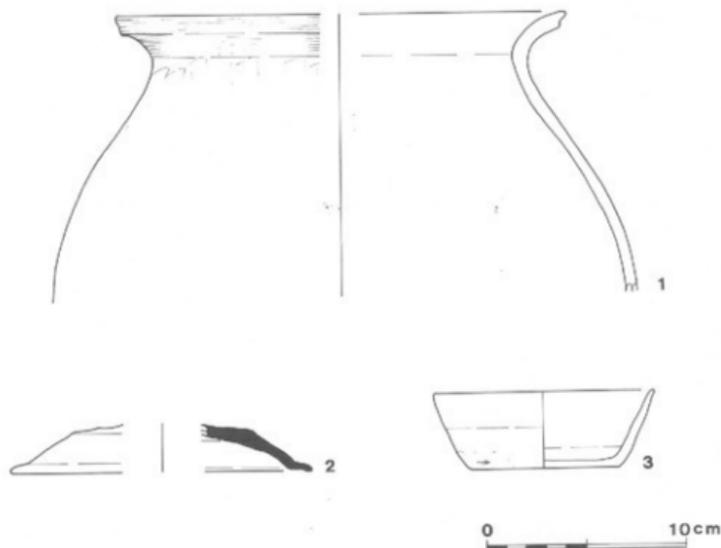
第35図 S I-05 出土遺物実測図(2)

第6号住居跡 (S I-06) (第31・33・36図)

B区、C25グリット画を中心に検出された。本住居跡は遺構の大部分が調査区域外の畑地と道路部分にわたっているため、検出できたのは南西コーナー部の一部のみであった。検出したコーナー部はS I-05と重複しており、新旧関係は切り合状況と貼り床の遺存状態から判断して本住居跡がS I-05より先行する時期のものと考えられた。しかし、規模、形状、付属施設などの詳細については不明であった。

覆土は暗褐色土、黒褐色土が主体で自然堆積の状況を示していた。

遺物は、覆土中および床面より土師器片40点、須恵器片10点が出土している。土師器片の内訳は甍片40点で須恵器片の内訳は、坏片7点、甍片3点であった。図化可能な遺物として第36図の3点があるが、1の甍片と3の坏片は床面より出土している。



第36図 S I - 06 出土遺物実測図

第7号住居跡 (S I - 07) (第37~43図)

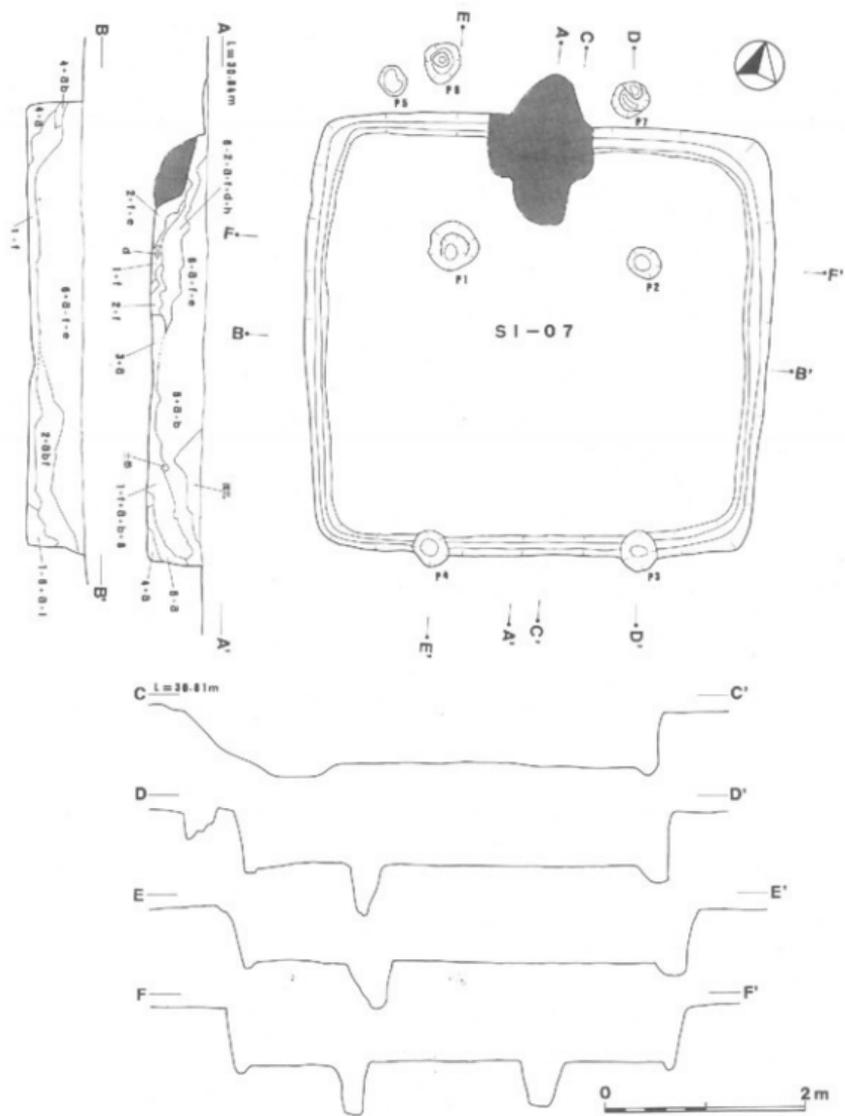
C区, C・D33グリット画を中心に検出された。本住居跡の検出部分は当初調査区域内から確認できた南東側部分のみであったが, 北西側部分を確認するため一部区域外部分を拡張して完掘した。

重複遺構はなく単独検出である。形状は方形を呈している。規模は, 東西462cm, 南北430cmを測れ, 主軸方向はN-14°-Wを指している。

壁面は, 東側55cm, 西側57cm, 南側55cm, 北側55cmの高さを測れた。壁溝は各壁面下より検出され, 規模は東側幅10cm, 深さ7cm。西側幅15cm, 深さ7cm。南側幅21cm, 深さ7cm。北側幅14cm, 深さ8cmであった。壁質はローム土で全体的に硬く, わずかに外傾して立ちあがっている。

床面は, 暗褐色土とロームブロック土との混合土が主体となった貼り床を施しており, 中央部は硬く踏み締まっているが壁周縁部は比較的軟質な床である。

ピットは, 7ヵ所から検出されその規模および形状は, P₁-53×50×45cm, 円形。P₂-34×29×52cm, 円形。P₃-41×31×19cm, 円形。P₄-39×32×14cm, 円形。P₅-32×26×18cm, 楕円形。P₆-42×34×28cm, 不整円形。P₇-36×34×29cm, 不整円形である。P₁, P₂, P₃, P₄は主柱と考



第37图 SI-07 实例图

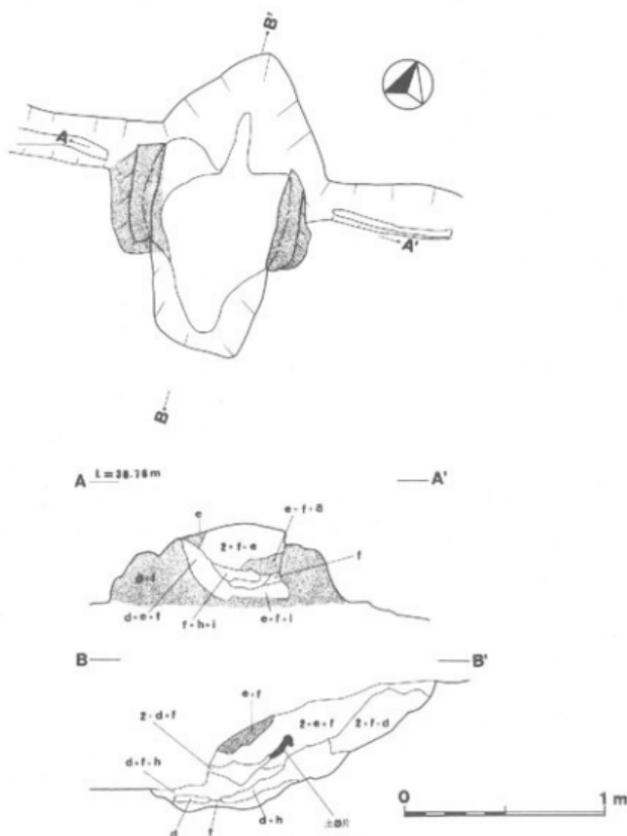
えられる。貯蔵穴はなし。

カマドは、北壁中央に1基付設されており、規模は両袖間100cm、焚口奥壁間153cm、現存高さは50cmであった。カマド内部の堆積状況は、焼土、粘土塊、粘土粒、黒褐色土、炭化物などが混在しておりほぼ自然崩落したものと考えられる。構築材は灰白色粘土と褐色粘土粒の混合土である。

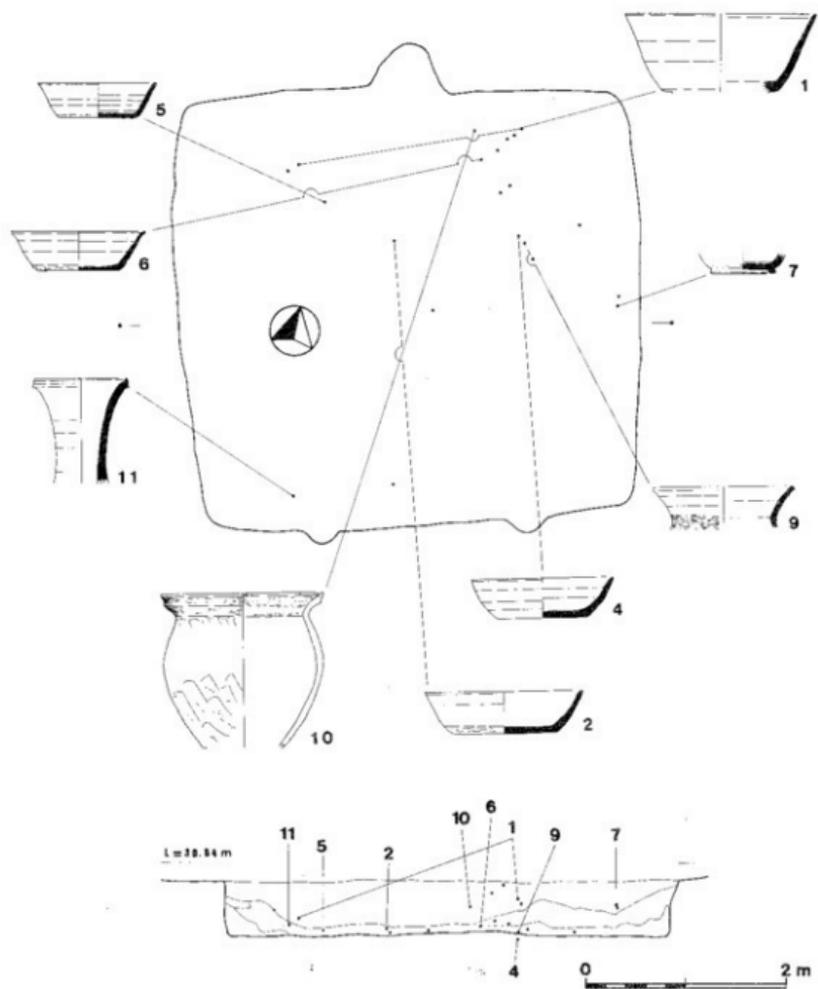
覆土は、黒褐色土が主体土で自然堆積状況を示していた。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片1001点、須恵器片112点出土している。土師器片の内訳は、坏片72点、甍片409点、判別不能なのが520点であった。須恵器片の内訳は、坏片88点、甍片21点、蓋片3点であった。

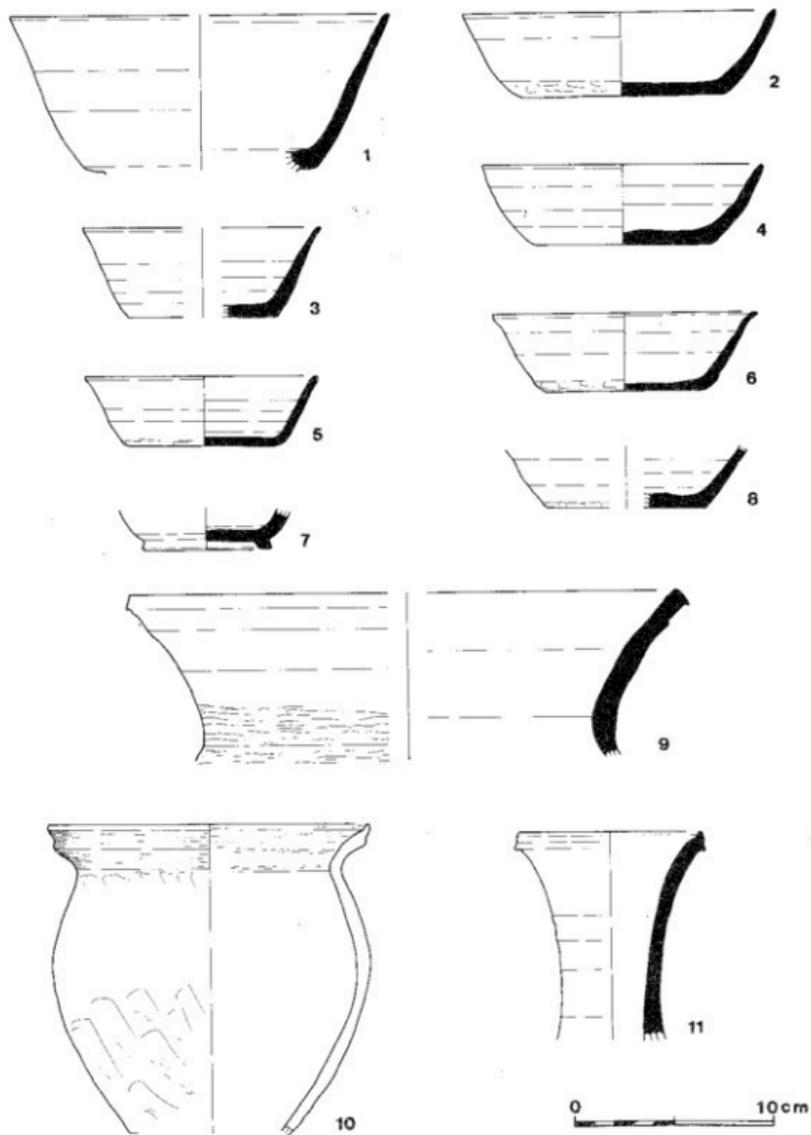
図化可能なものは全部で24点出土している。



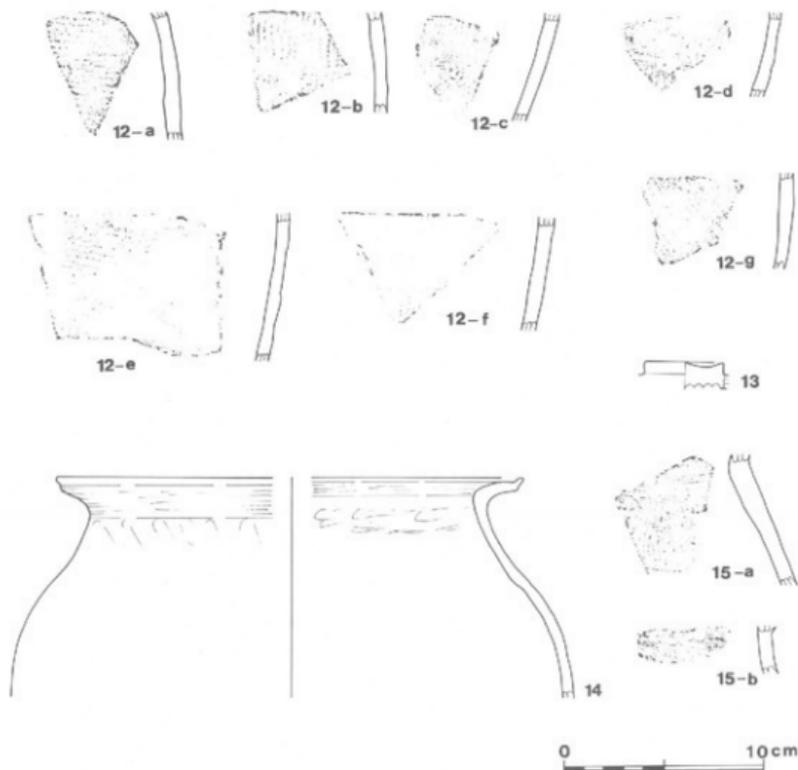
第38図 S1-07カマド実測図



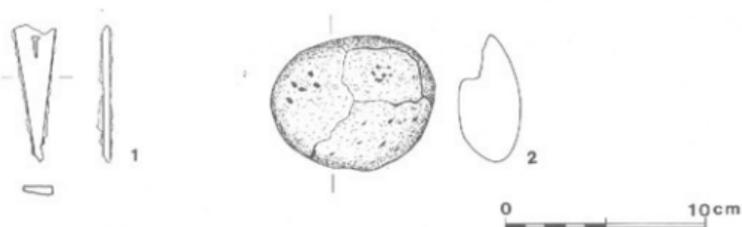
第39圖 S I - 07 遺物分布圖



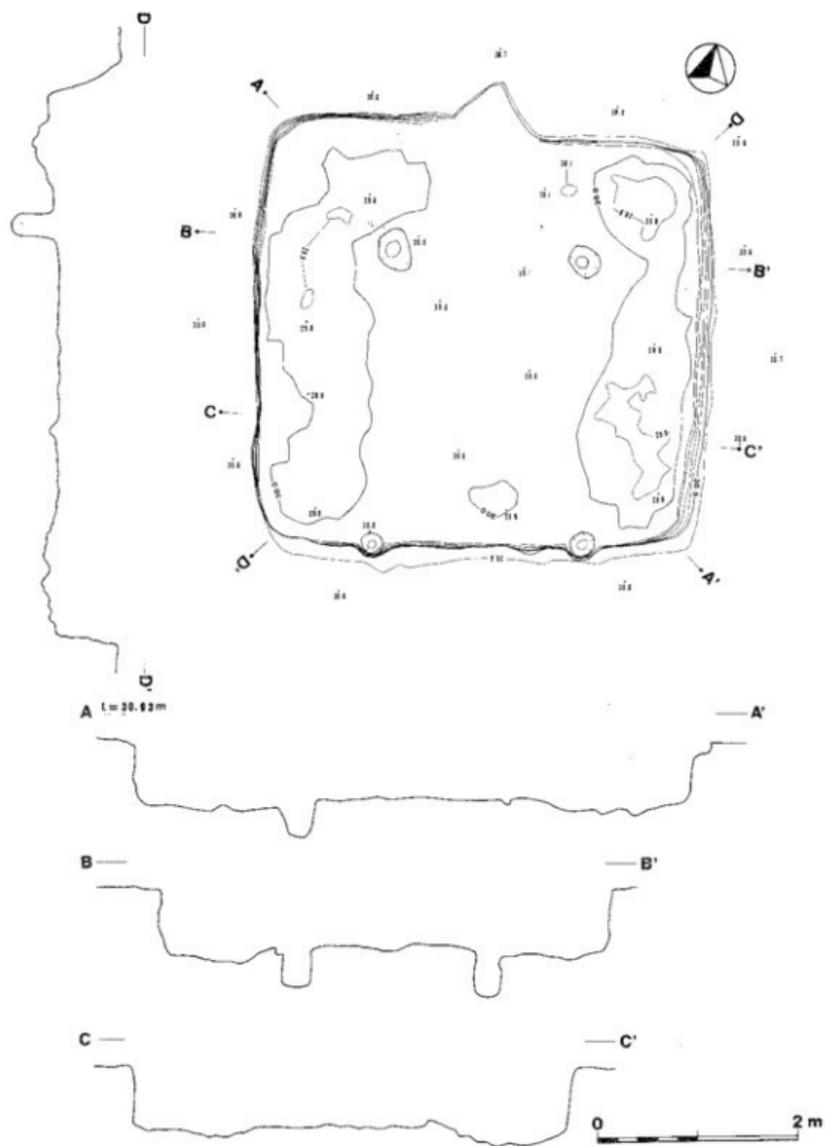
第40图 S I - 07 出土遗物实测图(1)



第41图 S I - 07 出土遺物実測図(2)



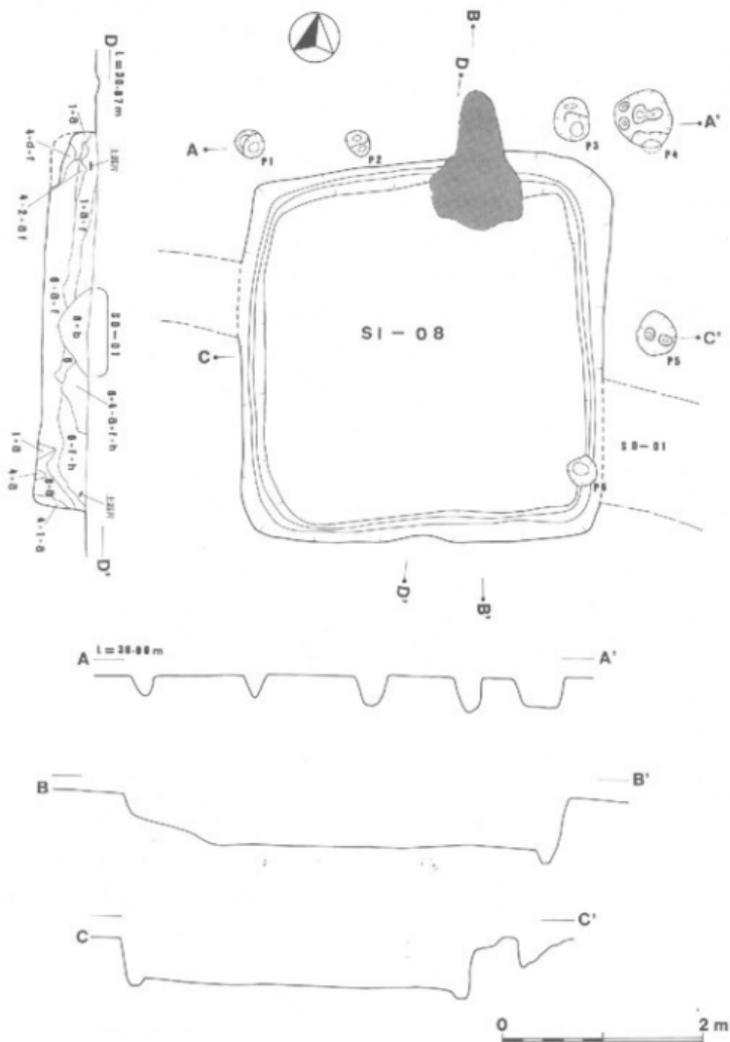
第42图 S I - 07 出土遺物実測図(3)



第43图 S1-07 掘り方面実測図

第8号住居跡 (S I - 08) (第44~51図)

C区、C・D35グリット画を中心に検出された。重複遺構としてはS D - 01が本住居跡の東西方向に縦貫して確認された。新旧関係は、セクション面からみた切り合状態でS D - 01が本住居跡を



第44図 S I - 08 実測図

切っていることからSD-01が新しい遺構であることが確認された。

形状は、方形を呈している。規模は、東西360cm、南北378cm。主軸方向はN-8°-Wを指している。壁面は、東側52cm、西側50cm、南側53cm、北側49cmの高さを測れた。壁溝は、各方向の壁面下より検出され、その規模は東側幅19cm、深さ15cm。西側幅16cm、深さ10cm。南側幅20cm、深さ15cm。北側幅20cm、深さ13cm。壁質はローム土で全体的に硬くやや外傾して立ちあがっている。

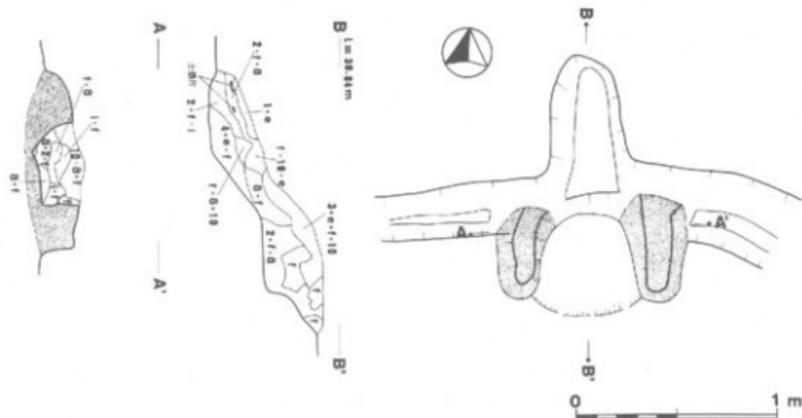
床面は、暗褐色土を主体とした貼り床で全体的に堅緻に踏み固められ平坦な床である。ピットは6ヶ所から検出され、規模および形状は、P₁-28×27×18cm、円形。P₂-28×22×23cm、楕円形。P₃-43×34×32cm、楕円形。P₄-60×54×28cm、不整形円形。P₅-44×40×29cm、不整形円形。P₆-32×30×10cm、不整形円形である。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは、北壁中央から東寄りの位置に付設されていた。規模は両袖間93cm、焚口奥壁間140cm、現存高さ55cmを測れた。内部には黒褐色土、黒色土、粘土粒、焼土、ローム粒が堆積しており、ほぼ自然崩壊したものと思われた。構築材は灰白色粘土と褐色粘土粒の混合土である。

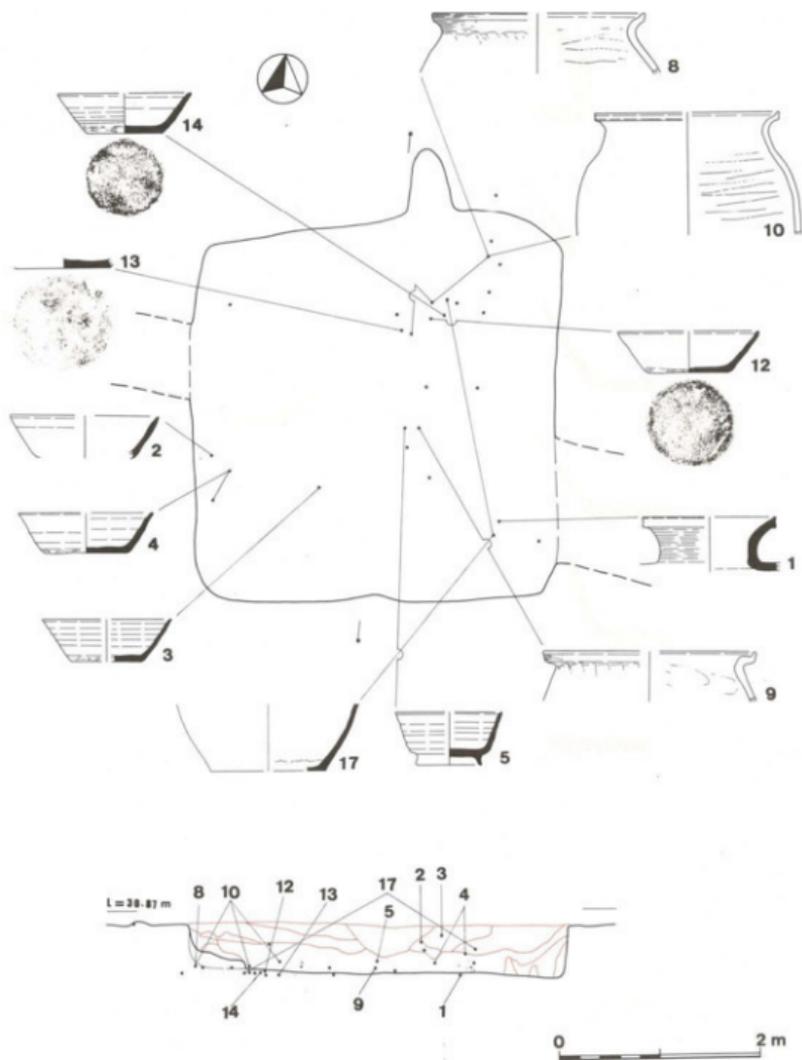
覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒が主で、堆積状況は自然堆積の状況を示していた。

遺物は、覆土中あるいは床面より土師器片298点、須恵器片102点が出土している。土師器片の内訳は、坏片34点、甕片136点、判別不明なものが128点であった。須恵器片の内訳は、坏片77点、高台付坏片3点、甕片22点であった。

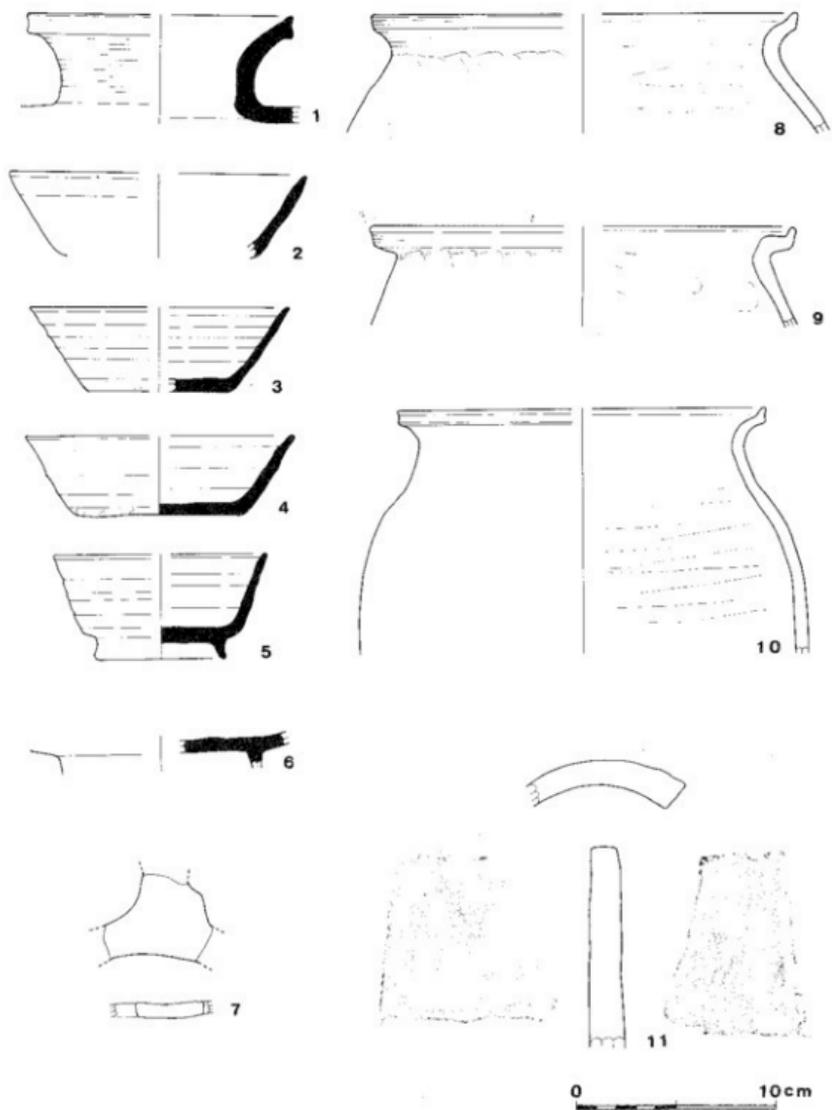
図化可能な遺物は全部で24点出土している。第47図の11は瓦片で外面はヘラ削りをおこない、内面には布目痕が残る。出土位置は竪穴南東コーナー部の覆土中より出土した。



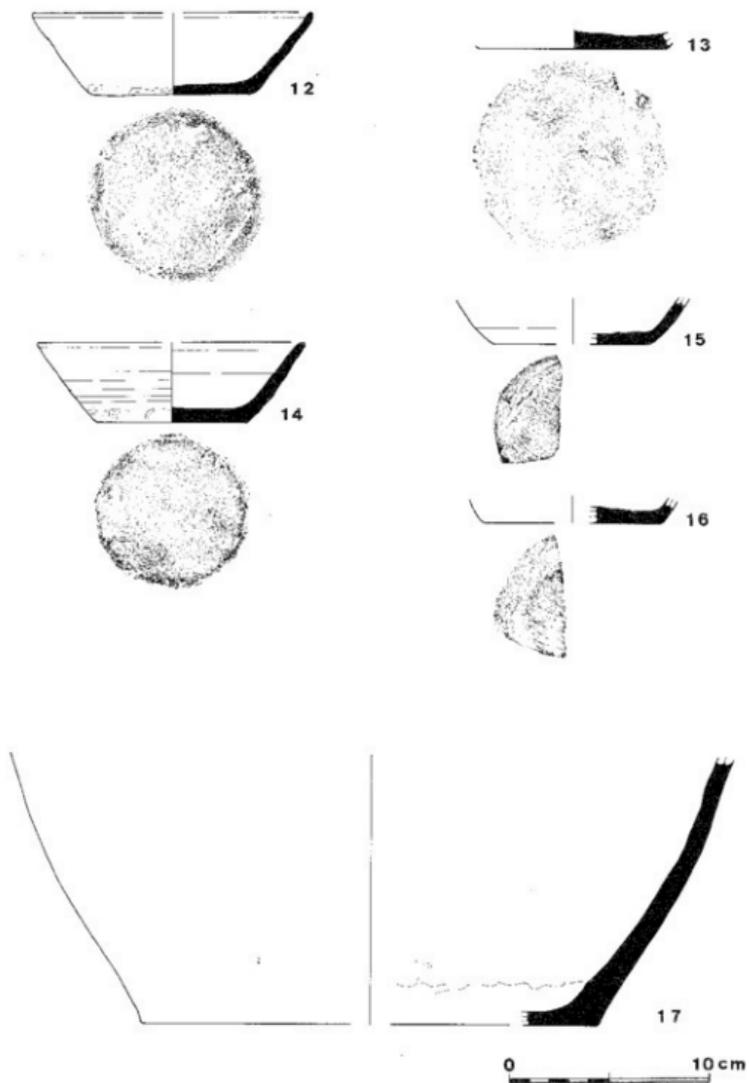
第45図 S1-08カマド実測図



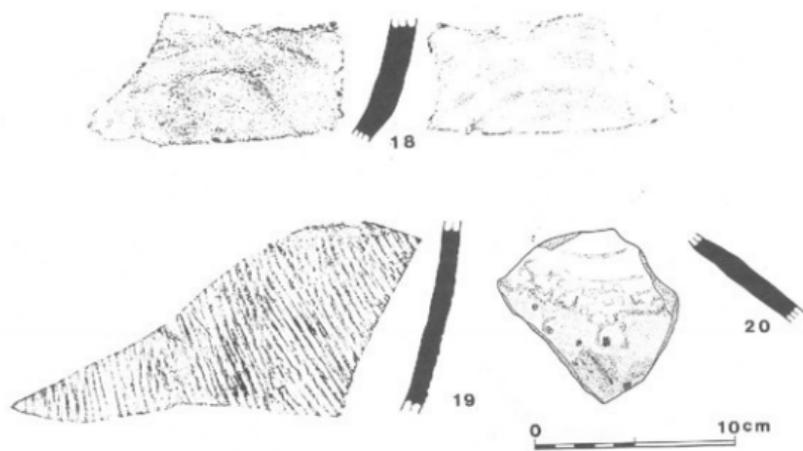
第46图 S I - 08 遺物分布図



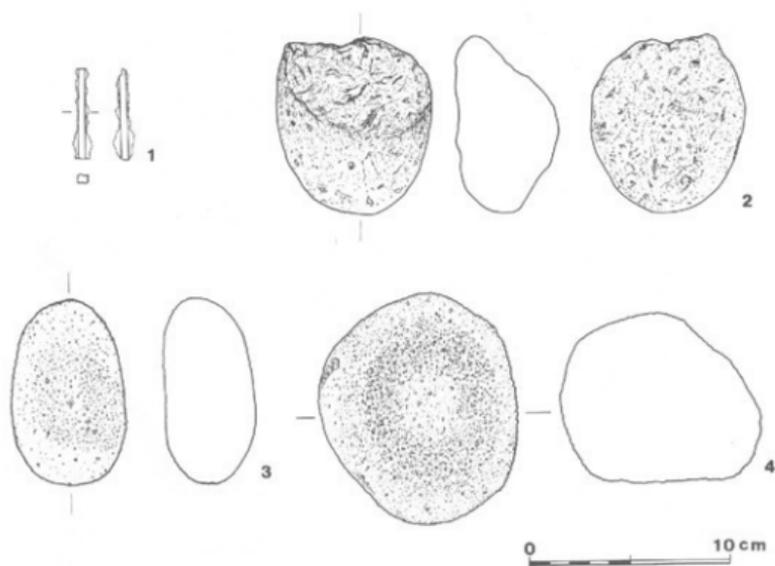
第47图 S I - 08 出土遗物实测图(1)



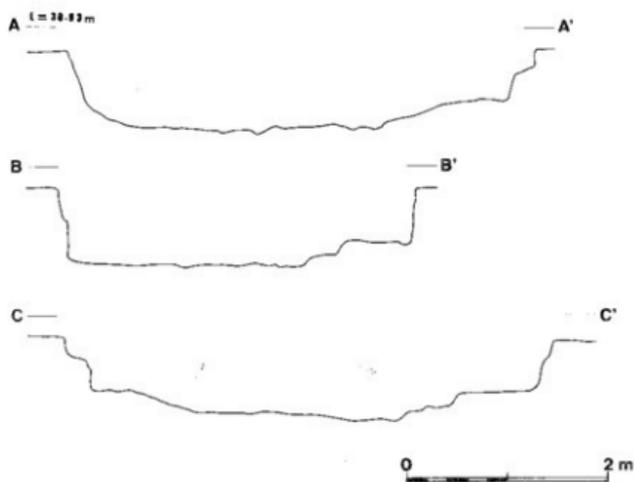
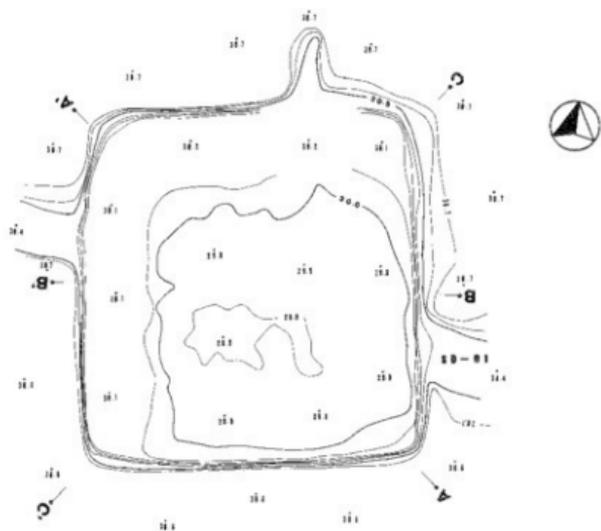
第48图 S I - 08 出土遗物实测图(2)



第49图 S I - 08 出土遗物实测图(3)



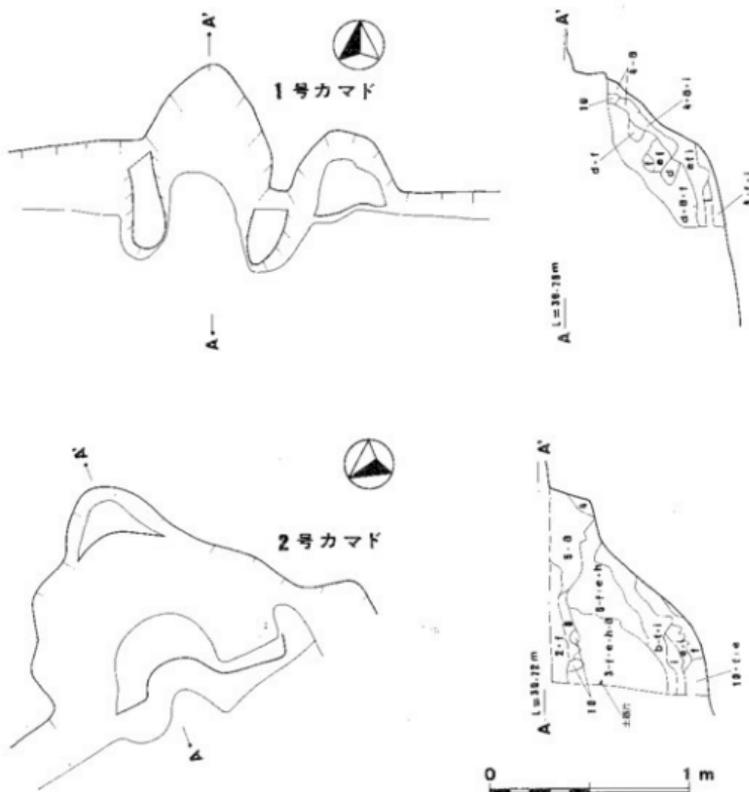
第50图 S I - 08 出土遗物实测图(4)



第51图 S I - 08 掘切方面实测图

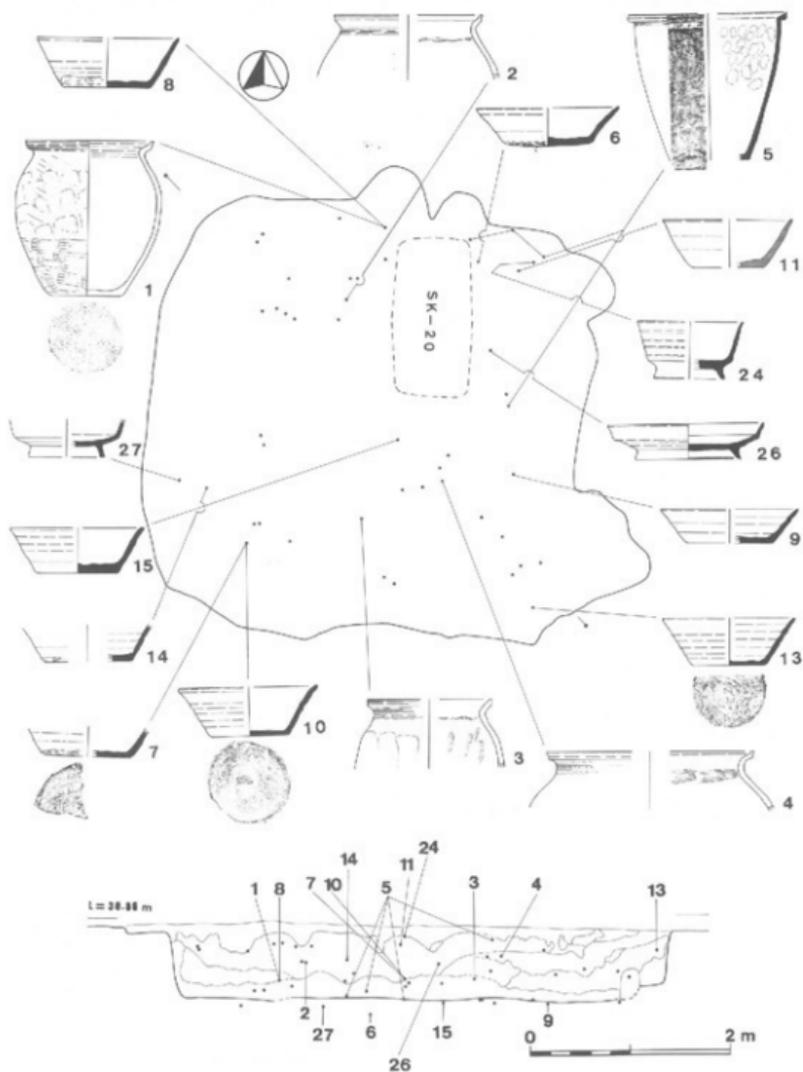
重複遺構はなく単独検出であった。形状は方形を呈している。規模は、東西430cm、南北430cm。主軸方向はN-1°-Eを指している。壁面は、東側77cm、西側81cm、南側79cm、北側76cmの高さを測れた。壁溝は検出されなかった。壁質はローム土で各方向とも直立したのち外傾して立ち上がり、全体的に凹凸がみられ軟質な壁面である。床面は、貼り床を施し全体的に堅緻に踏み固められた平坦な床である。ピットは7ヵ所から検出され、規模形状はP₁-47×39×30cm、不整円形。P₂-50×47×25cm、不整形円形。P₃-35×32×28cm、不整形円形。P₄-36×34×31cm、円形。P₅-34×27×25cm、楕円形。P₆-33×31×45cm、円形。P₇-61×50×34cm、不整形円形である。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは、2基検出された。1号カマドは北壁中央に位置し、規模は向袖間80cm、焚口奥壁間106cm、

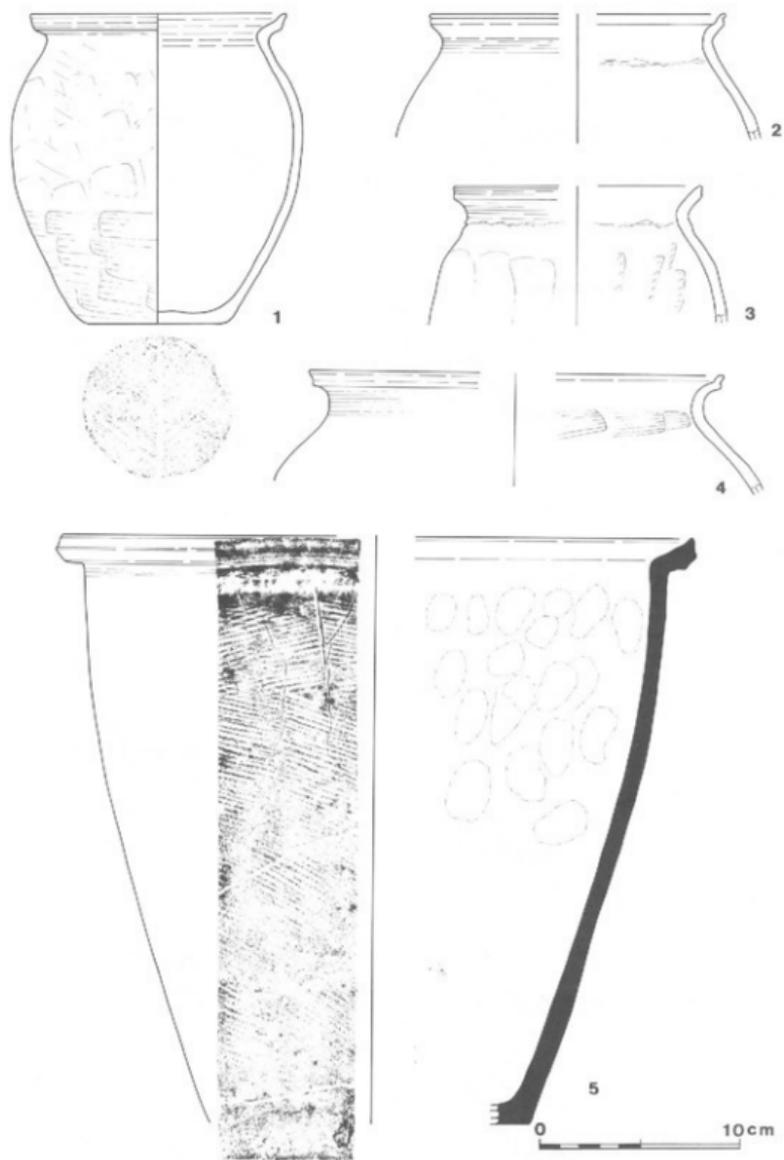


第53図 S I - 09 カマド実測図

現存高さ58cm。2号カマドは東壁の南端に位置し、規模は両袖間124cm、焚口奥壁間115cm、現存高さ80cmであった。

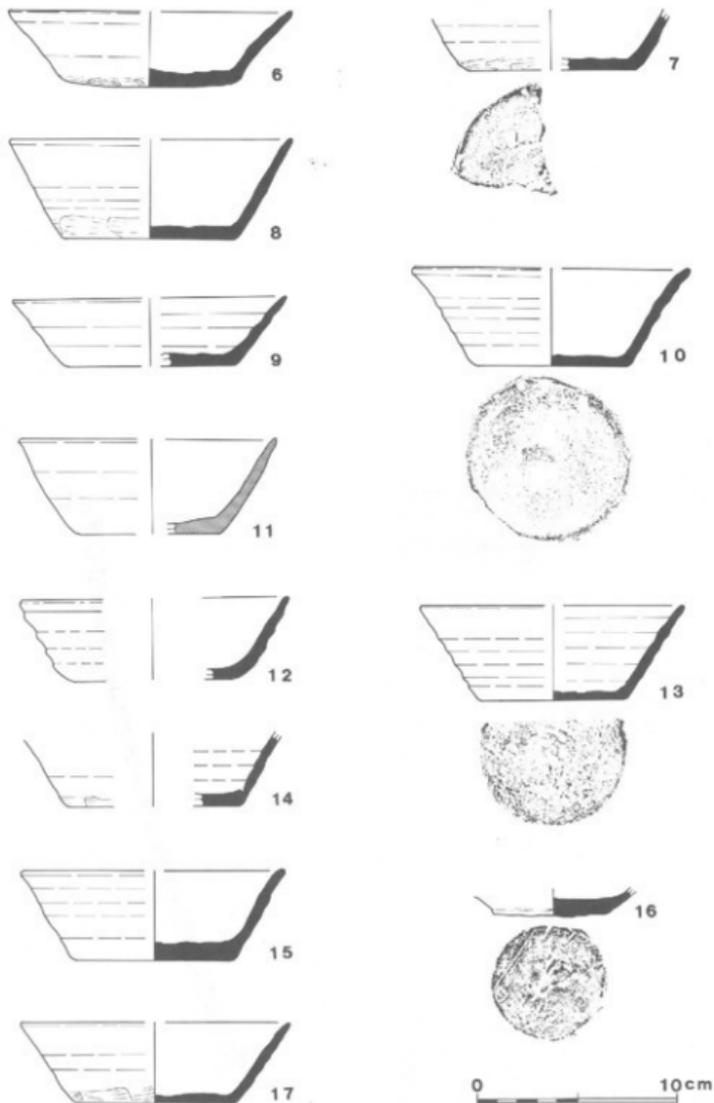


第54図 S I-09 遺物分布図



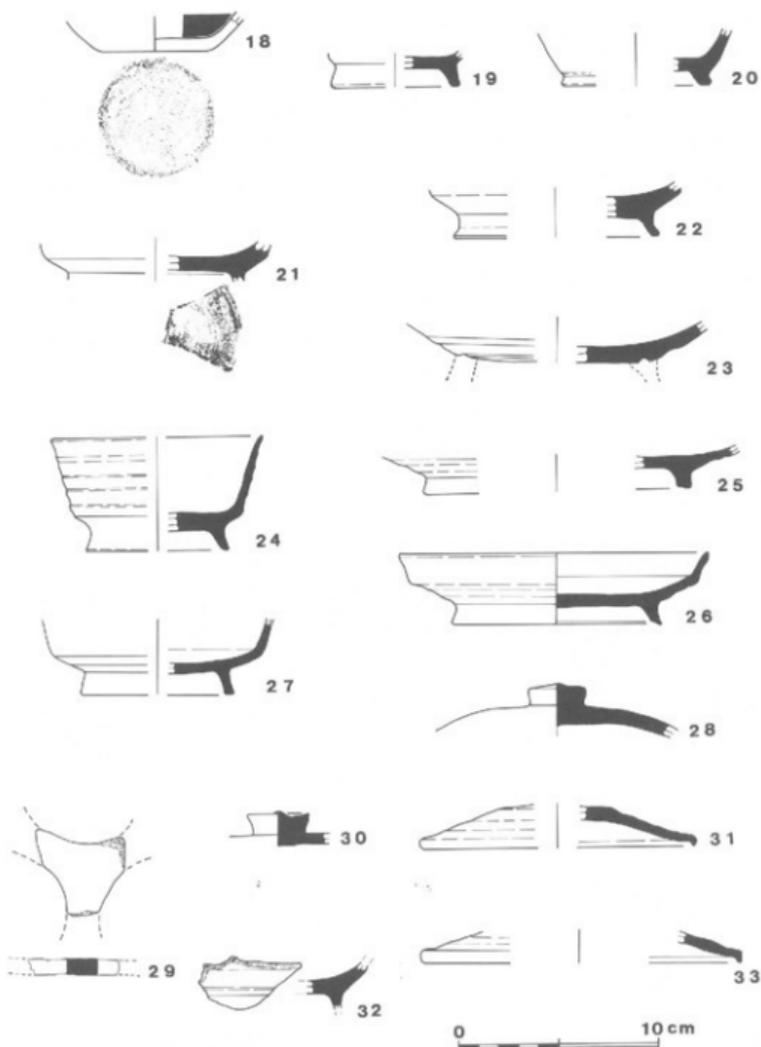
第55图 S I - 09 出土遺物実測図(1)

1号カマドの内部は、褐色土、黒色土に混在してローム粒、粘土塊、焼土、灰が堆積しており、とくに焼土は多量に含まれていた。なお、1号カマドの東側に壁面に若干切り込んだ部分で焼土、



第56図 S I - 09 出土遺物実測図 (2)

灰が堆積している部分が認められ、その内部の堆積土が1号カマドによって切られていたことから、本カマド以前のカマドすなわち改築前のカマドと考えられる。

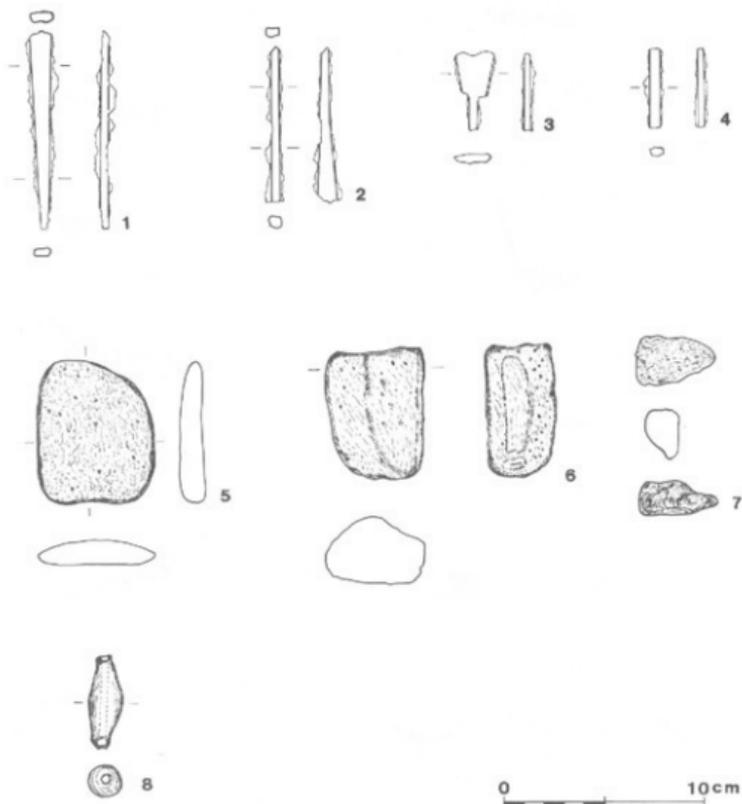


第57図 S I - 09 出土遺物実測図(3)

2号カマド内の堆積土はすべて焼土、ロームブロック土と若干の灰、褐色土などが主体である。1号、2号カマドともに構築材は灰白色粘土が主と思われ、とくに2号カマドについては粗砂も含まれていたと思われる。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ロームブロック土、ローム粒が主体となっており、堆積状況は自然堆積であった。

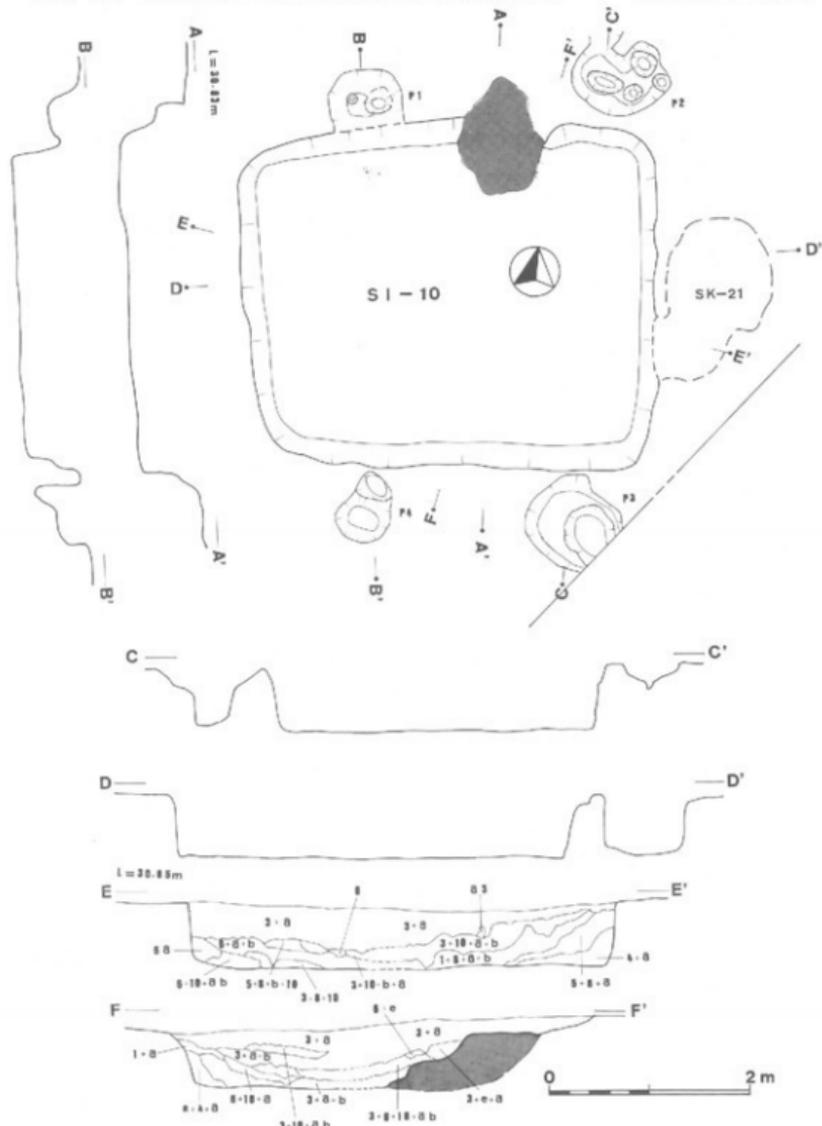
遺物は、覆土中および床面から土師器片939点、須恵器片513点が出土している。土師器片の内訳は、坏片38点、高台付坏片3点、甕片388点、判別不明なものが510点であった。須恵器片の内訳は、坏片438点、高台付坏片3点、甕片51点、甌片1点、蓋片20点であった。図化可能な遺物は全部で41点であった。



第58図 S1-09出土遺物実測図(4)

第10号住居跡 (S I - 10) (第60-64図)

C区, D37・38グリッド画を中心に検出された。本住居跡の北西コーナー部が区域内より確認さ



第60図 S I - 10 実測図

れ、南東側は区域外であったが部分拡張をおこなって完掘した。

重複遺構はなく単独検出である。形状は方形を呈している。規模は東西400cm、南北350cm。主軸方向はN-5°-Wを指している。

壁面は、東側62cm、西側61cm、南側58cm、北側50cmの高さを測れた。壁溝は検出されなかった。壁質はローム土でやや軟かく全体的に凹凸が多く、わずかに外傾して立ちあがった壁面である。

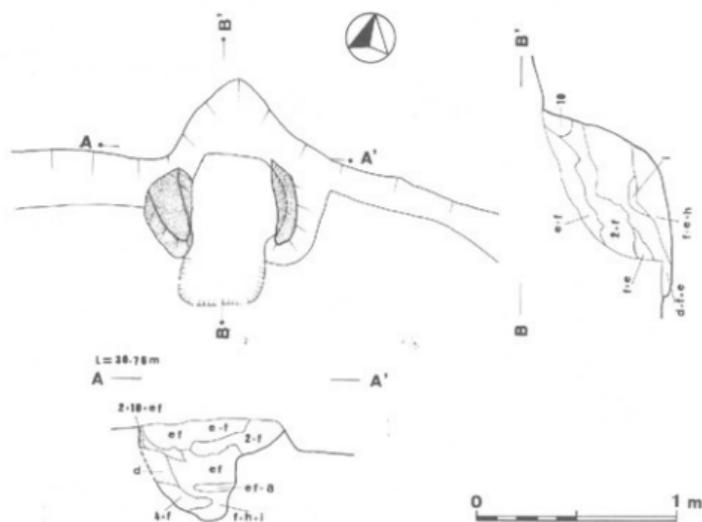
床面は、貼り床で暗褐色土とローム粒子を多量に含んだ土が主体となっており、全体的に堅緻な床ではあるが北側より南側にかけてわずかに傾斜した床である。

ピットは、4カ所から検出され、その規模および形状は、P₁-74×58×30cm、不整形円形。P₂-100×60×25cm、不整形円形。P₃-100×95×55cm、不整形円形。P₄-70×54×32~45cm、不整形円形である。

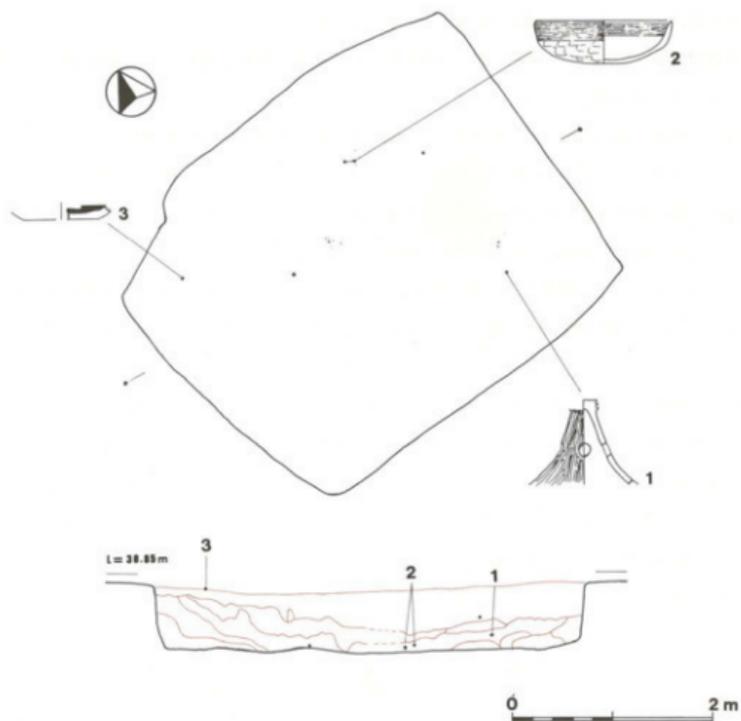
貯蔵穴は検出されなかった。カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに付設されていた。規模は両袖間87cm焚口奥壁間118cm、現存高さ65cmを測れた。構築材にはふり橙色粘土と灰白色粘土の混合土が主体である。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土、黒色土が主体で、ローム粒、ロームブロック土が部分的に含まれていたが、堆積状況は自然堆積である。

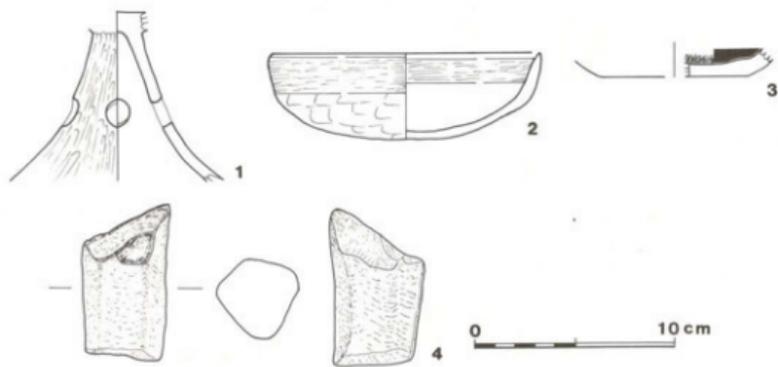
遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片158点、須恵器片58点が出土している。土師器片の内



第61図 S1-10カマド実測図

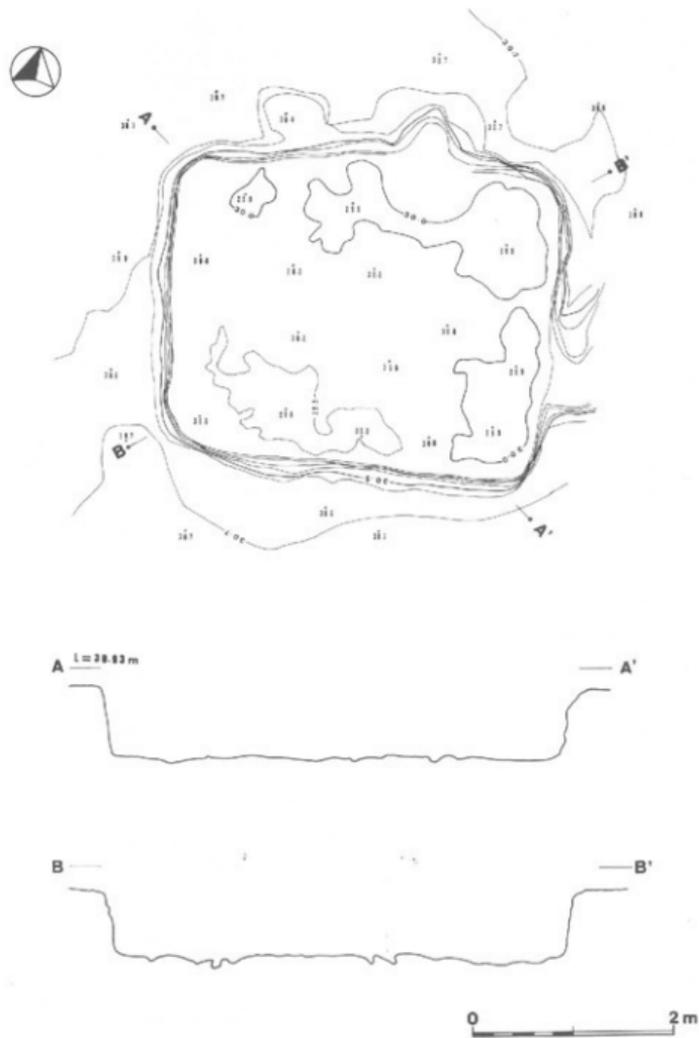


第62图 S I - 10 遺物分布図

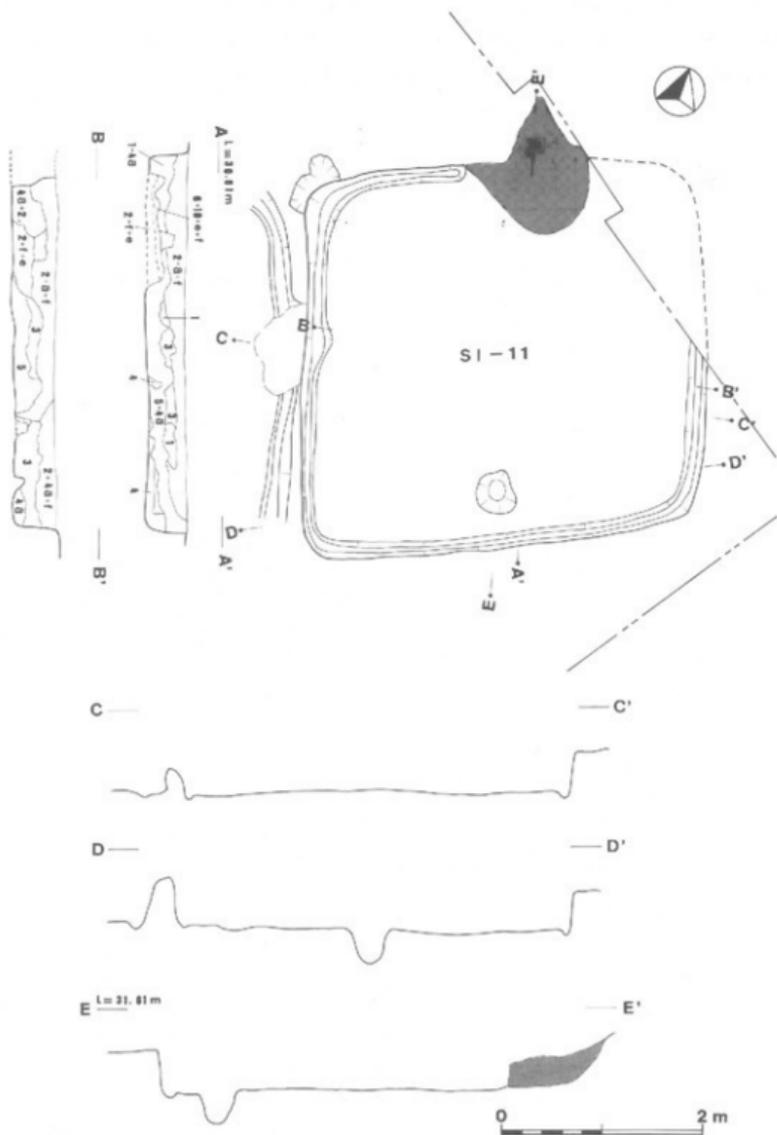


第63图 S I - 10 出土遺物実測図

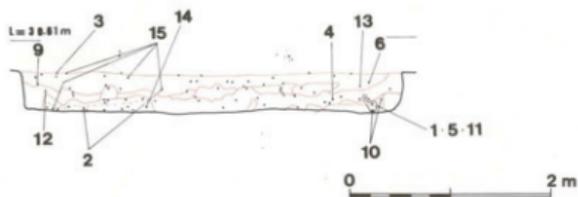
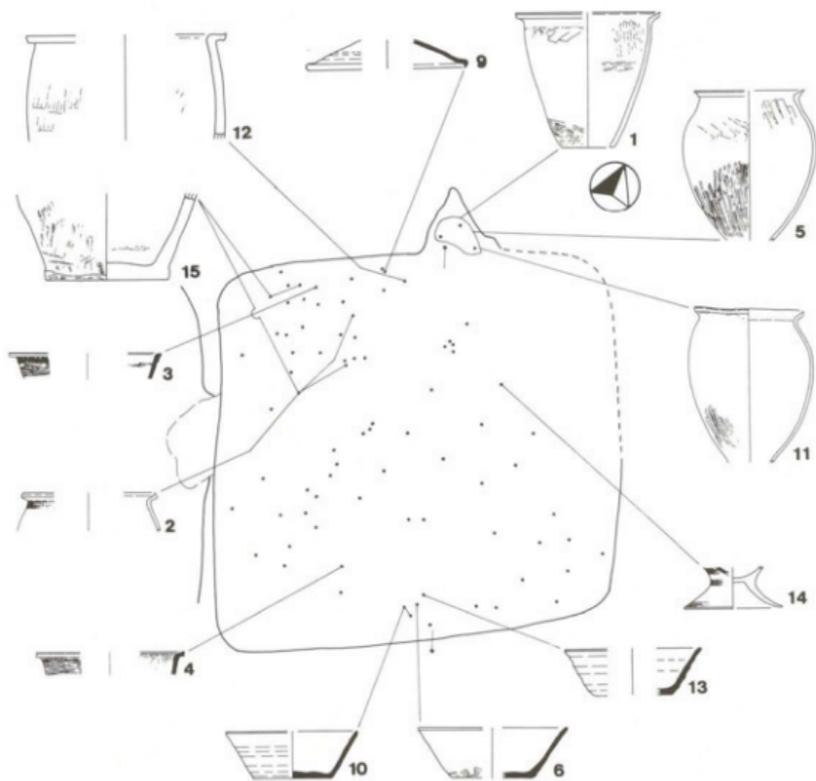
訳は、坏片21点、高台付坏片2点、甕片69点、判別不能なものが66点であった。須恵器片の内訳は、坏片37点、甕片18点、甗片1点、蓋片2点であった。図化可能な遺物は4点であった。第63図の1は器台脚部片で、覆土中に流れ込んだもので遺構との関連性はみられなかった。



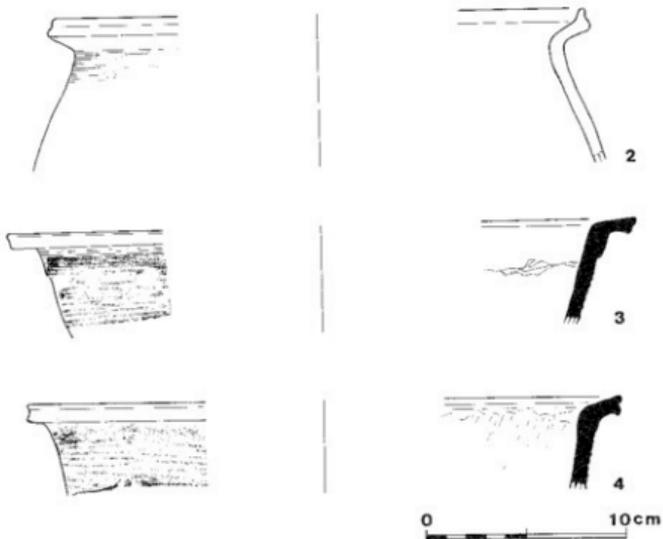
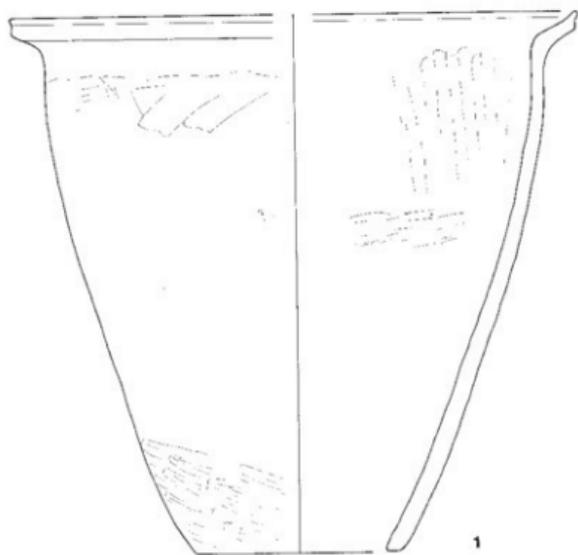
第64図 S1-10掘り方面実測図



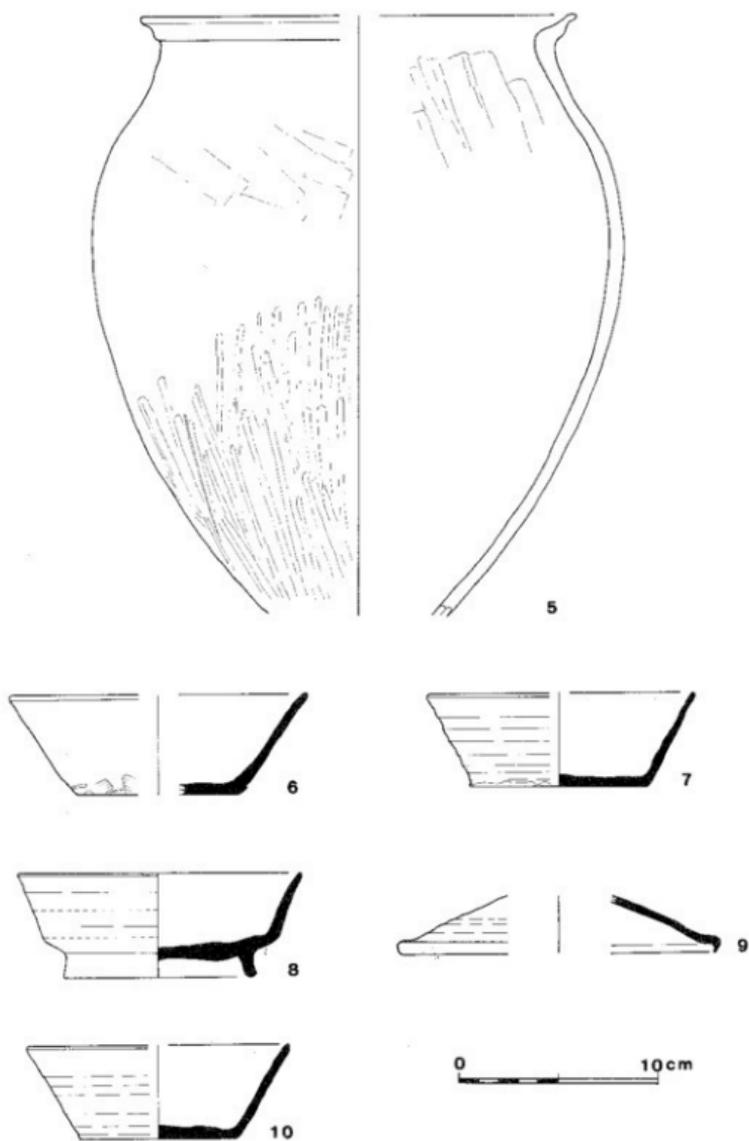
第65图 SI-11 实测图



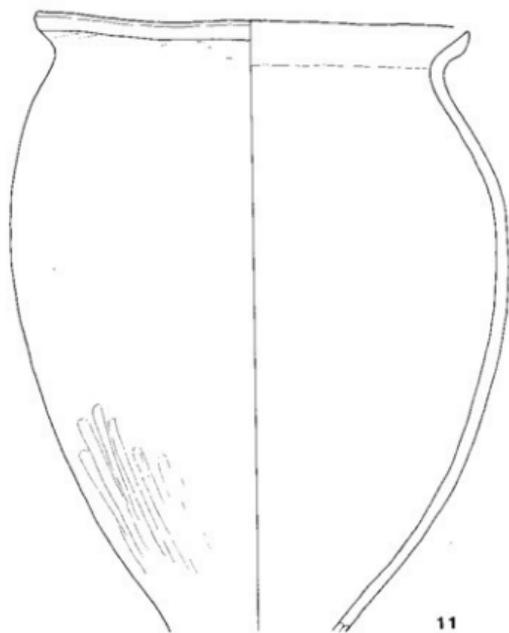
第66圖 S I - 11 遺物分布圖



第67图 S1-11出土遗物实测图(1)



第68图 S I - 11 出土物实测图(2)



11



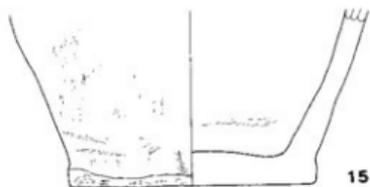
12



13



14



15



第69圖 S I - 11 出土遺物実測図(3)

第11号住居跡（S I - 11）（第65～71図）

C区，E45・46グリット画を中心に検出された。本住居跡は，S I - 15の調査区域外にあたる部分を検出するため，区域の部分拡張をおこなった時点で確認され，北東コーナー部以外は完掘できた。

重複遺構はS I - 15があり，本住居跡はS I - 15のカマドの一部を切って構築されていることが確認できた。形状は，方形を呈している。規模は，東西400cm，南北385cm。主軸方向は，N - 18° - Wを指している。

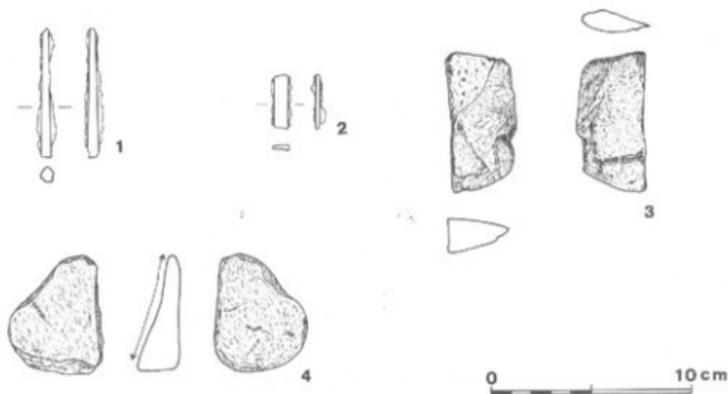
壁面は，東側40cm，西側30cm，南側43cm，北側54cmの高さを測れた。壁溝は，各壁面下より検出され，規模は東側幅20cm，深さ8cm，西側幅15cm，深さ6cm，南側幅16cm，深さ5cm，北側幅14cm，深さ5cmを測れた。壁質はローム土で全体的に硬く締った壁面である。

床面は，貼り床で暗褐色土，黒色土，ロームブロックの混合土が主体となった堅靱な踏み固め床である。床面の中央がやや盛り上がりその周縁部はわずかに低くなった床である。

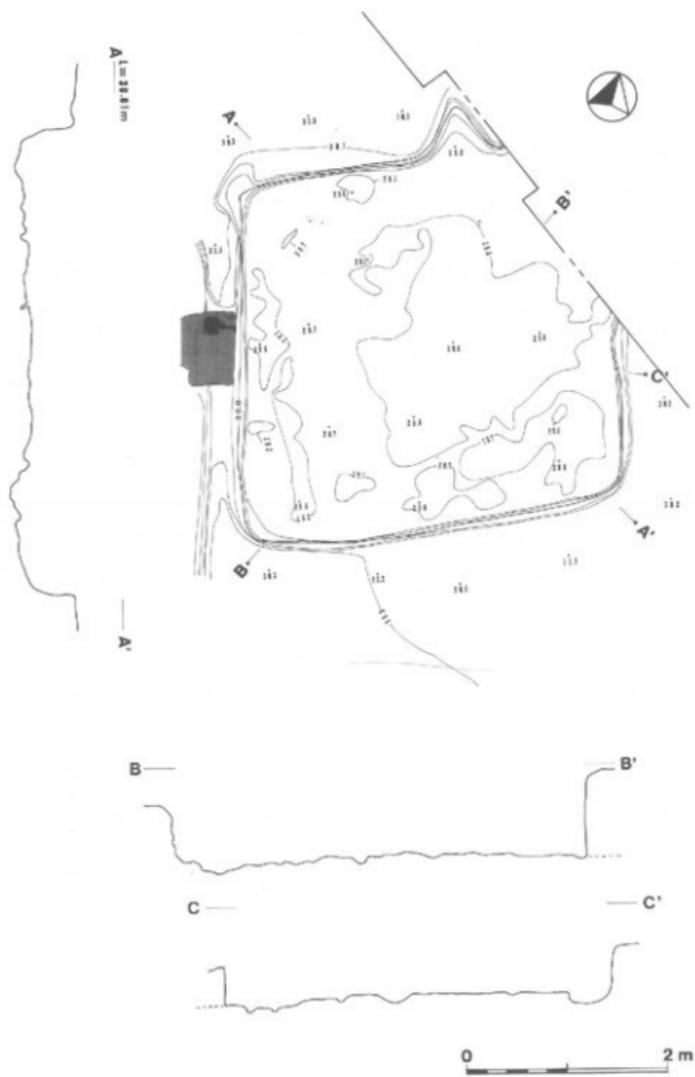
ピットは，1ヵ所から検出された。規模および形状はP - 20×18×16cm，不整円形である。カマドは，北壁の中央よりやや東寄りの位置から検出された。規模は両袖間120cm，焚口奥壁間140cm，現存高さ79cmを測れた。構築材は，褐色粘土と灰白色粘土の混合土となっている。

覆土は，暗褐色土，黒褐色土，褐色土が主体で，層中にはローム粒，焼土粒などが若干含まれており，ほぼ自然堆積の状況を示していた。

遺物は，覆土中あるいは床面から土師器片185点，須恵器片65点が出土している。土師器片の内訳は，坏片10点，甕片81点，判別不能なものが94点であった。須恵器片の内訳は，坏片62点，高台付坏片1点，甕片1点，蓋片1点であった。図化可能な遺物は全部で19点であった。



第70図 S I - 11 出土遺物実測図(4)



第71图 SI-11 掘り方面実測図

第12号住居跡 (S I-12) (第72~80図)

C区, D39・40, E39・40グリッド画から検出された。本住居跡は北西コーナー部の一部が調査区域内より確認されたため, 調査区域を部分的に南東側へ拡張し完掘した。

重複遺構はなく単独検出である。形状は不整形を呈している。規模は, 東西475cm, 南北420cm。主軸方向はN-4°-Wを指している。壁面は, 東側68cm, 西側64cm, 南側67cm, 北側58cmの高さを測れた。壁溝は認められず, 壁質はローム土で全体的に平坦で, 各壁面ともやや軟質であった。

床面は, 貼り床で暗褐色土とロームブロック土との混合土が主体で全体的に堅緻に踏み固められている。床面の中央は周縁部よりもわずかに高く, 壁面側に向ってわずかに傾斜している。

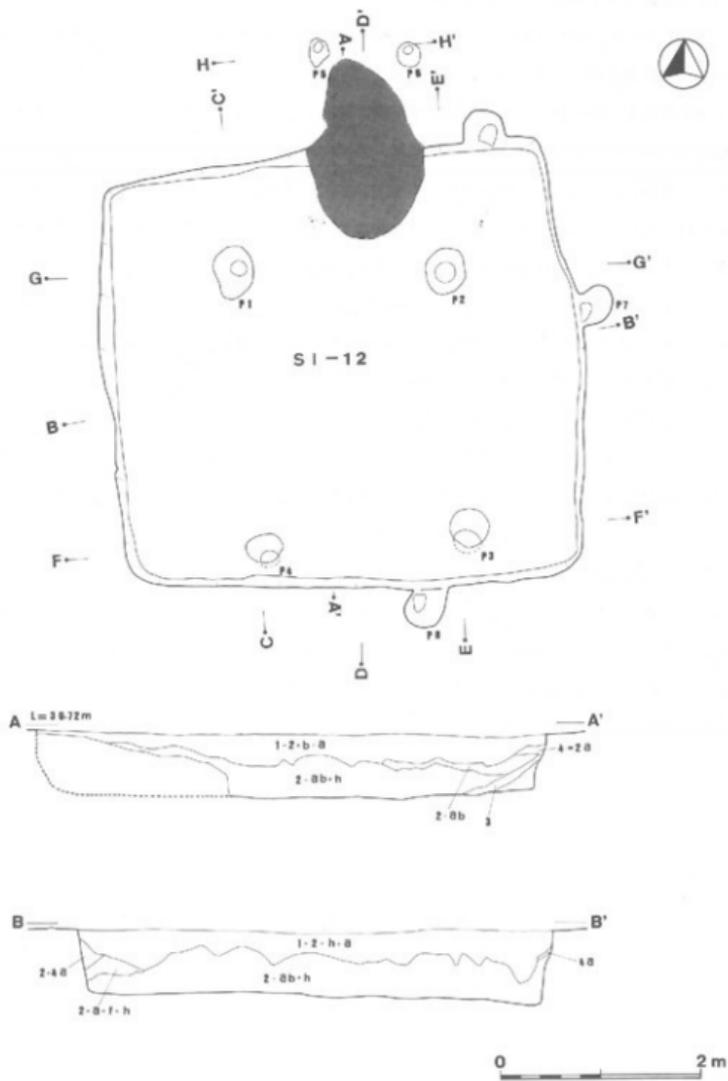
ピットは, 8カ所から確認されたがこのうち主柱のピットはP₁~P₆と考えられた。規模および形状は, P₁-54×39×77cm, 楕円形。P₂-46×40×62cm, 不整形。P₃-40×39×74cm, 円形。P₄-48×28×81cm, 楕円形。P₅-28×20×13cm, 楕円形。P₆-24×23×26cm, 円形。P₇-45×32×14cm, 楕円形。P₈-50×35×21cm, 楕円形である。

カマドは, 北壁中央よりやや東寄りの位置に付設されていた。規模は両袖間115cm, 焚口奥壁間182cmで現在高さは火床面から45cmであった。構築材にはぶい褐色粘土と灰白色粘土の混合土である。

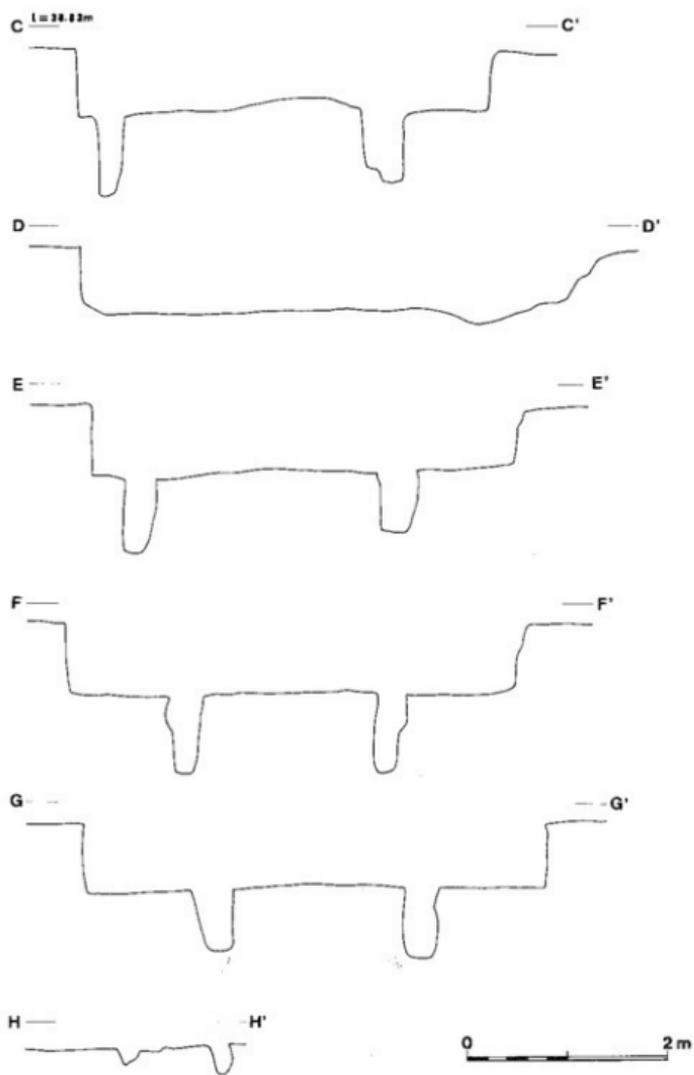
覆土は, 暗褐色土, 黒褐色土が主体で自然堆積の状況を示している。

遺物は, 覆土中あるいは床面から土師器片1707点, 須恵器片674点が出土している。土師器片の内訳は, 坏片170点, 高台付坏片1点, 甕片1084点, 判別不能なのが452点であった。須恵器片の内訳は, 坏片530点, 高台付坏片19点, 甕片100点, 蓋片25点であった。

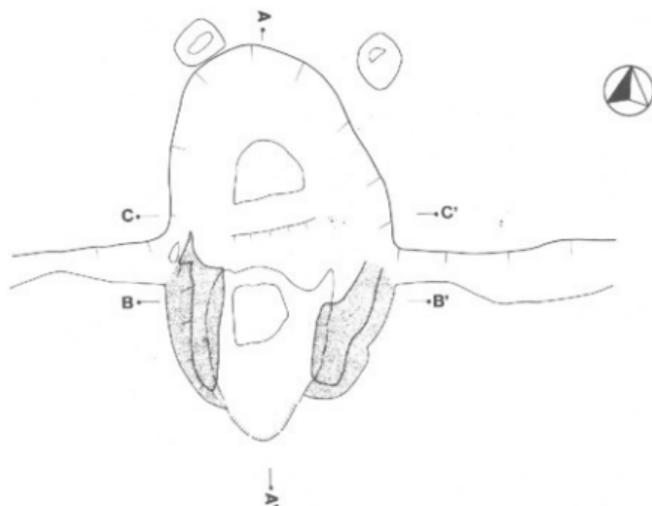
図化可能な遺物は全部で46点出上している。



第72图 S I - 12 实洲园 (1)

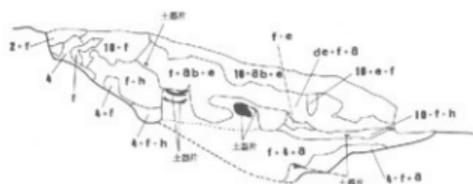


第73图 S I - 12 实测图 (2)



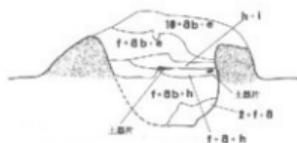
A 1=30.71m

A'



B

B'



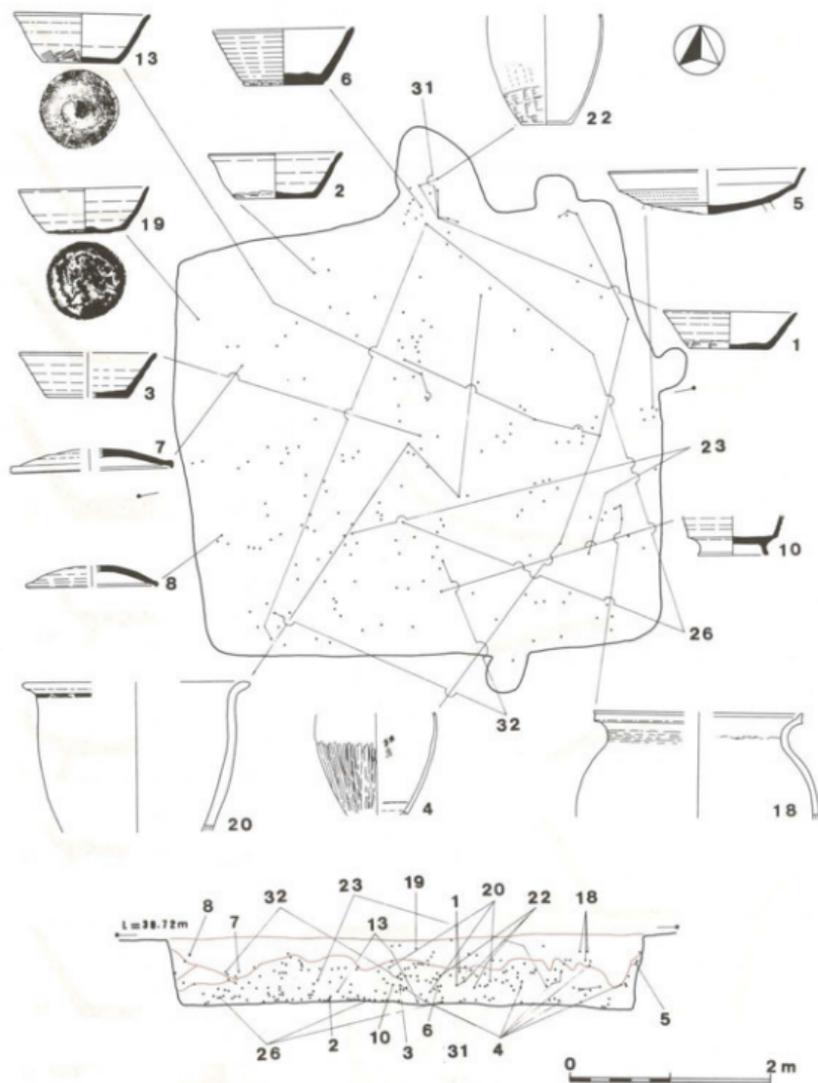
C

C'

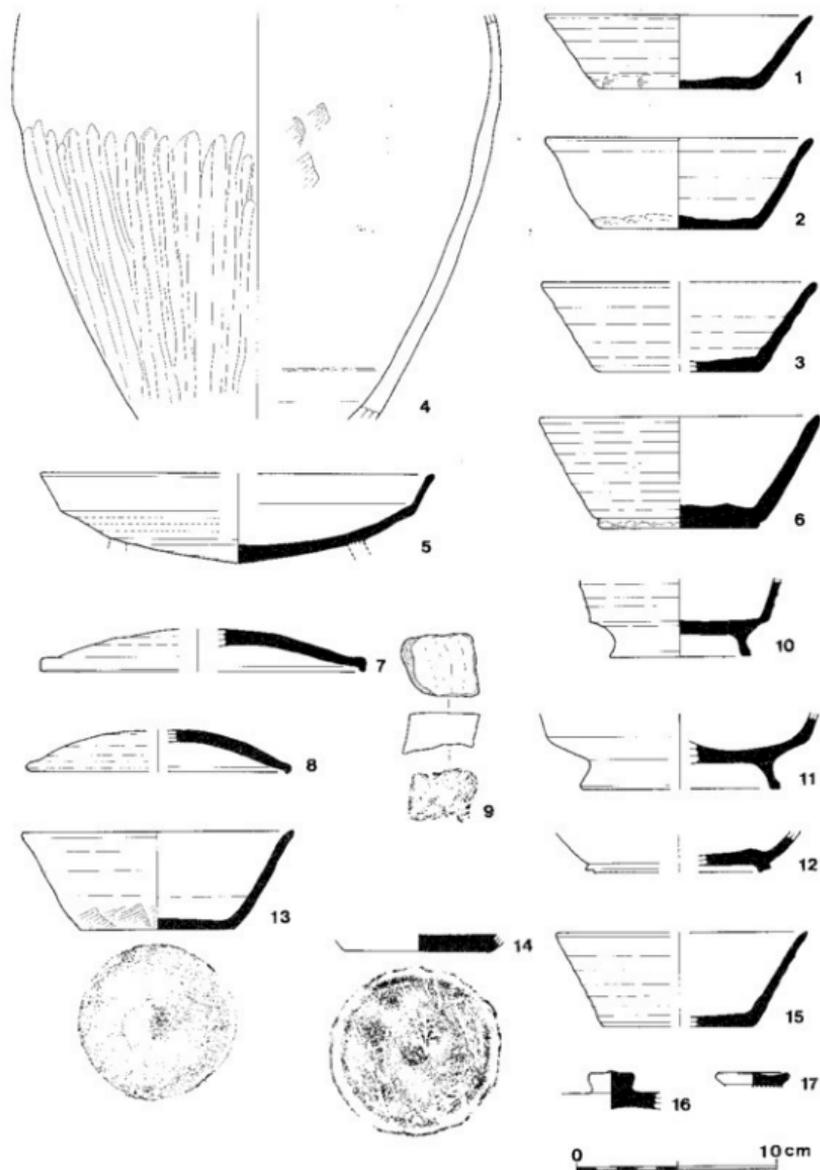


0 1 m

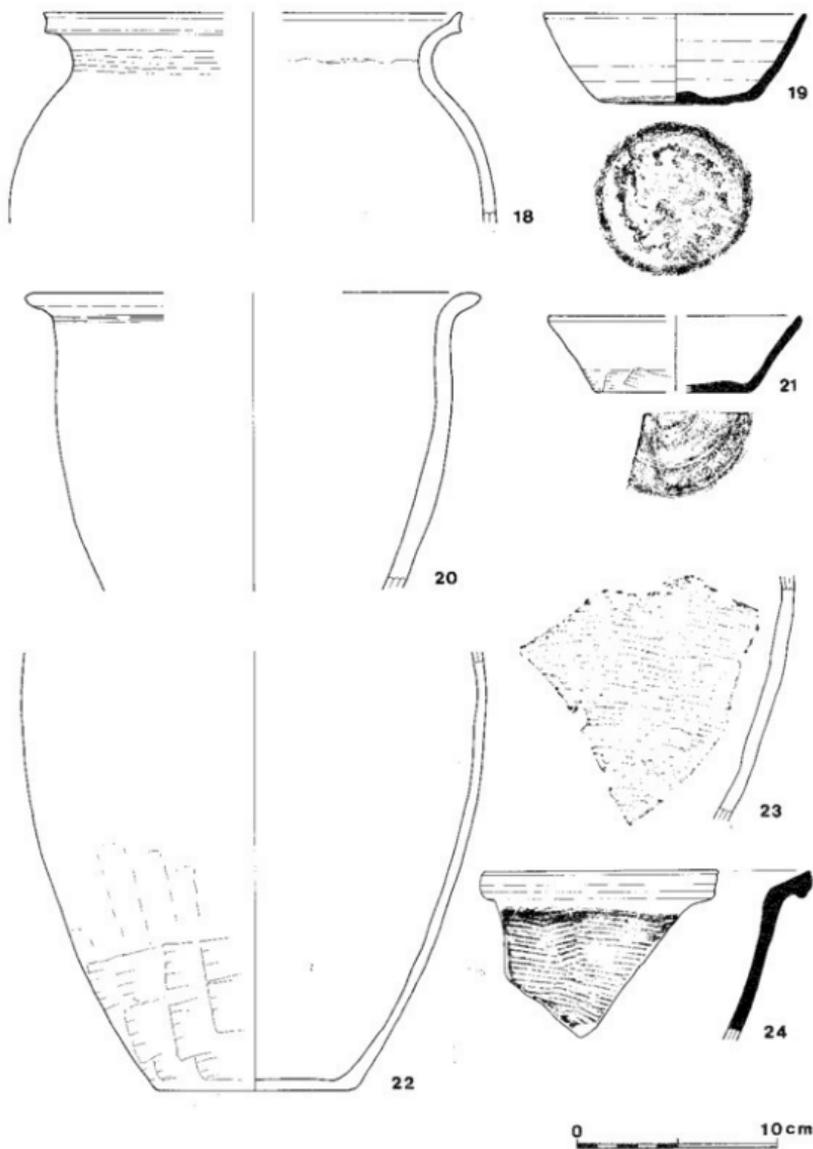
第74圖 S I - 12カマド実測図



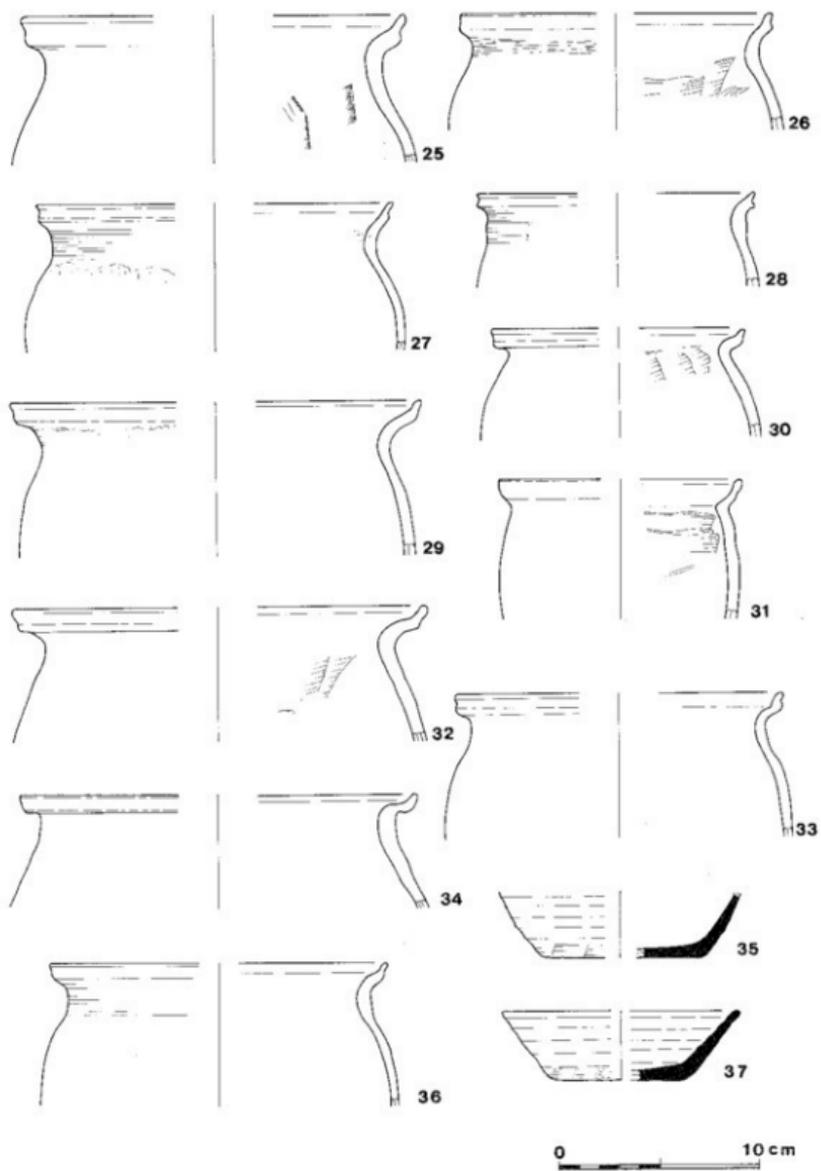
第75图 S I - 12 遺物分布图



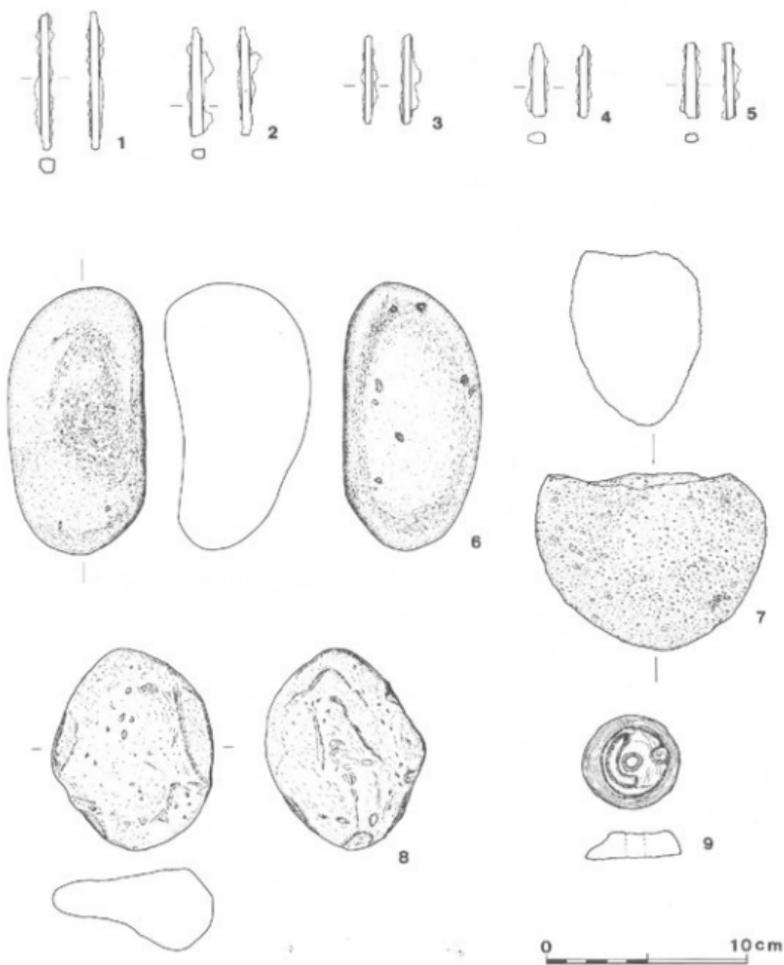
第76图 S I - 12出土物实测图(1)



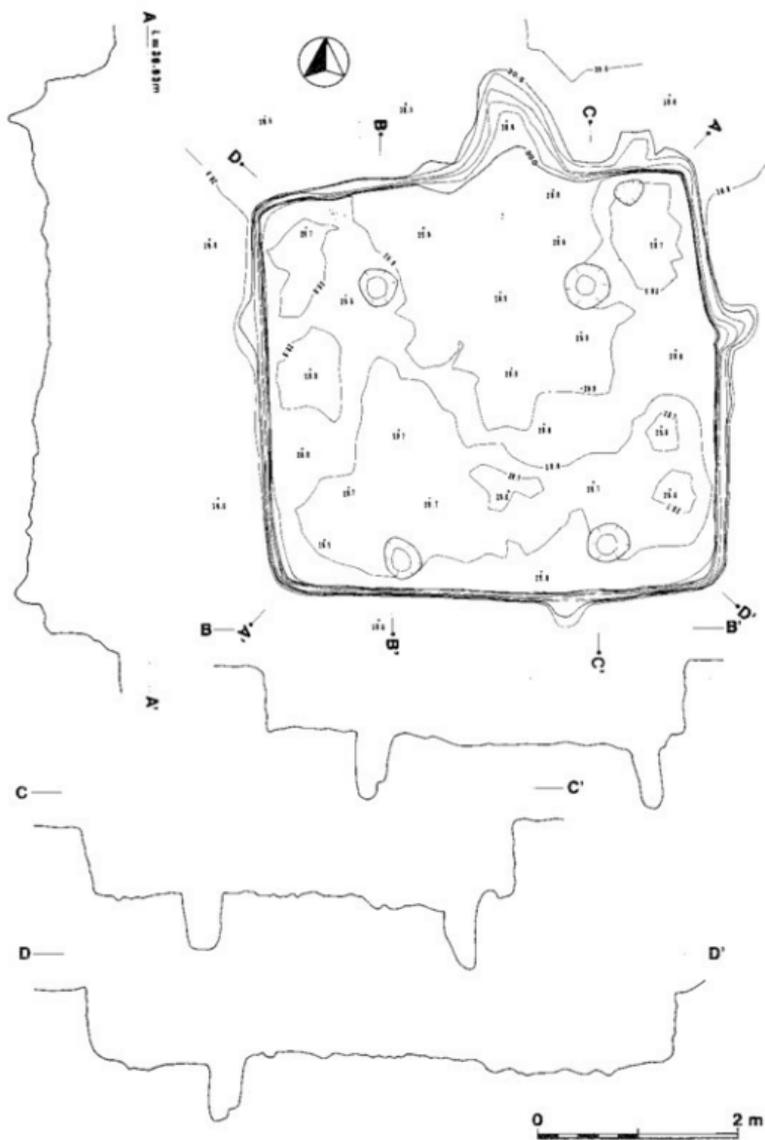
第77图 S1-12出土遗物实测图(2)



第78图 S1-12出土遗物实测图(3)



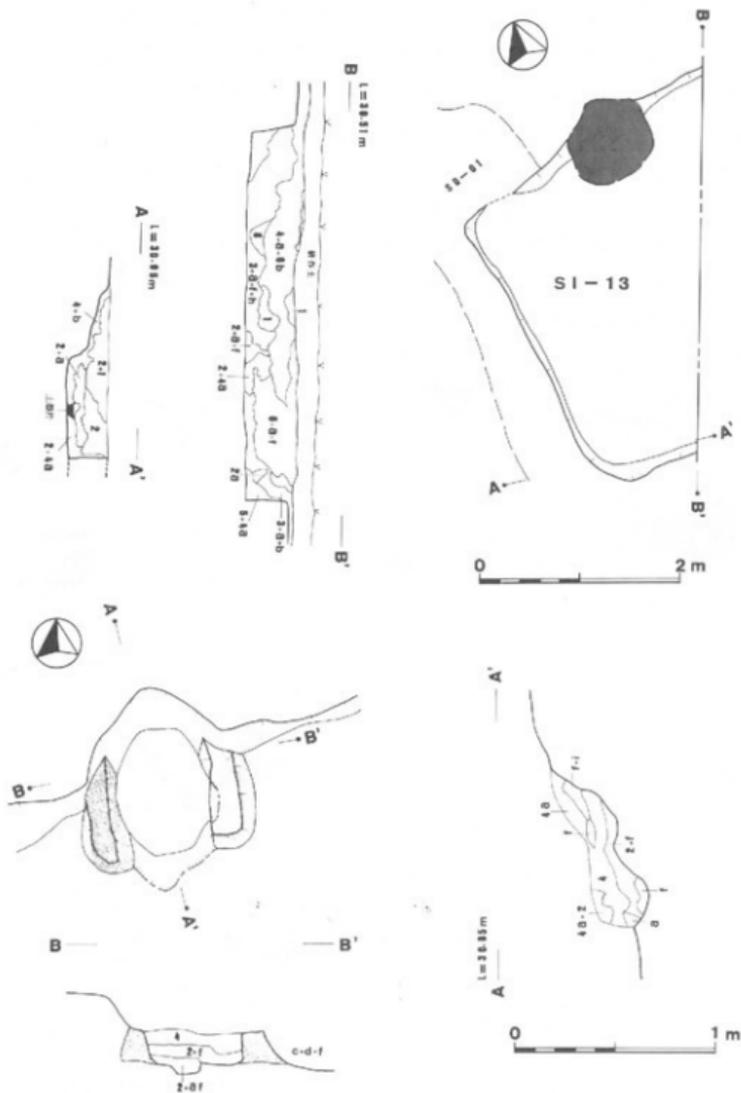
第79图 S1-12出土遺物実測図(4)



第80图 S1-12 掘り方面実測図

第13号住居跡 (S I-13) (第81-84図)

C区, E35グリット画を中心に検出された。本住居跡は, S I-09を完掘するために拡張した部



第81図 S I-13実測図・カマド実測図

分から確認されたが、原則として二次拡張はおこなわないという立場から、完掘はしなかった。

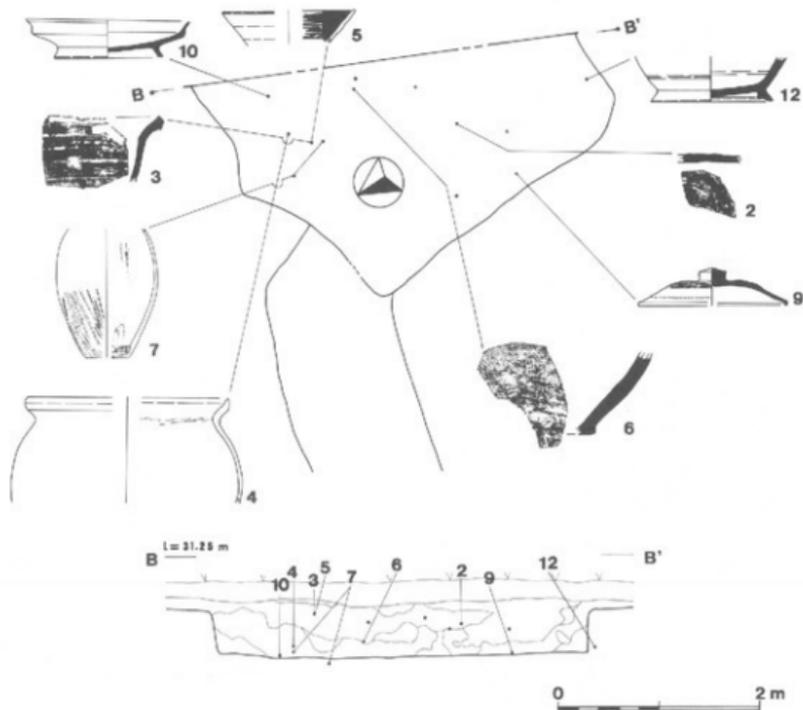
重複遺構は、本住居跡の西側にSD-01があり、同遺構が本住居跡を切っている状態で確認できた。形状は検出できた北西側と南西側のコーナー部の残存部分から推定して方形と思われる。

規模は、東西が不明、南北320cm。主軸方向はN-3°-Wを指している。壁面は、東側不明、西側が25cm前後と推定、南側43cm、北側45cmの高さを測れた。北、南側の壁面はほぼ直立している。

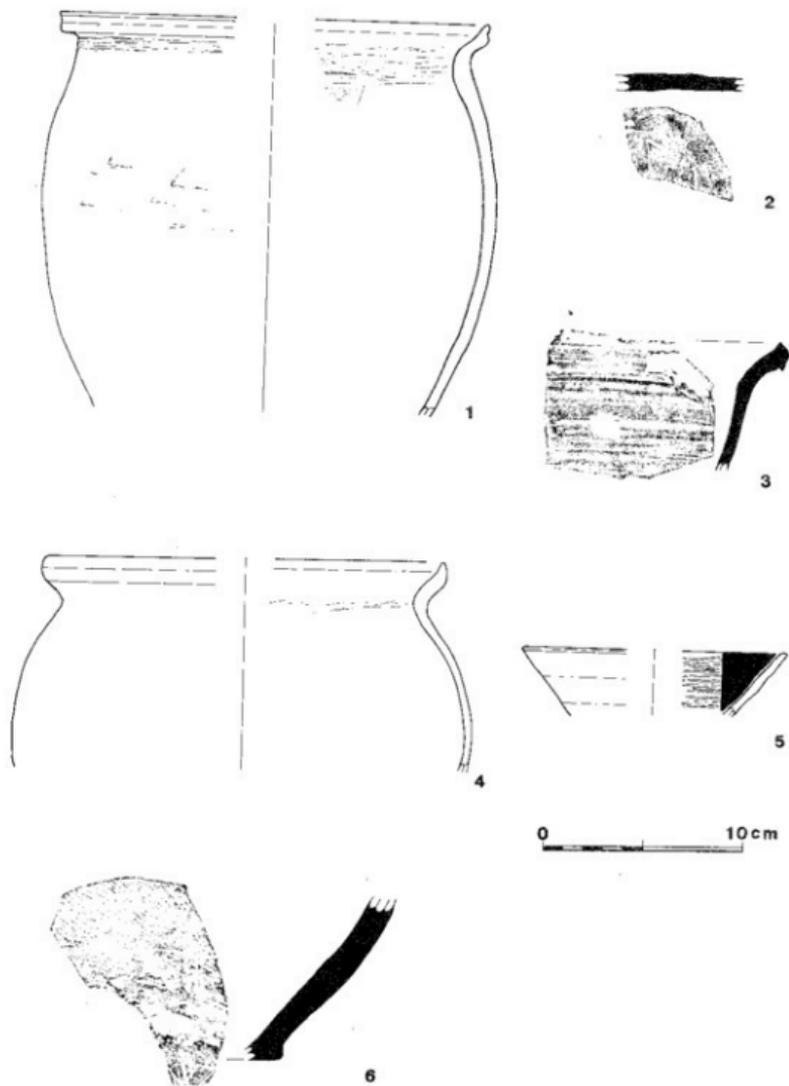
壁質は、ローム土で北、南壁はほぼ平坦であるが、軟質でありもろい。

床面は、貼り床を施しており、全体的に堅緻に踏み固めている。土質は、暗褐色土とローム粒、ロームブロック土の混合土で平均的な厚さは20cmほどである。ピットは検出されなかった。

カマドは、北壁部から検出され、規模は両袖間が90cm、焚口奥壁間80cm、現存高さ95cmを測れた。構築材は、褐色粘土、灰白色粘土の混合土である。内部には黒褐色土と砂粒、焼土粒、粘土塊が堆積しており、天井部は崩落しており原型は明確ではなかった。



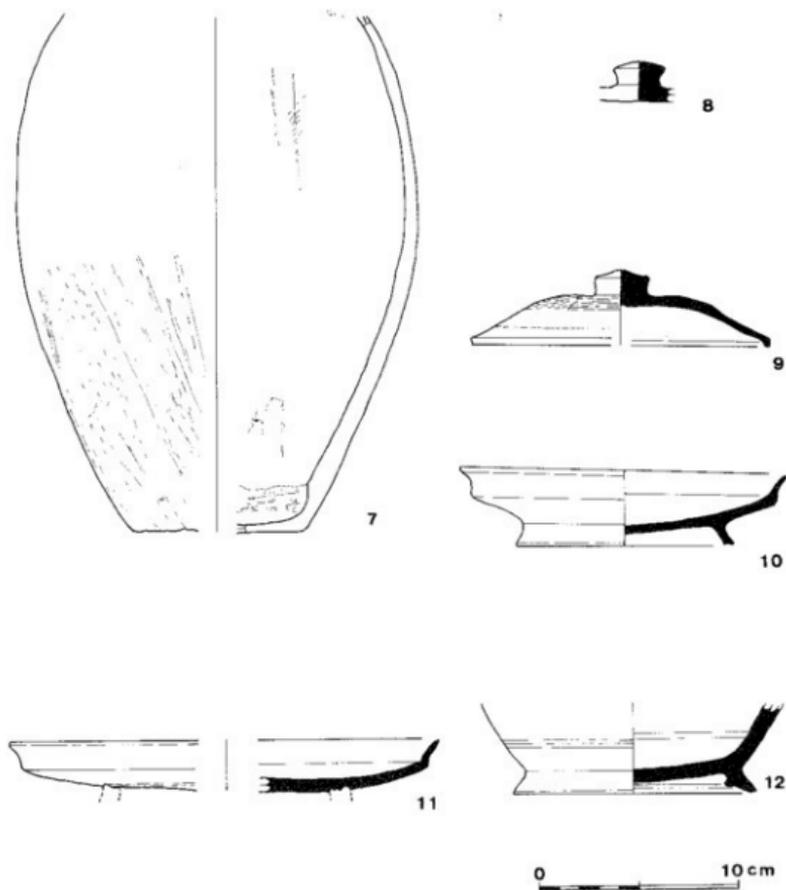
第82図 S I-13 遺物分布図



第83圖 S I - 13 出土遺物實測圖(1)

覆土は、暗褐色土、黒褐色土を中心とした土層の中にローム粒が若干含まれており、自然堆積の状況を示している。

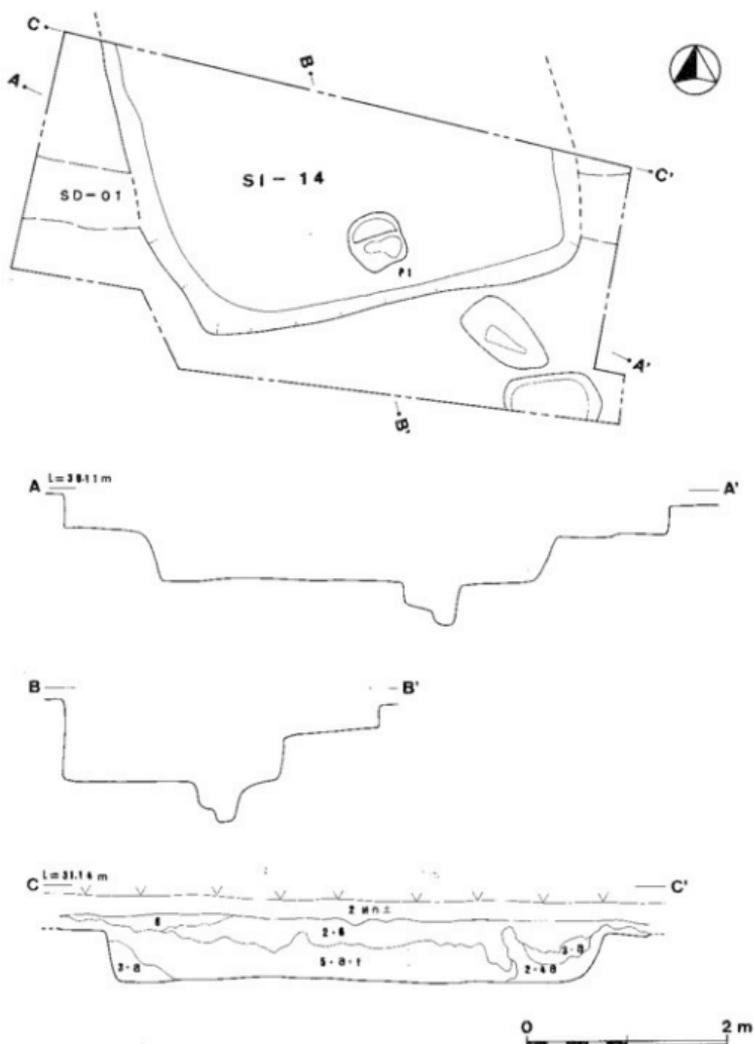
遺物は、覆土中および床面から土師器片201点、須恵器片45点が出土している。土師器片の内訳は、坏片29点、高台付坏片2点、甕片86点、判別不能なもの84点であった。須恵器片の内訳は、坏片36点、高台付坏片3点、甕片6点であった。図化可能なものは全部で12点出土している。



第84図 S1-13出土遺物実測図(2)

第14号住居跡 (S I - 14) (第85~89図)

C区, A33グリッド画を中心に検出された。本住居跡は, S D-01の西側延長部分を確認するた

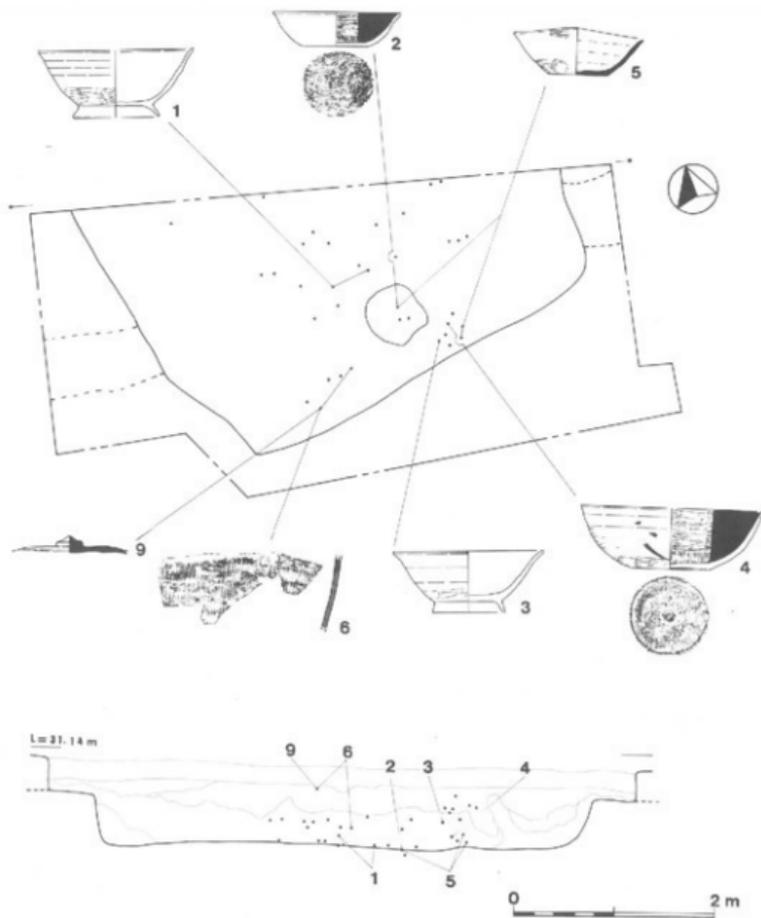


第85図 S I - 14実測図

めに設定した坪掘り坑内より確認されたため、必要に応じた部分のみの拡張にとどめ、完掘はしなかった。

重複遺構は、S D-01があり本住居跡を切った状態で検出された。形状は、検出できた南西、南東コーナー部から推定して方形と思われる。規模は、東西430cm、南北が不明。主軸方向も不明である。

壁面は、東側50cm、西側54cm、南側43cm、北側不明、であった。壁質は、ローム土で全体的に硬く平坦である。ピットは、1ヵ所から検出され、規模および形状は、63×60×27~41cm、不整形円形

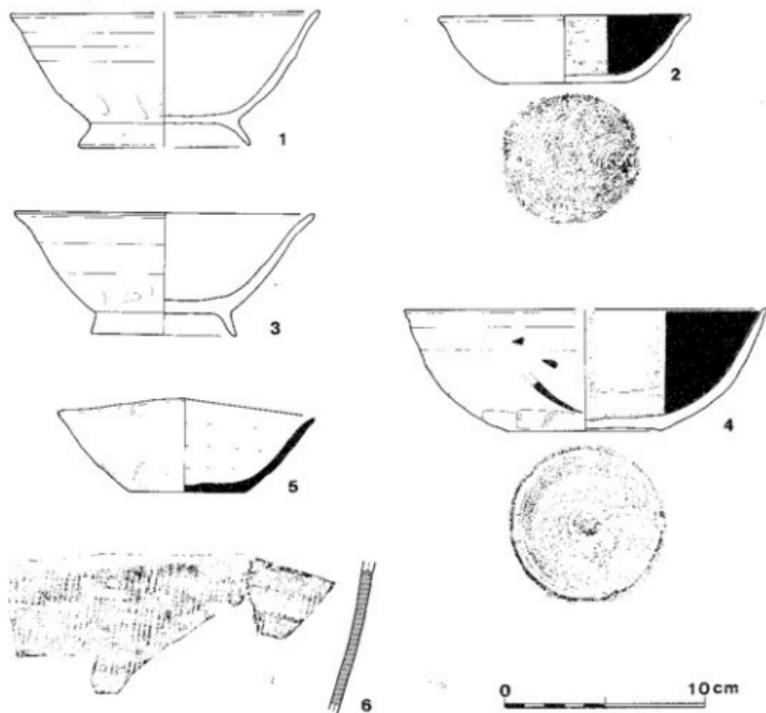


第86図 S I - 14 遺物分布図

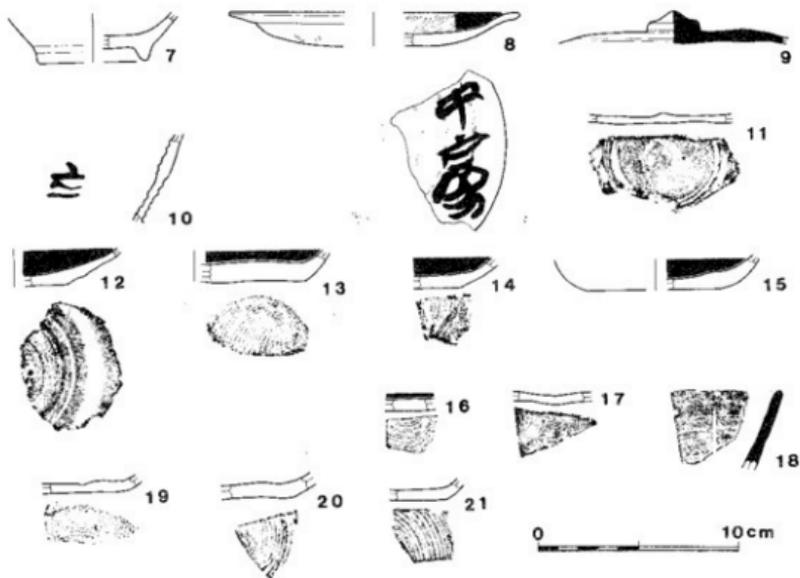
である。カマドは、不明。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土が主体で自然堆積の状況を呈していた。

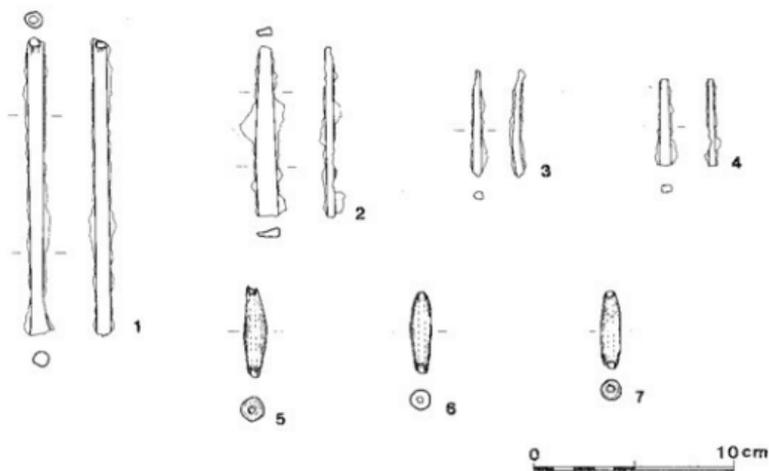
遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片826点、須恵器片242点が出土している。土師器片の内訳は、坏片89点、高台付坏片3点、甕片251点、判別不能なものが483点であった。須恵器片の内訳は、坏片173点、高台付坏片3点、甕片63点、蓋片3点であった。図化可能な遺物は全部で28点出土している。第87図の4は土師器の坏片で外面に墨書がみられたが判読はできない。第88図の8、10も墨書がみられ、8は「中庵」と読めたが、10は判読不能である。



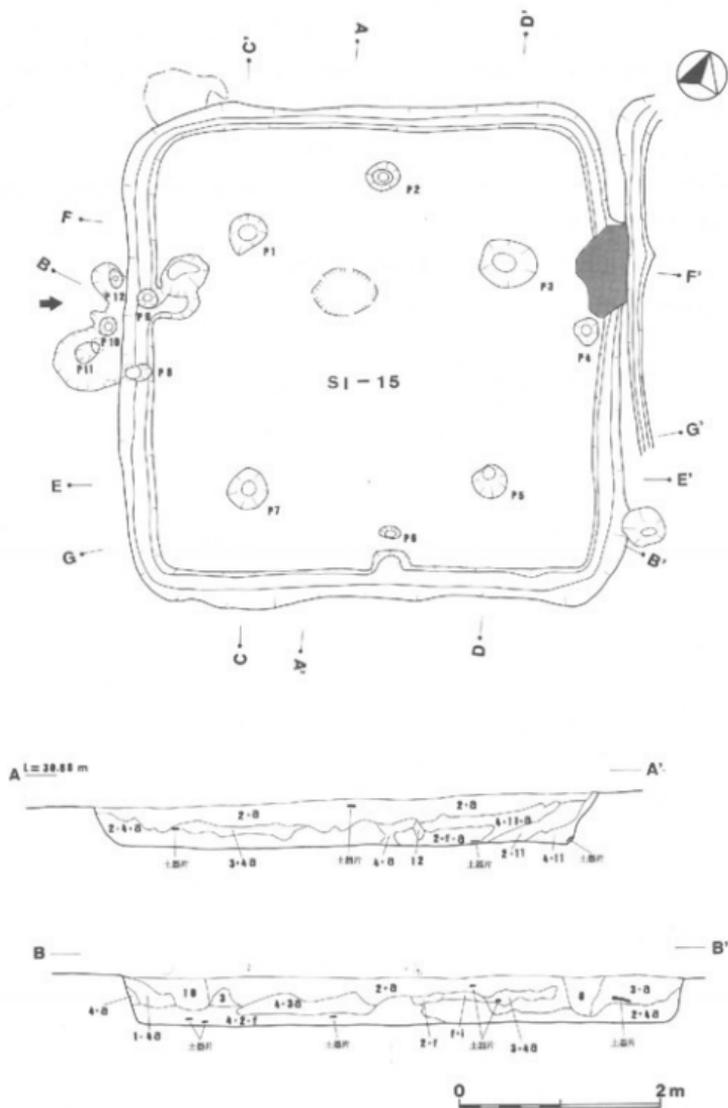
第87図 S I - 14 出土遺物実測図(1)



第88图 SI-14出土遗物实测图(2)



第89图 SI-14出土遗物实测图(3)



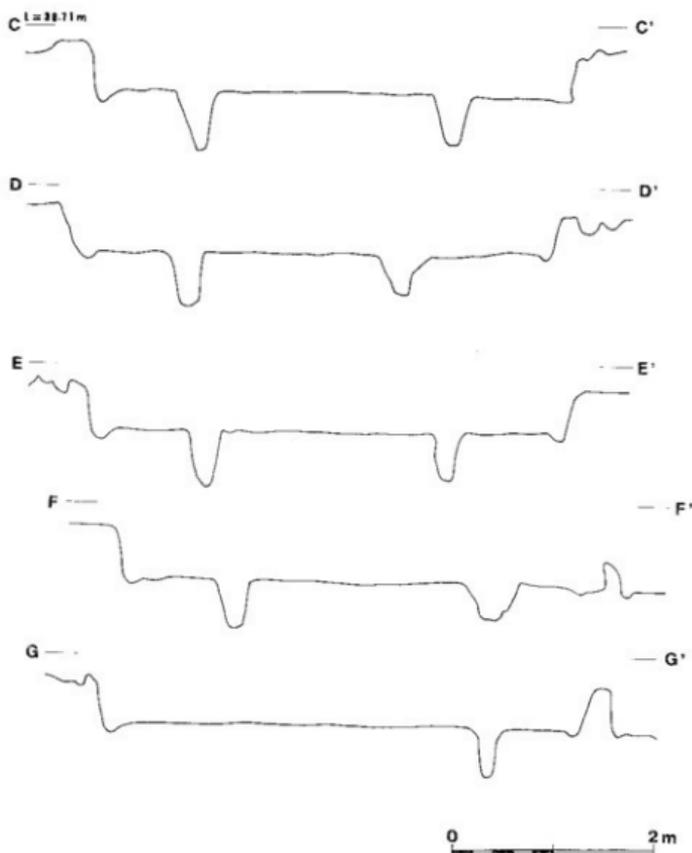
第90图 SI-15 实测图(1)

第15号住居跡 (S I-15) (第90-97図)

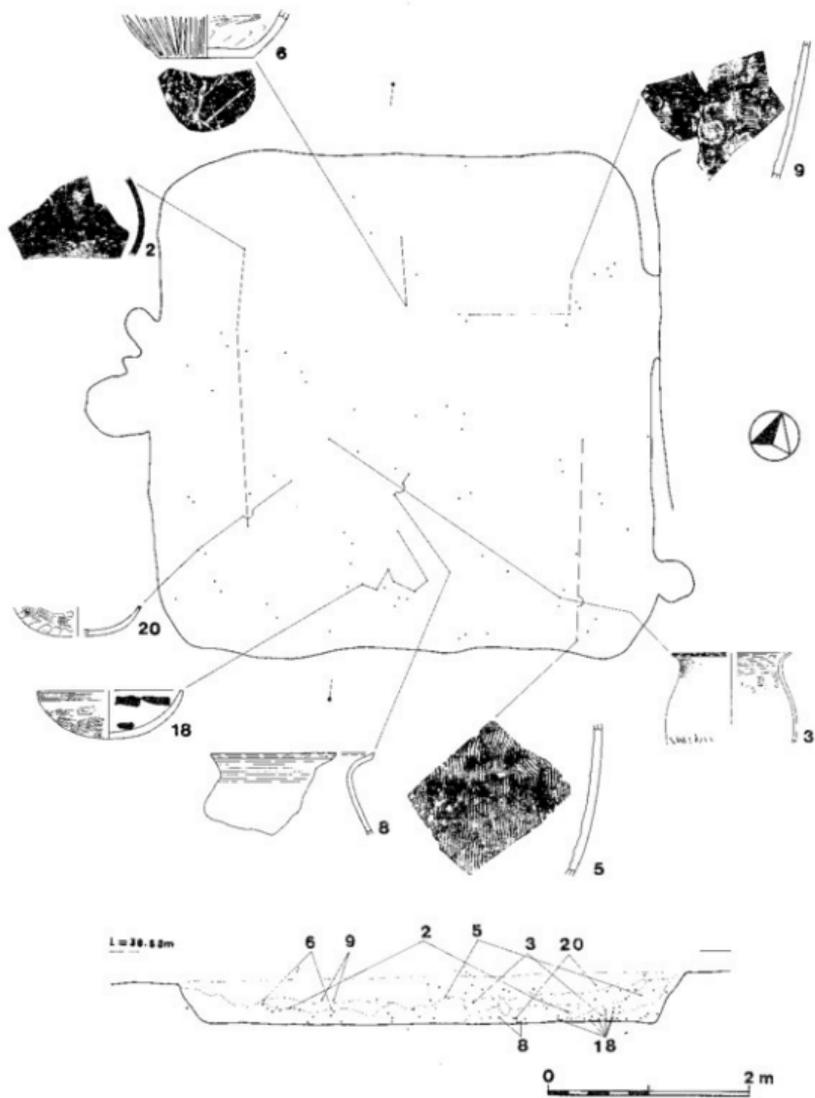
C区、D-44・45グリッド面を中心に検出された。本住居跡は、北西コーナー部を中心とした竪穴の半分ほどが調査区域内から確認されたため、完掘を目的として北東側調査区域外部分を拡張した。その結果、S I-11と切り合った状態であることが確認され、本住居跡のカマドがS I-11に切られていることから、本住居跡はS I-11より古い住居であることが確認された。

重複遺構は、先述したとおりS I-11があり、他にはS A-01のピットの一部も重複していたと思われるが明確にはできなかった。

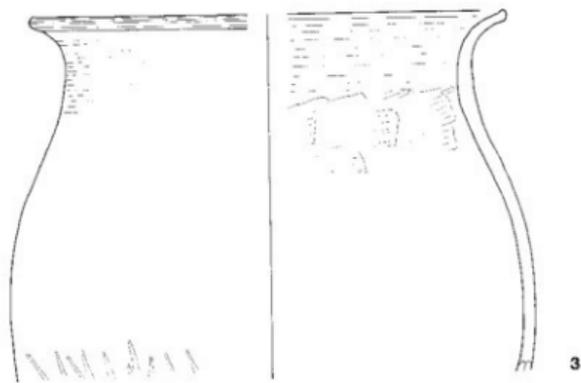
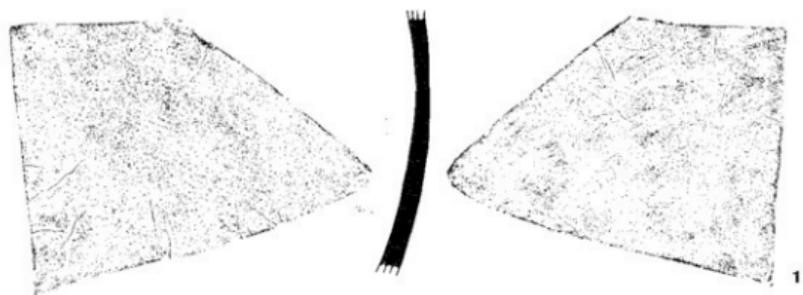
形状は、方形を呈している。規模は、東西500cm、南北490cm。主軸方向は、N-17°-Wを指し



第91図 S I-15実測図(2)

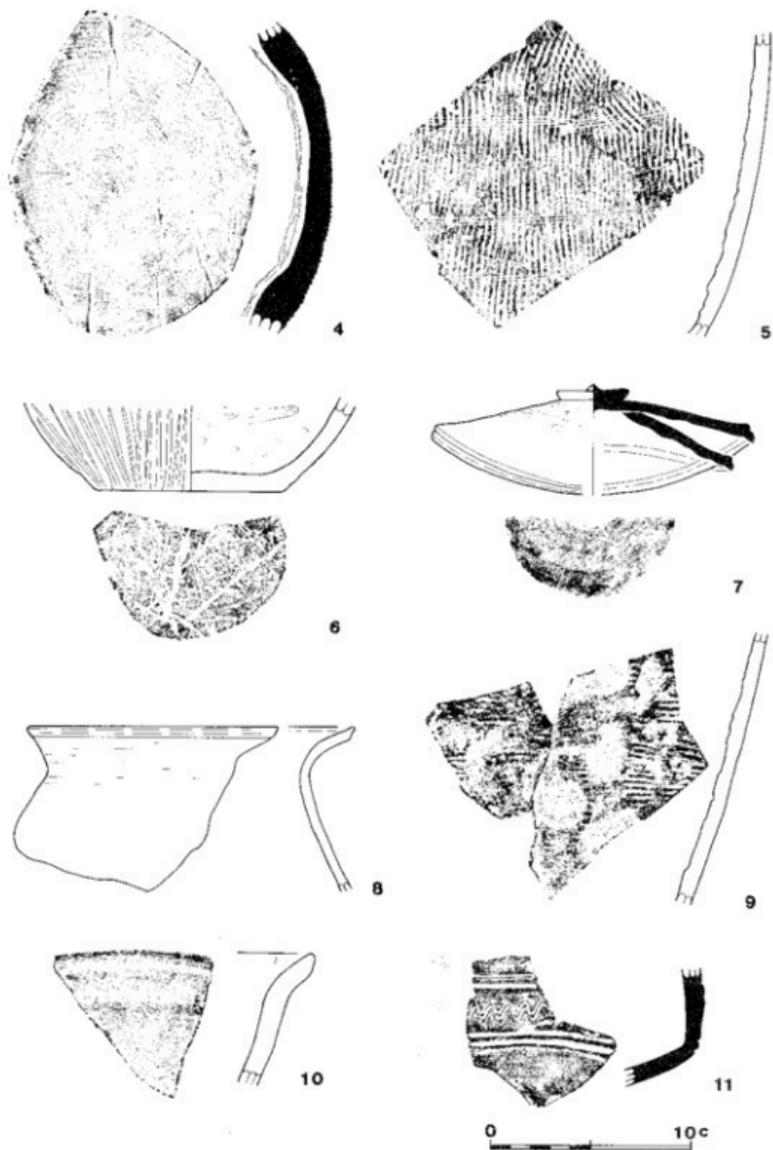


第92圖 S1-15 遺物分布圖



0 10cm

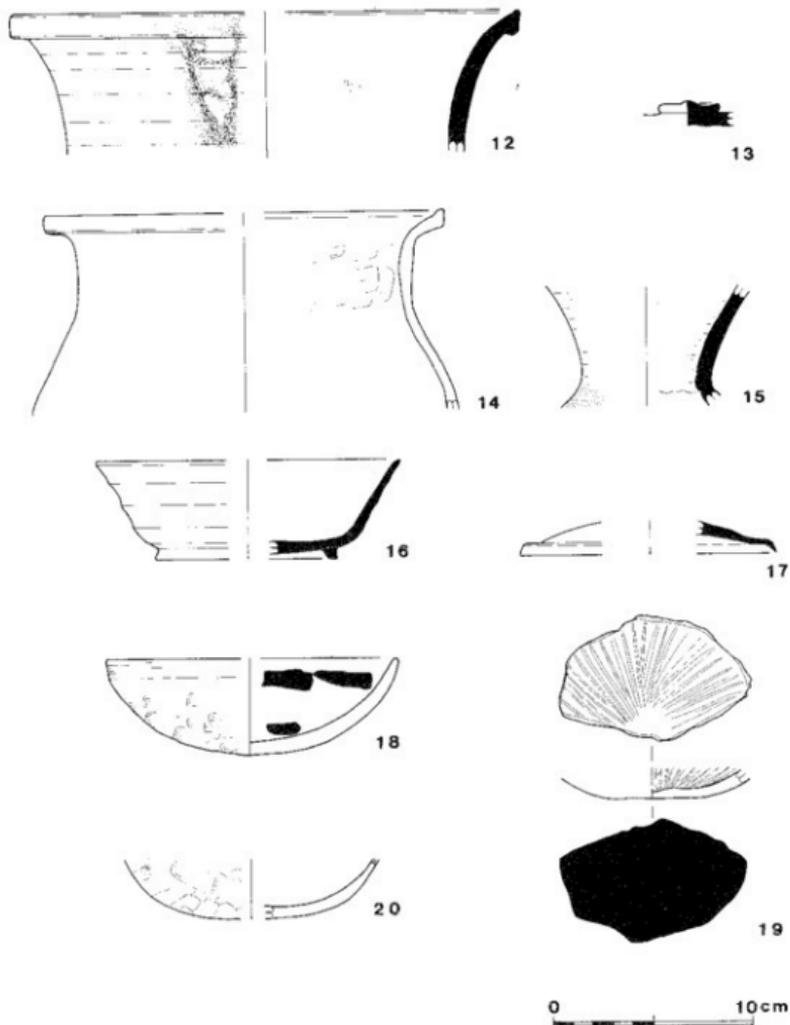
第93图 S I - 15 出土遗物实测图(1)



第94图 S I - 15 出土遗物实测图(2)

ている。壁面は、東側41cm、西側54cm、南側47cm、北側36cmの高さを測れた。

壁溝は、各壁面下より検出された。規模は東側幅28cm、深さ11cm。西側幅30cm、深さ8cm。南側幅28cm、深さ6cm。北側幅22cm、深さ5cmであった。壁質はローム土で全体的に平坦であり、ほぼ



第95図 S1-15出土遺物実測図(3)

直立かわずかに外傾気味に立ちあがっている。

床面は、貼り床ではあったがその土層も3～5cm程度で、局部には掘り方面のローム上が露出している部分もあった。全体的には堅緻で平坦である。

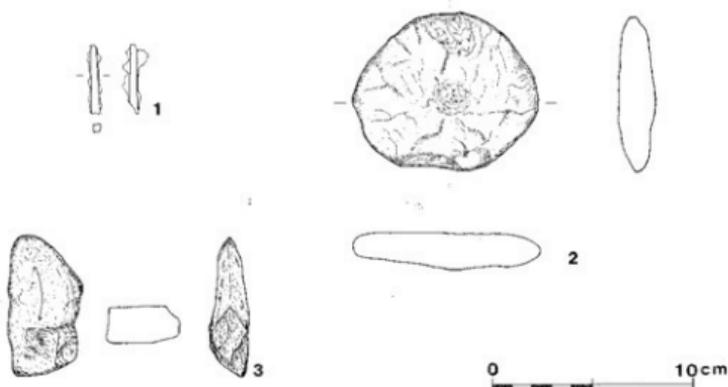
ピットは、関連が考えられるものだけでも12ヵ所から検出された。このうち主柱と考えられるのは、P₁、P₂、P₃、P₇が規定でき、他は補強柱のピットと思われる。なお、P₄～P₁₁は本住居跡の出入口の施設に関連するピットと推定できる。規模および形状は、P₁—41×38×50cm、不整形。P₂—35×30×23cm、円形。P₃—59×49×40cm、不整形。P₄—28×25—16cm、不整形。P₅—35×34×54cm、不整形。P₆—21×13×8cm、楕円形。P₇—41×41×58cm、不整形。P₈—25×15×19cm、楕円形。P₉—21×18×20cm、円形。P₁₀—18×18×21cm、円形。P₁₁—25×18×17cm、楕円形。P₁₂—18×13×18cm、不整形である。

カマドは、東壁中央よりやや北側の位置に付設されていたが、S1-11によって奥壁部が完全に切られていたため、原形はほとんど保っておらず、わずかに焚口部分と側壁部の粘土塊と焼土粒がみられただけである。規模は、両袖間が90cm、焚口奥壁間が不明、現存高は50cmであった。構築材は淡黄色粘土と焼土粒の混合土である。内部には、焼土粒、灰、ローム粒が堆積していたと思われるが、確認段階では混在していたため明瞭ではなかった。

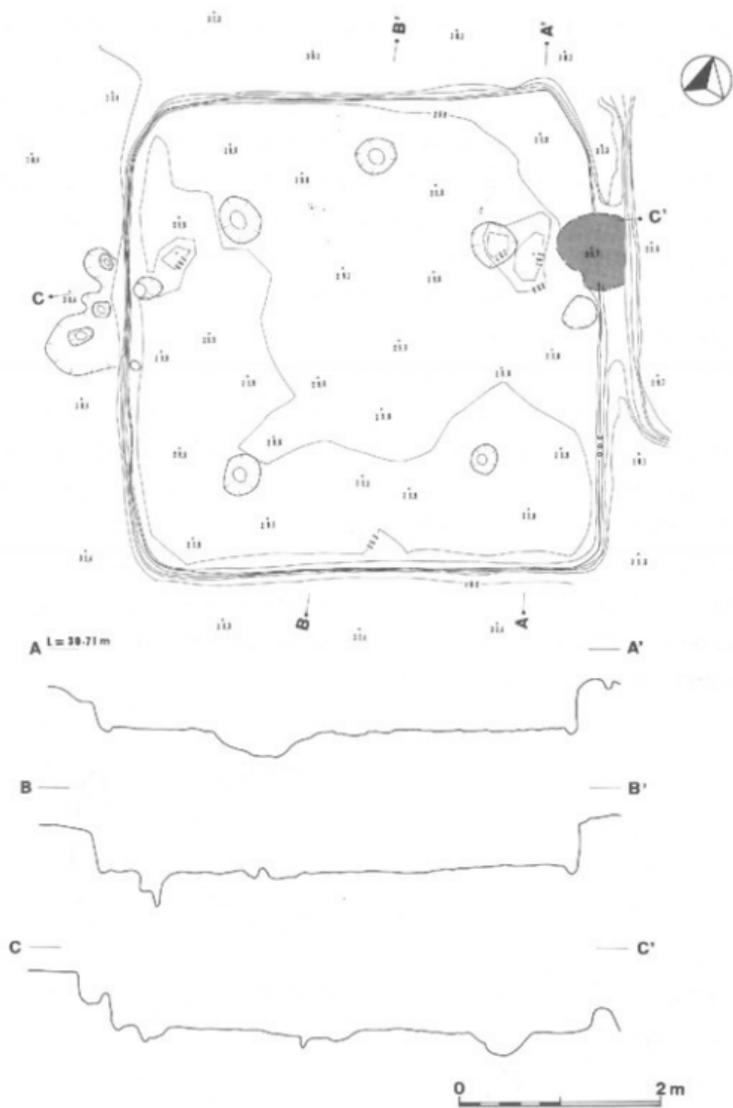
覆土は、黒褐色土が主体でローム粒も若干含まれており、堆積状況は自然堆積を呈していた。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片282点、須恵器片44点が出土している。土師器片の内訳は、坏片32点、甕片250点であった。須恵器片の内訳は、坏片29点、甕片8点、蓋片7点であった。

図化可能な遺物は全部で23点出土している。



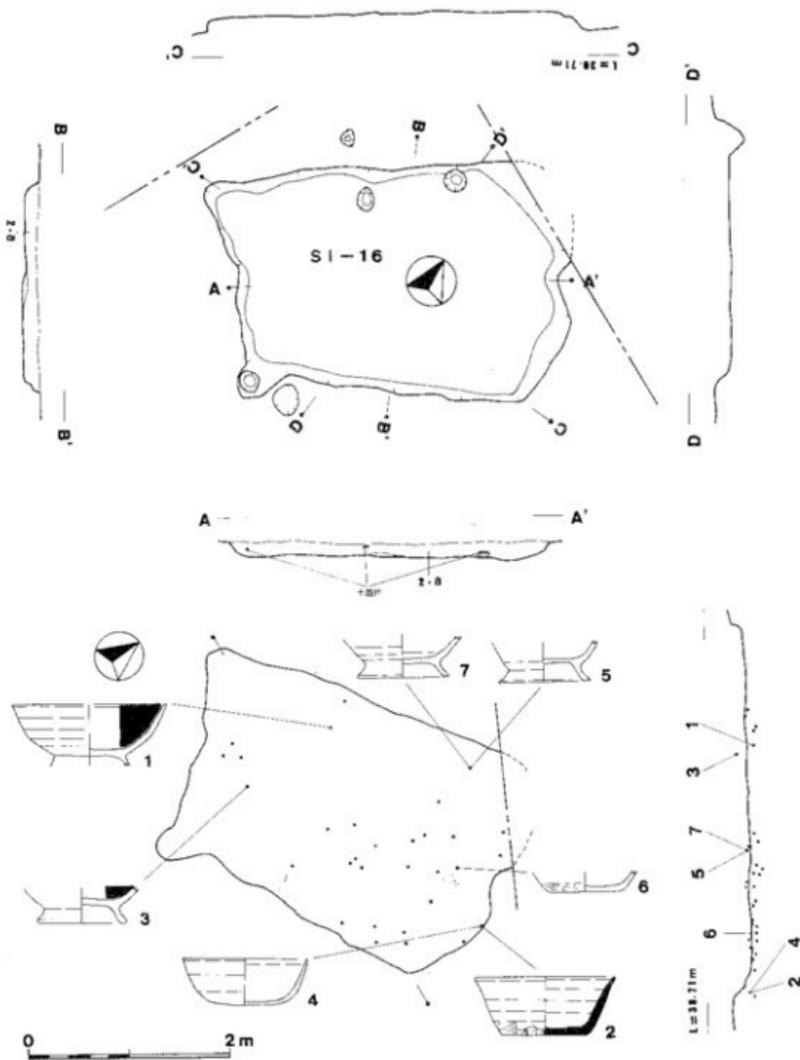
第96図 S1-15出土遺物実測図(4)



第97图 S I - 15 掘り方面実測図

第16号住居跡 (S I - 16) (第98-101図)

C区, C45・46グリット画を中心に検出された。重複遺構はなく単独検出である。形状は不整方



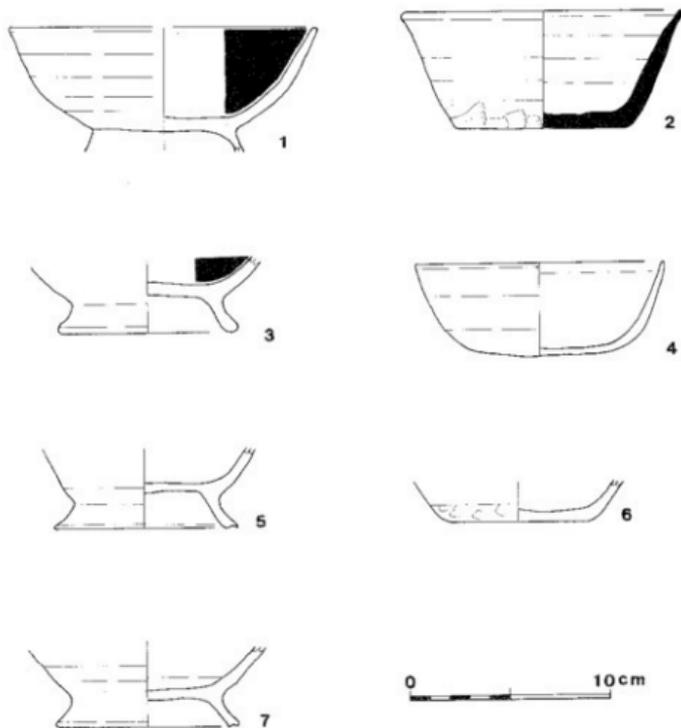
第98図 S I - 16実測図・遺物分布図

形を呈している。規模は、東西325cm、南北230cm。主軸方向は、N-60°-Wも指している。

壁面は、東側20cm、西側13cm、南側16cm、北側17cmの高さを測れた。壁面の壁質はローム土で全体的に軟質でもろく、側壁面は直線的ではなくかなりの凹凸がみられた。

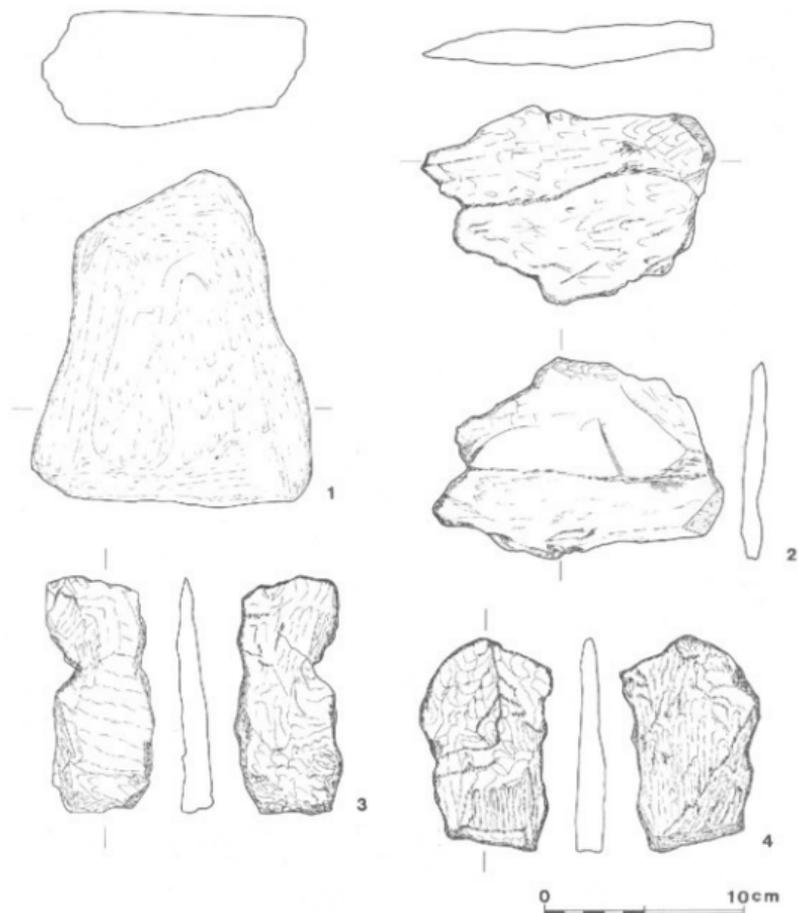
床面は、ローム土上の床で、中央部のみが堅緻に踏み固められており、その周縁部は非常に軟かく、しかも凹凸が激しい床面である。ピットは、4ヶ所から検出されたが、その性格および関連性については明確ではない。規模は、P₁-18×15×15cm、三角形。P₂-24×16×20cm、楕円形。P₃-23×26×21cm、円形。P₄-21×19×18cm、不整形円形であった。

カマド等の火床遺構は検出できなかった。覆土は、黒褐色土が主体上で自然堆積の状態をしめしていた。

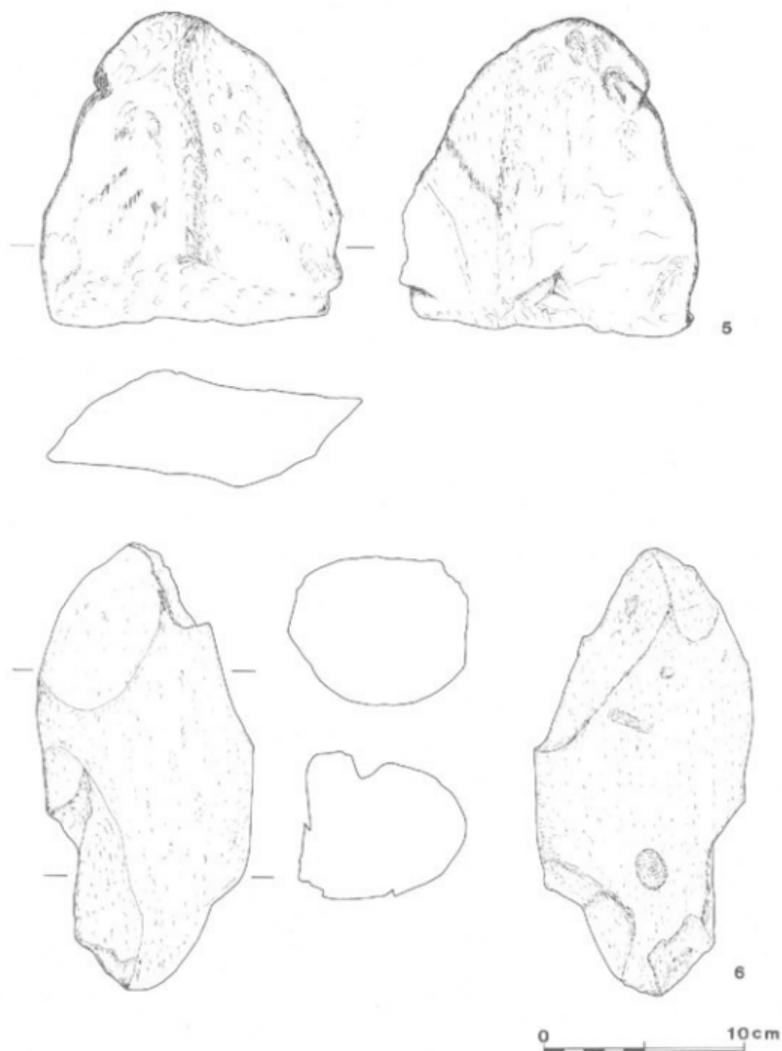


第99図 S I - 16 出土遺物実測図 (1)

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片70点、須恵器片12点が出土している。土師器片の内訳は、坏片15点、高台付坏片1点、甕片54点であった。須恵器片の内訳は、坏片8点、高台付坏片1点、甕片3点であった。図化可能な遺物は全部で13点出土しているが、第100・101図の1～6にみるように糠片が床面より出土しており、図示できなかった小礫も多数出土していることが他の住居跡の遺物出土状況と異なっており、これが本住居跡の特徴ともなっている。



第100図 S1-16出土遺物実測図(2)



第101图 S1-16出土遗物实测图(3)

第17号住居跡 (S I-17) (第102-107図)

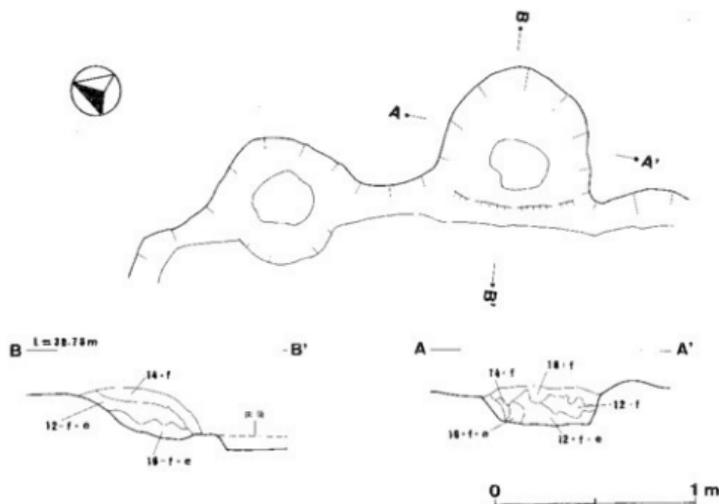
C区, C30・31グリット画を中心に検出された。本住居跡は, 竪穴の北東側が調査区域内より確認され完割するために北西側部分の一次拡張をおこなった。

重複遺構はなく単独検出である。形状は長方形を呈している, 規模は, 東西370cm, 南北315cmを測れ, 主軸方向は, N-74°-Eを指している。壁面は, 東側32cm, 西側34cm, 北側33cmの高さを測れ, わずかに外傾気味に立ちあがっている。壁質はローム土で, わずかな凹凸面があり非常に軟かい壁面であった。

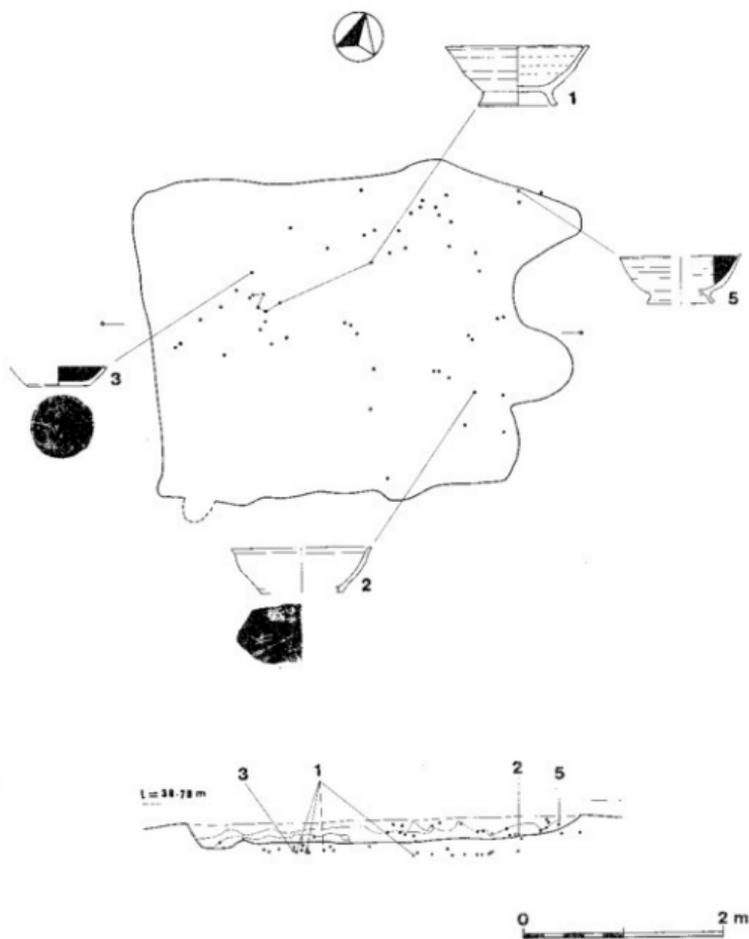
壁面は, 南側と西側から確認され, 規模は南側幅32cm, 深さ25cm, 西側幅29cm, 深さ13cmを測れた。

床面は, 貼り床で暗褐色土とロームブロック土の混合土が主体でわずかながらの踏み固めはみられたが, 全体的に軟かくもろい状態の床であった。なお, 部分的には耕作時の攪乱の影響も受けていると思われた。

ピットは, 10ヵ所から検出されたがこのうち, P₁, P₂, P₃, P₇, P₈, P₉は主柱のピットと想定できる。ピットの規模および形状は, P₁-38×26×45cm, 楕円形。P₂-32×32×25cm, 円形。P₃-26×24×16cm, 円形。P₄-32×26×21cm, 楕円形。P₅-50×50×23cm, 不整形円形。P₆-21×19×10cm, 不整形円形。P₇-15×15×25cm, 円形。P₈-45×28×20cm, 楕円形。P₉-23×21×33cm, 円形。P₁₀-22×20×21cm, 円形であった。



第103図 S I-17 カマド実測図



第104图 S I - 17 遺物分布図

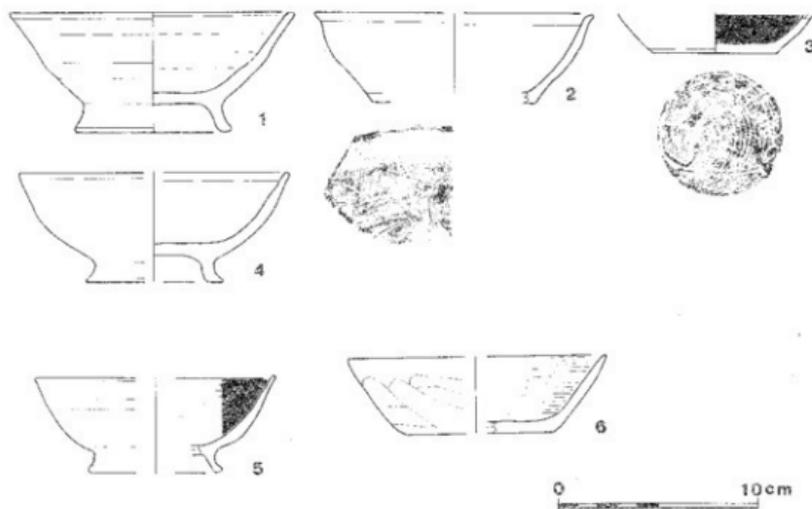
貯蔵穴は、北西コーナー部より1基検出した。形状および規模は、上端部の形状は不整形円形を呈し、底部は平底。規模は東西68cm、南北64cm、最深部深さは56cmであった。

カマドは、両袖間83cm、焚口奥壁間74cm、現存高さ50cmであった。構築材は不明であったが、わずかに粘土粒がみられたため粘土を用いていたとも考えられた。

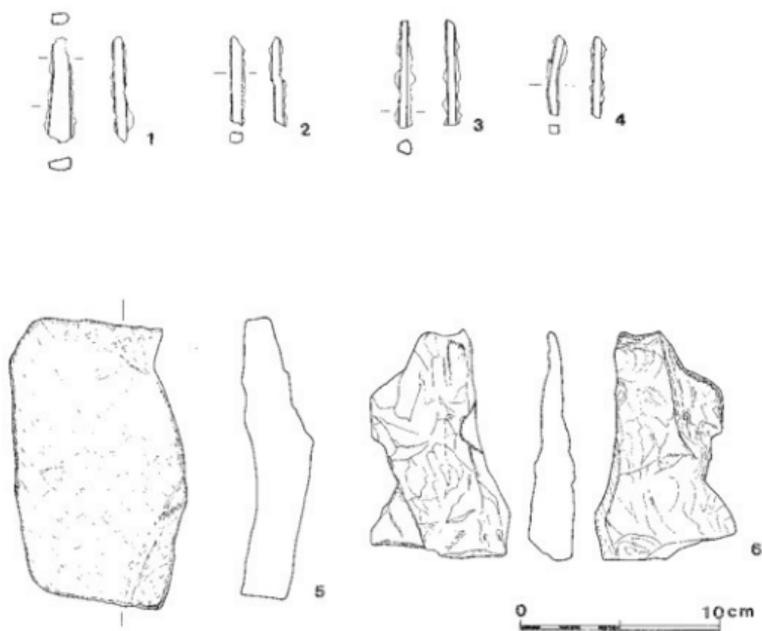
覆土は、暗褐色土、黒褐色土が主体で粘土、焼土、ローム粒が若干含まれていた。堆積状況は自然堆積を呈していた。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片284点、須恵器片97点が出土している。土師器片の内訳は、坏片49点、高台付坏片4点、甕片122点、判別不明なものが109点であった。須恵器片の内訳は、坏片69点、甕片28点であった。

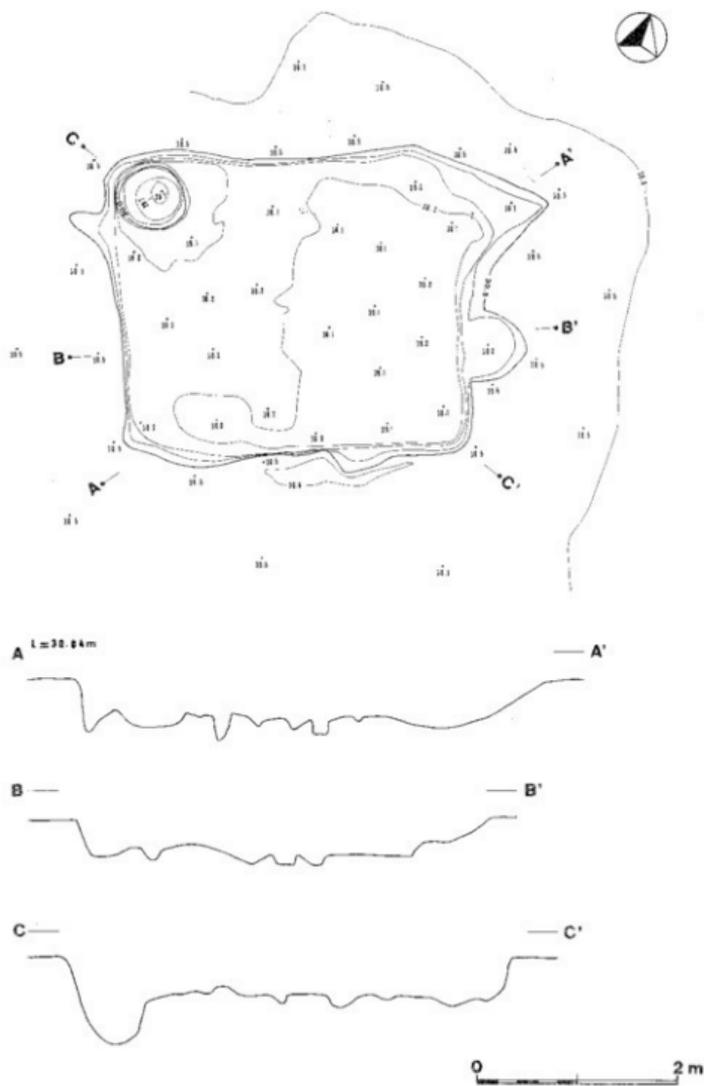
図化可能な遺物は全部で12点出土している。第105図の2は土師器の坏もしくは高台付坏の破片であるが外面に刻書がみられるが判読はできない。



第105図 Si-17出土遺物実測図(1)



第106图 S I - 17 出土遗物实测图(2)



第107图 S1-17 掘り方面実測図

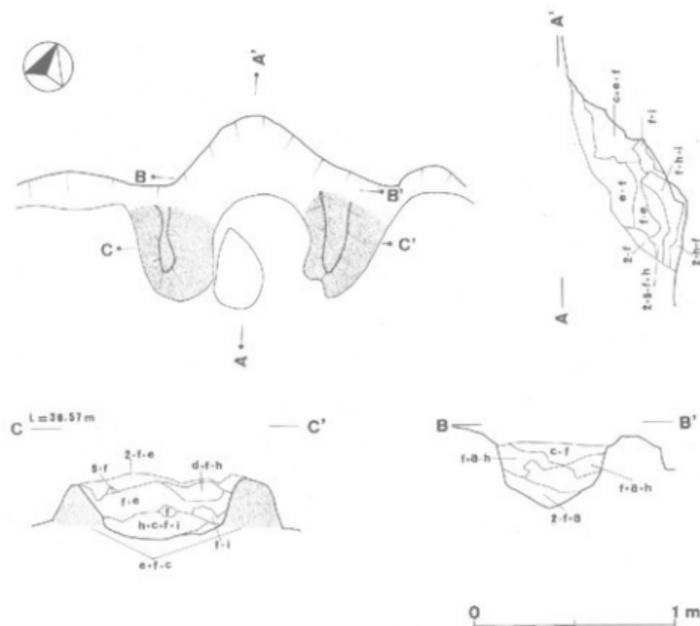
第18号住居跡 (S I-18) (第108-115図)

C区, C29・D29グリット画を中心に検出された。重複遺構はなく単独検出である。形状は、方形を呈している。規模は、東西418cm, 南北350cmを測れ、主軸方向は、N-17°-Wを指している。

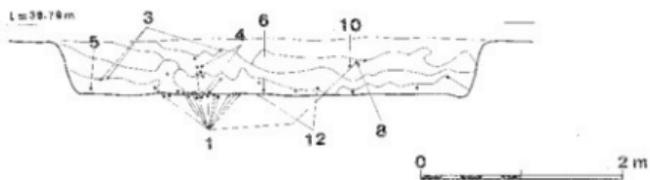
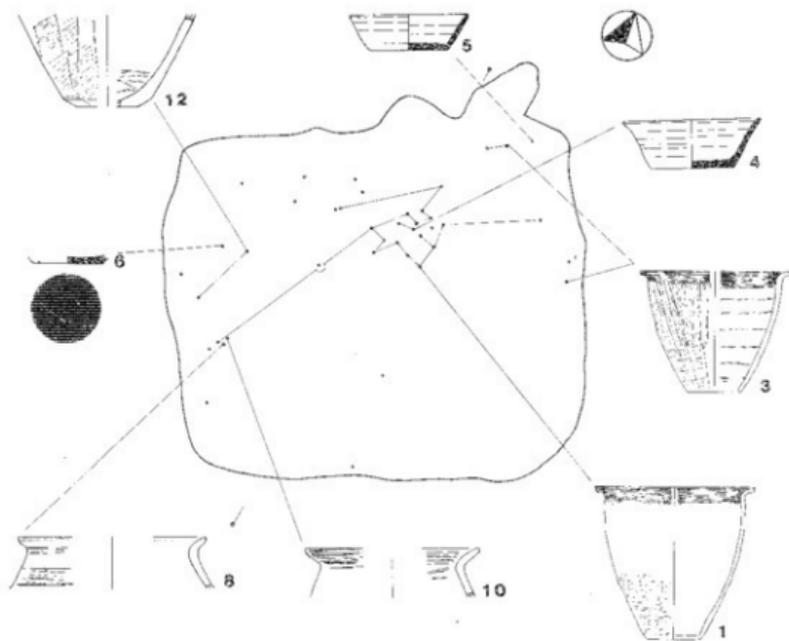
壁面は、東側50cm, 西側50cm, 南側50cm, 北側53cmの高さを測れ、壁溝は各壁下から検出された。規模は東側幅16cm, 深さ5cm。西側幅15cm, 深さ5cm。南側幅20cm, 深さ8cm。北側幅7cm, 深さ6cmを測れた。壁質はローム土で全体的に軟質であった。

床面は、貼り床でローム粒を含んだ黒褐色土が主体で、全体的に堅緻に踏み固められていた。ピットは、8カ所から検出されその規模および形状は、P₁-43×30×27cm, 楕円形。P₂-44×33×18cm, 楕円形。P₃-30×23×40cm, 楕円形。P₄-28×20×43cm, 楕円形。P₅-32×26×44cm, 楕円形。P₆-27×23×35cm, 楕円形。P₇-30×29×32cm, 楕円形。P₈-35×23×38cm, 楕円形であった。P₁からP₈までは本住居跡の支柱のピットと考えられる。

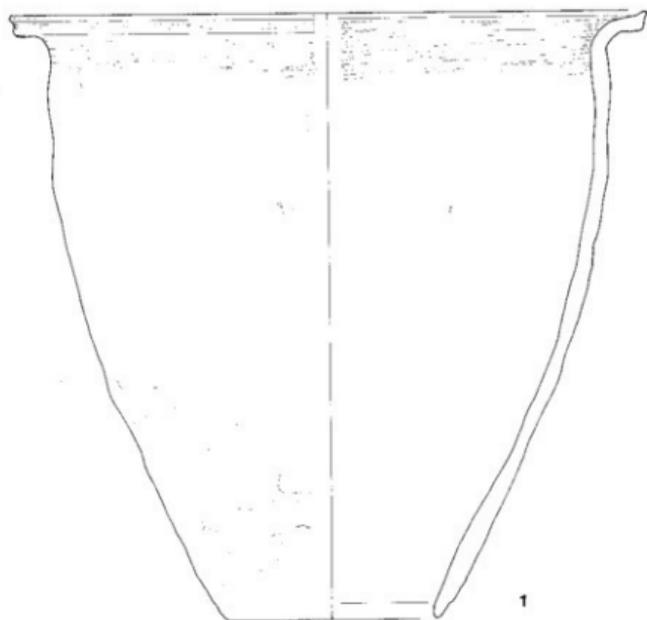
カマドは、北壁中央よりやや東寄りの位置に付設されていた。規模は両袖間が116cm, 焚口奥壁間が90cmで、現存高さは50cmを測れた。構築材は灰白色粘土と褐色粘土の混在した粘土であるが局部的には焼土化した部分も認められた。



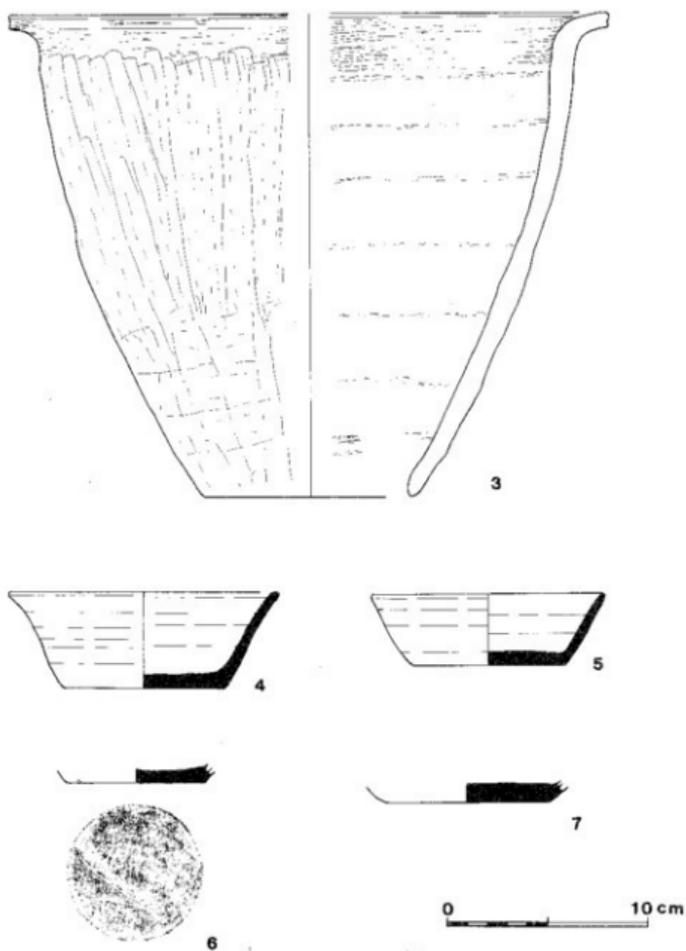
第109図 S I-18カマド実測図



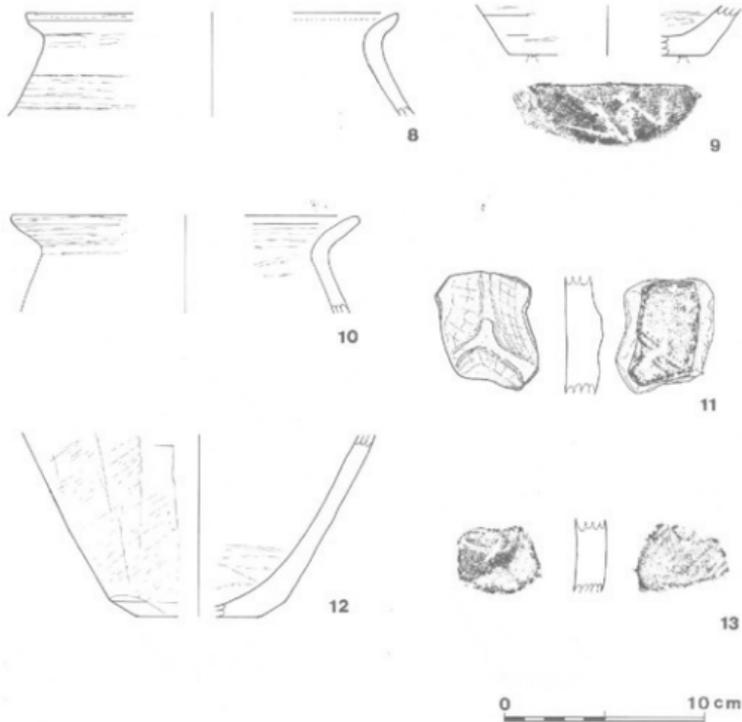
第110圖 S i - 18 遺物分布圖



第111圖 S I - 18 出土遺物実測図(1)



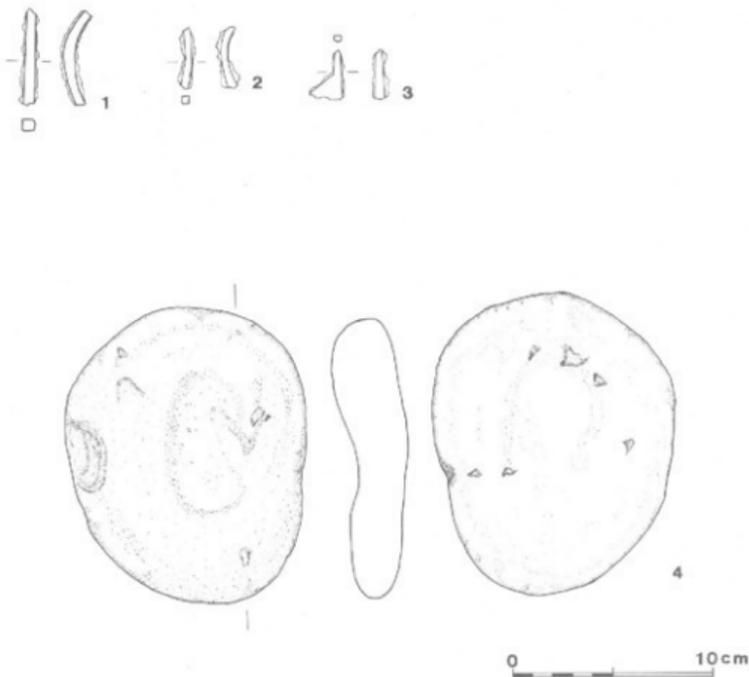
第112图 S I - 18 出土遺物実測図(2)



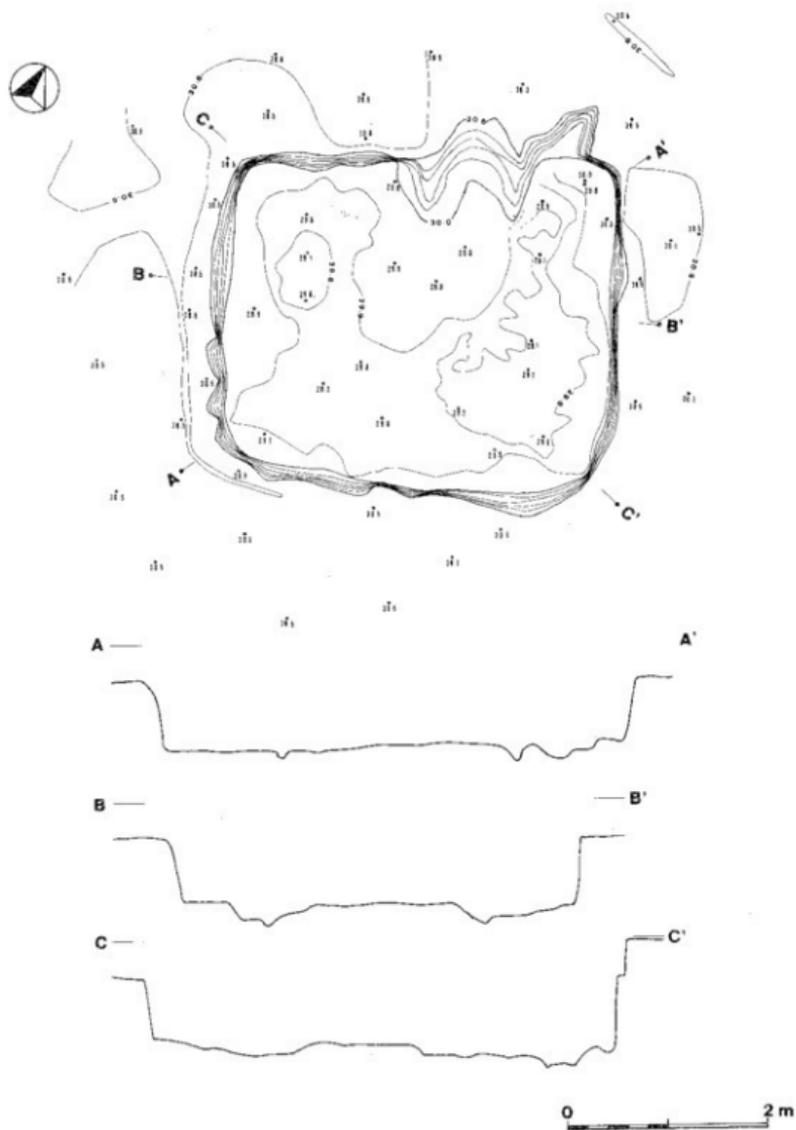
第113图 S I - 18 出土遗物实测图(3)

覆土は、暗褐色土、黒色土が主体で層中に若干黄褐色土、明褐色土粒が混り、堆積状況は自然堆積の状況を呈していた。

遺物は、覆土あるいは床面から土師器片222点、須恵器片5点が出土している。土師器片の内訳は、坏片24点、甕片198点であった。須恵器片の内訳は、坏片1点、甕片3点であった。図化可能なものは全部で17点出土している。第112図の6は須恵器坏片の底部でヘラ工具による刻線が刻まれている。第113図の11・13は瓦片で内面には布目痕が残されている。



第114図 S I - 18 出土遺物実測図(4)



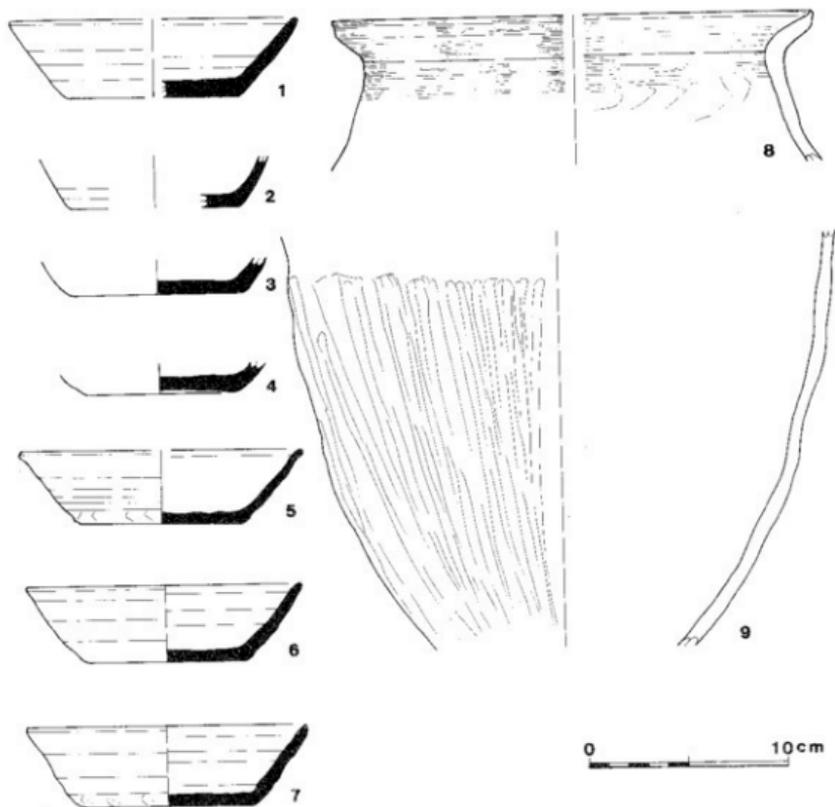
第115図 S I - 18 掘り方面実測図

形状は、検出できた北東側コーナー部の形態から方形と推定できる。規模は不明。主軸方向も不明。壁面は、西・南側が不明で、東側54cm、北側53cmであった。壁質はローム上で、検出できた東・北壁は硬質で、ほぼ直立して立ちあがっている。

床面は、ローム上の床でかなり堅緻に踏み固められている。火床遺構は不明。覆土は、黒褐色土が主体で自然堆積の状況を示していた。

遺物は、覆土中あるいは床面から土師器片135点、須恵器片68点が出土している。土師器片の内訳は、坏片1点、甕片134点であった。須恵器片の内訳は、坏片57点、甕片7点、蓋片4点であった。

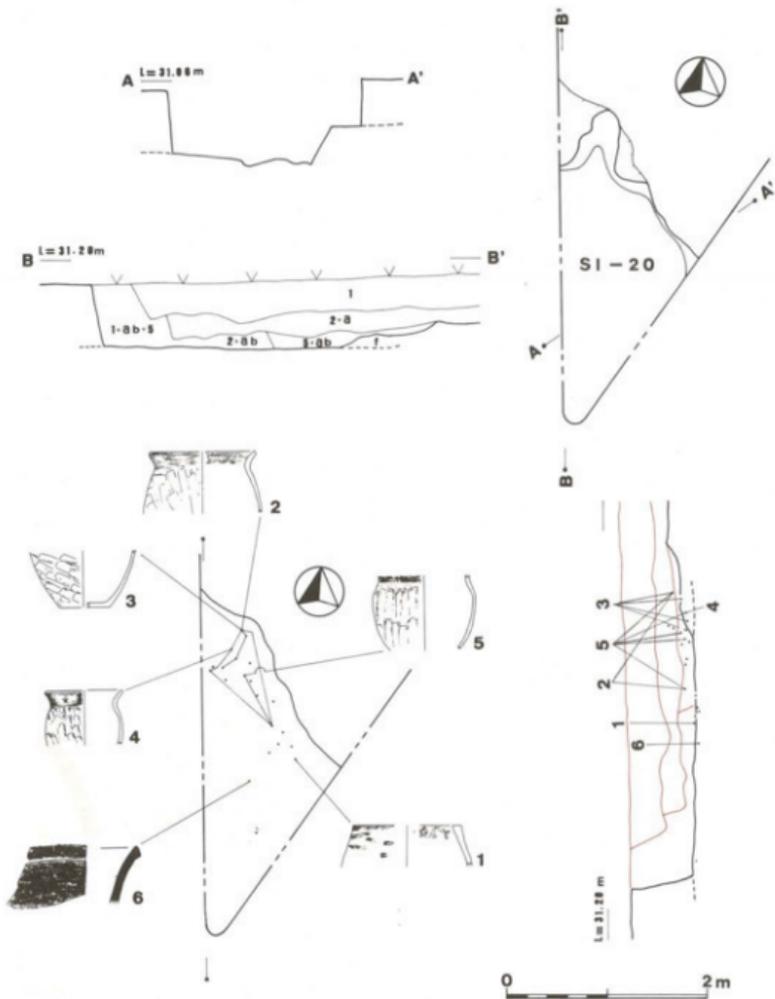
図化可能なものは全部で9点出土している。



第117図 S I - 19 出土遺物実測図

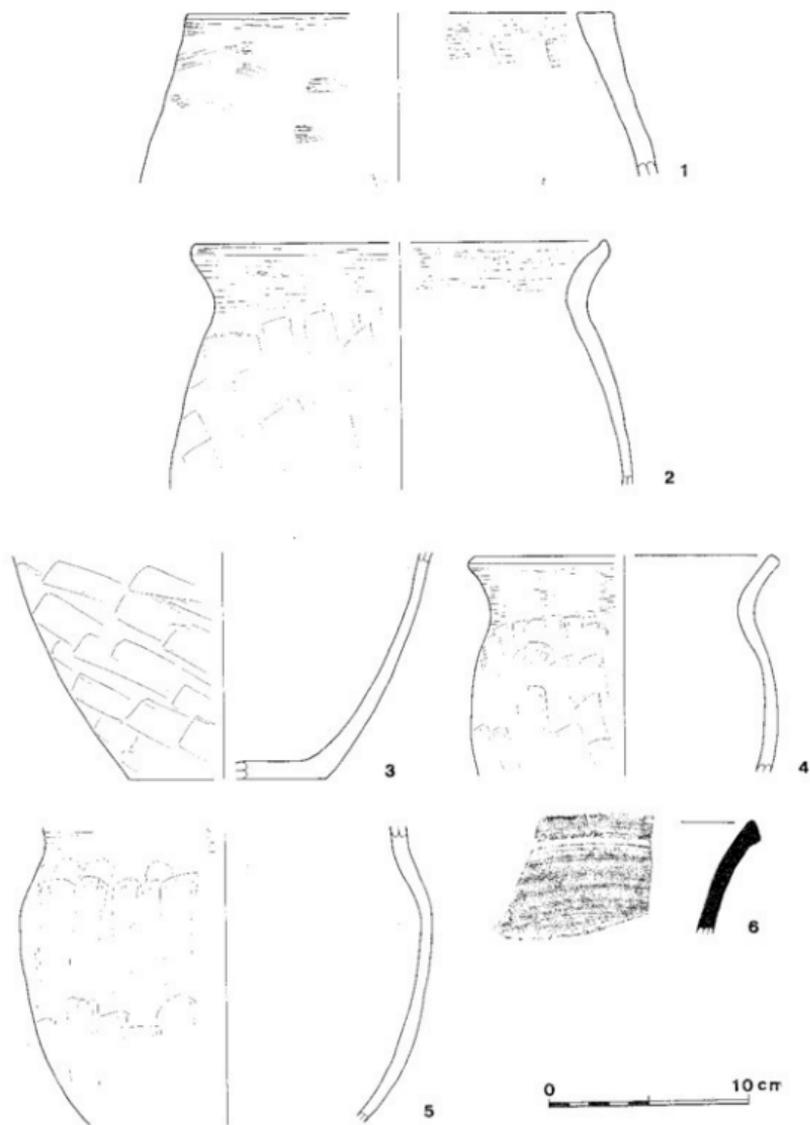
第20号住居跡 (S I - 20) (第118・119図)

C区, D26グリット画から検出された。竪穴のほとんどが調査区域外部分と道路部分とに延びており完掘はできなかった。したがって規模, 形状, 付属施設等の詳細は不明であった。検出部分の覆土は黒褐色土が主で堆積状況はほぼ自然堆積の状況を示していた。



第118図 S I - 20 実測図・遺物分布図

遺物は、第119図に図示した6点である。



第119図 S1-20出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (SB-01) (第120図)

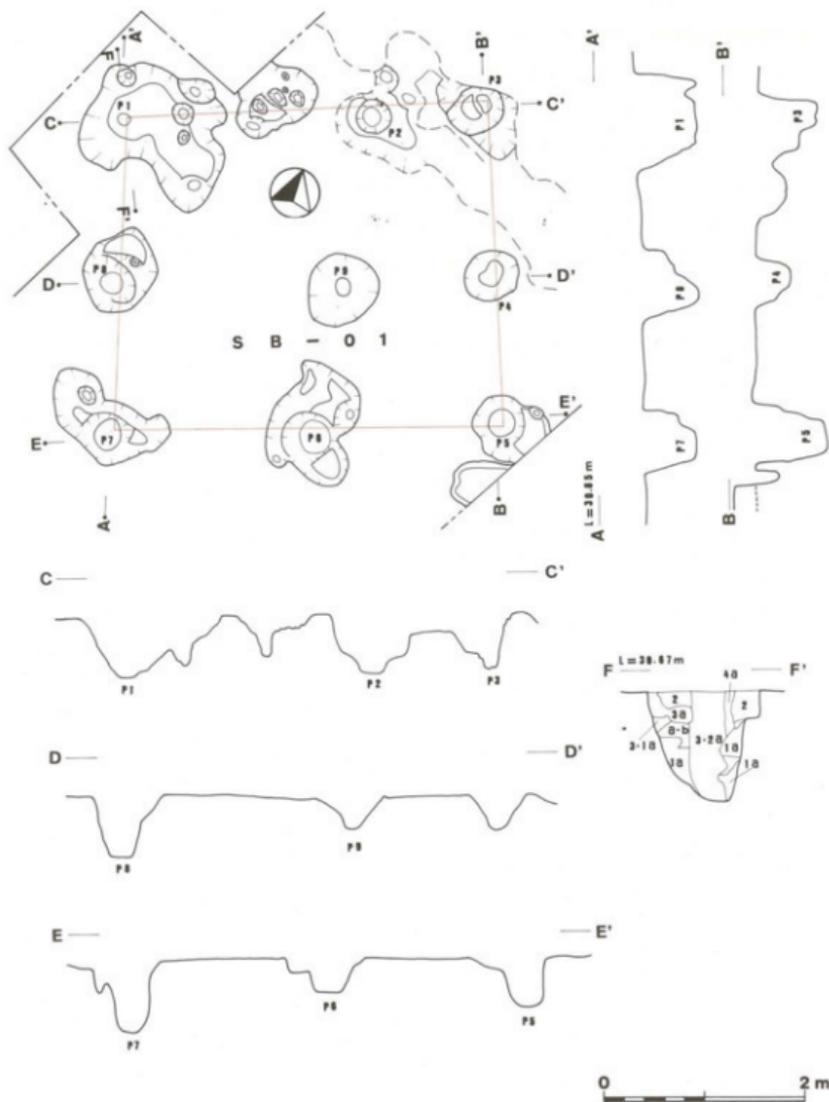
C区, C42・43グリッド画を中心に検出された。表土除去後の確認段階では、本遺跡で検出したSX-01, 02, 03と同様のピット列遺構と考えていたが、P₁, P₂, P₃, P₄, P₅を検出した時点でピットの深さ、配列などから掘立柱建物遺構であることが確認できた。

主軸の方向は、N-17°-Wを指していた。柱穴数はP₁~P₅までの9ヵ所から確認され、柱穴間を桁行、梁間方向を結ぶとはほぼ方形に結べる。桁行間は西側が2間で約315cm、東側も2間で320cmを測れた。梁間は南側が2間で約388cm、北側は中柱の柱穴が東側に寄っているが、約360cmを測れた。

ピットの規模、形状は、P₁-167×148×58cm, P₂-35×35×60cm, P₃-56×46×56cm, P₄-54×50×40cm, P₅-65×54×50cm, P₆-83×56×38cm, P₇-80×65×73cm, P₈-93×70×60cm, P₉-74×64×35cmであった。なお、P₁~P₃, P₅~P₈は重複したピット痕がみられた。ピット内の堆積土は、暗褐色土と黒褐色土が主体で、ローム粒、ロームブロック土が混入されており、とくにP₁はセクション面に柱痕の土層がみられた。

床面 (P₁~P₅に囲まれた部分) は、とくに踏み固めたような状態では検出されず、やや硬めのローム土である。

遺物は、本遺構に伴う良好な状態では出土していないが、土師器、須恵器の細片が遺構上層の覆土中より出土している。なお、P₁の覆土中からは、細片で図示できなかったが、須恵器の坏片3点、高台付坏片1点、土師器の甕片と思われる細片9点が出土している。



第120图 SB-01实测图

(3) 溝遺構

第1号溝遺構 (SD-01) (付図5)

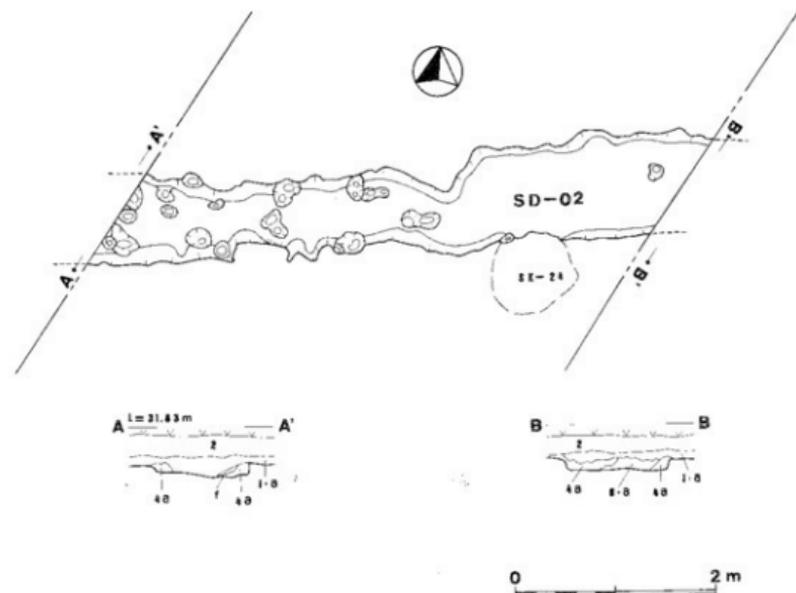
C区, A33-C・D35グリット画を中心に検出された。本遺構は, S1-08・13・14と重複し, この両遺構を切って構築されていたことが確認できた。断面形状は「 \sim 」状を呈し, 側壁部および底部は比較的硬く締っていた。

検出した総延長は約22mで, ほぼ東西方向に延びE35グリット画の位置より直角に南側へ折れている。

規模は, 上幅が55~115cm, 底幅が15~35cm, 深さは20~30cmを測れた。

覆土は, 黒褐色土と褐色土が主体で, ローム粒, ロームブロック土が層中に含まれ, 堆積状況は自然堆積の状況を示していた。

遺物は, 覆土中より土師器片249点, 須恵器片44点, 縄文土器片6点が出土したがいずれも細片で, 覆土中に流れ込んだものと思われる。



第121図 SD-02実測図

第2号溝遺構 (S D—02) (第121図)

C区、C41・D42グリット画を中心に検出された。本遺構は、SK 24と一部重複して検出されたが、切り合いの新旧関係は明確ではなかった。

断面形状は、「」状を呈し、底部はかなり硬く締っていた。

検出長さは、560cm、上幅60～110、底幅40～90cm、深さは15～20cmであった。長軸方向は、N—85—Eを指していた。

覆土は、褐色土、暗褐色土が主体でローム粒を若干含んでいた。堆積状況は、自然堆積の状況を呈していた。

遺物は、覆土中に土師器片14点、須恵器片4点、縄文土器片2点が含まれており、いずれも細片で覆土中に流れ込んだものと思われる。

(4) 柵列遺構

第1号柵列遺構 (S A—01) (第122図)

C区、C・D43・44グリット画を中心に検出された。本遺構は、確認段階では溝遺構とみていたが、掘り下げ精査をおこなっていくうちに複数のピットが列状を呈していることがわかった。しかし、検出したピットのほとんどが乱雑に重複した状態であったためピットの個体数および規模、形状を明確にすることができなかった。また、S B—01のP・Pが重複している部分もあり、関連状態を把握することが困難であった。ただ、不明瞭ではあるがピット系の配置が、横列もしくは乱杭の配列を思わせることから、柵列遺構として想定した。

遺物は、ピットの覆土中より、土師器片、須恵器片などの細片が若干出土しているが、いずれも覆土中に流れ込んだものと思われる。

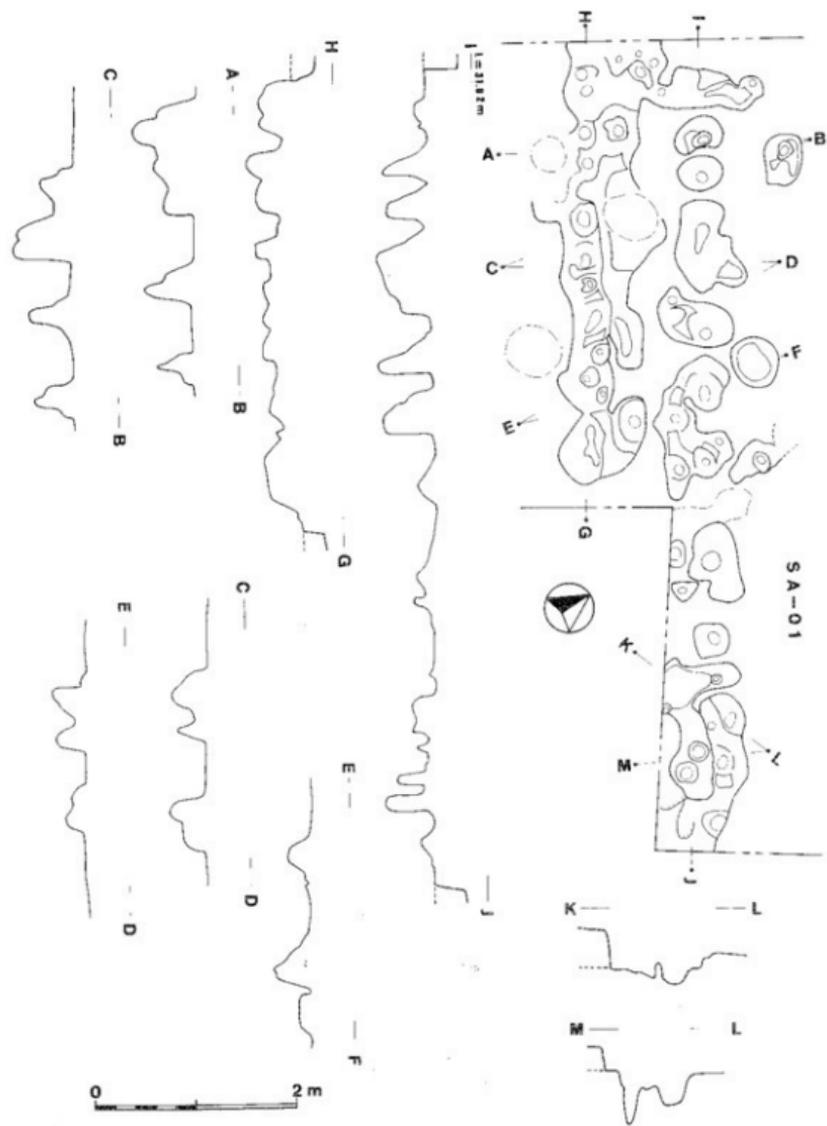
(5) 土坑遺構

第1号土坑 (S K—01) (第123図)

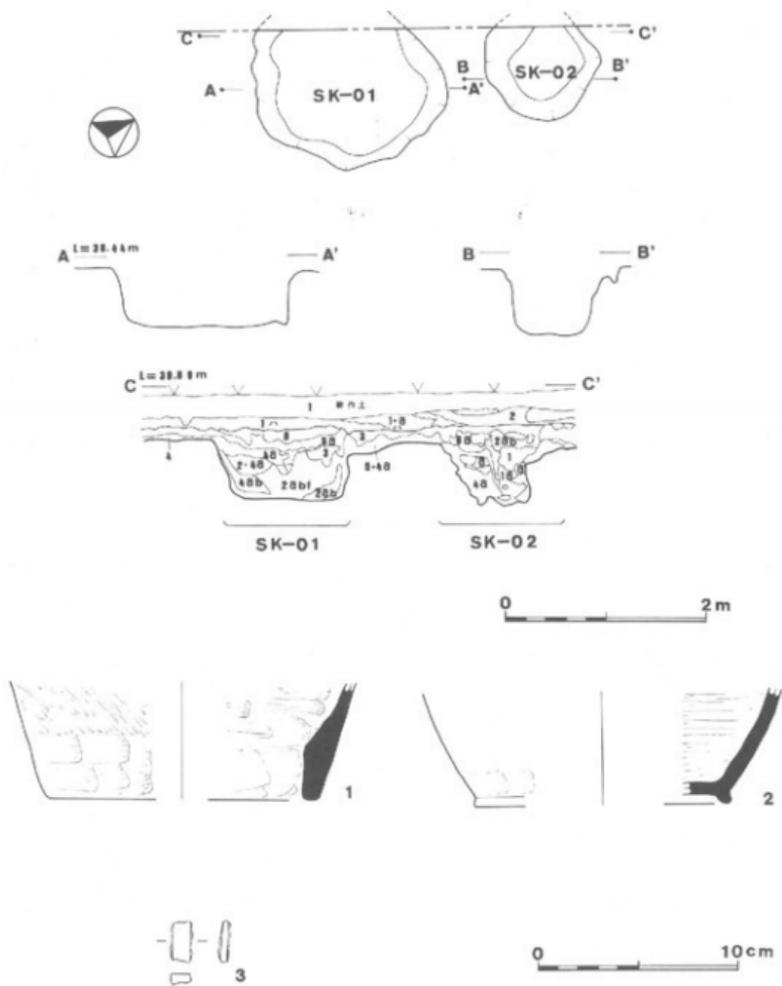
B区、C18・19グリット画を中心に検出された。西側の一部は調査区域外であったため未調査である。

形状は、不整形を呈している。規模は、東西は205cm、南北は不明、深さは55～60cmを測れた。底面は平坦である。覆土は、黒褐色土、褐色土が主体でローム粒が全体的に含まれており、堆積状況は自然堆積である。

遺物は、覆土中より土師器、須恵器の破片が出土し、土師器片19点、須恵器片6点であった。このうち同化可能なものは、須恵器の甗片(1)と壺の胴上部片(2)の2点のほか鉄製品の一部(3)が1点出土している。



第122图 SA-01 实测图



第123图 SK-01·02实测图, SK-01出土遗物实测图

第2号土坑 (SK-02) (第123図)

B区, C19グリット画から検出され, SK-01の北東側に隣接して確認された。西側の一部は調査区域外であったために未調査である。形状は, 不整形とみられた。規模は, 東西113cm南北は不明で, 深さは67~70cmを測れた。底面は平坦である。

覆土は, 暗褐色土, 黒褐色土, 褐色土が主体で上層部に多量のローム粒が混入されている。堆積状況は全体的にみて人為堆積の状況を呈していた。

遺物は, 土師器片18点, 須恵器片7点が混入されていたが, いずれも細片で図化は不能である。

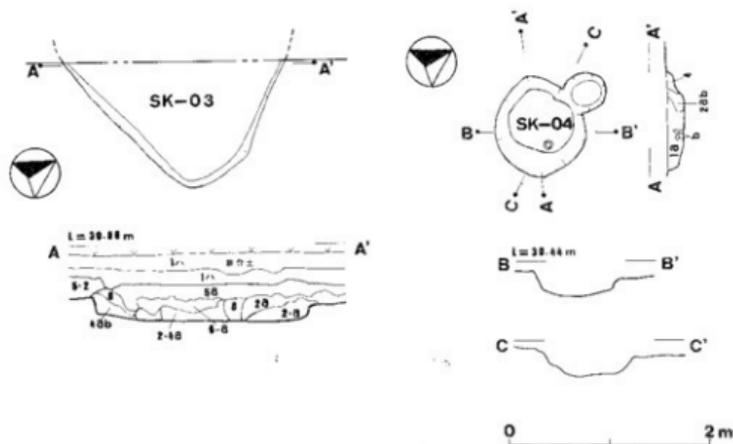
第3号土坑 (SK-03) (第124図)

B区, C16グリット画から検出された。西側の一部は調査区域外にあるため未調査である。

形状は, 検出部分から堆定すると方形と思われるが, 明確ではない。全体規模は不明であるが, 検出規模は東西180cm, 南北160cmを測れた。深さは15~20cmである。底面は平坦である。

覆土は, 暗褐色土, 黒褐色土が主体で一部にローム粒も含まれており, 堆積状況は自然堆積の状況を呈している。

出土遺物は皆無である。



第124図 SK-03・04実測図

第4号土坑 (SK-04) (第124図)

B区, C16グリット画から検出された。北側にピット状の凹部が隣接しているが、本遺構との関連は認められなかった。

形状は、円形を呈している。規模は、長軸103×短軸88cmで深さは13-20cmを測れた。底面はやや丸底気味の形状況を呈している。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒の混合で、自然堆積の状況を示している。

遺物の出土は皆無である。

第5号土坑 (SK-05) (第125図)

B区, C17グリット画から検出された。西側の一部が調査区域外に延びていたため未調査で東側は、S1-15に切られていた。

形状、規模は不明で深さは45cmを測れた。底面は平坦である。覆土は、黒褐色土、極暗褐色土、褐色土が主体で、堆積状況は人為的に埋めもどした状態を示している。

遺物は、土師器の細片が5点出土しているが図化不能であった。

第6号土坑 (SK-06) (第125図)

B区, D24グリット画から確認され、SK-07北側に隣接した位置から検出された。

形状は、不整形を呈していた。規模は、長軸90cm、短軸80cm、深さ50cmを測れた。底面は平坦である。覆土は、黒褐色土、褐色土にローム粒が含まれており、堆積状況は人為堆積の状態を示していた。遺物の出土は皆無であった。

第7号土坑 (SK-07) (第125図)

B区, D24グリット画から検出された。形状は、不整形を呈していた。規模は、長軸113cm、短軸92cm、深さは28-40cmを測れた。底面は北側に傾斜気味でわずかに段差がみられた。

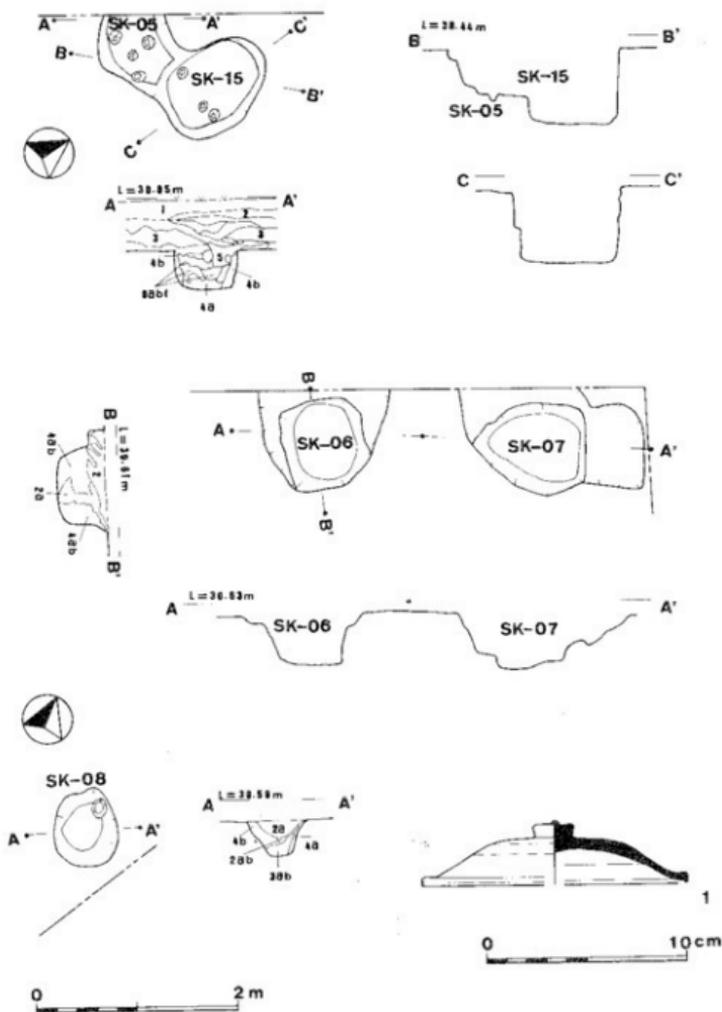
覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒が混合した土層で、堆積状況は自然堆積の状態を示していた。

遺物は、土師器片7点、須恵器片6点が層中より出土したが、いずれも細片のため図化不能であった。

第8号土坑 (SK-08) (第125図)

B区, D10グリット画から検出された。形状は、不整形を呈している。規模は、長軸80cm、短軸65cm、深さ30cmを測れた。底面はやや丸底気味の形態を呈している。

覆土は、黒褐色土、褐色土、ローム粒が混在し、堆積状況は自然堆積の状態を示していた。遺物は、須恵器の蓋片1点(1)と土師器片1点が覆土中より出土したが同化できたものは蓋片のみであった。



第125図 SK-05・15・06・07・08実測図, SK-08出土遺物実測図

第9号土坑（SK—09）（第126図）

B区、D9グリット面から検出された。形状は、円形を呈している。規模は、東西120cm、南北133cm、深さは30—33cmを測れた。底面は全体的には平坦であるが、局部的に小ピット状の穴が9ヶ所から確認された。

覆土は、黒褐色土、褐色土が主体で層中にローム粒、ロームブロック土、炭化粒などが混在しており、堆積状況は自然堆積の状態を示していた。

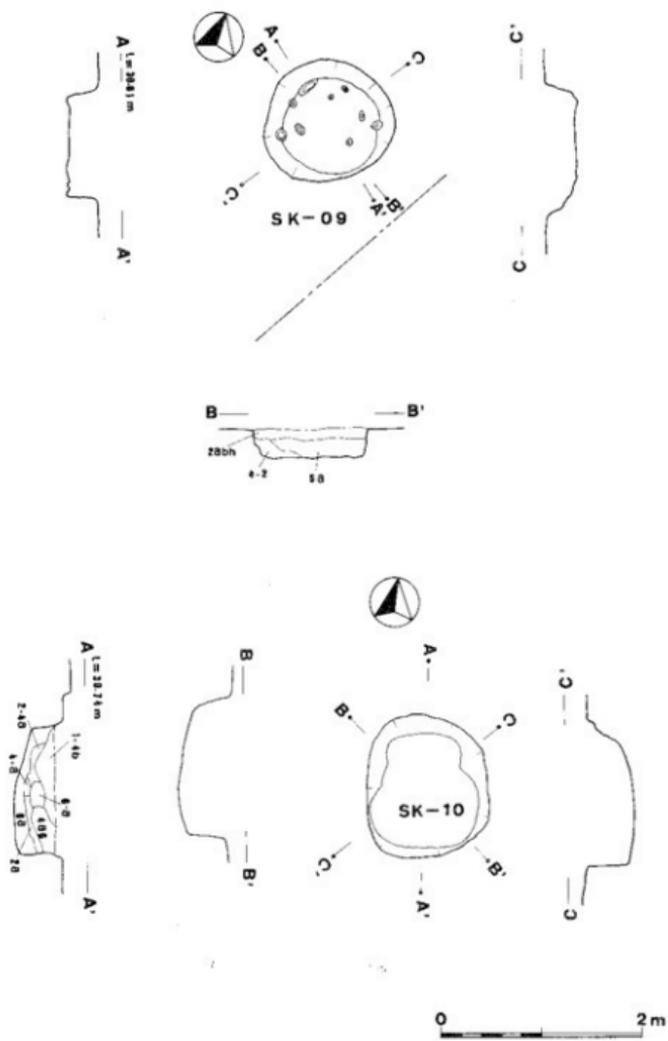
遺物は、土師器片12点、須恵器片2点が層中より出土したがいずれも細片で図化不能であった。

第10号土坑（SK—10）（第126図）

C区、C31・32グリット面から検出された。形状は、不整形を呈している。規模は、長軸141cm、短軸121cm、深さ35—45cmを測れた。底面は東側から西側に傾斜気味に延びている。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土、褐色土、ローム粒、ロームブロック土が混在しているが、堆積状況は自然堆積の状態を示している。

遺物は、土師器片73点、須恵器片36点が覆土中より出土しているがいずれも細片であるため図化不能であった。



第126图 SK-09·10实测图

第11号土坑（SK-11）（第127図）

B区、D 8グリット画から検出された。形状は楕円形を呈している。規模は、長軸94cm、短軸30～35cmを測れた。底面は南北側に小段状の段差を有している。

覆土は、黒褐色土、褐色土とかなり、自然堆積の状況を示している。遺物の出土は皆無である。

第12号土坑（SK-12）（第127図）

B区、C 6グリット画から検出された。形状は、不整形形を呈している。規模は、長軸80cm、短軸65cm、深さ23cmを測れた。底部は凹凸が多く、小ピット状の穴が6ヵ所から検出された。

覆土は、褐色土、極暗褐色土が2層に堆積しており、状況は自然堆積である。遺物は、須恵器の細片が1点覆土中より出土しているが因化不能である。

第13号土坑（SK-13）（第127図）

B区、C・D 5グリットから検出された。形状は、不整形形を呈している。規模は、長軸90cm、短軸86cm、深さ15cmを測れた。底面は、ほぼ平坦であるが小ピット状の穴が3ヵ所にみられた。

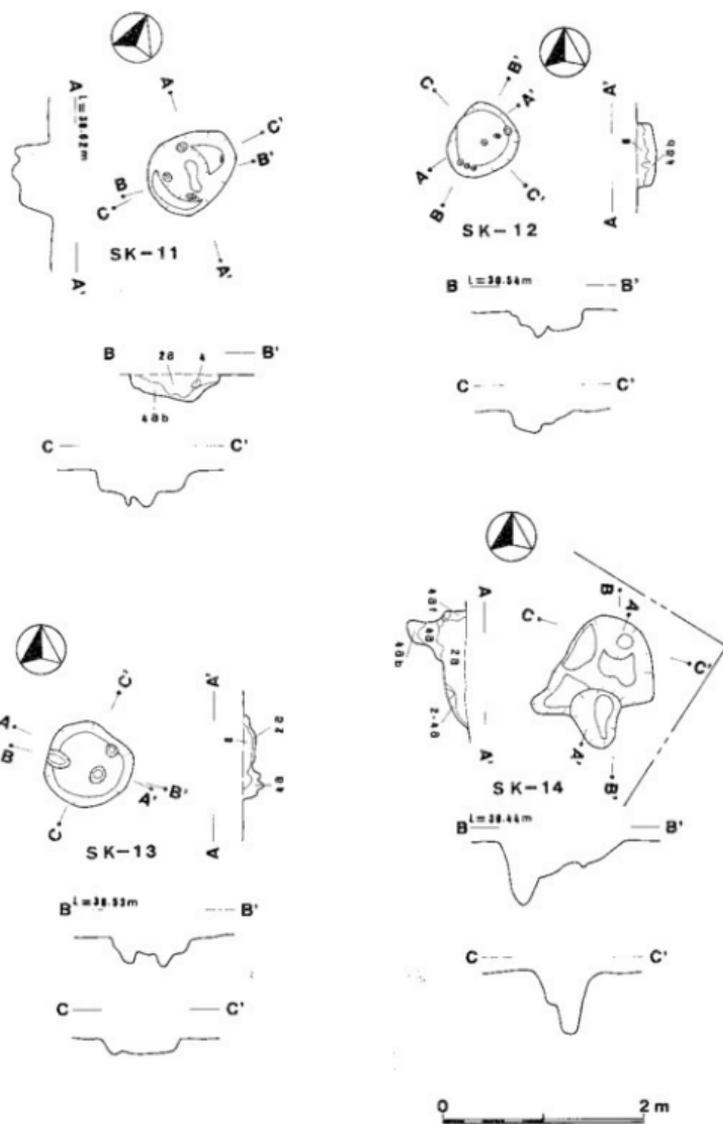
覆土は、褐色土、黒褐色土、極暗褐色土が主体で2層になっている。堆積状況は、自然堆積である。

遺物は、土師器片1点、須恵器片1点が覆土中より出土しているが、いずれも細片のため因化不能である。

第14号土坑（SK-14）（第127図）

B区、E 18グリット画から検出された。形状は、不整形形を呈している。規模は、長軸133cm、短軸132cm、深さは最深部で63cmを測れた。本遺構の南端面にはピット状の穴が重複しているが、本遺構との関連は認められなかった。底面は凹凸を呈しながら北側に傾斜している。

覆土は、黒褐色土、褐色土が3層に堆積しており、堆積状況は自然堆積である。遺物は、土師器片14点、須恵器片16点が層中より出土しているが、いずれも細片のため因化不能である。



第127图 SK-11·12·13·14实测图

第15号土坑 (SK-15) (第125図)

B区、C17グリット画から検出された。西側にS1-05が重複しており、本遺構はS1-05を切っていることが確認できた。

形状は、楕円形を呈している。規模は、長軸117cm、短軸90cm、深さは40cmを測れた。底面は平坦である。

覆土は、暗褐色土、褐色土が主体で層中に若干のロームブロック土が混入されており、堆積状況は人為堆積の状態を示していた。

遺物の出土は皆無であった。

第16号土坑 (SK-16) (第128図)

B区、C20グリット画から検出された。本遺構は、西側端部がS1-03と重複しているが、切り合い状況からは新旧関係が確認できなかった。

形状は、不整形円形を呈している。規模は、長軸が114cm前後と推定でき、短軸は80cm、深さは23~26cmであった。底面は丸底を呈していた。覆土は、褐色土、極暗褐色土、黒褐色土が混在し、各層中にロームブロック土、ローム粒が若干含まれている。堆積状況は自然堆積であった。

遺物の出土は、皆無であった。

第17号土坑 (SK-17) (第128図)

C区、C34グリット画から検出された。形状は不整形楕円形を呈している。規模は、長軸95cm、短軸69cm、深さは25~30cmを測れた。底面はやや丸底気味である。

覆土は、暗褐色土、褐色土が主体で堆積状況はほぼ自然堆積の状態を示していた。遺物の出土は皆無であった。

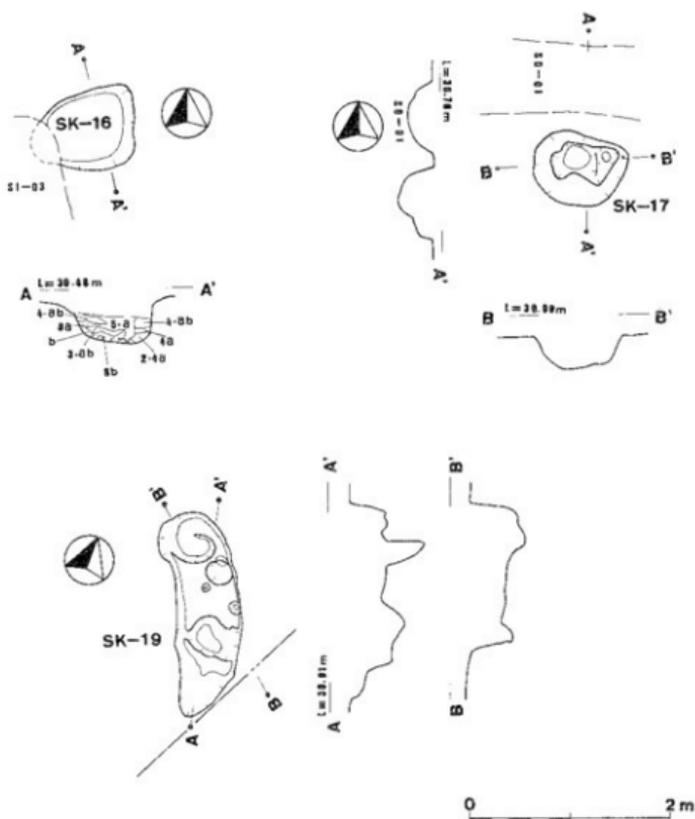
第18号土坑 (SK-18) 欠番

第19号土坑 (SK-19) (第128図)

C区、E36グリット画から検出された。形状は長楕円形を呈している。規模は、長軸206cm、短軸62cm、深さは36~50cmを測れた。底面は凹凸が多く、局部に小ピット状の窪地がみられた。

覆土は、黒褐色土、ローム粒が混在しており、ほぼ1層であった。堆積状況は自然堆積である。

遺物は、須恵器片20点、土師器片23点、縄文土器片1点が覆土中から出土したが、いずれも細片であるため図化不能であった。



第128図 SK-16・17・19実測図

第20号土坑 (SK-20) (第54図) :

本遺構は、S1-09の覆土内に掘り込まれていたが、遺跡に伴う遺構とは認められず、畑地内に掘られたイモ穴と考えられたため、遺構として扱わなかった。

第21号土坑 (SK-21) (第129図)

C区、D38グリット画から検出された。本遺構は、S1-10の東側に隣接しており、本遺構の南端にはピット状の穴がわずかに重複しているが切り合い関係は不明であった。

形状は、楕円形を呈している。規模は、長軸が115cm前後と推定でき、短軸は108cm、深さは60cmを測れた。底面はほぼ平坦である。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒が混在しほぼ1層で、堆積状況は自然堆積である。

遺物は、土師器片21点、須恵器片3点でいずれも覆土中より出土しているが、細片であるため図化不能であった。

第22号土坑（SK-22）（第129図）

C区、A33グリット画から検出された。本遺構の南側部分は未調査である。形状は楕円形と推定できる。規模は、東西98cm、南北は不明、深さは53cmを測れた。底面はわずかに丸味をもっている。

覆土は、暗褐色土、褐色土、黒褐色土が主体で、最下層には黒色腐食土が堆積していた。堆積状況は自然堆積の状況を呈している。

遺物の出土は皆無であった。

第23号土坑（SK-23）（第129図）

C区、C40グリット画から検出された。形状は、方形を呈している。規模は、長軸80cm、短軸68cm、深さ47cmを測れた。底面はほぼ平坦であるが、4カ所から小ピット状の穴が検出されその性格については不明である。

覆土は、黒褐色土、褐色土が主体でローム粒と若干のロームブロック土が混合されており、全体的に3層に分層できた。堆積状況は、自然堆積の状態を呈していた。

遺物は、須恵器片5点、土師器片11点、陶器片1点、磁器片1点が覆土中より出土したが、いずれも細片であるため図化不能であった。

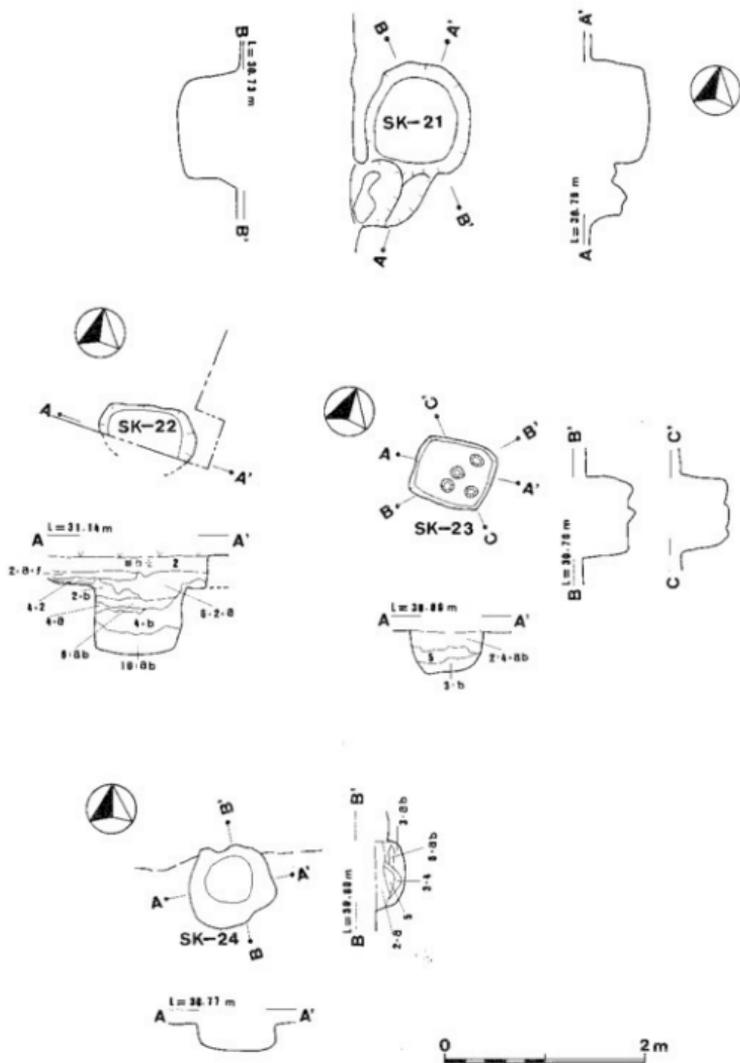
第24号土坑（SK-24）（第129図）

C区、D42グリット画から検出された。本遺構は、SD-02に北側の一部が切られていることが切り合状況から確認できた。

形状は、不整形を呈している。規模は、長軸90cm、短軸85cm、深さ23~27cmを測れた。底面はやや丸底気味である。

覆土は、黒褐色土、暗褐色土、褐色土が主体で層中にローム粒、ロームブロックが若干含まれている。堆積状況は、自然堆積の状況を呈していた。

遺物は、覆土中より須恵器片5点、土師器片11点、縄文土器片が1点出土しているが、細片であったため図化不能であった。



第129图 SK-21·22·23·24 实测图

第25号土坑 (SK-25) (第130図)

C区、D36・37グリット画を中心に検出された。形状は、楕円形を呈している。規模は、長軸89cm、短軸73cm、深さ40cmを測れた。底面は平坦である。南東端部には小ビット状の穴が重複していたが新旧関係は不明である。

覆土は、暗褐色土が主で層中に若干のローム粒が含まれていた。堆積状況は自然堆積の状態を示していた。

遺物は、土師器片11点、須恵器片2点が覆土中より出土したが、いずれも細片であるため図化不能であった。

第26号土坑 (SK-26) (第130図)

C区、D42グリット画から検出された。形状は、不整楕円形を呈している。規模は、長軸113cm、短軸82cm、深さ45～64を測れた。底面はわずかに小段状を呈している。

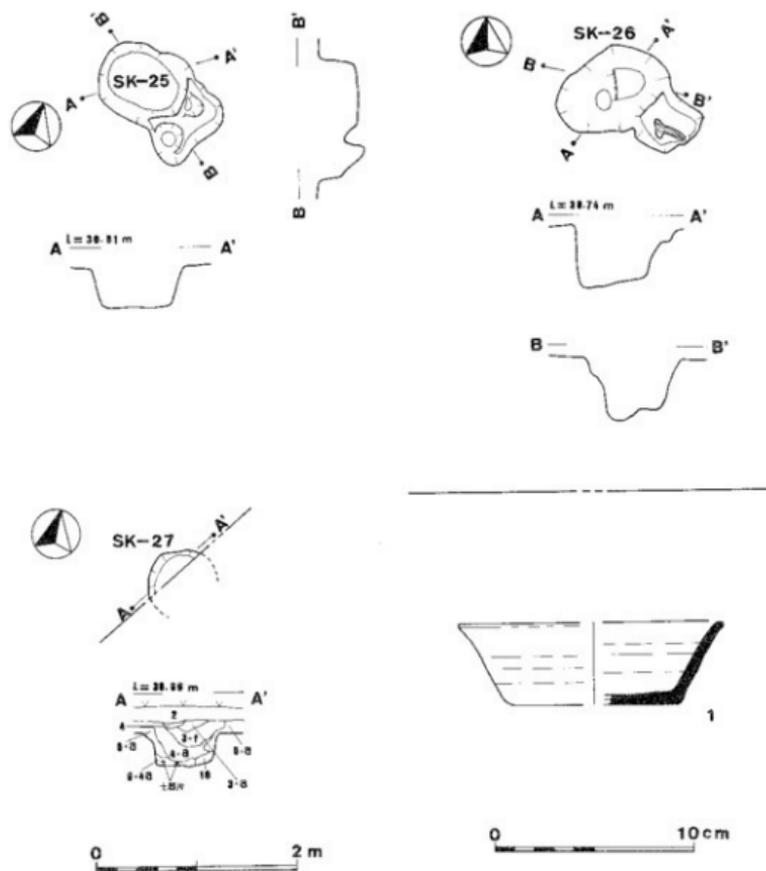
覆土は、黒褐色土が1層であるが自然堆積の状況を呈している。遺物は皆無であった。

第27号土坑 (SK-27) (第130図)

C区、E45グリット画から検出された。南東側は調査区域外であるため未調査。形状は、円形と推定できる。規模は不明であるが深さは33cmを測れた。底面はほぼ平坦と思われる。

覆土は、黒褐色土、暗褐色土、黒色土が主体で、各層中にローム粒が含まれていた。堆積状況は自然堆積の状況を呈している。

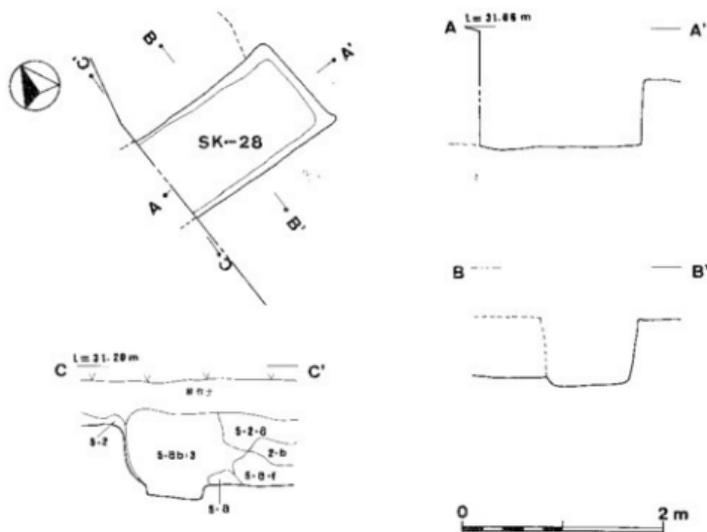
遺物の出土は、覆土中より土師器片4点、須恵器片2点が出土したが、図化できたものは(坪)1点であった。



第130図 SK-25・26・27実測図，SK-27出土遺物実測図

第28号土坑（SK-28）（第116・131図）

C区，C27グリッド画から検出された。本遺構は，S1-19を切った状態で検出されたが，西側は調査区域外であるため未調査である。本遺構は，遺跡に伴うものではなく，耕作時のイモ穴の類でSK-20とほぼ同様の穴と思われた。



第131図 SK-28 実測図

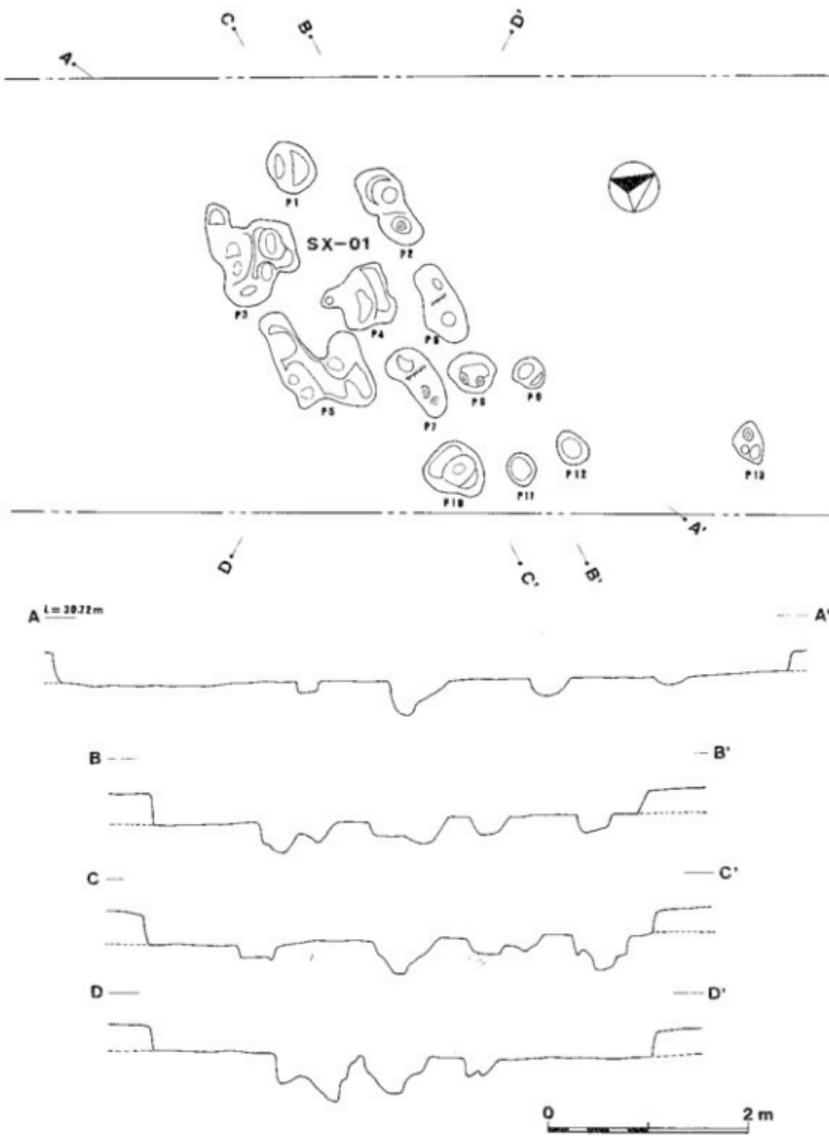
(6) 不明ピット群

第1号不明ピット群 (S X-01) (第132図)

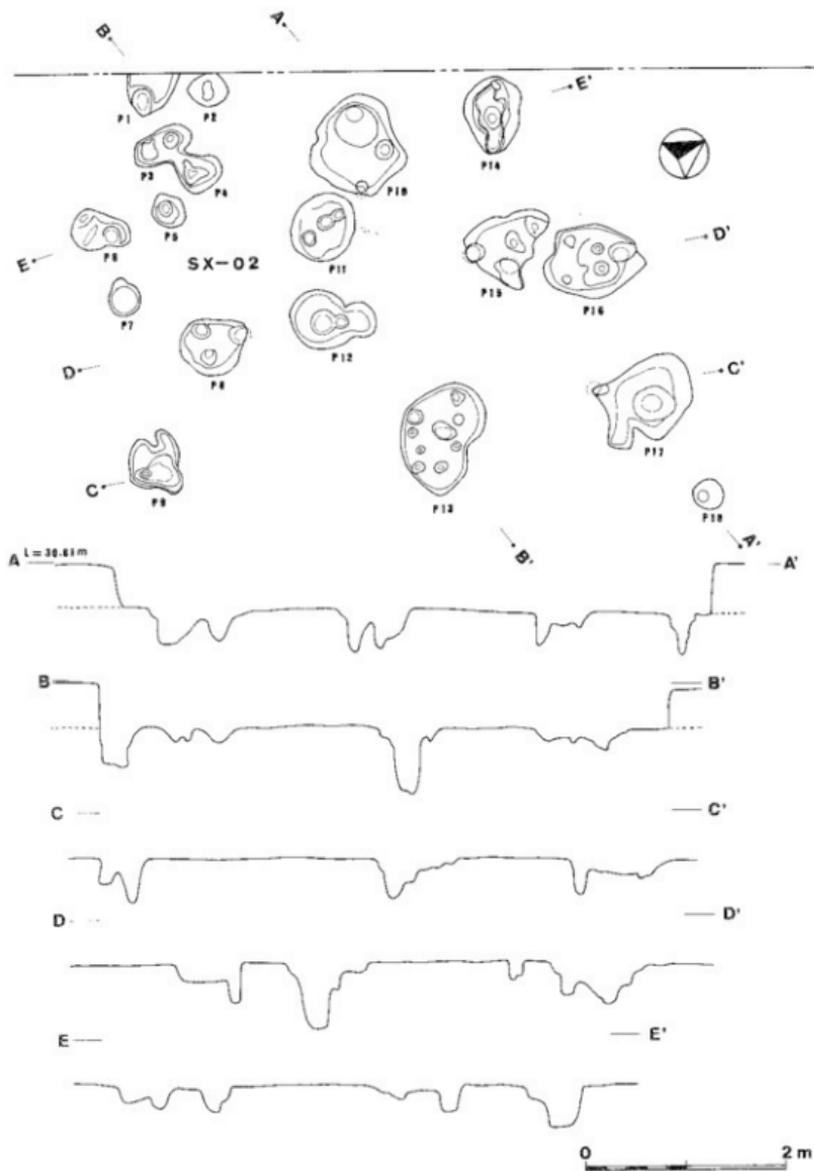
B区, C2・D2, 3グリット画を中心に検出された。本遺構は、確認段階で複数のピットが集中している状態であったため横列もしくは、掘立柱遺構と思われたが、ピットを精査するにおよび、その配列、規模、形状などの点で、その関連性が認められず、ピットの形態そのものが柱穴の性格を有していないものであった。換言すれば樹根の穴の様相を呈したピットであった。しかし、本遺構の存在する位置は、調査以前の土地状態が畑地であったことと、明確な規則性はみられなかったとはいえ、全体的な軸方向がほぼ東西に延び、しかも、堅穴住居群の軸方向と一致する点などを考え合わせると、住居跡遺構との同時性が推測できた。

ピットの規模は、上径で25~65cm、深さ10~50cmを測れる。底部は平底状、丸底状、V字状などまちまちな形状を呈している。

遺物の出土は皆無であった。



第132图 SX-01 实测图



第133图 SX-02实测图

第2号不明ピット群 (S X-02) (第133図)

B区, C13, 14, D13, 14グリット画から検出された。本遺構もS X-01と同様に、ピット配列、関連性などは把握できなかったが、全体的な方向性のみが、ほぼ東西方向に延びているように思われた。

ピットの規模は、上径で30~110cm、深さ10~70cmを測れ、底部の形態も、丸底、V字状、平底などである。

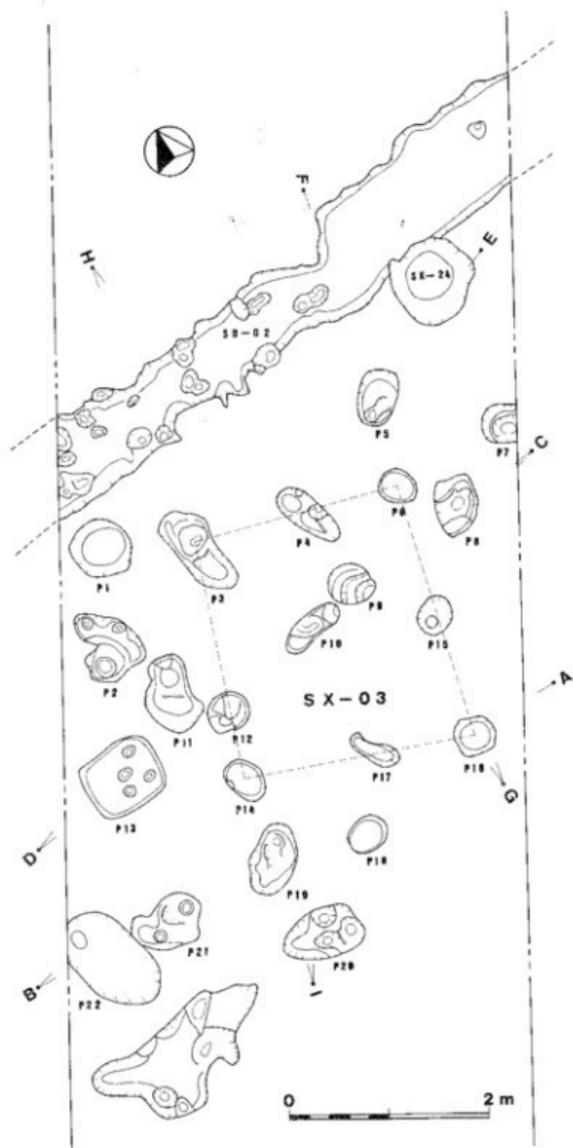
遺物の出土は皆無であった。

第3号不明ピット群 (S X-03) (第134図)

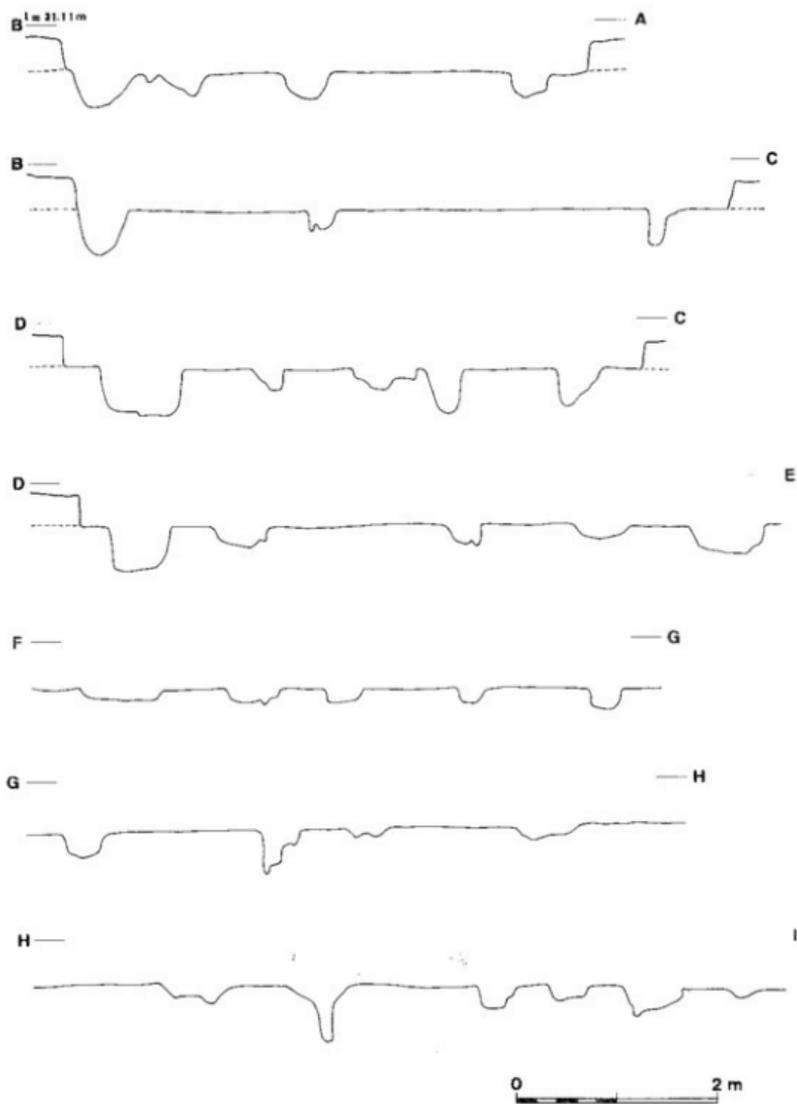
C区, C40・41, D40・41グリット画を中心に検出された。本遺構も、S X-01, 02とはほぼ同様の状態で確認され、ピット配列、関連性等が把握できず、全体的な方向性のみがほぼ東西方向に延びていることが予想できただけである。しかし、P₃, P₄, P₅, P₆, P₇, P₈, P₉, P₁₀の関連が、掘立柱建物遺構としてみる見方もあったが、これはあくまでも平面形のみからみた場合であり、各ピットの規模、形状等から判断するとかなり難しいと思われたため、ここではS X-03とした。

ピットの規模は、上径が30~100cm、深さは15~58cmを測れ、底部の形態も丸底、平底、U字状などを呈している。

遺物は、各ピットの覆土中より、細片で図化はできなかったが、土師器片43点、須恵器片14点が出土している。その内訳は、土師器の坏片が7点、甕片36点。須恵器の坏片が8点、高台付坏片1点、甕片4点、蓋片1点であった。



第134图 SX-03 实例图(1)



第135图 SX-03实测图(2)

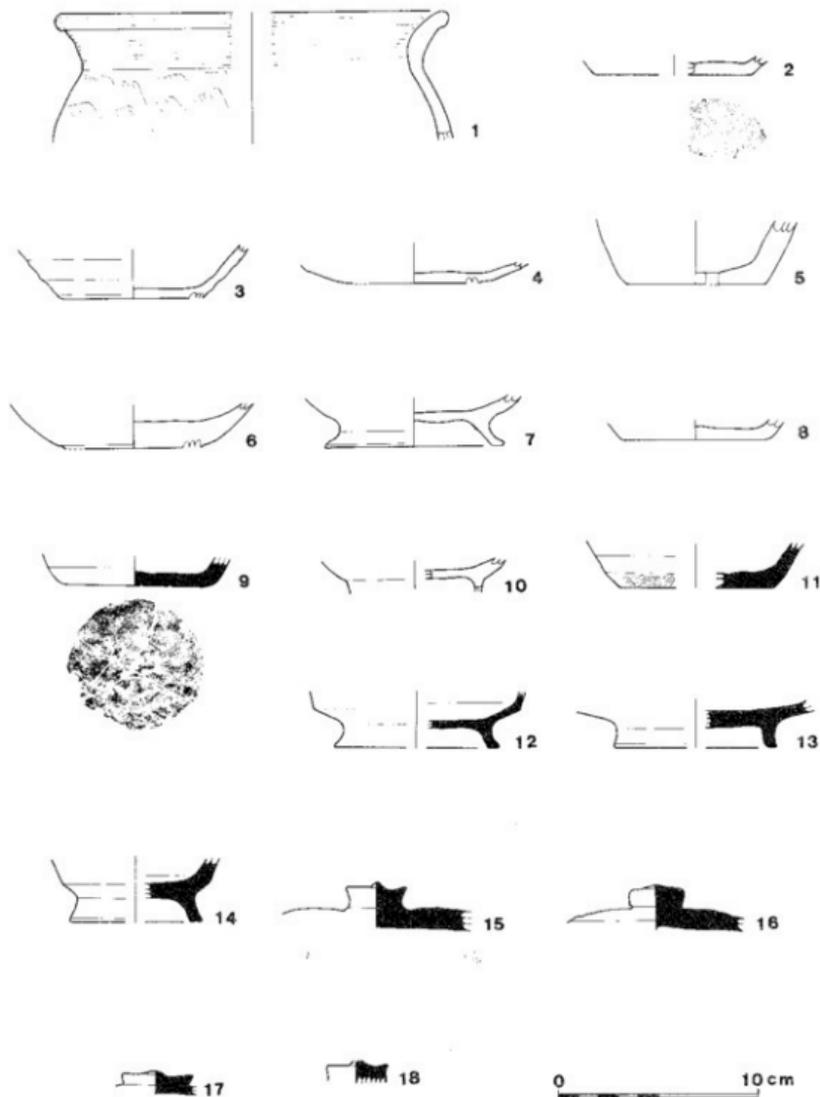
第2節 遺構外出土遺物

(1) B・C区出土土師器、須恵器 (第136図)

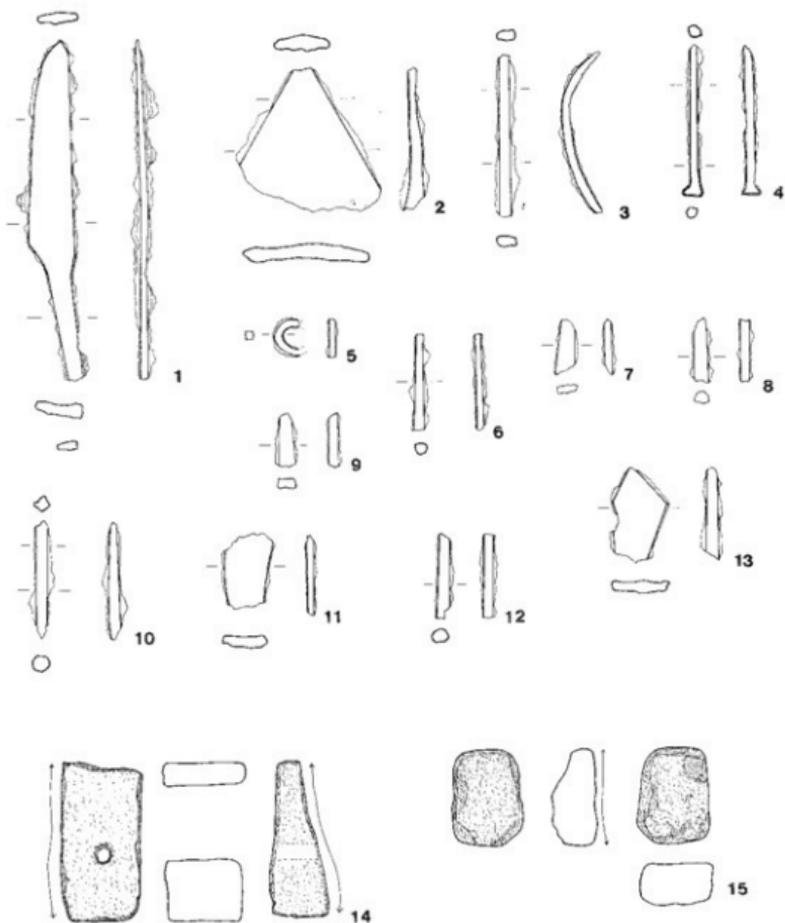
1は土師器甕の口縁部一類部片で、C区東側の覆土下層から出土した。2は土師器杯の底部で、B区東側の覆土中より出土した。3は土師器の高台付坏の底部片で、台部は欠損している。B区中央の覆土下層から出土した。4は土師器の高台付坏の底部片で、B区東側の覆土中より出土した。5は土師器の甕底部片で、焼成後に穿れた円孔がみられる。C区東側の覆土下層から出土した。6は土師器の高台付坏の底部片で、B区東側の覆土中から出土した。7は土師器の高台付坏片で、B区東側の覆土中より出土した。8は土師器の坏底部片で、B区東側の覆土中より出土した。9は須恵器の坏底部片で外面にへう記号が刻まれている。B区東側の覆土中より出土した。10は土師器の高台付坏の底部片で、B区中央の覆土下層から出土した。11は須恵器の坏底部片でB区中央の7号試掘坑の覆土中より出土した。12は須恵器の高台付坏の底部一台部片で、B区中央の覆土下層から出土した。13は須恵器の高台付坏片で、B区中央の覆土下層より出土した。14は須恵器の高台付坏片で、C区西側の覆土下層より出土した。15は須恵器の蓋片で、C区西側の覆土中より出土した。16は須恵器の蓋片で、B区中央の覆土下層より出土した。17は須恵器の蓋(つまみ)片で、B区中央の覆土下層から出土した。18は須恵器の蓋(つまみ)片で、B区中央の覆土下層から出土した。

(2) B区出土鉄・石製品 (第137図)

1は刀子で、B区東側の覆土下層より出土した。2は鎌先片で、B区東側の覆土下層から出土した。3は鉄鍔の柄部で、B区中央の覆土下層から出土した。4は釘で、B区中央の覆土下層から出土した。5は不明鉄製品で、リング状を呈したものである。B区東側の覆土中より出土した。6は鉄鍔の柄部で、B区東側の覆土中より出土した。7は刀子の柄の一部と思われる。B区東側の覆土中より出土した。8は鉄鍔の柄部で、B区の覆土中より出土した。9は鉄鍔の柄部で、B区東側の覆土中より出土した。10は鉄鍔の柄部で、B区東側の覆土中より出土した。11は鎌の破片で、B区西側の覆土中より出土した。12は鉄鍔の柄の一部で、B区東覆土下層から出土した。13は鎌片で、B区東側覆土中より出土した。14は砥石片で、B区東側の覆土下層から出土した。15は砥石片で、B区東側の覆土中より出土した。



第136图 B·C区出土土師器，須惠器



0 10cm

第137图 B区出土铁·石製器

(3) B・C区出土石器 (第138図)

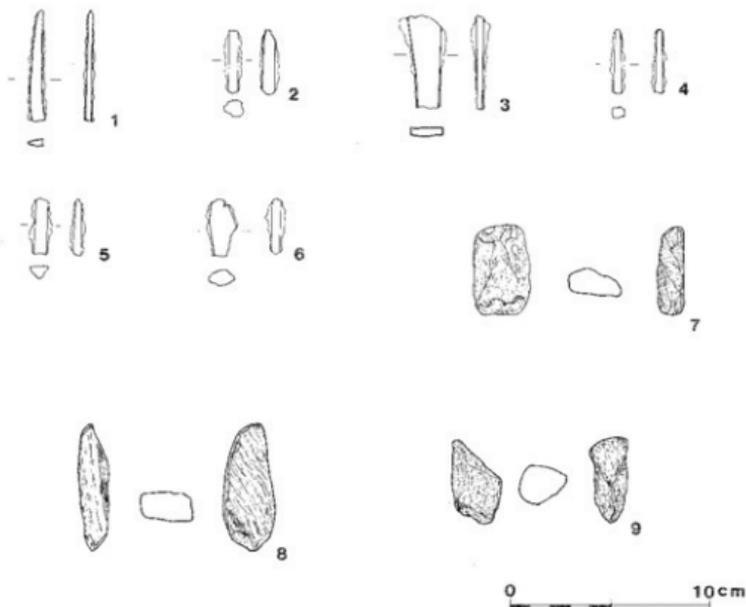
1は黒曜石の石刃で、B区西側の覆土下層より出土した。2, 3はチャートの石鏃で、B区東側の覆土下層より出土した。4はチャートの剥片で、S I-11の覆土中に混入していた。5は硬砂岩の石斧片で、C区西側の覆土中より出土した。6はチャートの剥片で、S I-15覆土内より出土した。7は黒曜石の剥片で、C区中央の覆土中より出土した。8はチャートの剥片で、S I-15の覆土中より出土した。9は黒曜石の剥片で、S I-12の覆土中より出土した。10は黒曜石の剥片で、S I-12の貼り床土内より出土した。11はチャートの剥片で、S I-15の覆土中より出土した。12はチャートの剥片で、S I-11の覆土中より出土した。13はチャートの剥片で、S I-11の覆土中より出土した。



第138図 B・C区出土石器

(4)C区出土鉄・石製品 (第139図)

1は刀子の先部で、C区発掘前に表面採取したものである。2は鉄鍔の柄部で、C区中央の覆土中より出土した。3は刀子の柄部の一部で、C区中央の覆土下層より出土した。4は鉄鍔の柄部で、C区中央の覆土下層より出土した。5は鉄鍔の柄部で、C区で表面採取したものである。6は鉄鍔の先端と柄の中間部と思われる。C区西側の覆土中より出土した。7は砥石片で、C区の21号試掘坑の覆土中より出土した。8は砥石で、C区東側の覆土中より出土した。9は砥石で、C区東側の覆土中より出土した。



第139図 C区出土鉄・石製品

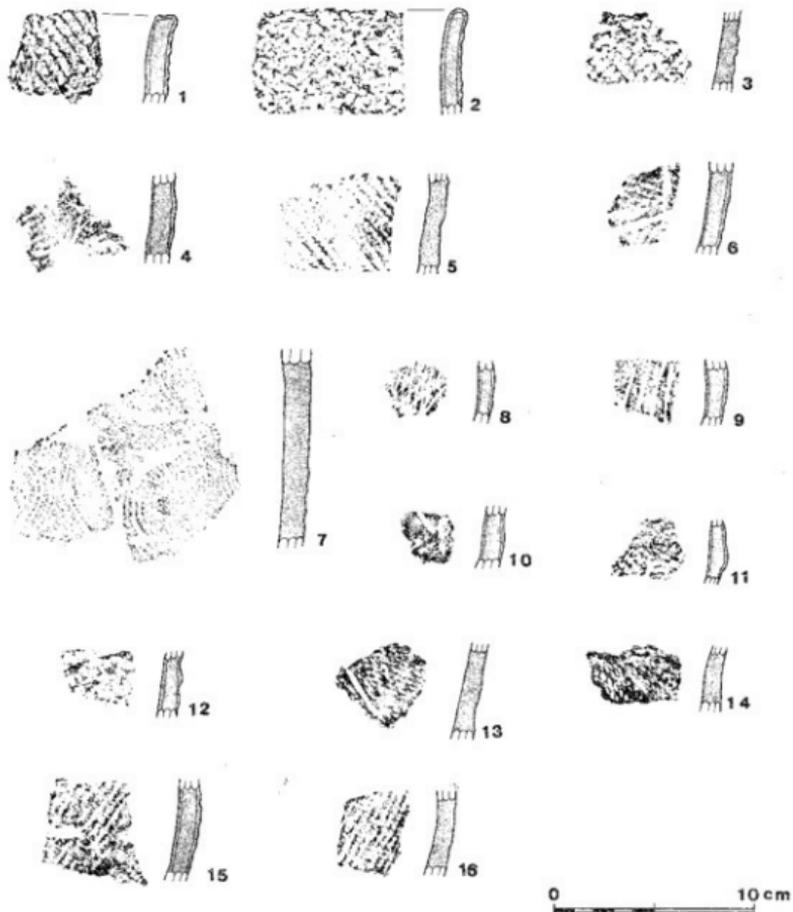
(5)B・C区出土縄文土器 (第140～146)

本遺跡から出土した縄文時代の遺物は、前期・中期・後期の土器片が中心に出土している。土器片以外にも石器、石鏃類 (第138図) も出土しているが前述したので、ここでは土器片を図示した。

縄文土器片は、本遺跡の堆積土である黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土層より出土したものと、住居跡遺構、溝遺構の覆土中より出土したものが含まれている。

第1群土器 (第140図)

本群の器片の胎土中にはすべて繊維が含まれており、器面の文様は縄文と沈線文のものがある。1～3は縄文が施文されており、7は曲線状に沈線状の文様が施され、8、9は沈線文が縦位から斜位に施されている。時期的には、早期後半から前期前半のものが含まれている。



第140図 縄文土器(1)

第2群 (第141図)

本群の本器は、器面の文様が、荒い縄文または沈線が主で、胎土内には、砂粒、バミスが含まれており、焼成もかなり良好なものである。1～3、7は縄文が施文されており、4、8は縦位に太沈線が施されている。5は横位に条線状の文様である。時期的には、前期後半のものと思われる。

第3群土器 (第141図)

本群の土器は、器厚が全体的に厚くなり、胎土内は砂粒、バミス、雲母などが含まれている。3は口縁部片で器面には数条の沈線状の文様がみられるだけである。胎土内には砂粒のほかに雲母粒が含まれている。2、4～8は縄文が主体で、2、4、5、7には縦位もしくは横位に沈線が施されている。8は地文が縄文で太い隆帯によって区画されている部分がみられる。時期的には中期の阿玉台式と加曾利EⅡ式の時期に比定されたものと思われる。

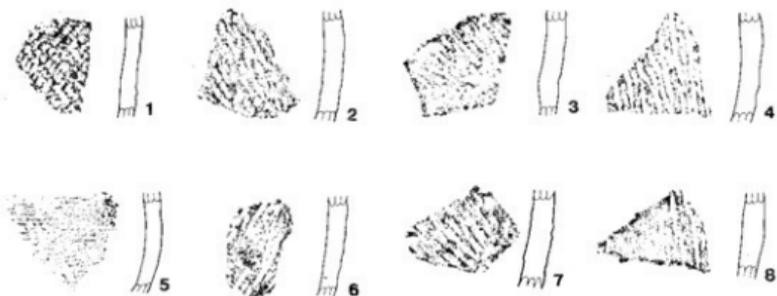
第4群土器 (第143～146図)

a種 縄文と沈線文が施されているもの (第143・144図)

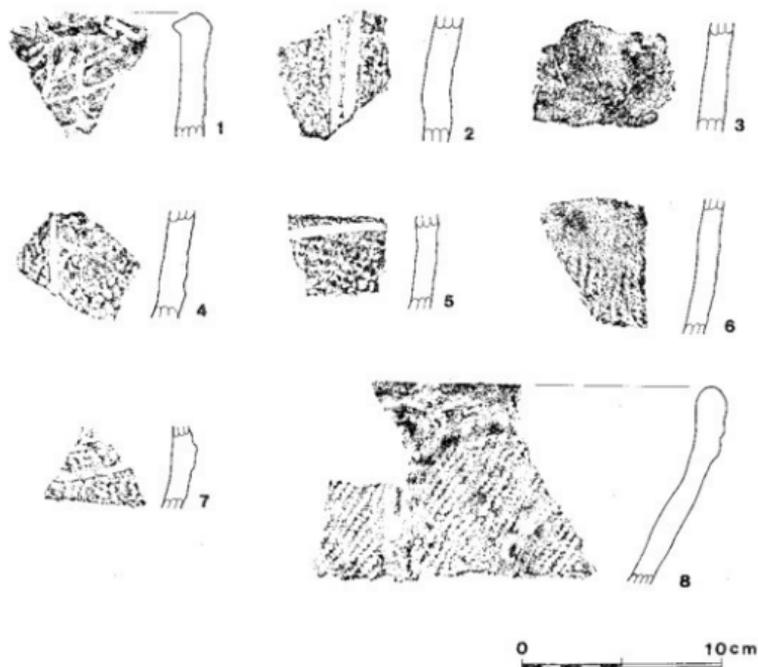
縄文の地文に、横位、縦位、斜位、蛇行状に施されているものである。

b種 器面の文様がすべて縄文のみで、全体的に荒い縄文である。

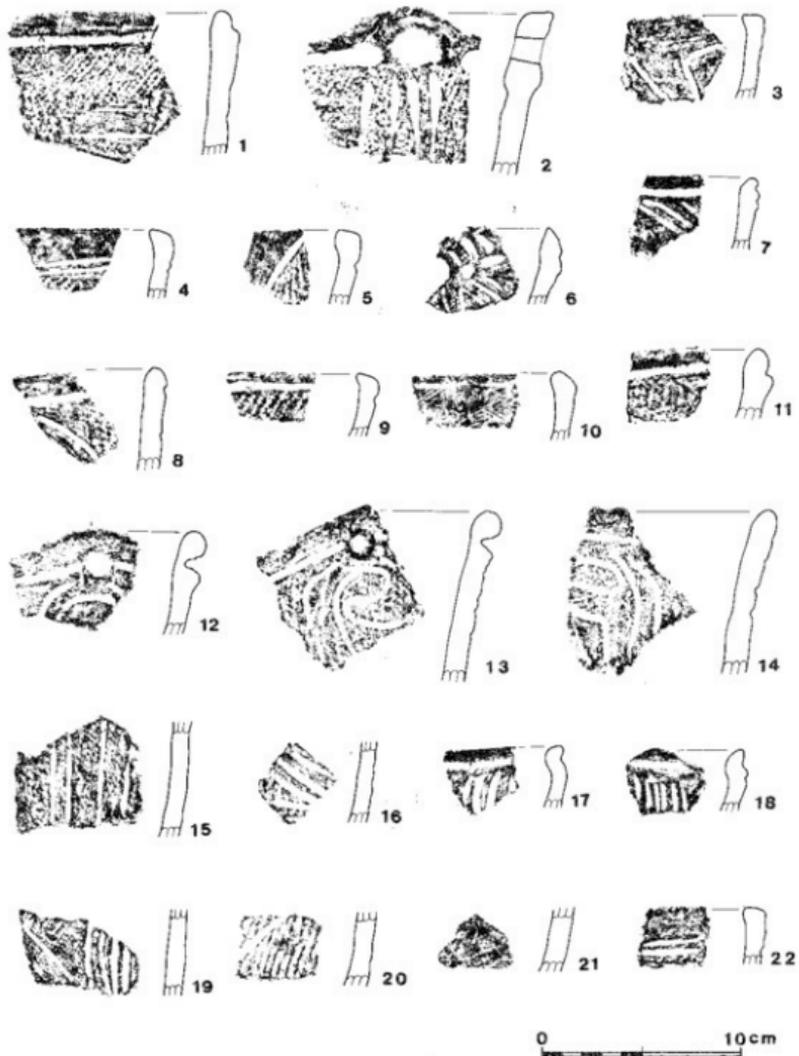
時期的には、後期の堀、内式の土器に比定されるものである。(第145図) 第146図の1～3は口縁突起部でこれも堀ノ内式に比定されるものである。



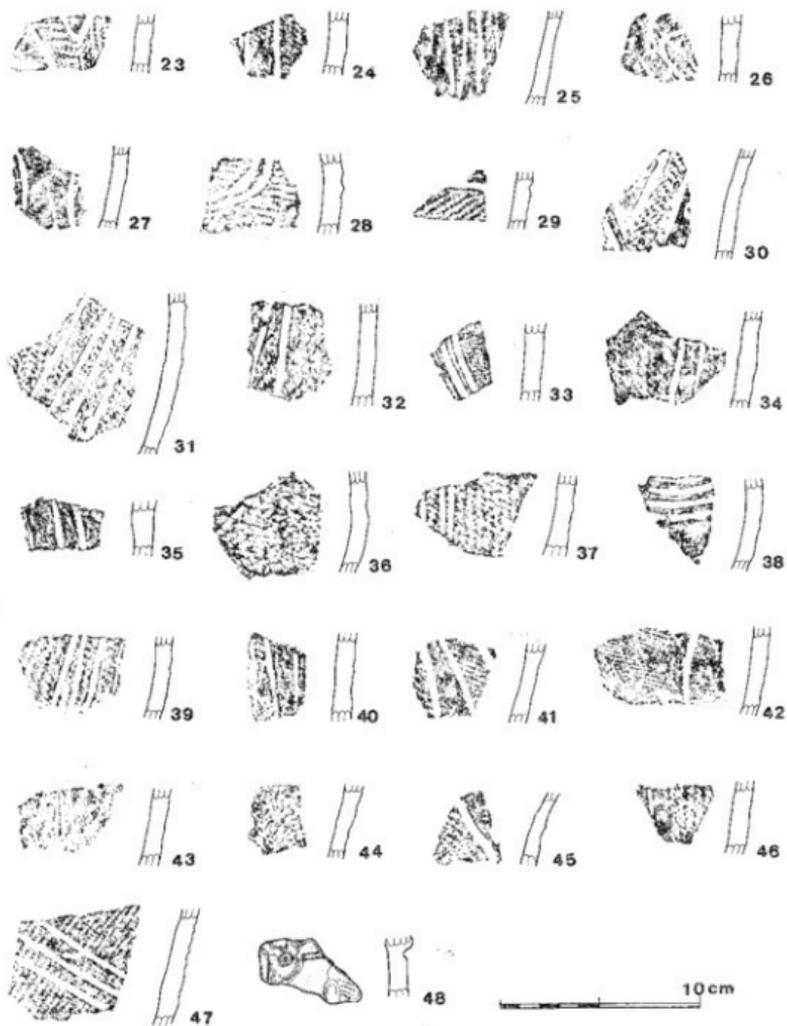
第141図 縄文土器(2)



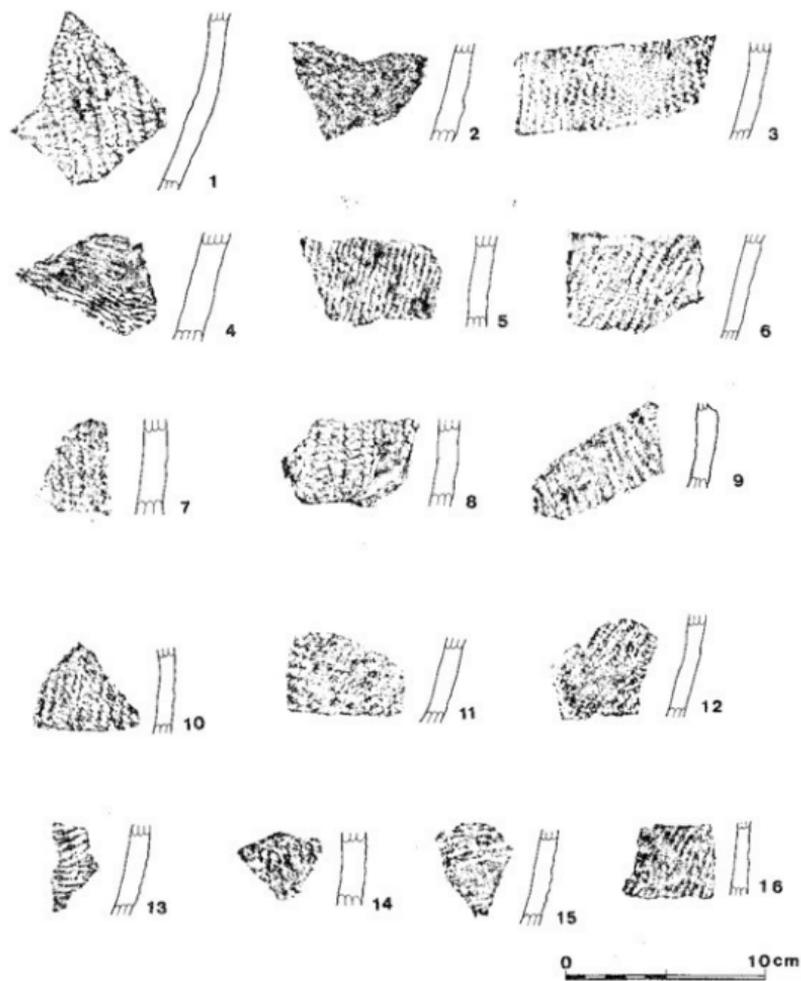
第142圖 縄文土器(3)



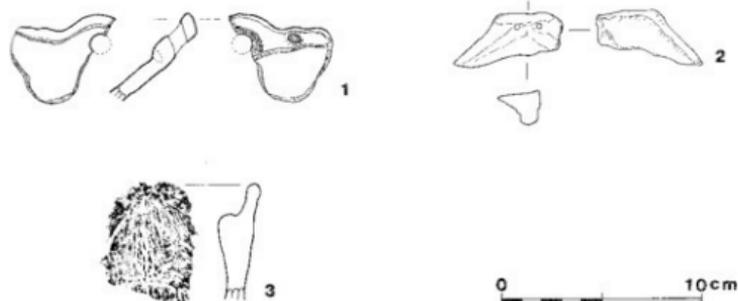
第143圖 縄文土器(4)



第144圖 縄文土器(5)



第145圖 縄文土器(6)



第146図 縄文土器(7)

(6) B・C区出土陶器・磁器 (P L99, 100)

本道跡の調査区域内から出土した陶器磁器類はすべて調査区域の堆積土中より出土したものである。器種としては、皿、碗、摺鉢、こね鉢、天目茶碗片で、時期については細片であるため明確ではないが、産地については瀬戸産、常滑産、美濃産のものが主体である。

(7) 出土遺物観察表

第1号住居跡出土土器観察表 (S I - 01)

図 号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土色・色調・肌	備考
第9回	甕 土師器	A (22.6)	底部は平底。胴部は長胴形を呈し、最大径を胴部上位にもつ。口縁部は外反しながら高さ、口部部は外上方へつまみ出している。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外周の中央部から下半部にかけて縦方向にヘラミガキを施す。胴部内面はナデ。	砂粒、バミス、赤母 灰黄色 良好	30%
		B 33.0				
2	甕 須恵器 (土師製)	C 8.6	甕の口縁部片と思われる。	口縁部外面に磨蓮き波状文を施す。内面はナデ。	砂粒、バミス、赤母 灰黄色 不良	口縁部 (10%)
3	須恵器 (土師製)		甕の口縁部片と思われる。 口縁部は外側に屈曲する。口部部は上方へつまみ出している。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面に平行タタキ目肌。内面はナデ。	砂粒、赤母 黒褐色 普通	口縁部 (10%)
4	甕 土師器	B 10.8	底部は平底。胴部は外上方へ立ち上がるが、大手を欠損する。	胴部外面、横方向にヘラ削り。内面、内面に輪槽み肌、底部外面に木炭灰を施す。	砂粒、赤母、長石 褐色 不良	胴下半部 (60%)
		C 7.5				
5	甕 土師器	A (17.4)	口縁部は頸部より外上方へ傾くが、口部部は上方へつまみ出される。胴部は下半部を欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部は内外面ともナデ。	砂粒、バミス、赤母 灰黄色 普通	口縁部一 割上半 (10%)
		B 9.4				
第10回	甕 土師器	A (22.4)	底部は欠損する。胴部は球状を呈するとと思われる。口縁部は「く」の字状を呈し、口部部は上方へつまみ出される。	口縁部内外面は回転ヨコナデ。胴部内外面はナデ。	砂粒、バミス 黒褐色 普通	口縁部一 割部 (30%)
		B 24.3				
7	甕(小形) 須恵器	B 26.2	底部は平底。胴部は球状を呈し、最大径を胴部上位にもつ。口縁部は欠損する。	胴部外面は上半から中段までタタキ目肌を施し、下半は斜位にヘラ削りを行っている。内面に輪槽み肌、接合部に常痕灰がみられる。	砂粒、バミス、長石、砂礫 暗褐色 良好	胴部 (100%)
		C 14.8				
8	高台付 須恵器	B 29.0	底部は平底。体部は外上方へ立ち上がるが、大手を欠損する。高台は外下方にのびる。(転用疑の可能性あり)	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。ヨコナデ。体部内面に墨痕と赤母を、底部外面に常痕灰が認められる。	砂粒、バミス 灰黄色 良好	20%
		D (10.1)				
9	高台付 須恵器	E 1.3	底部は高台のみ残存。高台は「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。	砂粒、長石、バミス 暗褐色 良好	底部一 割部 (20%)
		B 22.0	D (8.6)	E 1.0		
10	高台付 須恵器	B 4.4	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がる。口縁部は欠損する。高台は外下方にのびる。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。体部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、バミス 灰黄色 良好	25%
		D 8.0				
11	高台付 須恵器	E 1.5	底部は高台のみ残存。高台は「ハ」の字状に開く。接合面は平坦を成す。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。	砂粒、バミス 灰黄色 普通	底部 (25%)
		B 2.4	D (8.4)	E 1.3		
12	甕 須恵器	B 2.2	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がるが、大手を欠損する。	底部は回転ヘラ削り後、無調整。体部下部は手持ちヘラ削り後、ナデ。水掻き、ヨコナデ。	砂粒、長石、バミス 灰黄色 良好	体部下 端一 割部 (25%)
		C (8.0)				
13	甕 須恵器	B 3.5	底部は平底。外縁は外傾して立ち上がる。口縁部は欠損する。	底部は切り離し後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部下部はナデ。水掻き、ヨコナデ。	砂粒、長石、バミス 暗褐色 普通	体部一 割部 (20%)
		C (7.2)				
14	高台付 須恵器	B 1.9	底部は高台のみ残存。高台は「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。	砂粒、バミス、赤母、石英 灰白色 普通	底部 (75%)
		D (6.0)				
15	高台付 須恵器	E 1.3	底部は高台のみ残存。高台は棄つする。	底部は切り離し後、回転ヘラ削り。その後高台貼付。	砂粒、石英 暗褐色 良好	底部 (10%)
		B 2.2	D (11.9)	E 1.3		
第11回	甕 須恵器	A (36.6)	胴部は深鉢形を呈すとと思われる。口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下に突出するほか、外面に鋭い稜をもつ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は横方向の平行タタキ目。内面ナデ。	砂粒、赤母 灰黄色 不良	口縁部一 割上半 (15%)
		B 11.0				
17	甕 須恵器	A (35.6)	胴部は深鉢形を呈すとと思われる。口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は上下に突出するほか、外面に鋭い稜を持つ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は縦方向の平行タタキ目。内面ナデ。	砂粒、赤母 灰黄色 普通	口縁部一 割中央 (20%)
		B 19.0				

図番	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
18	埴 土 器	A 13.8 B 5.4 C 7.2	底部は平底、体部は内傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転糸切り後、無調整。体部下端は手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、雲母、パミス 肌灰色 普通	50%
19	埴 土 器	A 13.0 B 5.0 C 8.0	底部は平底。体部は外上方へまっすぐにのび、口縁部に至る。	底部は回転糸切り後、一方方向の手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、 雲母、長石 暗灰色 普通	80%
20	埴 土 器	A 12.9 B 4.9 C 7.5	底部は平底、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部は回転糸切り後、回転糸切り。体部下端は手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、雲母、パミス にぶい黄褐色 不良	90%
第12回 21	壺 埴 土 器	B 5.0 C 15.2	底部は平底。胴部は外上方へ立ち上がるが、大平を欠損する。	胴部外面へう割り。内面ナデ。	砂粒、雲母 灰白色 普通	20%
22	埴 土 器	A (14.3) B 4.4 C (8.0)	底部は平底、体部は外上方へまっすぐにのび、口縁部に至る。	底部は切り差しし、手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、 実母 肌灰色 普通	15%
23	蓋 埴 土 器	A 11.4 B 2.4	つまみは欠損する。天井部は弧状を呈し、口縁部は外下方へ短くのびる。大弁部と口縁部の境に線を有す。	天井部は回転糸切り後、ナデ。内面全体をナデ。内面には若干の自然亀裂がかかっている。	砂粒、肌色 灰白色 良好	60%
24	高 台 埴 土 器	E 9.0	底部は欠損。胴部はラッパに開くが、指部は欠損する。透し孔が2ヶ所認められる。	胴部外面ヨコナデ。内面は焼いたナデ。	砂粒、パミス、 長石 灰白色 良好	胴部 (25%)
25	高 台 付 埴 土 器	B 2.5 D 9.0 E 1.6	底部は高台のみ残存。高台は外下方に開く。	底部切り差し後、回転糸切り。その後高台貼付。	砂粒、長石、パミス 灰白色 良好	底部一高 部 (35%)
26	埴 土 器	B 1.1 C 7.4	底部は平底。体部下端は外傾きみに立ちあがる。	底部外面は回転糸切り後、僅かにへうナデを行なう。内面は回転糸切りナデ。	砂粒、長石、 肌色 普通	底部 (80%)

第2号住居跡出土土器観察表 (S I-02)

図番	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17回 1	魂 土 器	A 14.4 B 5.7 C 6.6	底部は平底、体部は内傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部は回転糸切り後、無調整。体部下端は手持ちへう割り。体部内外面ともヨコナデ。内面に黒色染手を施す。	砂粒、パミス にぶい褐色 良好	25%
2	高 台 付 土 器	A (14.2) B 5.5 D (7.5) E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字に開く高台が付く。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	水洗き整形。底部は回転糸切り後ナデ、その後高台貼付。	砂粒、パミス にぶい褐色 普通	40%
3	埴 土 器	A (14.6) B 4.8 C (10.0)	底部は欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は回転糸切りナデ。内面はへうナデ。	砂粒、パミス 浅黄褐色 普通	20%
4	埴 土 器	A 13.0 B 3.6 C 6.8	底部は平底。体部は内傾きみに立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転糸切り。体部下端はナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス にぶい褐色 良好	60%
5	瓦		平瓦の破片	外面はナデ。内面に布目肌。	砂粒、パミス 明赤褐色 良好	5%未満
6	壺 土 器	B 4.8	胴部のみ残存。	胴部は内外面ともヨコナデ。胴上半の外面は履方向にへう割り。内面ナデ。	砂粒、パミス にぶい褐色 普通	胴部一胴 上半 (15%)
7	瓦		丸瓦(雄)の破片。	外面はナデ。内面は布目肌を残す。	砂粒、パミス 明赤褐色 良好	不明
8	壺 土 器	A (20.2) B 5.0	口縁部のみ残存。口縁部は胴部から外反して開き、端部は内傾気味につまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス、 雲母 にぶい褐色 普通	口縁部 (15%)

図版 番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
9	土師器	A (22.0)	口縁部のみ残存。口縁部は頸部より「く」の字状に開き、肩部は内傾する。	口縁部は内外ともヨコナデ。頸部下位の外面にへう割り痕を残す。	砂粒、バミスにふい橙色	11線部-頸部 (10%)
		B 5.0				
10	須恵器	E 1.5	宝珠形のつまみのみ残存。	外面はナデ。	砂粒、バミス灰オリーブ色	つまみ部 (100%)
		F 2.5				

第3号住居跡出土土器観察表 (S I -03)

図版 番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第22図	土師器	A 23.0	底部は欠損。胴部は内傾しながら立ち上がり、上位で丸く張る。口縁部は頸部より「く」の字状に開き、肩部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ、中位から下半部にかけて、縦位にへうミガキを施す。内面はへう割りの後ナデ。	砂粒、バミス 暗赤褐色 普通	85%
		B 28.7				
2	須恵器 (土師質)	A 13.2	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部は切離し後、一方の手持ちへう割り。体部下層も手持ちへう割り。水洗、ヨコナデ。	砂粒、バミス、雲母 にふい赤褐色 普通	95%
		E 4.3				
		C 7.3				
3	土師器	A 20.6	底部は欠損。胴部は内傾しながら立ち上がり、最大径を中位のやや上にもつ。口縁部は頸部より丸く屈曲させ、肩部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ、内面はナデ。胴下半部にへうミガキを施す。	砂粒、バミス、石英 褐色 普通	65%
		B 28.1				
4	土師器	A (17.3)	底部は平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面はナデの後へうミガキ。内面はへう割りの後ナデ。底部外面に木炭痕。	砂粒、雲母、バミス、長石 褐色 普通	65%
		B 11.8				
		C 7.7				
第23図	土師器	A 21.2	底部は欠損。胴部は内傾しながら立ち上がり、最大径を中位のやや上にもつ。口縁部は頸部より「く」の字状に開き、肩部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ、胴中位から下半部にかけてへうミガキを施す。内面ナデ。	砂粒、雲母、長石 にふい橙褐色 普通	80%
		B 29.8				
6	土師器	A (26.9)	口縁部のみ残存。口縁部は頸部から丸く屈曲させ、肩部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、雲母、バミス にふい橙褐色 普通	口縁部-頸部 (30%)
		B 6.6				
7	土師器	B (16.5)	内傾しながら立ち上がる胴部のみ残存。	胴部は内外面ともナデ。外周下半部に縦位のへうミガキ痕が認められる。	砂粒、雲母、バミス 褐色 普通	胴部 (20%)

第4号住居跡出土土器観察表 (S I -04)

図版 番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第27図	土師器	A (22.6)	口縁部は頸部より大きく外反して開き、11線部は上方につまみ出される。胴部の大半は欠損する。	11線部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ、内面はナデ。	砂粒、長石、雲母 明赤褐色 普通	20%
		B 13.6				
2	土師器	A (17.7)	口縁部は頸部から大きく外反して開き、口唇部は外上方につまみ出される。胴部の大半は欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部は内外面ナデ。	砂粒、バミス、雲母、長石 にふい橙褐色 普通	20%
		B 7.4				
3	土師器	A (22.0)	口縁部は頸部からほぼ水平方向に開き、口唇部は1方につまみ出される。胴部の大半は欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部内外面ナデ。	砂粒、バミス、雲母 褐色 普通	10%
		B 7.0				
4	土師器	A (23.2)	口縁部は頸部よりほぼ水平方向に開き、口唇部は上方につまみ出される。胴部は大半が欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ、内面ナデ。	砂粒、長石、雲母 褐色 普通	5%未満
		B 6.2				
5	土師器		底部が無底式の破片。	胴部は内外面ともへう割りの後ナデ。	砂粒、バミス、雲母、石英 にふい橙褐色 普通	破片

図 番 号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
6	土 師 器	B 7.4	底部は平底。胴部は外傾して立ち上がるが、大半は欠損する。	胴部外側、履位のヘラ削り、内面ナデ。底部外面に木炭灰。	砂粒、パミス、雲母 褐色 普通	10%未満
		C (7.8)				
7	土 師 器	B 3.8	底部は平底。胴部は外傾して立ち上がるが、大半は欠損する。	胴部は内外面ともヘラナデ。底部外面に木炭灰。	砂粒、パミス、雲母 にぶい褐色 普通	底部 (45%)
		C (8.6)				
第28回 8	高台付 須 恵 器	D (8.0)	底部のみの残存。底部は平底で短く直立する高台が付く。	水洗き整形。底筋は切り離し後、裏面を貼付。 外面に平行タタキ目或を残す。内面はヘラ削りの後ナデ。	砂粒、パミス 普通	底部一高台 (10%)
		E 0.8				
9	須 恵 器	B 2.2	頸部の破片	外面に平行タタキ目或を残す。内面はヘラ削りの後ナデ。	砂粒、パミス 白灰色 普通	頸部 (15%)
		A (12.4)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は大半が欠損する。	水洗き整形。底部は回転ヘラ切り後、高台を貼付。	砂粒、パミス 灰色 良好	20%
B 2.8						
D 7.8						
10	須 恵 器	E 0.9	つまみのみ残存。つまみは楕円状を呈する。	つまみは内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス、長石 灰色 良好	つまみ部 (90%)
		B 1.6				
11	須 恵 器	F 4.0	底部のみ残存。底部は平底。	底部は回転ヘラ切り後、軽くヘラナデを行なう。底面に刷毛を残す。	砂粒、パミス、長石 灰色 普通	底部 (20%)
		B 1.5				
12	須 恵 器	C (9.0)	つまみは欠損する。天井部はなだらかにのび、1/3部は下方に強く屈曲する。	大井部は回転ヘラ削り。ヨコナデ。	砂粒、パミス 灰白色 良好	20%
		A (14.8)				
13	須 恵 器	B 1.6	底部は多孔状。胴部は深鉢形を呈し、11線部は外反しながら大きく開く。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は平行タタキ目或が残る。外面下位はヘラ削り。内面は上位にヨコナデのほかは、軽いヨコナデと指頭痕が残る。	砂粒、パミス、長石、雲母 灰白色 普通	30%
		A (29.2)				
14	須 恵 器	B 29.2	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。	砂粒、パミス、長石 褐色 普通	体部下端一底筋 (40%)
		C 13.5				
第29回 15	須 恵 器	B 2.2	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、水洗き整形。体部下端は手持ちヘラ削り。	砂粒、長石、雲母 灰白色 普通	底部 (25%)
		C (7.4)				
16	須 恵 器	B 2.0	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。	砂粒、パミス、雲母 白灰色 普通	10%
		C (9.2)				
17	須 恵 器	B 2.4	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、水洗き整形。体部下端は手持ちヘラ削り。	砂粒、パミス 灰色 普通	体部下端一底筋 (20%)
		C (7.8)				
18	須 恵 器	B 3.2	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	底筋は切り離し後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端は手持ちヘラ削り後、ナデ。	砂粒、パミス 灰色 普通	体部一底筋 (15%)
		C (8.2)				
19	須 恵 器	B 2.6	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部下端は手持ちヘラ削り後、ナデ。水洗き整形が強い。	砂粒、パミス、雲母 白灰色 普通	体部下端 (20%)
		C (8.4)				
20	須 恵 器	B (2.6)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。水洗き整形が強い。	砂粒、パミス、雲母 白灰色 普通	体部下端 (20%)
		C (8.8)				
21	須 恵 器	A (14.0)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	底部は切り離し後、一方の手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 灰白色 普通	20%
		B 4.4				
22	須 恵 器	C (9.0)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。体部下端は手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 灰白色 普通	30%
		A (13.3)				
23	須 恵 器	B 3.8	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。体部下端は手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 灰白色 普通	30%
		C 8.2				

図番	版号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
24	須恵器	坏	A (14.0)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。体部下端もナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 灰色 普通	20%
			B 4.0				
			C (8.2)				
25	須恵器	坏	A (13.8)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰白色 普通	25%
			B 4.6				
			C (8.5)				

第5号住居跡出土土器観察表 (S I-05)

図番	版号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第34回	1	土師器	A (27.0)	口縁部から胴上部にかけての破片。口縁部は外反しながら開き、口縁部は上方につまみ出される。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、パミス、雲母 褐色 普通	10%
			B 10.2				
2	土師器	甕	A (30.0)	口縁部の破片。口縁部は頸部から外反しながら大きく開き、口縁部を丸くおさめる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス (外)褐色 (内)黒色 普通	口縁部 (20%)
			B 4.7				
3	土師器	高台付坏	A (14.4)	底部は平底。体部は内埋して立ち上がり口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ切り後、高台削り付け。水挽き整形。	砂粒、パミス、雲母 褐色 普通	80%
			B 5.9				
			D 8.6				
			E 1.7				
4	土師器	高台付坏	A 14.8	底部は平底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平底である。	底部は回転ヘラ切り。高台削り付け後ナデ調整。水挽き整形。内面を黒色処理。	砂粒、パミス、雲母 (外)にふい褐色 (内)黒色 普通	95%
			B 5.9				
			D (8.4)				
			E 1.7				
5	甕	甕	A (14.0)	口縁部は僅かに外反する。	口縁部は内外面とも回転ヨコナデ。口縁部と体部の一部内外面に自然釉が認められる。	細砂 灰色 良好	5%未満
6	土師器	高台付坏	D (12.0)	高台のみ残存。高台は外下方へ外反しながら開く。	高台は内外面とも回転ヨコナデ。	砂粒、パミス 浅黄褐色 普通	台部 (80%)
			E 5.0				

第6号住居跡出土土器観察表 (S I-06)

図番	版号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第36回	1	土師器	A (22.4)	口縁部は頸部より外反しながら大きく開き、口縁部は外上方につまみ出される。胴部は球状を呈すると思われる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、パミス、雲母 褐色 普通	15%
			B 14.2				
2	須恵器	甕	A (15.0)	つまみは欠損する。天井部は平坦な頸部からならだかに下降する。口縁部は概外方へのび、かえりを有する。	水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。口縁部内外面ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 灰色 良好	10%
			B 2.4				
3	須恵器	坏	A 11.0	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部に至る。	底部は切り磨き後、一方向の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母 明黄褐色 普通	100%
			B 3.8				
			C 7.4				

第7号住居跡出土土器観察表 (S I-07)

図番	版号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・焼成	備考
第40回	1	須恵器	A (19.0)	体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。底部は欠損するが、高台の削り付いた痕跡が認められる。	水挽き整形	砂粒、パミス、長石 灰色 良好	10%
			B 7.8				
			C (11.4)				
2	須恵器	坏	A (15.5)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、一方向の手持ちヘラ削り。体部下端部も手持ちヘラ削り。水挽きヨコナデ。	砂粒、パミス 良好	25%
			B 4.2				
			C 10.0				

図 番 号	器 種	法 量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土・色調・産成	備 考
3	環	A (12.0)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は軽く外反する。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端はナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、長石 灰色 良好	20%
	須恵器	B 4.5				
	C 7.4					
4	環	A (14.0)	底部は平底。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	底部は切り難し後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部下端はナデ。水洗きヨコナデ。	砂粒、パミス 灰色 良好	60%
	須恵器	B 4.0				
	C 8.6					
5	環	A 11.8	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ切り後、不定方向への手持ちヘラ削り。体部下端は手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、長石 青灰色 良好	100%
	須恵器	B 3.5				
	C 7.4					
6	環	A (13.2)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反気味に開く。	底部は回転ヘラ切り後、一方方向の手持ちヘラ削り。体部下端は手持ちヘラ削り。水洗きヨコナデ。	砂粒、長石、雲母 灰色 良好	60%
	須恵器	B 3.9				
	C 8.0					
7	高台付環	D (6.5)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は欠損する。	底部は回転ヘラ切り後、高台貼り付け。水洗き整形。	砂粒、パミス、長石 灰色	底部(80%)
	須恵器	E 0.5				
8	環	B 3.0	底部は平底。体部は外上方へやや内向きみに立ち上がる。口縁部は欠損する。	底部は切り難し後、一方方向の手持ちヘラ削り。体部下端はナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス 灰色 良好	10%
	須恵器	C (8.0)				
	甕	A (27.5)				
9	須恵器	B 8.3	口縁部のみ残存。口縁部は頸部より外反して開き、口唇部は蓋取りされる。	水洗き整形。	砂粒、パミス、長石 灰色 良好	口縁部(10%)
	甕	A 16.2	底部は欠損。胴部は球状を呈し、上半部に張りをつける。口縁部は外反気味に開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は上半部をナデ、下半部をヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。胴部に複合痕が認められる。	砂粒、パミス、雲母、石英、長石 ぶい・橙色 普通	80%
土師器	B 15.6					
10	長頸壺	A 9.1	口縁部は軽く外反しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部は上下に突出する前に仕上げる。胴部は欠損する。	巻きあげ、水洗き整形。内然焼が分かる。	砂粒、パミス、石英 黒褐色 良好	口縁部(100%)
	須恵器	B 10.5				
第41図 12-a	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と横位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-b	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と横位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-c	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と横位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-d	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-e	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-f	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と縦位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と斜位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
12-g	甕		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と斜位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	
	土師器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目と斜位の櫛掻き文。	砂粒、雲母、パミス 褐色 普通	
13	甕	F 3.9	つまみのみ残存。つまみは球状を呈し、中央部が僅かに突出している。	回転ヨコナデ。	砂粒、雲母、パミス 褐色 普通	つまみ(90%)
	土師器	00 0.6				
14	甕	A (23.3)	胴上半部のみ残存。胴部は球状を呈するものと思われる。口縁部は頸部から強く外反して開き、口唇部は外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部内面はヘラナデ。胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、パミス、雲母、長石 褐色 普通	10%
	土師器	B 11.0				
15-a	甕		胴部の破片。	外面に平行タタキ目と横位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 普通	
	土師器		胴部の破片。	外面に平行タタキ目と横位の櫛掻き文。	砂粒、パミス 黄灰色 普通	

図 表 号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土 ・ 色 調 ・ 地 質	備 考
15-b	甕 土 師 器		胴部の破片。	外面に平行タタキ目痕。	砂粒、バミス 黄灰色 普通	

第8号住居跡出土土器観察表 (S I-08)

図 表 号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土 ・ 色 調 ・ 地 質	備 考
第47回 1	壺 須 恵 器	A (13.0) B 5.6	口縁部は頸部より大きく外反して開き、 口唇部は上下に突出する。	回転ヨコナデ。内外面ともに 自然輪がかかる。	砂粒、バミス 灰色 良好	口縁部 (20%)
2	坏 須 恵 器	A (14.8) B 4.2 C (8.0)	底部は欠損。体部は外上方へ立ち上がり、 口縁部に至る。	水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス 白灰色 普通	体部 (10%)
3	坏 須 恵 器	A (13.0) B 4.3 C (7.2)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部に至る。	底部は回転へう切り後ナデ。 体部下端は手持ちへう割り。 水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス 灰色 良好	口縁部一 底部 (20%)
4	坏 須 恵 器	A 13.4 B 4.0 C 8.2	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部は僅かに外反気味に固く。	底部は回転へう切り後ナデ。 体部下端は手持ちへう割 り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母 灰色 良好	35%
5	高台付坏 須 恵 器	A (10.6) B 6.4 D 6.4 E 0.8	底部は平底で「ハ」の字状に固く高台が 付く。体部は外上方へまっすぐに立ち上 がり、口縁部に至る。	水挽き整形。 底部は回転へう切り。高台貼 り付け。	砂粒、バミス 灰色 良好	35%
6	高台付坏 須 恵 器	B 1.8 D (10.0) E 0.8	底部のみ残存。底部は平底で、直立する 高台が付く。端部は欠損する。	水挽き整形。 底部は切り難し後ナデ。その 後高台貼り付け。	砂粒、バミス 煙灰色 普通	底部 (25%)
7	甌 土 師 器	G 5.2 H 5.0 I 0.6	多孔式底部の破片。	底部は内外面ともヘラナデ。	砂粒、バミス、 雲母 にぶい橙色 良好	底部 (20%)
8	甕 土 師 器	A (21.2) B 6.0	口縁部のみ残存。口縁部は頸部より外反 しながら開き、口唇部は上方へつまみ出 す。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部外面はへう割りの後 ナデ。内面はナデ。	砂粒、バミス、 雲母 橙色 普通	口縁部 (10%)
9	甕 土 師 器	A (21.2) B 5.0	口縁部のみ残存。口縁部は頸部で強く屈 曲して開き、口唇部は外上方へつまみ出 す。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部上位外面はへう割 りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、バミス、 雲母 にぶい橙色 普通	口縁部一 胴部上位 (20%)
10	甕 土 師 器	A (18.4) B 12.2	口縁部は頸部より外反して開き、口唇部 は外上方へつまみ出される。下半部は欠 損する。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部外面はへう割りの後 ナデ。内面はナデ。	砂粒、バミス、 雲母 橙色 良好	口縁部一 胴上半 (20%)
11	瓦		丸瓦(塼)の破片。	外面はヘラナデ。内面は布目 痕を残す。	砂粒 橙色 良好	
第48回 12	坏 須 恵 器	A 14.0 B 4.1 C 8.0	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部に至る。	底部は回転へう切り後ヘラナ デ。体部下端は手持ちへう割 り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 長石 灰色 良好	90%
13	坏 須 恵 器	C 9.8	平底の底部のみ残存。	底部は、回転へう切り後ヘラ ナデ。	砂粒、バミス、 雲 灰色 良好	底部 (100%)
14	坏 須 恵 器	A (13.4) B 4.0 C 7.5	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部に至る。	底部は切り難し後、一方の 手持ちへう割り。体部下端は 手持ちへう割り。水挽き、ヨ コナデ。	砂粒、バミス、 雲母 灰色 良好	80%
15	坏 須 恵 器	B 2.3 C (8.0)	底部のみ残存。底部は平底。体部は内傾 気味に立ち上がるが大平を欠損する。	底部は回転糸切り。	砂粒、バミス 灰色 良好	体部下端 一部 (30%)
16	坏 須 恵 器	B 1.3 C (9.3)	平底の底部のみ残存。	底部は静止糸切り後、外縁部 のみへう割りを行なう。	砂粒、バミス、 雲母 白灰色 普通	底部 (15%)

図 番 号	器 種	法 量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色調・焼成	備 考
17	壺 須 恵 器	B 13.5 C (22.8)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上 がるが大半を欠損する。	胴部外面は平行タタキ目。内 面はナデのほか下部に接合痕 が認められる。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	胴下半 (15%)
第49回 18	提 須 恵 器		提籃の胴部片と思われる。	外面はヘラ削り後ナデ。内面 は回転はヨコナデ。	砂粒、パミス オリーブ灰色 良好	胴部 (10%)
19	壺 須 恵 器		胴部片。	外面は平行タタキ目を残す。 内面はナデ。	砂粒、パミス、 長石 灰色 普通	
20	壺 白 定		胴部片。	外面に自然釉がかかる。	砂粒、パミス 灰白色 普通	

第9号住居跡出土土器観察表 (S I - 09)

図 番 号	器 種	法 量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色調・焼成	備 考
第55回 1	小形壺 土師器	A 12.8 B 15.6 C	底部は平底。胴部は球状を呈し、最大径 を胴中位よりやや上部に有す。口縁部は 頸部より「く」の字状に開き、口唇部を 外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部外面上はヘラ削り の後ナデ。下半部は傾位のヘ ラ削り。内面はナデ。底部外 面に木炭痕。	砂粒、石灰、長 石、パミス にぶい褐色 不良	100%
2	小形壺 土師器	A (14.0) B 6.3	口縁部は頸部より「く」の字状に開き、 口唇部を外上方へつまみ出す。胴部の大 半は欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。	砂粒、長石、パ ミス にぶい褐色 普通	口縁部 (20%)
3	小形壺 土師器	A (12.4) B 6.9	口縁部は外反して開き、口唇部を外上方 へつまみ出す。胴部の大半は欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部外面はヘラ削りの後 ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒、パミス、 長石 にぶい褐色 普通	口縁一側 上半 (20%)
4	壺 土師器	A (20.6) B 5.7	口縁部は大きく外反して開き、口唇部は 外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部内外面はナデ。頸部 内面にヘラ削り痕を残す。	砂粒、密母、長 石 褐色 良好	口縁部一 側部 (20%)
5	甗 須 恵 器	A (32.0) B 29.5 C (16.1)	底部は多孔式。胴部は深鉢状を守る。 口縁部は頸部で強く隆起し、頸部は上 方に突出するほか、外面に稜を持つ。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。胴部外面は平行タタキ目。 内面はナデのほか上半部に指 痕を残す。	砂粒、雲母 灰色 普通	50%
第56回 6	坏 須 恵 器	A (14.2) B 3.8 C 8.5	底部は平底でやや突出気味。体部は外上 方へ外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部は切り差し後、手持ち ヘラ削り。体部下端も手持ち ヘラ削り。木挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、 雲母 褐色 普通	40%
7	坏 須 恵 器	B 3.0 C (8.4)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる が大半を欠損する。	底部は回転ヘラ削り後、手持 ちヘラ削り。体部下端も手持 ちヘラ削り。木挽き、ヨコナ デ。	砂粒、雲母、長 石 灰色 普通	体部一底 部(20%)
8	坏 須 恵 器	A 14.2 B 5.0 C 8.7	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに 立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ削り後、手持 ちヘラ削り。体部下端も手持 ちヘラ削り。木挽き、ヨコナ デ。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	70%
9	坏 須 恵 器	A (13.8) B 3.4 C (8.5)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに 立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転ヘラ削り後、手持 ちヘラ削り。体部下端も手持 ちヘラ削り。木挽き、ヨコナ デ。	砂粒、パミス、 雲母 灰白色 普通	30%
10	坏 須 恵 器	A 13.9 B 5.0 C 8.0	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ削り後、一方 向の手持ちヘラ削り。体部下 端はナデ。木挽き、ヨコナデ。	砂粒、長石、パ ミス、雲母 褐色 普通	50%
11	坏 須 恵 器 (土師質)	A (13.0) B 4.8 C (7.2)	底部は平底。体部は内彎気味に外上方へ 立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ削り後、一方 向の手持ちヘラ削り。体部下 端はナデ。木挽き、ヨコナデ。	砂粒、長石、パ ミス にぶい褐色 普通	20%
12	坏 須 恵 器	A (13.6) B 4.1 C (8.1)	底部は平底。体部下端は丸味を帯び、体 部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口 縁部に至る。	底部は回転ヘラ削り後、手持 ちヘラ削り。体部下端は手持 ちヘラ削り後ナデ。木挽き、 ヨコナデ。	砂粒、長石、パ ミス 灰色 普通	35%

図番	版号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13		須恵器	A (13.3)	底部は平底。体部は直線状に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端はナダ。水挽き、ヨコナダ。	砂粒、パミス、長石 灰白色 普通	50%
			B 4.8				
			C 7.4				
14		須恵器	B 3.7	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がる。口縁部は欠損する。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水挽き、ヨコナダ。	砂粒 灰色 良好	体部・底部(10%)
			C (8.8)				
15		須恵器	A (13.0)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端はナダ。水挽き、ヨコナダ。	砂粒、長石、パミス、赤母 褐色 不良	45%
			B 4.5				
			C 8.0				
16		須恵器	B 1.2	平底の底部のみ残存。	底部は回転へう切り後、一方側の手持ちへう割り。底部外面に割線が施される。	砂粒 灰色 良好	底部(100%)
			C 5.8				
17		須恵器	A 13.6	底部は平底。体部は直線状に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転へう切り後、不定方向の手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水挽き、ヨコナダ。	砂粒、パミス 褐色 良好	40%
			B 4.1				
			C 8.0				
第5図 18		十 十 器	B 1.8	底部は平底。体部下端は丸味を帯びる。	底部は回転へう切り後、無調整。体部下端ナダ。内面は黒色処理後にミガキを施す。	砂粒 灰白色 普通	底部(100%)
			C 5.6				
19		高 台 付 須 恵 器	D (6.4)	平底の底部に「ハ」の字状に開く高台が付く。	水挽き調整。 高台貼り付け	砂粒、長石、パミス 灰色 良好	底部・台部(10%)
			E 1.2				
20		高 台 付 須 恵 器	B 2.6	平底の底部に外下方へ開く高台が付く。	水挽き整形。 高台貼り付け。	砂粒、長石 灰色 良好	体部・台部(10%)
			D (7.2) E 0.7				
21		高 須 恵 器	D (8.8)	底部は平底で、「ハ」の字状に開くと思われる高台が付く。体部下端は平面を成す。	水挽き整形。 底部外面は回転へう割り。その後高台貼り付け。	砂粒 灰白色 普通	底部(20%)
			E (0.4)				
22		高 須 恵 器	B 2.5	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部下端は平面を成す。	水挽き整形。 底部外面は回転へう割り。その後高台貼り付け。	砂粒、長石 灰白色 普通	底部・台部(10%)
			D (10.2) E 1.2				
23		高 須 恵 器	B 2.2	底部は丸底が平面を成す。高台は割線している。	水挽き整形。 底部外面はへう切り後、高台貼付。	砂粒、パミス 灰色 良好	底部(45%)
			C (9.5)				
24		高 台 付 須 恵 器	A (10.6)	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反して開く。	底部は回転へう切り後、高台貼付。水挽き、ヨコナダ。	砂粒、長石 灰色 良好	25%
			B 5.7				
			E 1.0				
25		高 須 恵 器	B 2.1	底部は平底で、直立する高台が付く。	水挽き整形。 底部は切り直し後、高台貼付。	砂粒 褐色 良好	10%
			D (13.3)				
			E (1.1)				
26		高 須 恵 器	A (15.6)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部は回転へう割り。その後高台貼付。水挽き、ヨコナダ。	砂粒、パミス 灰色 良好	40%
			B 3.1				
			D 10.5				
			E 0.9				
27		高 台 付 須 恵 器	B 3.7	底部は平底で外下方に開く高台が付く。体部下端は平面を成し、体部は外傾して立ち上がる。	水挽き調整。 底部は回転へう割り。その後高台貼付。	砂粒、長石 灰白色 良好	体部下端・台部(20%)
			D (7.6) E 1.2				
28		蓋 須 恵 器	B 2.5	天井部中央にやや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部の頂部はなだらかな張りみせる。	天井部周辺は回転へう割り後、ナダ。つまみはヨコナダ。	砂粒、石英、長石 灰色 良好	20%
			F 2.9				
29		須 恵 器	F 3.0	多孔式底部の破片。	内外面ともにナダ。	砂粒、赤母 灰色 普通	不明
30		つ ま み 須 恵 器	F 3.0	扁平なボタン状のつまみのみ残存。	つまみ外面はナダ。	砂粒、パミス 灰色 普通	つまみ部(100%)
31		須 恵 器	A (13.8)	つまみは欠損。天井部の頂部はやや平坦でなだらかに口縁部にのびる。口縁部は短く下方に屈曲する。	天井部は回転へう割りの後、回転ヨコナダ。内面はナダ。	砂粒、長石、赤母 灰白色 普通	10%
			B 2.1				

図番	取号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色・質・成	備考
32		高台付坏	B 2.4	底部の破片。高台の厚さは薄く外方に開く。	水挽き整形。	砂粒、長石 灰色	5%
33		須恵器	A (16.2) B 1.7	口縁部は下方に屈曲する。天井部は大半を欠損する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス 良好 灰色	10%

第10号住居跡出土土器観察表 (S I-10)

図番	取号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色・質・成	備考
第63号	1	土器	B 8.6 D (10.8)	胴部のみ残存。胴部はラッパ状に開き、中位に円孔3個が穿たれる。胴部は欠損する。	胴部外面は履位のヘラミガキ。内面はヘラナデ。	砂粒、パミス、 長石 浅黄褐色 普通	胴部 (70%)
2		土器	A 13.6 B 4.3	底部は丸底。体部は緩く内傾しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は直立気味に開く。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、パミス、 長石 浅黄褐色 良好	100%
3		土器	B 0.9 C (7.4)	平底の底部のみ残存。	底部は回転ヘラ切り後ナデ。体部下端は回転ヘラ削り。内面を黒色処理する。	砂粒、パミス、 雲母 (外)にふいかけ色 (内)黒色 普通	底部 (30%)

第11号住居跡出土土器観察表 (S I-11)

図番	取号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色・質・成	備考
第67号	1	土器	A 28.3 B 27.0 C 10.4	底部は無底式。胴部は深鉢形を呈する。口縁部は大きく外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒、パミス、 雲母、長石 灰色 普通	50%
2		土器	A (36.5) B 7.7	口縁部は頸部から外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部は内外面ともナデ。	砂粒、パミス、 長石 浅黄褐色 小良	口縁部一 頸部 (15%)
3		須恵器	A (31.3) B 5.5	口縁部は頸部で水平方向に屈曲し、端部を面取りする。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は平行タタキ目。内面はナデ。	砂粒、雲母、長 石 灰黄色 良好	口縁部一 頸部 (10%)
4		須恵器	A (29.5) B 4.6	口縁部は頸部で水平方向に屈曲し、端部は上下に変出する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は平行タタキ目。内面はヘラナデ。	砂粒、雲母、長 石 灰黄色 良好	口縁部一 頸部 (20%)
第68号	5	土器	A (21.9) B 29.8 C (9.0)	底部欠損。胴部は球状を呈し、最大径を中位のやや上部にもつ。口縁部は外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は上半部をナデ、下半部を丁寧な履位のミガキ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒、パミス、 長石、雲母 にふいかけ色 普通	40%
6		須恵器	A (14.9) B 4.9 C (8.1)	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端は手持ちヘラ削り。体部内外面、回転ヨコナデ。	砂粒、長石 灰灰色 良好	15%
7		須恵器	A (13.6) B 4.7 C 8.7	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端はナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰灰色 普通	75%
8		高台付坏	A 14.2 B 5.3 D 9.6 E 1.4	底部は平底で、「ハ」の字状に深く高台が付く。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反気味に開く。	水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後、高台貼付	砂粒、パミス、 長石 灰灰色 良好	80%
9		須恵器	A (16.2) B 3.8	つまみは欠損。天井部からなだらかに口縁部に移行する。口縁部は下方に屈曲する。	天井部・口縁部の内外面とも回転ヨコナデ。内面に自然漆がかかる。	砂粒、パミス、 長石 灰灰色 良好	10%
10		坏	A 13.3 B 4.7 C 8.1	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。体部下端はナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰灰色 普通	80%

図 番 号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・産成	備 考
第6回 1	甕	A 21.7 B 31.3 C (8.7)	底部は欠損。胴部は長胴形を呈する。口縁部は「く」の字状に開き、口唇部は上方につまみ出される。	口縁部内外面、ヨコナデ。胴部内外面、ナデ。胴部外面下半にヘラムギキが施される。	砂粒、バミス 棕色 普通	65%
	土師器	A (20.0) B 10.5	口縁部から胴部上端にかけての破片。口縁部は胴部で水平方向に強く屈曲し、底部は西向きする。	口縁部内外面、ナデ。胴部外面ヘラ削りの後、ナデ。内面、ナデ。	砂粒、バミス、 炭色 普通	口縁部一 部部 (15%)
12	坏	A (13.5) B 4.7 C (8.7)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部は回転ヘラ切り。体部下端は手持ちヘラ削り後、ナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、バミス 灰白色 良好	口縁部一 体部 (15%)
	須恵器	D 9.7 E 2.5	台部のみ残存。台部は外下方へ外反して開く。	台部内外面は回転ヨコナデ。	砂粒、バミス、 炭色 明赤褐色 良好	台部 (85%)
14	小形台付甕	D 9.7 E 2.5	台部のみ残存。台部は外下方へ外反して開く。	台部内外面は回転ヨコナデ。	砂粒、バミス、 炭色 明赤褐色 良好	台部 (85%)
	土師器					
15	深鉢	B 8.8 C 12.4	底部は平底。胴部は外上方へ立ち上がるが大平は欠損する。	胴部内外面は甍いナデ。	砂粒、バミス 淡褐色 不良	胴下平一 底部 (30%)
	縄文					

第12号住居跡出土土器観察表 (S I -12)

図 番 号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・産成	備 考
第7回 1	坏	A 13.3 B 3.8 C 7.6	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石、バミス 褐色 普通	60%
	須恵器					
	坏	A 13.3 B 4.6 C 8.1	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反気味に開く。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、灰白色 良好	80%
2	須恵器					
	坏	A (13.6) B 4.5 C (8.0)	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端は手持ちヘラ削りの後、ナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰色 良好	25%
3	須恵器					
	甕	B 23.0	胴部は長胴形を呈する。口縁部と底部は欠損する。	胴部外面下半部は縦位のヘラムギキ、内面はナデ。	砂粒、バミス、 長石、雲母 に白い橙色 普通	胴部 (30%)
4	土師器					
	高盤	A (19.7) B 4.5	底部は中央が僅かに突出する。体部は内傾しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外傾する。高台は欠損する。	口縁部と体部の内外面は回転ヨコナデ。口縁部外面に自然釉がかかる。底部外面は回転ヘラナデ。	砂粒、長石、スコリア 灰色 良好	25%
5	須恵器					
	坏	A 14.0 B 5.6 C 7.8	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端も無調整。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石 青灰色 良好	90%
6	須恵器					
	甕	A (15.7) B 2.1	つまみは欠損。天井部はなだらかに下降し、口縁部に移行する。口縁部は下方に屈曲する。	天井部外面は回転ヘラ削り。内面はナデ。	砂粒、長石 青灰色 良好	25%
7	須恵器					
	甕	A (13.2) B 2.1	つまみは欠損。天井部は張状にのび、口縁部は強く下方に屈曲する。	天井部外面は回転ヘラ削り。内面は回転ヨコナデ。	砂粒、長石 灰色 良好	30%
8	須恵器					
	瓦		春日瓦の破片。	内面に布瓦痕。	砂粒、バミス、 長石 浅黄褐色 普通	
9	高台付坏	B 3.8 D (7.0) E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して外上方へ立ち上がる。上位は欠損する。	水洗き成形。底部は切り離し後、回転ヘラ削り。その後高台貼付。	砂粒、長石 灰白色 良好	40%
	須恵器					
10	高台付坏	B 3.8 D (10.0) E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部下端は丸味を帯びる。接地面は平坦。	水洗き成形。底部は切り離し後、回転ヘラ削り。その後高台貼付。	砂粒、長石 灰色 良好	底部一 部部 (25%)
	須恵器					
11	高台付坏	B 2.0 D (9.4) E 0.4	底部は平底で、外下方に短く開く高台が付く。接地面に沈線がある。体部の大半は欠損する。	水洗き成形。底部は切り離し後、回転ヘラ削り。その後高台貼付。	砂粒、バミス、 スコリア 灰白色 良好	底部 (30%)
	須恵器					

取 番 号	器 種	法 量(m)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土・色調・焼成	備 考
13	坏 須 恵 器	A 13.5 B 4.9 C 7.7	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反気味に開く。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰白色 良好	95%
14	坏 須 恵 器	B 0.8 C 8.4	平底の底部のみ残存。	底部は回転へう切り後、一方 向の手持ちへう割り。	砂粒、バミス、 長石 灰色 良好	底部 (100%)
15	坏 須 恵 器	A (12.7) B 4.7 C (7.5)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端は手持ちへう割り後、ナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰白色 良好	20%
16	蓋 須 恵 器	F 2.4	扁平な梨室珠形つまみのみ残存。	内外面ともナデ。	砂粒、バミス、 長石 灰色 良好	つまみ部 (100%)
17	蓋 須 恵 器	F 3.9	中央がやや突出するボタン状つまみのみ残存。	外面はナデ。	砂粒、長石 灰色 良好	つまみ (70%)
第77回	甕 土 師 器	A (20.6) B 10.5	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は外反しながら開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内外面はナデ。	砂粒、バミス、 雲母、長石 にぶい褐色 普通	口縁一部 部(10%)
19	坏 須 恵 器	A 13.0 B 4.5 C 7.1	底部は平底。体部は内傾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転へう切り後、無調整。体部下端も手持ちへう割り後、ナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰白色 普通	100%
20	甕 土 師 器	A 23.0 B 14.9	底部欠損。胴部は深鉢形を呈し、中にやや張りみせる。口縁部は外反して開く。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内外面はナデ。	砂粒、バミス、 長石 浅黄褐色 普通	30%
21	坏 須 恵 器	A (12.6) B 3.8 C (7.8)	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転へう切り後、手持ちへう割り。体部下端も手持ちへう割り。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、雲母、長石 黄灰色 良好	20%
22	甕 土 師 器	B 22.0 C 9.7	底部は平底。胴部は長筒形を呈する。口縁部は欠損する。	胴部内外面、ナデ。胴部外面 下平にへう割り痕が残る。	砂粒、バミス、 長石 褐色 不良	胴中央一 底部 (45%)
23	瓶 土 師 器		瓶の胴部片と思われる。	外面はタタキ目状を残す。内 面は荒いナデ。	砂粒、長石 にぶい褐色 普通	胴部10% 未測
24	甕 須 恵 器	A (34.8) B 8.5	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から外方に屈曲し、端部は上下に突出する。	口縁部内外面、ヨコナデ。胴部外面はタタキ目、内面はヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母、長石 灰白色 良好	口縁部 (20%)
第78回	甕 土 師 器	A (19.3) B 7.4	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、長石、雲母 褐色 普通	口縁部一 部(10%)
26	甕 土 師 器	A (15.7) B 5.8	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開き、口唇部を直立気味につまみ出す。	口縁部の内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はへうナデ。	砂粒、バミス、 長石 褐色 普通	口縁部一 部(40%)
27	甕 土 師 器	A (17.9) B 7.3	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から強く外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、バミス、 長石 褐色 普通	口縁部一 部上半部 (15%)
28	甕 土 師 器	A (13.9) B 4.7	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、上位で外反する。端部は上下に突出する。	口縁部内外面はヨコナデ。	砂粒、バミス、 長石、雲母 にぶい褐色 普通	口縁部一 部(10%)
29	甕 土 師 器	A (20.8) B 7.8	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から大きく外反して開き、口唇部を直立気味につまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、バミス、 雲母 褐色 普通	口縁部一 部(10%)

調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
30	土師器 甕	A (12.7) B 5.5	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、バミス、雲母 棕色 普通	口縁部一側上半(10%)
31	土師器 甕	A (12.3) B 7.0	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から内彎気味に立ち上がり、口唇部を先くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内外面はナデ。	砂粒、バミス、雲母 棕色 普通	口縁部(40%)
32	土師器 甕	A (20.6) B 6.3	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、バミス、長石、雲母 棕色 普通	口縁部一側部(10%)
33	土師器 甕	A (16.4) B 7.3	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、長石 棕色 普通	口縁部一側上半部(10%)
34	土師器 甕	A (20.0) B 5.7	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、上位で強く屈曲する。	口縁部内外面はヨコナデ。	砂粒、バミス、雲母 棕色 普通	口縁部一側部(10%)
35	須恵器 坏	A (12.0) B 3.3 C 8.2	底部は平底。体部は強く内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水焼き、ヨコナデ。	砂粒、長石 褐色 良好	20%
36	土師器 甕	A (16.8) B 7.2	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部上半の内外面はナデ。	砂粒、バミス、長石、雲母 棕色 普通	口縁部一側上半(10%)
37	須恵器 坏	A (11.9) B 3.5 C (6.5)	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ削り後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水焼き、ヨコナデ。	砂粒、長石 灰色 普通	15%

第13号住居跡出土土器観察表 (S I-13)

調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83回 1	土師器 甕	A (21.5) B 19.8	底部は欠損。胴部は球状を呈すると思われる。口縁部は外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面、ヘラ削りの捷ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒、バミス、雲母 棕色 普通	口縁部一側部(25%)
2	須恵器 瓶	B 6.5	瓶の口縁部片と思われる。口縁部は強く外反して開き、肩部は上下に突出するほか、外面に皺をもつ。	口縁部内外面はヨコナデ。	砂粒、長石、良好	底部(20%) 破片有り
3	土師器 甕	A (20.0) B 10.5	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は肥厚で、外反して開き、口唇部を直立気味につまみ出す。	口縁部内外面ともにナデ。	砂粒、長石、石灰、雲母 棕色 普通	口縁部一側部(20%)
4	土師器 甕	A (13.2) B 3.3	坏体部の破片	体部外面はヨコナデ。内面は黒色処理を施した後ヘラミガキを施す。	砂粒、雲母 棕色 普通	体部外面に不明黒炭 口縁部(10%)
5	土師器 甕	A (13.2) B 3.3	坏体部の破片	体部外面はヨコナデ。内面は黒色処理を施した後ヘラミガキを施す。	砂粒、雲母 棕色 普通	体部外面に不明黒炭 口縁部(10%)
6	土師器 甕	A (13.2) B 3.3	坏体部の破片	体部外面はヨコナデ。内面は黒色処理を施した後ヘラミガキを施す。	砂粒、雲母 棕色 普通	体部外面に不明黒炭 口縁部(10%)
7	土師器 甕	A (13.2) B 3.3	坏体部の破片	体部外面はヨコナデ。内面は黒色処理を施した後ヘラミガキを施す。	砂粒、雲母 棕色 普通	体部外面に不明黒炭 口縁部(10%)
8	須恵器 甕	B 25.7 C (8.7)	口縁部欠損。底部は平底。胴部は長筒形を呈する。	胴部外面上半はヘラナデ、下半はヘラミガキ。内面はナデ。	砂粒、バミス、雲母、長石 棕色 普通	胴部一側部(25%)
9	須恵器 甕	B 2.0	観音鉢形をつまみのみ残存。	ナデ整形。	砂粒、バミス 灰色 良好	つまみ部(80%)

図 番 号	器 種	法量(m)	器形の特 徴	手法の特 徴	土・色・調・成 成	備 考
9	甕 須 忠 器	A (14.9)	大井部中央に鍔宝珠形つまみが付く。 大井部は丸味を帯び、なだらかに下降し、 口縁部は下方に屈曲する。	天井部周辺は回転ヘラ削り。 内面はヨコナデ。	砂粒、バミス、 長石、石英 灰白色 良好	60%
		B 3.9				
10	高 須 忠 器	A 16.4	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台 が付く。体部は外側して立ち上がり、口 縁部は外反する。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ削り。その後 に高台貼付。	砂粒、バミス 灰白色 良好	90%
		B 6.7				
		D 10.8				
		E 1.0				
11	高 須 忠 器	A (21.6)	底部は平底でやや突出気味。体部は幅広く 内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反す る。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ削り。高台が 貼付されていた痕跡が認めら れる。	砂粒、長石、バ ミス 灰白色 良好	
		B 2.5				
12	甕 須 忠 器	B 4.5	底部は平底でやや突出気味。高台は外下 方に開く。胴部は内彎気味に立ち上がる。	外面は回転ヘラ削りの後ヨコ ナデ。内面は回転ヨコナデ。 高台貼付。	砂粒、バミス 灰赤色 良好	胴下部 一部 (70%)
		D 12.2				
		E 1.2				

第14号住居跡出土土器観察表 (S I - 14)

図 番 号	器 種	法量(m)	器形の特 徴	手法の特 徴	土・色・調・成 成	備 考
第87回 1	高台付 土師器	A (15.5)	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台 が付く。体部はわずかに内彎気味に立ち 上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き整形。 底部及び体部下位は回転ヘラ 削り。	砂粒、バミス 灰褐色 普通	70%
		D (8.4)				
	土師器	E 1.2	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上 がり、口縁部は僅かに外反する。	底部は回転ヘラ削り。体部外面 はヨコナデ。内面は黒色処理 の後、珣文状のミガキを施す。	砂粒、石英 灰白色 普通	80%
		A 12.7				
		B 3.4				
3	高台付 土師器	A 15.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台 が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ削り。その後 に高台貼付。体部下位にヘラ ナデ痕が残る。	砂粒、バミス 灰白色 良好	95%
		B 6.0				
		D 7.4				
		E 0.5				
4	高台付 土師器	A (18.2)	底部は平底。体部は内彎しながら外上方 へ立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面は回転ヨコナデ。内 面は黒色処理の後、ヘラミガ キを施す。	砂粒、バミス、 雲母 棕色 良好	55% 体部外面 に不明黒 色
		B 12.4				
		C 7.5				
5	高台付 土師器	A 12.9	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上 がる。全体的に歪んだ器形である。	底部は切り離し後、二方向の 手持ちヘラ削り。体部下端も 手持ちヘラ削り。水挽き、ヨ コナデ。	砂粒、バミス 暗灰色 普通	75%
		B 4.8				
		C 5.7				
6	甕 須 忠 器 (土師質)		胴部の破片。 瓶の可能性もある。	胴部外面はタタキ目。内面は ヨコナデ。	砂粒、バミス 黒褐色 普通	
		第88回 7	A 2.4 B (5.5) D 0.7	底部は平底で、短く直立する高台が付く。 体部は内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。高台貼 付。	砂粒、バミス 灰白色 普通
8	甕 土師器	A 14.5 B 1.7	底部は丸底で平面を成す。体部は幅広く内 彎しながら立ち上がり、口縁部は水平方 向にのびる。高台彫刻か。	体部外面はヨコナデと一部ヘ ラ削り。内面は黒色処理 の後、ヘラミガキを施す。	砂粒 淡黄褐色 普通	外面に雲 母「中層」 20%
		F 1.7	天井部中央が大きく突出するつまみが 付く。天井部頂部は平頂である。	大井部外面はヨコナデで、そ の下部はヘラ削りを行って いる。内面はナデ。	砂粒、バミス、 長石 灰白色 良好	つまみ部 一部 (20%)
9	甕 須 忠 器		胴部の破片。	外面はヨコナデ。内面は剥離 し調整不明。	砂粒、バミス 棕色 普通	剥離不明 墨書あり
		10	C 7.2	平底の底部のみ残存。	底部は回転ヘラ削り。内面に 黒色処理した痕跡が残る。	砂粒、バミス 暗灰色 普通
11	甕 土師器	C 1.8	平底の底部の破片。	底部は回転ヘラ削り。内面に 黒色処理を施す。	砂粒、雲母 に濃い棕色 普通	20%
		12	C 1.5	平底の底部の破片。	底部は回転ヘラ削り。内面は 黒色処理とヘラミガキ を施す。	砂粒、雲母 に濃い棕色 普通
13	甕 土師器		胴部の破片。	胴部外面はタタキ目。内面は ヨコナデ。	砂粒、バミス 黒褐色 普通	
		13	A 2.4 B (5.5) D 0.7	底部は平底で、短く直立する高台が付く。 体部は内彎気味に立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。高台貼 付。	砂粒、バミス 灰白色 普通

図 番 号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 ・ 色 調 ・ 産 成	備 考
14	土 師 器	C 1.5	平底の底部の破片。	底部は回転糸切り痕を残す。内面は黒色処理を施す。	砂粒 灰褐色 普通	
15	土 師 器	B 1.7 C 7.1	平底の底部の破片。	底部は回転ヘラ切り。内面は黒色処理を施す。	砂粒、バミス 灰褐色 普通	底部 (20%)
16	土 師 器		平底の底部の破片。	底部に糸切り痕を残す。	砂粒、バミス にふい黄褐色 普通	
17	土 師 器		平底の底部の破片。	底部に糸切り痕を残す。	砂粒 にふい橙色 普通	
18	土 師 器		口縁部片。	内外面ともに回転コノナデ。ヘラ痕あり。	砂粒 灰色 普通	
19	土 師 器		平底の底部の破片。	底部に回転ヘラ切り痕を残す。	砂粒 暗褐色 普通	
20	土 師 器		平底の底部の破片。	底部に糸切り痕を残す。	砂粒 褐色 普通	
21	土 師 器		平底の底部の破片。	底部に回転糸切り痕を残す。	砂粒 褐色 普通	

第15号住居跡出土土器観察表 (S I-15)

図 番 号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 ・ 色 調 ・ 産 成	備 考
第93図 1	土 師 器		胴部片。僅かに張り出しを有する。	内外面ともにタタキ整形の後ナデ。	砂粒、バミス 暗灰色 良好	
2	土 師 器		胴部片。	外面はヘラナデ。内面はナデ。	砂粒、バミス 灰色 良好	胴部 (20%)
3	土 師 器	A (23.8) B 18.1	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は大きく外反して開く。	口縁部内外面、コノナデ。胴部外面、ナデのほか半位にヘラミガキの痕跡が認められる。内面ヘラ削り。	砂粒、雲母、長石 にふい橙色 普通	口縁部一 胴部 (25%)
第94図 4	土 師 器		胴部の破片。	外面に回転カキ目を施す。内面は兼いナデを行なっている。	砂粒、バミス 灰色 良好	胴部 (40%)
5	土 師 器		胴部の破片。内面は全体的に剝離している。	外面は平行タタキ目調整体。横位に帯描き文。内面はヘラ削り。	砂粒、バミス 褐色 不良	
6	土 師 器	B 4.7 D 9.2	底部は平底。胴部は内湾ぎみに立ち上がる。	胴部外面は縦位にヘラミガキ。内面はヘラ削りの後ナデ。底部外面に木炭痕。	砂粒、雲母、長石 にふい赤褐色 普通	胴下半一 底部 (30%)
7	土 師 器	A (16.1) B 5.5 F 3.6	つまみは扁平なボタン状を呈し、中央が僅かに突出する。天井部は全体的に歪む。口縁部は外下方に懸曲する。	天井部は回転ヘラ削り。内面は回転コノナデ。天井部外面に帯削り有り。	砂粒、バミス 灰色 良好	60% 線刻「井」 か
8	土 師 器		口縁部片。口縁部は大きく外反して開き、口唇部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともコノナデ。	砂粒、雲母、長石 褐色 普通	口縁部一 胴部 (15%)
9	土 師 器		胴部の破片。	外面は平行タタキ目。内面はヘラナデ。	砂粒、バミス 褐色	
10	土 師 器		口縁部の破片。	水浅き整形。	砂粒、バミス、 雲母 にふい橙色 普通	口縁部 (10%)
11	土 師 器	B 6.0	胴部の破片	胴部外面は上下2条の沈線の間に、帯描き波状文が周回する。	砂粒、バミス 灰白色 普通	胴部 (15%)

図 番 号	器 種	量 量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土・色調・焼成	備 考
12	須 恵 器	A (25.4) B 7.1	口縁部片。外反して圍く口縁部で、踵部は上下に突出する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。内外面とも自然釉がかかる。	砂粒、長石、石灰色 良好	口縁部 (20%)
13	須 恵 器	F 3.1	扁平なボタン状のつまみのみ残存。	外面はナデ。	砂粒、バミス 雲母 灰白色 普通	つまみ部 (100%)
14	土 師 器	A (20.0) B 9.9	口縁部は頸部から直立して立ち上がり、上位で外反して圍く。口唇部は上方につまみ出す。	口縁部内外面ともナデ。	砂粒、長石、石灰 にふい赤褐色 普通	口縁部一 部部 (20%)
15	須 恵 器	B 5.6	頸部片。口縁部は頸部より大きく外反して立ち上がる。	内外面ともヨコナデ。外面には部分的に自然釉がかかる。	砂粒、バミス 暗灰色 良好	頸部 (20%)
16	高 台 付 土 師 器	A (15.2) B 5.0 D (8.3) E (6.6)	底部は平底で「ハ」の字状に圍く高台が付く。体部は外側して外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	水挽き整形。高台貼付。底部は回転ヘラ切り後ヘラナデ調整。内外面に赤褐色の塗布物が部分的に残る。	砂粒、バミス 灰白色 良好	50%
17	須 恵 器	A (13.0) B 1.7	つまみは欠損する。天井部はなだらかに下降し、口縁部に至る。口唇部は外下方へよく曲がる。	大丹部は口縁部の内外面は、回転ヨコナデ。	砂粒 灰白色 良好	10%
18	土 師 器	A 14.5 B 4.9	底部は丸底。体部は大きく内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立して圍く。	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は、ヘラ削り。内面はナデ。黒色の塗布物有り。	砂粒、バミス 浅褐色 普通	60%
19	土 師 器	A (10.0) B 1.5 C (5.4)	扁平な丸底の破片。	底部内外面はナデ。外面は黒色処理後、不定方向にミガキを施す。内面は放射状に暗文を施す。	砂粒、バミス 明褐色 良好	底部 (30%)
20	土 師 器	B 3.0	底部は丸底。体部は細く内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は欠損する。	体部外面はヘラ削りの後ナデ。内面は磨直し。調整不明。	砂粒、バミス 褐色 良好	20%

第16号住居跡出土土器観察表 (S I - 16)

図 番 号	器 種	量 量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土 土・色調・焼成	備 考
1	高 台 付 土 師 器	A (15.4) B 6.3	底部は平底。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口唇部はやや外反気味に圍く。高台は外下方にのびるが端部は欠損する。	体部は回転ヨコナデ。内面は黒色処理する。底部は磨止糸切り後高台貼付。	砂粒、バミス、 雲母 (外)にふい褐色 (内)黒褐色 普通	40%
2	須 恵 器	A 14.0 B 5.9 C 8.6	底部は平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はやや外反気味に圍く。	底部は回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部トラスも手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母、長石 灰色 普通	80%
3	高 台 付 土 師 器	D 8.8 E 1.8	底部は平底。高台は「ハ」の字状に外上方へのびる。体部は欠損する。	底部は回転ヘラ切り後、高台貼付。内面は黒色処理する。	砂粒、バミス にふい褐色 普通	高台 (100%)
4	土 師 器	A 12.5 B 4.7	底部は丸底だが扁平を成す。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後ナデ。体部は内外面とも回転ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母 にふい褐色 普通	50%
5	高 台 付 土 師 器	B 4.0 D 9.0 E 1.8	底部は平底で「ハ」の字に圍く高台が付く。体部は外上方へ立ち上がるが、大平を欠損する。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。	砂粒、雲母、白 色炭粒 にふい褐色 普通	40%
6	土 師 器	B 2.0 C (7.0)	底部は平底。体部は外上方へ立ち上がるが、大平を欠損する。	底部は回転ヘラ切り後ナデ。体部下層ナデ。	砂粒、バミス、 雲母 にふい褐色 普通	20%
7	高 台 付 土 師 器	B 4.3 D 9.0 E 1.3	底部は平底で「ハ」の字状に圍く高台が付く。体部は外上方へ立ち上がるが、大平を欠損する。	体部は内外面とも回転ヨコナデ。底部は回転ヘラ削り後、高台貼付。	砂粒、バミス、 雲母 にふい褐色 普通	40%

第17号住居跡出土土器観察表 (S I - 17)

図版 番号	器種	法量(cm)	器形の特徵	手法の特徵	粘土・色澤・焼成	備考
第105図 1	高台付 土師器	A 14.2	底部は平底で外下方にのびる高台が随分付く。体部は僅かに内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、高台随分付く。体部は内外面とも回転ヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母、褐色粒子にぶい褐色	
		B 6.0				
		D 7.6				
		E 1.4				
2	土師器	A (14.0)	底部は平底。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反して開く。	底部の切り差し不明。体部内外面ともヨコナデ。体部外面に粗澁不明の痕跡を有す。器内面を黒色処理する。	砂粒、パミス、雲母、褐色粒子(外)浅黄褐色(内)黒色	40%
		B 4.5				
		C (8.0)				
3	土師器	B 2.0	平底の底部のみ残存。	底部は回転糸切り後無調整。器内面を黒色処理する。	砂粒、パミス、雲母(外)にぶい褐色(内)黒色	底部(100%)
		C 6.2				
4	高台付 土師器	A (13.4)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、高台随分付く。体部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母にぶい褐色	40%
		B 5.5				
		D (6.8)				
		E 1.3				
5	高台付 土師器	A (11.9)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	体部内外面は回転ヨコナデ。内面に黒色処理を施す。高台随分付く。	砂粒、雲母、良好	30%
		B 4.6				
		D (6.7)				
		E 1.0				
6	土師器	A (13.0)	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラ削り、内面はヨコナデ。	砂粒、パミス、雲母、褐色	25%
		B 3.9				
		C (7.4)				

第18号住居跡出土土器観察表 (S I - 18)

図版 番号	器種	法量(cm)	器形の特徵	手法の特徵	粘土・色澤・焼成	備考
第111 1	土師器	A (31.6)	底部は無底式である。胴部は深鉢形を呈する。口縁部外反しながら大きく開き、口部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は上半部はヘラ削りの後ナデ。下半部は横位のヘラ削り。内面はナデ。	砂粒、パミス、長石、明黄褐色	40%
		B 30.4				
		C 10.6				
2	台付鉢 須恵器	B 6.8	胴下半部の破片。底部は平底。体部は内彎きみに立ち上がる。	水挽き整形。底部は回転ヘラ削り。その後高台を貼付した痕跡が認められる。胴下半部も回転ヘラ削りの後ナデ。	砂粒、パミス、長石、灰色、良好	胴部下端(20%)
		C (18.2)				
第112図 3	土師器	A (29.8)	底部は無底式。胴部は深鉢形を呈する。口縁部は外反しながら大きく開き、口部を内取りする。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面上半部は丁寧な横位のヘラ削り。下半部は横位のヘラ削り。内面はナデ。胴部内面に輪轆痕を残す。	砂粒、パミス、長石、浅黄褐色、普通	40%
		B 34.2				
		C (10.6)				
4	土師器	A (13.4)	底部は平底。体部は外傾して外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反して開く。	底部は回転ヘラ切り後、無調整。体部下端は手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、灰色、良好	30%
		B 4.8				
		D (8.0)				
5	土師器	A 11.6	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、灰色、良好	50%
		B 3.6				
6	土師器	C 7.8	平底の底部のみ残存。	回転ヘラ切り後ナデ。底部外面に「X」状の線刻を施す。	砂粒、パミス、長石、灰色、良好	底部(100%)
		B 0.9				
7	土師器	C 6.9	平底の底部のみ残存。	回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒、パミス、灰色、良好	底部(100%)
		B 0.9				
第113図 8	土師器	A (18.6)	口縁部のみ残存。口縁部は頸部から外反しながら開く。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、パミス、褐色、良好	口縁部(5%未満)
		B 5.2				
9	土師器	B 2.5	平底の底部のみ残存。	底部外面に木葉痕を残す。	砂粒、パミス、浅黄褐色	底部(30%)
		C (9.9)				

図版 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
10	壺 土師器	A (17.5) B 4.9	口縁部のみ残存。口縁部は頸部から「く」の字状に開く。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	砂粒、バミス 浅黄褐色 普通	口縁部 (5%未満)
11	瓦		布目瓦の破片。	外面は剥離が著しく調整不明。内面に布目痕が残る。	砂粒、バミス、 長石 浅黄褐色 良好	
12	壺 土師器	B 10.2 C (6.1)	胴部下位の破片。胴部は外傾して外上方に立ち上がる。	胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面は剥離が著しく、調整不明。	砂粒、バミス 浅黄褐色 普通	10%
13	平瓦		布目瓦の破片。	外面はヘラナデ。内面に顕著な布目痕を残す。	砂粒、バミス 黒色 良好	

第19号住居跡出土土器観察表 (S I - 19)

図版 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第117図 1	坏 須恵器	A (14.2) B 3.9 C (8.4)	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部に至る。	底部は切り離した後、一方方向の手持ちヘラ削り。体部下端はナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母 黄灰色 普通	30%
2	坏 須恵器	B 2.6 C (8.4)	底部は平底。体部は外上方へ内傾気味に立ち上がる。	底部は回転切り後ヘラナデ。体部下端は回転ヘラナデ。	砂粒、雲母 灰白色 普通	10%未満
3	坏 須恵器	B 1.8 C 8.5	体部は欠損する。底部は平底である。	底部は回転ヘラ切り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、 雲母 普通	底部 (100%)
4	坏 須恵器	B 1.5 C 7.5	体部は欠損する。底部は平底である。	底部は回転ヘラ切り後ヘラナデ。	砂粒、バミス、 長石 灰白色 普通	底部 (100%)
5	坏 須恵器	A (14.2) B 3.6 C 8.2	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反して開く。	底部は回転ヘラ切り後、一方方向の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母 灰白色 普通	60%
6	坏 須恵器	A 13.8 B 3.8 C 7.8	底部は平底。体部は僅かに内傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 雲母 灰色 普通	60%
7	坏 須恵器	A 14.0 B 4.0 C 8.5	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに立ち上がり、口縁部に至る。	底部は回転ヘラ切り後、一方方向の手持ちヘラ削り。体部下端は手持ちヘラ削りの後ナデ。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、バミス、 石英、長石 灰色 普通	80%
8	壺 土師器	A (24.0) B 7.5	胴部の大半は欠損する。口縁部は頸部から外反しながら開き、口縁部を外上方へつまみ出す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部内面へ削り。	砂粒、バミス、 雲母 黄褐色 普通	口縁部一 部部 (40%)
9	壺 土師器	B 20.8	底部と胴部上位を欠損する。胴部は長胴形を呈すると思われる。	胴部外面下半は縦位のヘラミガキ。内面はナデ。胴部内外面に輪積み痕を残す。	砂粒、雲母、石 英、長石 にぶい棕色 普通	30%

第20号住居跡出土土器観察表 (S I - 20)

図版 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第120図 1	カマド 土師器	A 21.2 B 8.4	内傾して立ち上がる口縁部。	口縁部は内外面ヨコナデ。	砂粒、バミス、 石英、雲母 褐色 良好	不明
2	壺 土師器	A 20.6 B 12.4	胴部下半は欠損。口縁部は外反して開く。胴部は球状を呈すると思われる。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラ削りの後ナデ。内面はナデ。	砂粒、バミス 褐色 良好	口縁部一 部上半 (15%)

図取 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・産成	備考
3	甕 土師器	B 11.4 C (8.5)	胴部上半は欠損。底部は平底。胴部は内 壁気味に立ち上がる。	底部はヘラ削り。胴部外面は ヘラ削りの後ナデ。内面は全 体的に割削している。	砂粒、パミス、 雲母 良好	胴下半一 底部 (30%)
4	甕 土師器	A (15.0) B 11.0	胴部下半は欠損。口縁部は外反して開く。 胴部は球状を呈すると思われる。	口縁部は内外面ともにヨコナ デ。胴部外面はヘラ削りの後 ナデ。内面ナデ。	砂粒、パミス 橙色 良好	口縁部一 胴上半 (20%)
5	甕 土師器	A (18.0) B 15.0	口縁部と胴部下半は欠損。胴部は球状を 呈すると思われる。	底部は内外面ヨコナデ。胴部 外面はヘラ削りの後ナデ。内 面ナデ。	砂粒、パミス 橙色 不良	胴部一胴 上半 (20%)
6	須恵器		口縁部の破片。	口縁部内外面は回転ヨコナ デ。内面は自然釉がかかる。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	口縁部 (20%)

第1号土坑遺構出土土器観察表 (SK-01)

図取 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・産成	備考
第123図 1	甕 須恵器	B 5.9 C 13.6	底部が多孔式の破の破片。	胴部外面に平行タタキ目。そ の後下位をヘラ削り調整。内 面はヘラ削り後、ヘラナデ。	砂粒、パミス、 灰色 良好	5%未満
2	甕 須恵器	B 6.0 D (13.4) E (0.5)	底部は平底で、外下方に深く高台が付く。 胴部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部切り難し後、高白貼付。 胴部内外面はナデのほか、胴 部外面下位にヘラ削り痕。内 面下位に指漉痕が残る。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	5%未満

第8号土坑遺構出土土器観察表 (SK-08)

図取 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・産成	備考
第125図 1	甕 須恵器	A (13.4) B 3.0 F 2.0	天井部中央に扁平なボタン状のつまみが 付く。天井部は胴部が平坦で、なだらかに 下向き、口縁部は短く下方に屈曲する。	天井部胴部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内外面はヨコ ナデ。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	40%

第26号土坑遺構出土土器観察表 (SK-26)

図取 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・産成	備考
第130図 1	甕 須恵器	A (13.2) B 4.1 C 8.6	底部は平底。体部は外上方へまっすぐに 立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部は回転ヘラ削り後、一方 向の手持ちヘラ削り。体部下 端はナデ。水洗き、ヨコナデ。	砂粒、パミス、 長石 灰色 良好	30%

遺構外出土土器観察表

図取 番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・産成	備考
第136図 1	甕 土師器	A (19.2) B 6.5	口縁部から胴部上半にかけての破片。口 縁部は外反して開き、口唇部を丸くおさ める。	口縁部内外面はヨコナデ。	砂粒、パミス にふい橙色 普通	
2	甕 土師器	C (8.0)	平底の底部の破片。	底部は回転削り。	砂粒、パミス 浅黄棕色 良好	
3	高台付 土師器	B 2.5 C 7.0	底部は平底で、高台の付く痕跡が認めら れる。体部は外上方へ立ち上がるが、人 手を欠損する。	底部は回転ヘラ削り後、高台 を貼付したと思われる。体部 内面に黒色処理を施す。	砂粒、パミス にふい橙色 良好	
4	高台付 土師器		底部の破片。高台の付く痕跡が認められ る。	底部は回転ヘラ削り後、高台 を貼付したと思われる。内面 に黒色処理を施す。	砂粒、パミス、 雲母 浅黄棕色 普通	
5	甕 土師器	B 3.2 C 6.9	底部は平底で、焼成後、人為的に穿けた 円孔を有す。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部下端は内外面ともナデ。	砂粒、パミス 浅黄棕色 普通	底部 (20%)

図番 号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色裏・地色	備考
6	高台付 土師器 坏		底部の破片。高台の付く痕跡が認められる。	底部は回転ヘラ切り後、高台を貼付したと思われる。内面に黒色処理を施す。	砂粒、パミス にぶい棕色 普通	底部 (50%)
7	高台付 土師器 坏	B 2.5 D (9.0) E 1.2	底部から体部下端にかけての破片。底部は平底で、外下方に開く高台が付く。体部下端は丸味を帯びる。	底部は回転ヘラ切り後、高台貼付。体部内面に黒色処理を施す。	砂粒、パミス、 赤母 にぶい棕色	底部 (60%)
8	土師器 坏	C (7.4)	平底の底部のみ残存。	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。	砂粒、パミス、 赤母 にぶい棕色 良好	底部 (70%)
9	土師器 坏	C 7.0	平底の底部のみ残存。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。底部外側に「×」状の線刻を施す。	砂粒、パミス 白灰色 良好	底部 (95%)
10	高台付 土師器 坏		底部の破片。	底部は回転ヘラ切り後、高台貼付。内面に黒色処理を施す。	砂粒、赤母 にぶい棕色 良好	底部 (30%)
11	坏 須恵器	B 2.3 C (7.6)	底部の破片。	底部は回転ヘラ切り後、一方の手持ちヘラ削り。体部下端も手持ちヘラ削り。水挽き、ヨコナデ。	砂粒、パミス にぶい藍色 普通	底部 (10%)
12	高台付 須恵器 坏	B 2.8 D (8.2) F 1.0	底部は平底で、「フ」の字状に開く高台が付く。接地面は平担である。体部の大半は欠損する。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。高台貼付。	砂粒、パミス 灰色 良好	底部 (10%)
13	高台付 須恵器 坏	D (8.0) E 1.1	底部は平底で、直立する高台が付く。接地面は平担である。体部は欠損する。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。高台貼付。	砂粒、パミス 灰色 良好	底部 (40%)
14	高台付 須恵器 坏	B 3.2 D (6.6) E 1.4	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外上方へ立ち上がるが、大半は欠損する。	水挽き整形。 底部は切り離し後、高台貼付。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	底部 (45%)
15	須恵器 壺	F 3.1	つまみは扁平なボタン状を呈する。天井部頂部はやや平担である。	水挽き整形。 つまみはナデ。天井部外面は回転ヘラ削り。	砂粒、パミス 黄灰色 良好	つまみ (100%)
16	須恵器 壺	F 2.8	つまみは擬定冪形を呈し、天井部頂部はほぼ平担である。	水挽き整形。 つまみはヨコナデ。天井部頂部は回転ヘラ削り。	砂粒、パミス 灰色 普通	つまみ (95%)
17	須恵器 壺	F 3.4	扁平なボタン状のつまみのみ残存。	水挽き整形。 つまみ外面はナデ。	砂粒、パミス 灰白色 普通	つまみ (95%)
18	須恵器 壺	F 3.1	扁平なボタン状のつまみのみ残存。	水挽き整形。 つまみ外面はヨコナデ。	砂粒、パミス、 長石 灰色 普通	つまみ (80%)

第1号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第13図 1	鏃(柄)	15.0	10.8	1.1	0.7	鉄製品	
2	刀子(片)	3.0	4.9	1.1	0.6	鉄製品	
3	鏃(柄)	1.0	4.8	0.6	0.6	鉄製品	
4	鏃(先)	1.0	3.1	1.1	0.6	鉄製品	

第2号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第18図 1	鏃(柄)	16.0	10.1	0.6	0.5	鉄製品	
2	鏃(柄)	15.0	6.8	1.7	0.4	鉄製品	
3	不明	16.0	4.9	2.4	0.6	鉄製品	

第2号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第18図 4	砥石	15.0	3.2	1.3	1.3	泥岩	
5	石直片	410.0	12.1	9.0	5.3	砂岩	
6	礫片	108.0	7.3	7.3	1.5	けつ岩	

第3号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第24図 1	鏃	68.0	11.7	4.2	0.7	鉄製品	
2	鏃	30.0	9.0	3.4	0.6	鉄製品	
3	鏃(柄)	5.0	7.4	1.0	0.3	鉄製品	
4	刀子(柄)	1.0	3.1	1.0	0.3	鉄製品	
5	鏃(柄)	1.0	3.6	0.9	0.4	鉄製品	

第3号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第24図 6	不明	540.0	9.1	6.1	5.6	流紋岩	
7	不明	545.0	11.4	6.2	7.0	新野ホルンフェス	
8	不明	260.0	5.1	7.1	5.0	凝灰岩	
9	砥石	36.0	5.6	3.9	0.9	砂岩	

第4号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第30図 1	鏃	35.0	9.7	4.7	0.5	鉄製品	
2	鏃	120.0	7.6	4.2	1.2	鉄製品	
3	鏃	29.0	7.1	3.8	0.4	鉄製品	

第4号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第30図 4	砥石	15.0	3.7	3.0	1.3	泥岩	
5	不明	360.0	10.9	7.9	3.3	砂岩	
6	不明	285.0	9.0	5.3	3.9	砂岩	

第5号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第35図 1	砥石	380.0	10.8	10.2	7.4	滑岩	
2	不明	130.0	6.8	6.3	2.3	砂岩	
3	砥石	165.0	12.1	3.8	2.9	泥岩	

第7号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第42図 1	鎌(先)	10.0	6.9	2.2	0.4	鉄製品	

第7号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第42図 2	不明	215.0	8.2	6.7	3.0	砂岩	

第8号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第50図 1	鎌(柄)	1.5	4.6	1.0	0.4	鉄製品	

第8号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第50図 2	不明	410.0	9.2	7.7	5.3	輝石安山岩	
3	不明	304.0	9.3	5.7	4.4	輝石安山岩	
4	不明	835.0	11.6	9.9	10.1	滑岩	

第9号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第58図 1	鎌(柄)	14.0	9.8	1.5	0.4	鉄製品	
2	鎌(柄)	9.0	7.7	1.4	0.6	鉄製品	
3	鎌(先)	4.0	4.0	2.1	0.4	鉄製品	
4	鎌(柄)	1.5	4.0	1.0	0.5	鉄製品	

第9号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第58図 5	砥石	85.0	7.3	5.7	1.2	砂岩	
6	砥石	115.0	6.6	5.1	3.4	泥岩	
7	砥石	14.0	3.9	2.4	1.7	泥岩	

第9号住居跡出土 土製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			粘土・色調・焼成	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
第58図 8	管形土鉢	10.0	4.7	2.1	0.4	砂粒、パミス、 炭屑 に多い褐色	普通

第10号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第63図 4	砥石	190.0	7.8	4.2	4.2	泥岩	

第11号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第70図 1	鍔(柄)	6.0	6.5	0.9	0.8	鉄製品	
2	刀子(柄)	1.0	2.7	1.0	0.2	鉄製品	

第11号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第70図 3	砥石	38.0	7.1	3.4	1.6	泥岩	
4	砥石	45.0	5.8	4.4	2.0	泥岩	

第12号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第79図 1	鍔(柄)	7.0	6.9	0.9	0.8	鉄製品	
2	鍔(柄)	6.0	5.4	1.2	0.5	鉄製品	
3	鍔(柄)	3.0	4.5	0.9	0.5	鉄製品	
4	鍔(柄)	3.0	3.7	1.0	0.6	鉄製品	
5	鍔(柄)	3.5	3.8	0.9	0.4	鉄製品	

第12号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第79図 6	不明	820.0	13.5	6.9	6.8	大山岩	
7	不明	640.0	11.3	9.4	6.7	泥岩	
8	不明	245.0	10.2	8.1	4.7	泥岩	

第12号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)				出土位置
			(上部径)	(下部径)	(孔径)	(最大厚)	
9	紡錘車	36.0	2.7	4.8	0.9	1.4	

第14号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第89回 1	鍬 (柄)	37.0	14.9	1.5	0.9	鉄製品	
2	刀子 (柄)	11.0	8.6	2.0	0.4	鉄製品	
3	鍬 (柄)	1.5	5.4	0.7	0.5	鉄製品	
4	鍬 (柄)	3.0	4.3	1.1	0.3	鉄製品	

第14号住居跡出土 土製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)			土・色調・地味	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
第90回 5	管形土鉢	4.0	4.6	1.1	0.3	砂粒 褐色	普通
6	管形土鉢	2.5	4.2	1.0	0.2	砂粒 淡黄色	普通
7	管形土鉢	2.0	4.0	1.0	0.3	砂粒 或黄色	普通

第15号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第96回 1	鍬 (柄)	1.5	3.5	1.1	0.4	鉄製品	

第15号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第98回 2	不明	135.0	9.7	9.3	1.8	粘板岩	
3	砥石	62.0	7.0	3.6	1.8	泥岩	

第16号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量 (g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第100回 1	不明	2.0	16.9	14.1	5.7	砂岩	
2	不明	220.0	14.5	10.2	1.7	けつ岩	
3	礫片	105.0	11.8	5.2	1.5	けつ岩	
4	礫片	125.0	10.6	6.7	1.4	けつ岩	
第101回 5	礫片	1,800.0	15.7	14.4	5.2	けつ岩	
6	不明	2,500.0	22.4	10.9	7.7	集塊岩	

第17号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第106図 1	鍬(柄)	6.0	5.3	1.4	0.5	鉄製品	
2	鍬(柄)	2.0	4.5	0.6	0.5	鉄製品	
3	鍬(柄)	4.0	5.4	1.1	0.7	鉄製品	
4	鍬(柄)	2.0	4.1	0.8	0.4	鉄製品	

第17号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第106図 5	砥片	570.0	14.7	8.9	3.1	けつ岩	
6	礫片	130.0	11.7	7.1	2.1	けつ岩	

第18号住居跡出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第114図 1	鍬(柄)	5.0	4.9	0.9	0.7	鉄製品	
2	鍬(柄)	2.0	3.1	0.8	0.4	鉄製品	
3	鍬(先)	1.5	2.5	1.8	0.7	鉄製品	

第18号住居跡出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第114図 4	不明	760.0	15.0	12.0	3.5	滑岩	

B区 遺跡外出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第123図 3	鍬(柄)	1.5	2.0	1.1	0.5	鉄製品	SK-01上層
第137図 1	刀子	50.0	17.0	2.8	0.7	鉄製品	No.16
2	鍬(先)	65.0	7.2	7.3	0.7	鉄製品	
3	鍬(柄)	15.0	8.0	1.2	0.5	鉄製品	
4	釘	5.0	7.6	1.0	0.5	鉄製品	
5	不明	1.2	2.0	0.5	0.3	鉄製品	
6	鍬(柄)	4.0	4.8	0.9	0.5	鉄製品	
7	刀子(柄)	1.5	2.8	1.1	0.4	鉄製品	
8	鍬(柄)	1.0	3.2	1.1	0.6	鉄製品	
9	鍬(柄)	2.0	2.7	1.1	0.7	鉄製品	
10	鍬(柄)	6.0	5.9	1.1	0.8	鉄製品	
11	鍬	20.0	3.7	2.7	0.5	鉄製品	
12	鍬(柄)	4.0	4.3	0.9	0.7	鉄製品	
13	鍬	18.0	4.7	2.8	0.7	鉄製品	

B区 遺跡外出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第137回 14	砥石	136.0	8.0	3.9	2.7	泥岩	
	砥石	41.0	4.8	3.6	2.1	泥岩	

B・C区 出土 石器

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第138回	1 石 刀	3.0	5.2	1.2	0.7	黒曜石	
	2 石 鏃	0.5	2.7	1.3	0.4	チャート	
	3 石 鏃	1.0	2.7	1.4	0.3	チャート	
	4 石	2.0	2.8	1.6	0.4	チャート	
	5 石 斧片	80.0	7.2	5.5	1.2	硬砂岩	
	6 石	3.0	3.3	1.9	0.5	チャート	
	7 剥片	1.5	2.2	2.1	0.4	黒曜石	
	8 剥片	1.5	2.3	1.6	0.4	チャート	
	9 剥片	4.0	2.4	2.3	0.6	黒曜石	
	10 剥片	1.5	2.9	1.4	0.6	黒曜石	
	11 剥片	25.0	4.8	3.5	1.6	チャート	
	12 剥片	7.0	3.8	2.4	1.0	チャート	
	13 剥片	17.0	2.9	3.1	2.1	チャート	

C区 遺跡外出土 鉄製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第139回	1 刀子(先)	1.5	5.6	0.9	0.3	鉄製品	
	2 鍔(柄)	3.0	3.2	0.9	0.8	鉄製品	
	3 刀子(柄)	6.0	4.7	2.4	0.3	鉄製品	
	4 鍔(柄)	2.0	3.2	0.7	0.6	鉄製品	
	5 鍔(柄)	1.5	2.8	1.1	0.8	鉄製品	
	6 鍔	5.0	2.8	1.5	0.8	鉄製品	

C区 遺跡外出土 石製品

図版番号	器種	重量(g)	法 量 (cm)			質	出土位置
			最大長	最大幅	最大厚		
第139回	7 砥石	22.0	4.5	2.7	1.3	泥岩	
	8 砥石	26.0	6.8	2.5	1.5	泥岩	
	9 砥石	15.0	4.2	2.3	1.0	泥岩	

第6章 まとめにかえて

第1節 遺構について

古稲荷遺跡の今回の発掘調査で得た成果のうち検出遺構の種類と個数は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟、溝遺構2条、欄列遺構1カ所、土坑遺構26基、不明ピット群3カ所であった。これら検出した遺構のうち年代比定ができるものは竪穴住居跡のみである。住居跡以外の遺構については住居跡遺構との切り合い状態が確認された遺構で新旧関係が判断できたのは以下のとおりである。

- (旧) S B-01 → (新) S A-01
(旧) S I-08, 13, 14 → (新) S D-01
(旧) S K-24 → (新) S D-02

竪穴住居跡の年代については、出土している遺物の編年から以下の年代に比定し区分しておく。

I期	— S I-04, (10), 15, 19	8世紀第3四半期
II期 a	— S I-07	8世紀第4四半期
II期 b	— S I-01, 13	8世紀第4四半期 9世紀第1四半期
III期	— S I-08, 09, 11, 12	9世紀第1四半期
IV期	— S I-03, 06, 18	9世紀第2四半期
V期 a	— S I-02	10世紀第1四半期
V期 b	— S I-05, 14, 16, 17, 20	10世紀第2四半期以降

第2節 竪穴住居跡の掘り方面について

検出された住居跡20軒のうち完掘できたのは12軒である。完掘はできなかったがカマドの存在および規模、形状を推定できたものが3軒で完掘住居跡と含めると15軒であった。これらの住居跡は方形または長方形を呈しており、主軸方向はN-1°-WからS N-84°-Wまでの軸方向をもった住居跡でおよそ3°~18°の範囲の軸方向のものが中心である (S I-01, 02, 03, 04, 07, 08, 09, 10, 11, 12, 13, 15, 18)。したがって、住居跡の軸方向としてはほぼ同軸方向とみてさしつかえない。また、カマドの位置としては15軒のうち11軒 (S I-01, 02, 03, 07, 08, 09, 10, 11, 12, 13) が北壁の中央または、中央よりやや東側に位置している住居跡が多く、東壁にカマドを有する

ものがS I-05, 15, 17の3軒であり、S I-16はカマドを有していなかった。なお、S I-09は北壁（1号カマド）と東壁（コーナー）（2号カマド）にカマドを有していたが、東壁コーナーの2号カマドは袖部をはじめ構架材の粘土などは検出されず、内部には焼土の堆積のみが確認されていることから、1号カマド以前に使用されていたカマドで廃棄されたものと思われる。

貯蔵穴を有している住居跡は、S I-02, 05, 17の3軒で、このうち05, 17の2軒はいずれも東壁にカマドを有している住居跡である。

出入口の遺構と思われる部分が、S I-01（第6図）、02（第14図）、03（第19図）、09（第52図）、15（第90図）の住居跡から確認された。S I-01, 02, 09, 15は小ピットが出入口の施設遺構と推定でき、S I-03は南壁（西側）に「」部があり、わずかに有段状を呈していた。

検出住居跡のうち9軒（S I-07, 08, 09, 10, 11, 12, 15, 17, 18）について貼り床を除去しその掘り方面の形状を確認した。その結果、S I-07（第43図）は、堅穴内の東側と西側の部分のみが中央部より深く掘削されており、とくに東側の北東コーナー部と南東コーナー部がとくに深く削り込まれている状態であった。S I-08（第51図）は、堅穴の南東コーナー部かS中央部にわたって深く掘削されており、西壁側、北壁側のみがテラス状に平坦で掘削時に拡張したと思われるような状態を呈していた。S I-09（第59図）は、堅穴の北側、西側、東側の3ヵ所が深く掘削されており、とくに北西コーナー部と南東コーナー部が深く、中央部から南壁に向う部分のみが平坦な地山となっている。S I-10（第64図）は、堅穴の北東コーナー部、南東コーナー部、南西コーナー部、北西コーナー部の四コーナー部のみが深く中央部のみがほぼ平坦な地山となっている。S I-11（第71図）は、北西、南西、南東のコーナー部のみがローム層の地山を深く掘削している。S I-12（第80図）は、北西、北東の各コーナー部より南側に向って南壁下全域まで掘削しており、カマド付近の北側から中央部までが平坦である。S I-15（第97図）は、ほぼ全体的に平坦で、部分的に小門部がみられるだけである。S I-17（第107図）は、ほぼ東側半分ほどが掘削されているタイプである。S I-18（第115図）は、ほぼS I-12と同タイプである。

以上が、本遺跡で検出した堅穴住居跡の掘り方面であるがタイプの別には5タイプに大別できる。

Aタイプ（S I-09, 12, 18）

堅穴の3壁面方向のみに掘削痕が残り、中央部および一壁面が平坦になっているもの。

Bタイプ（S I-10, 11）

堅穴の各壁面に掘削痕を残し、中央部のみが平坦になっているもの。

Cタイプ（S I-08, 17）

堅穴の半分または一部分を集中的に掘り込んでいるもの。

Dタイプ（S I-07）

2方向の壁面側のみ掘削痕を残すもの。

Eタイプ (S I-11)

全体的に平坦で、局部的に小掘削痕のみを残すもの。

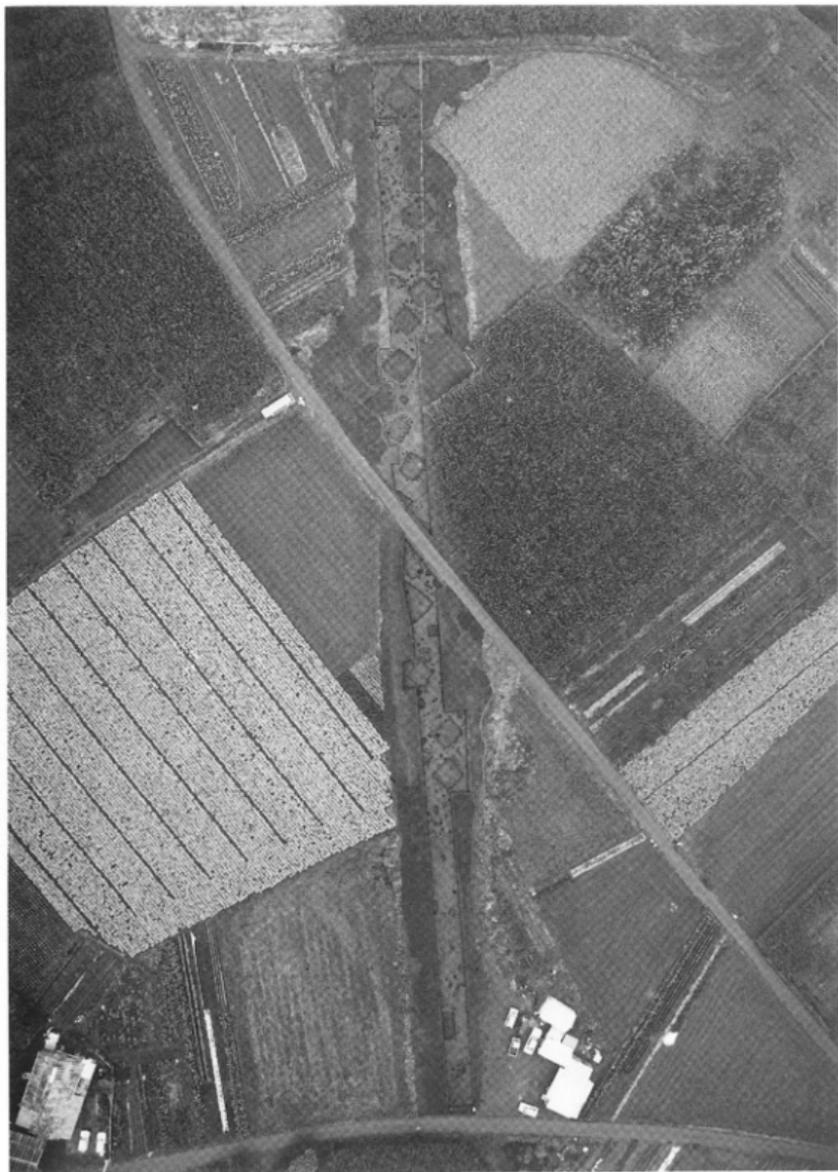
などである。したがって、Cタイプ以外のタイプは基本的に竪穴中央部のみが平坦で他の部分より高いことがわかり、竪穴住居を建築する場合に竪穴を掘る際の掘り方作業の手順を意味しているものであるのか、掘る工具によって差が生じるものなのかは今後の発掘事例とを検討する必要があると思われる。

終章 むすび

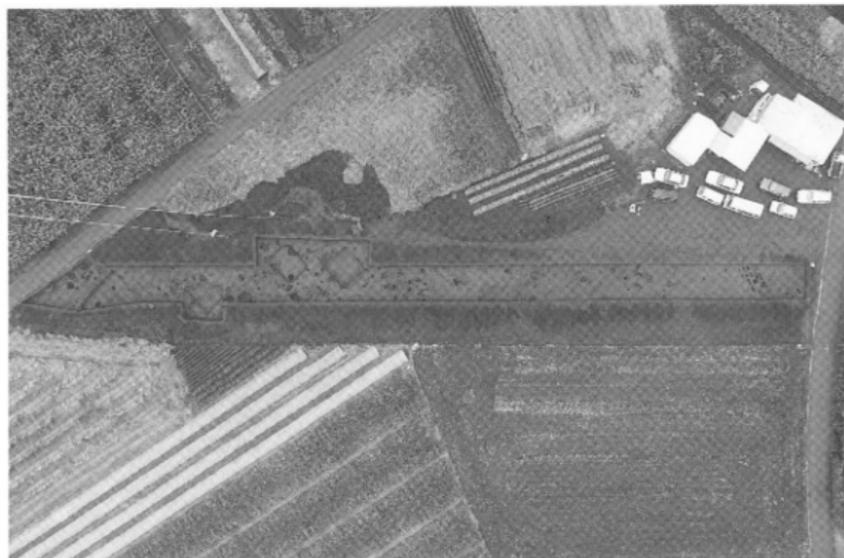
古稲荷遺跡の発掘調査をもって関城地区の霞ヶ浦用水事業工事地内の埋蔵文化財発掘調査をすべて終了したことになる。平成元年に12月から仲道遺跡、平成2年9月には井上城跡、そして今度の古稲荷遺跡の発掘調査を実施し、終えることができた。本遺跡の調査においても仲道遺跡、井上城遺跡と同様に調査が限定され、遺跡全体を把握するまでには至らなかったことも事実である。しかし、調査区域内からは8世紀から10世紀にかけての堅穴住居跡を中心とした遺構が検出され、この時期の集落遺跡であることがほぼ判明し、今回の調査区域外にも、同時期の集落跡の延長部分が埋もれていることが確実に推定できる。調査区域内での住居跡の配置状況からみて、本遺跡は、自然発生的な集落というよりも、政治的な意図によって造り出された計画集落の可能性が高いと思われる。もしこの推定が正しいとするならば、8世紀から10世紀にかけての懸田開発政策に伴う計画集落であるといえよう。したがって、船玉古墳に代表される古墳時代の豪族権力によって形成された集落と比較すると、本遺跡は、律令期に入って国家権力を背景に形成された集落として考えた場合、本地域においてきわめて貴重な遺跡であるといえる。今後、今回の調査区域に隣接した区域で発掘調査が実施されたとするならば、今回の成果により一層の明確さを加えることができ、古稲荷遺跡の性格をさらに明らかにすることができるであろう。

なお、今回の発掘調査および本報告書をまとめるにあたって、水資源開発公団をはじめ関係機関、関係各位の御指導、協力に対し、文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

写 真 图 版



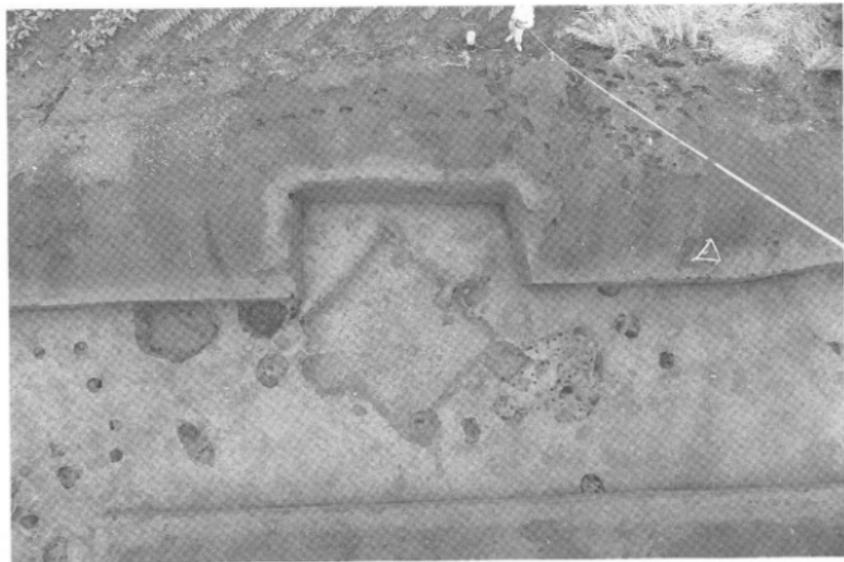
発掘調査区域全景



B 調査区 全景



S1-01 (左)・02 (右) 全景



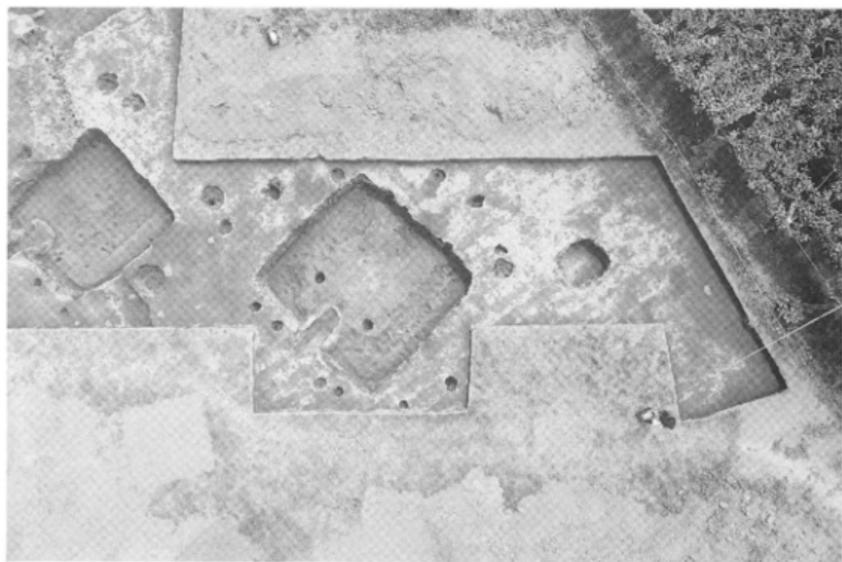
S I - 03 全 景



S I - 04 (左上)・05 (右下) 全 景



C 調査区全景



S1-07 (右)・08 (左) 全景



S1-08-09-10-13 全景



SB-(中央)・SA-01(左)・SD-02(右)



S I - 11 15・16・SA-01 全 景



上空よりみた古稲荷遺跡（南側一帯）

発掘前の古稲荷遺跡(1) (西から)



発掘前の古稲荷遺跡(2) (東から)



発掘前の古稲荷遺跡(3) (南から)





発掘前のB調査区(1) (南西から)



発掘前のB調査区(2) (北東から)



B調査区の試掘調査坑

B調査区の試掘調査坑



表土除去後のB調査区



C調査区の試掘調査坑





B調査区の遺構確認作業(1)



B調査区の遺構確認作業(2)



B調査区の遺構確認作業(3)



B調査区遺構確認後(1) (南から)



B調査区遺構確認後(2)



S X - 01 確認状況



C調査区（梨畑）抜採後の状況

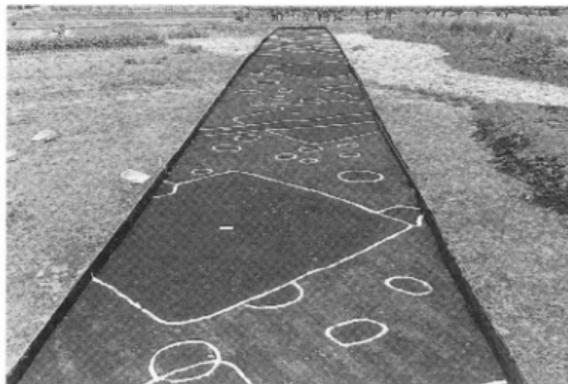


C調査区試掘作業



C調査区試掘後の状況

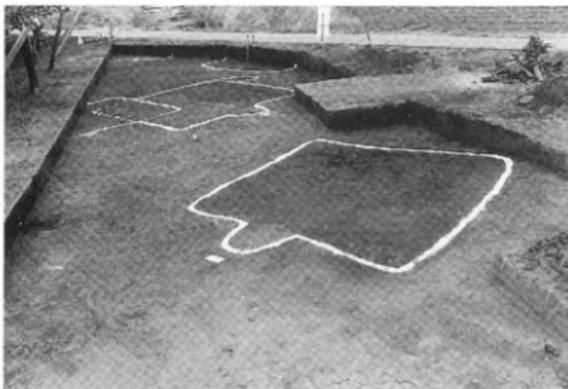
C調査区遺構確認後の状況(1)



C調査区遺構確認後の状況(2)



C調査区遺構確認後の状況(3)





S I - 01 完掘状況(1) (南から)



S I - 01 完掘状況(2) (西から)

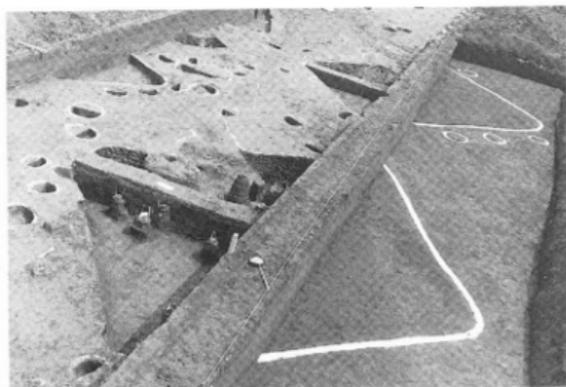


S I - 01 調査区域内の確認部分

S I - 01 掘り込み作業



S I - 01・
S I - 02 拡張部分 (右)



S I - 01 拡張後の掘り込み作業





S I - 01 遺物出土状況



S I - 01 カマド遺物出土状況



S I - 01 遺物出土状況(1)
(須恵器甕)



S I - 01 遺物出土状況(2)



S I - 01 遺物出土状況(3)



S I - 01 遺物出土状況



S I - 02 完掘状況(1) (南から)



S I - 02 完掘状況(2) (東から)



S I - 02 調査区域内確認状況

S 1 - 02 掘り込み作業風景



S 1 - 02 調査区域外拡張作業

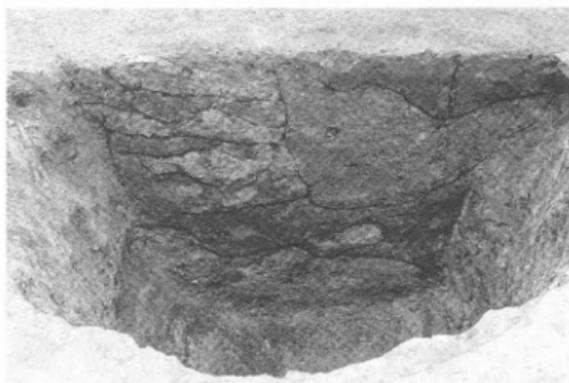


S 1 - 02 拡張後の作業風景

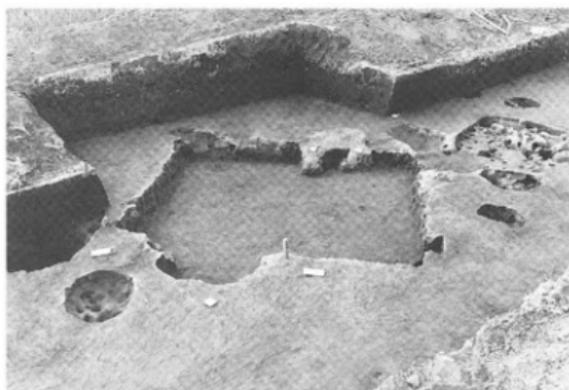




S I - 02 カマド (完掘状況)



S I - 02 貯蔵穴のセクション



S I - 03 完掘状況 (南から)

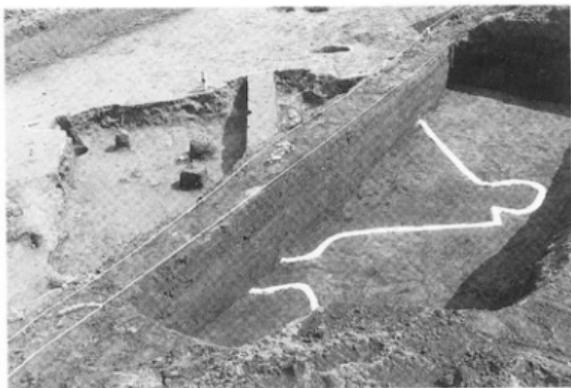
S I - 03 調査区域内の確認状況



S I - 03 掘り込み作業



S I - 03 拡張部分の確認状況





S I - 03 遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

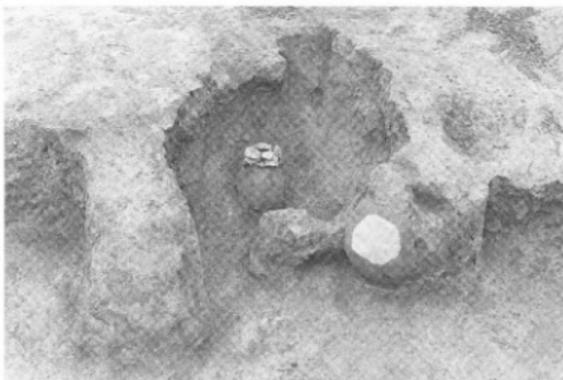


遺物出土状況(3)

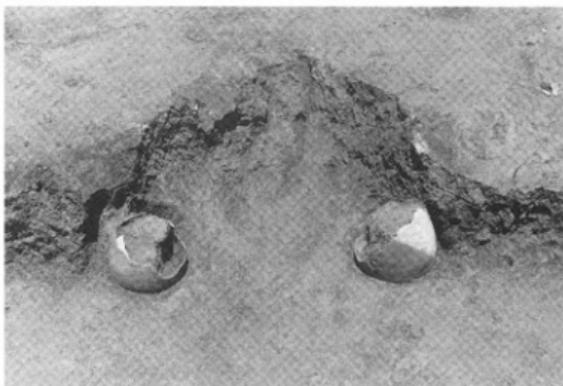
S I - 03
カマド内の遺物出土状況(1)

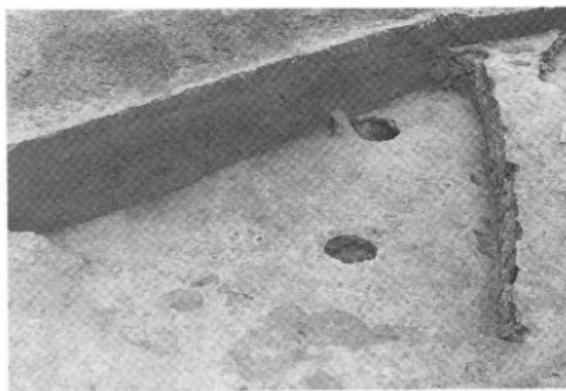


S I - 03
カマド内の遺物出土状況(2)



S I - 03
カマド内の遺物出土状況(3)





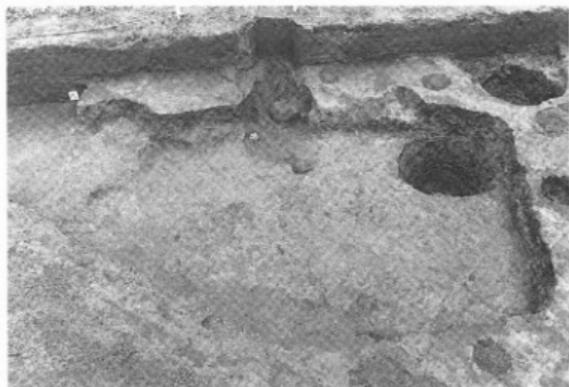
S I-04 完掘状況



S I-04 掘り込み作業



S I-04 遺物出土状況



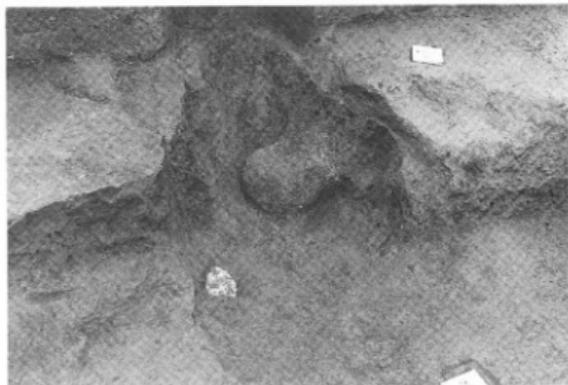
S I - 05 完掘状況



S I - 05 確認状況



S I - 05 遺物出土状況



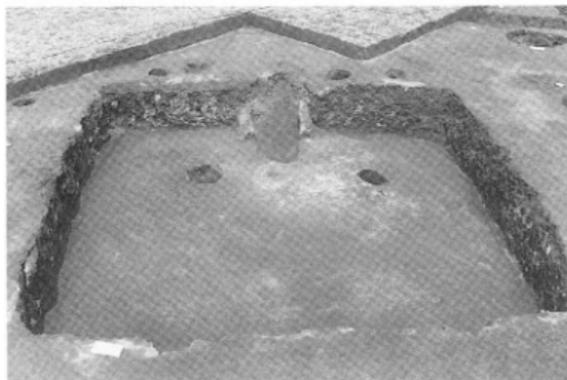
S I - 05 カマド完掘状況



S I - 05 貯蔵穴遺物出土状況(1)



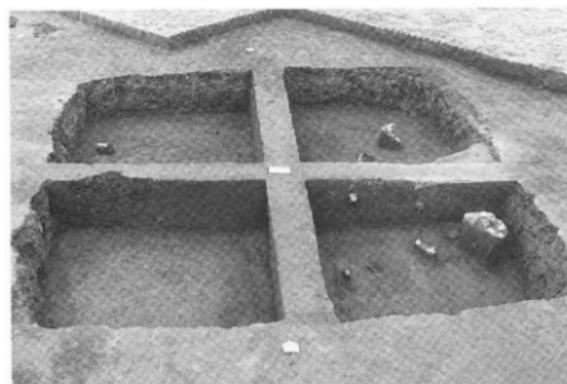
S I - 05 貯蔵穴遺物出土状況(2)



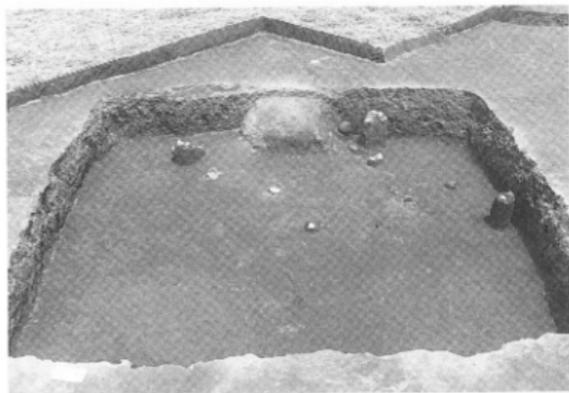
S 1-07 完掘状況 (南から)



S 1-07 南壁から検出したピット



S 1-07 セクションベルト設置状況



S1-07 遺物出土状況

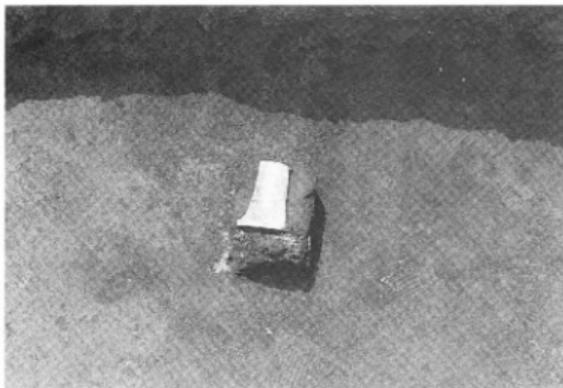


S1-07 カマド切開状況

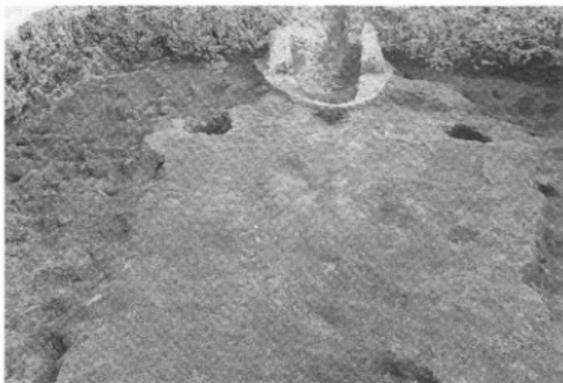


S1-07 遺物出土状況(1)

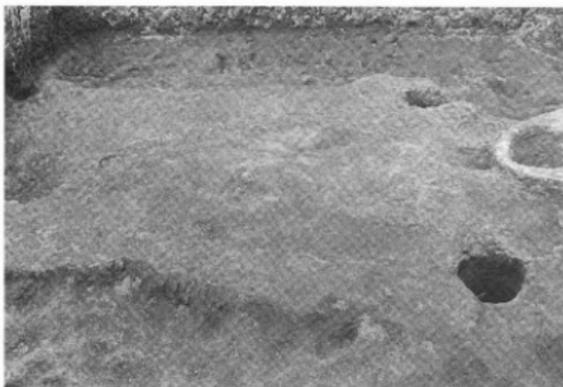
S I - 07 遺物出土状況(2)



S I - 07 掘り方面(1)

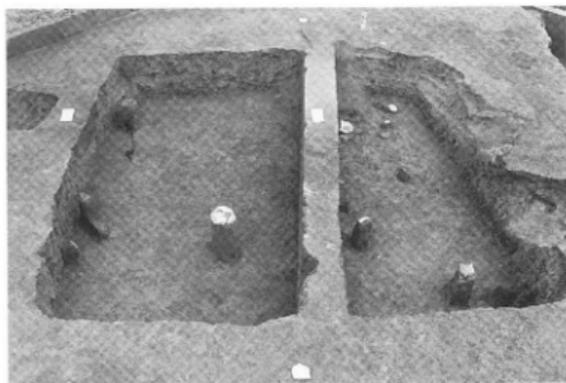


S I - 07 掘り方面(2)





S I-08 完掘状況 (南から)



S I-08 セクションベルト
設置状況

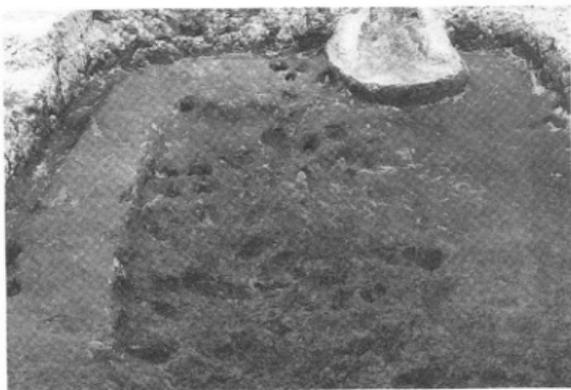


S I-08 遺物出土状況(1)

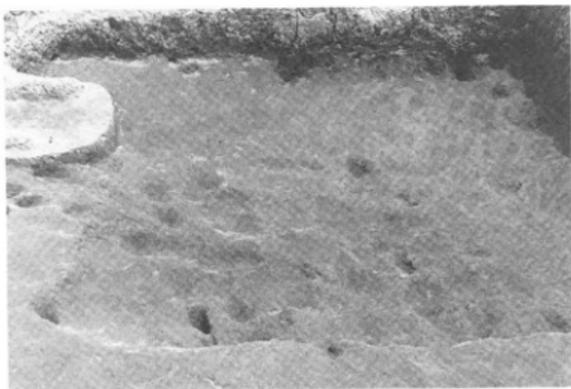
S I - 08 遺物出土状況(2)



S I - 08 掘り方面(1)



S I - 08 掘り方面(2)





S 1 - 09 完掘状況

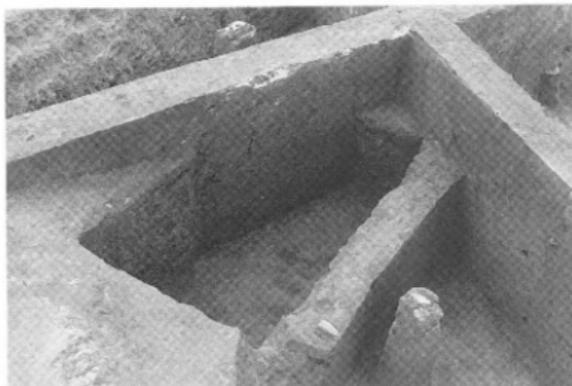


S 1 - 09 セクションベルト
設置状況



S 1 - 09の覆土内に掘り込まれた
SK - 20

S I - 09 内SK - 20の掘り込み状況

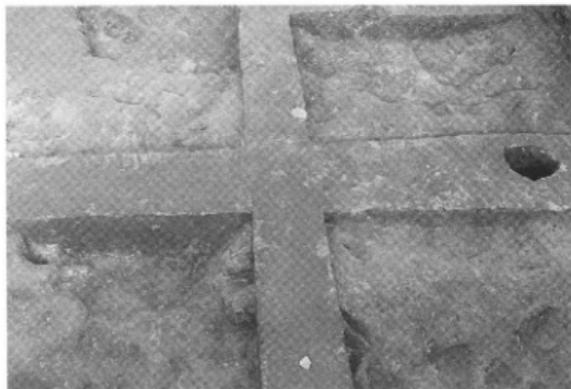


S I - 09 1号カマドと遺物出土状況



S I - 09 2号カマド





S I - 09 貼り床セクションと
掘り方面



S I - 09 掘り方面(1)



S I - 09 掘り方面(2)



S 1-09 1号カマド脇出土の甕



S 1-09 遺物出土状況



S I - 10 確認状況

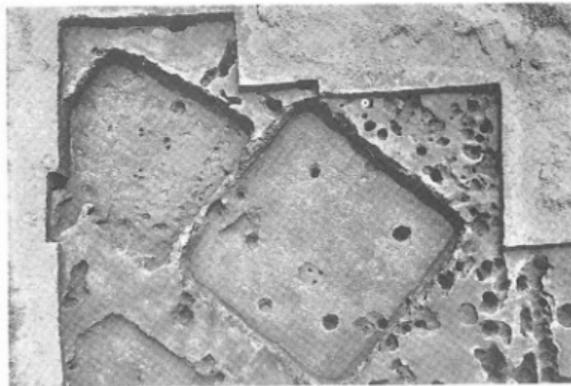


S I - 10 セクションベルト
設置状況



S I - 10 完掘状況

S I - 11 (左) と S I - 15 (右)
の完掘状況

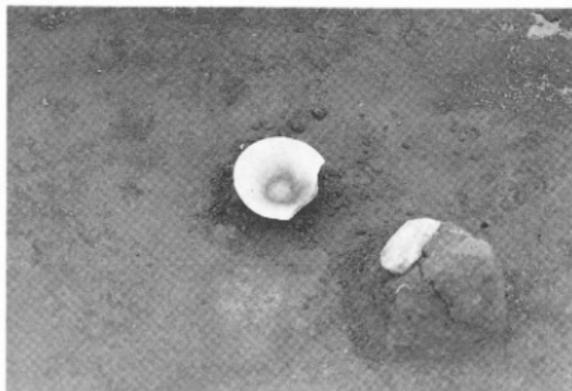


S I - 11 遺物出土状況(1)



S I - 11 遺物出土状況(2)





S I - 11 遺物出土状況(3)



S I - 11 カマド出土の壺



S I - 11 カマド内の遺物出土状況



S I - 11 カマド完掘状況



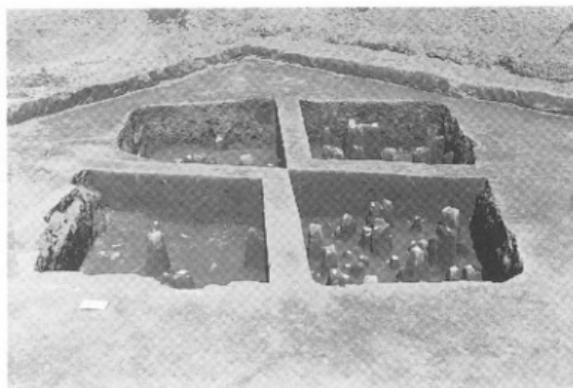
S I - 11 掘り方面(1)



S I - 11 掘り方面(2)



S I - 12 完掘状況



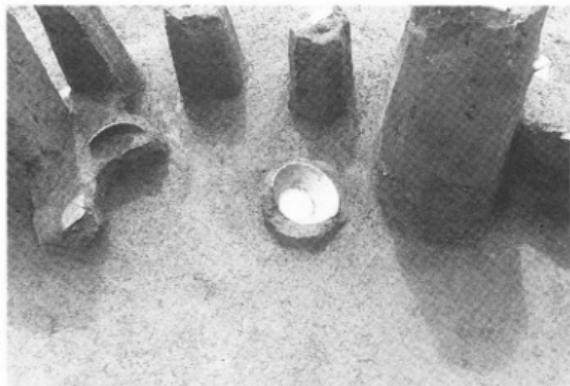
S I - 12 セクションベルト
設置状況



S I - 12 遺物出土状況

S1-12 カマド切開状況

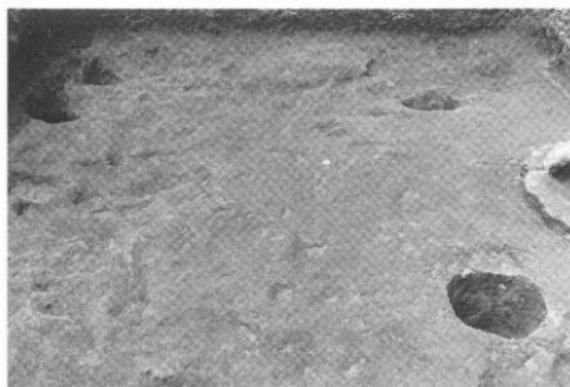
S1-12
カマド内の遺物出土状況(1)S1-12
カマド内の遺物出土状況(2)



S I - 12 遺物出土状況(1)



S I - 12 遺物出土状況(2)



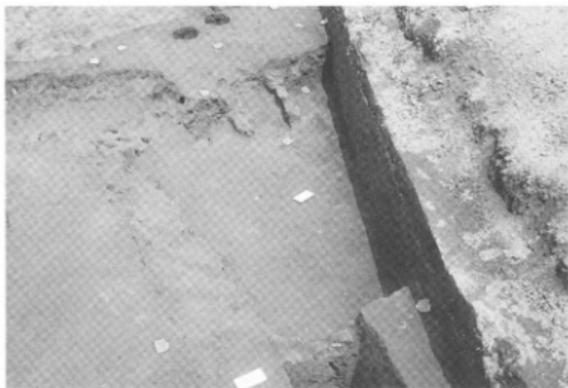
S I - 12 掘切方面



S I - 13 カマドの切開状況と竪穴の完掘状況



S I - 13 カマド内遺物出土状況



S I - 13 完掘状況



S1-14 完掘状況(1) (東から)



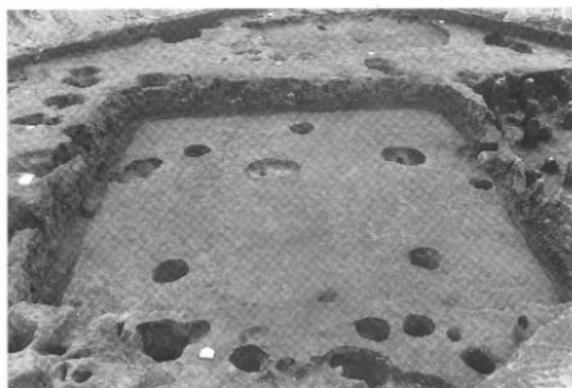
S1-14 完掘状況(2) (西から)



S1-14 遺物出土状況



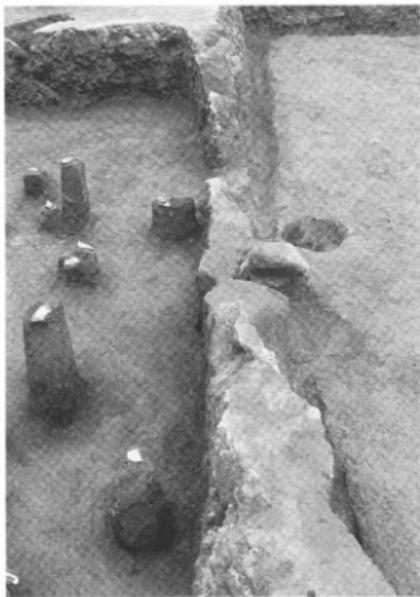
S I - 15 確認状況



S I - 15 完掘状況



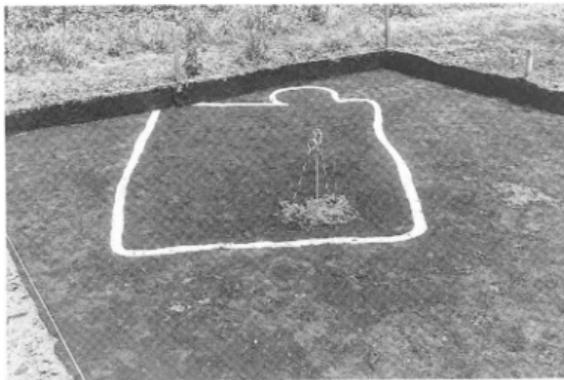
S I - 15 遺物出土状況



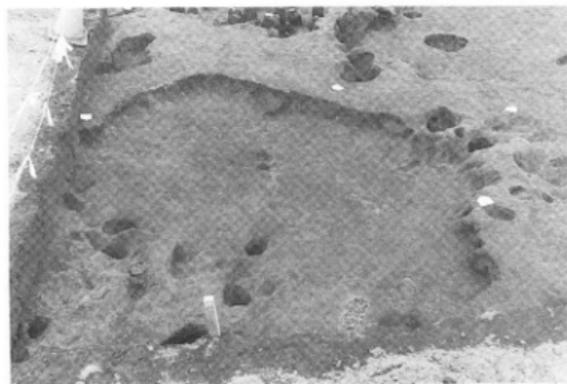
S I - 15 (右) と S I - 11 (左) の切り合い状況(1)



S I - 15 (右) と
S I - 11 (左) の切り合い状況(2)



S I - 16 確認状況



S I - 16 完掘状況



S I - 16 遺物出土状況(1)



S I - 16 遺物出土状況(2)

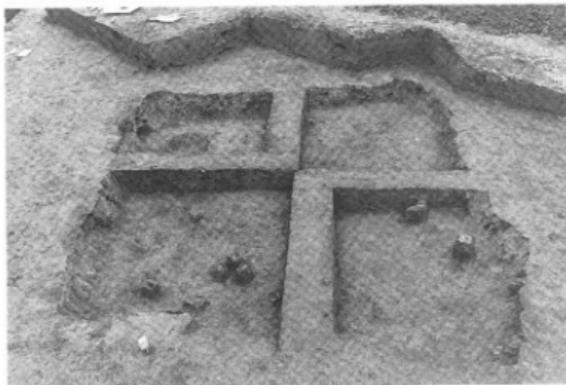


S I - 16 遺物出土状況(3)

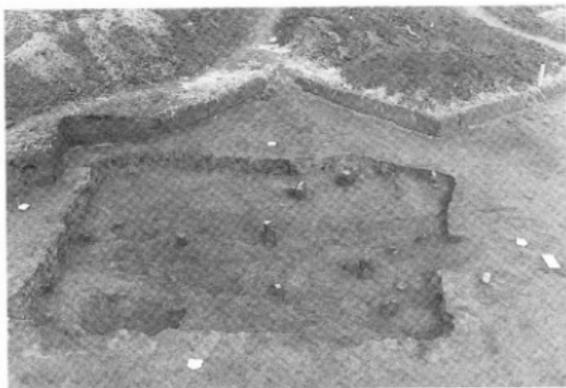


S I - 17 完掘状況

S I - 17
セクションベルト設置状況

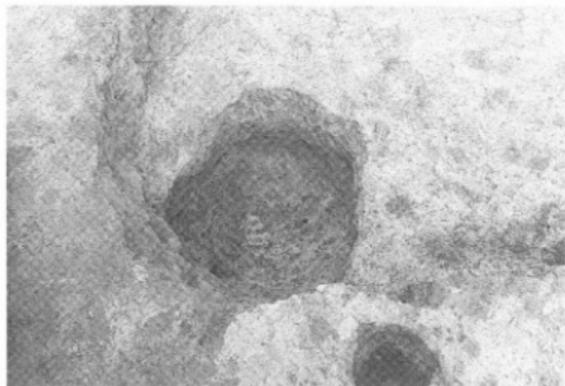


S I - 17 遺物出土状況

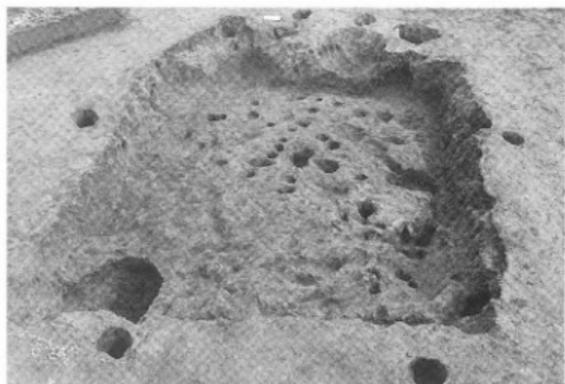


S I - 17 カマド切開状況

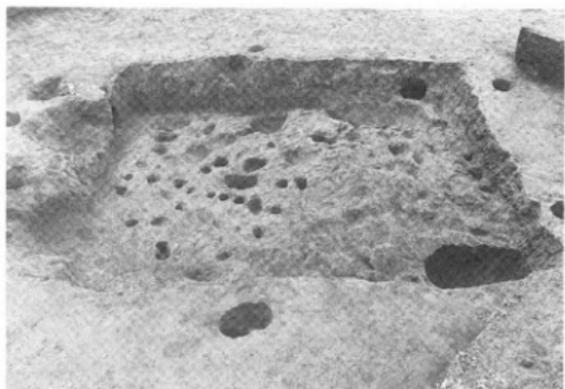




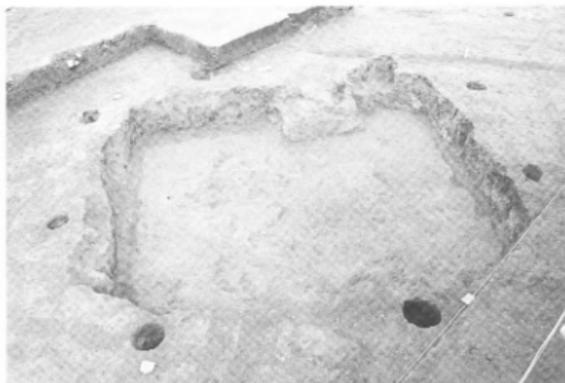
S I - 17 貯蔵穴



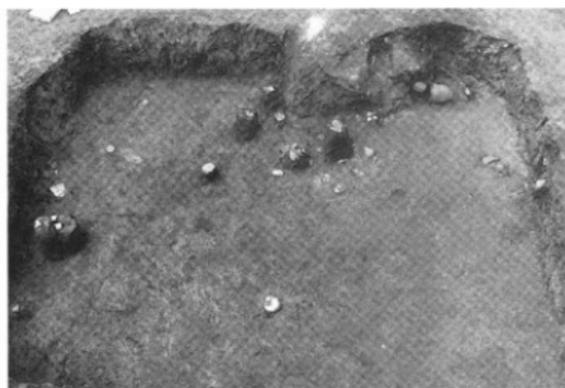
S I - 17 掘り方面(1)



S I - 17 掘り方面(2)



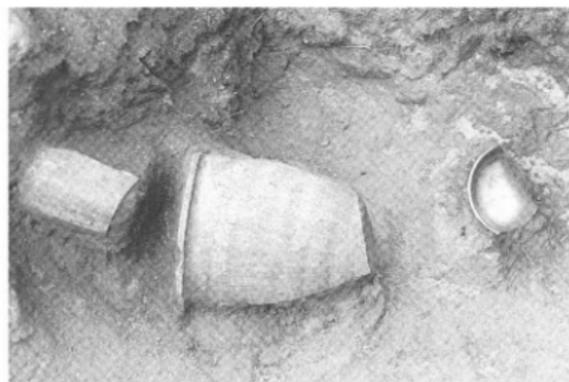
S I - 18 完掘状況

S I - 18
セクションベルト設置状況

S I - 18 遺物出土状況(1)



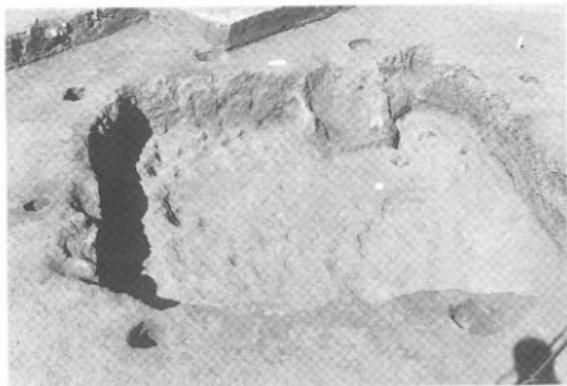
S I - 18 遺物出土状況(2)



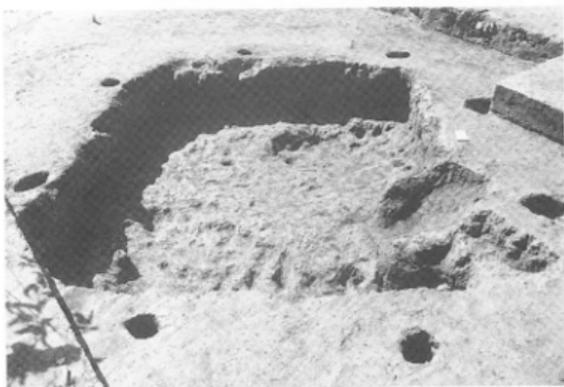
S I - 18 遺物出土状況(3)



S I - 18 遺物出土状況(4)



S I - 18 掘り方面(1)



S I - 18 掘り方面(2)



S I - 18 掘り方面(3)



S I-19 (右)
S K-28 (左) 完掘状況 (東から)

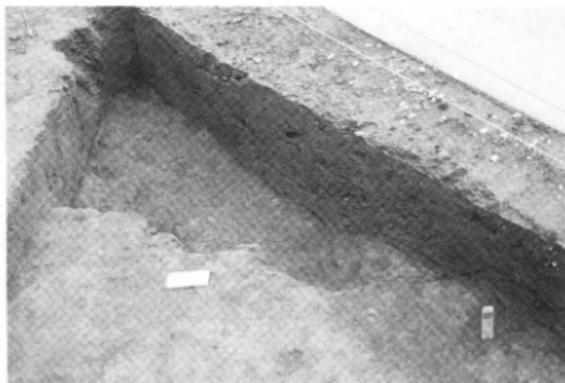


S I-19 完掘状況 (北から)

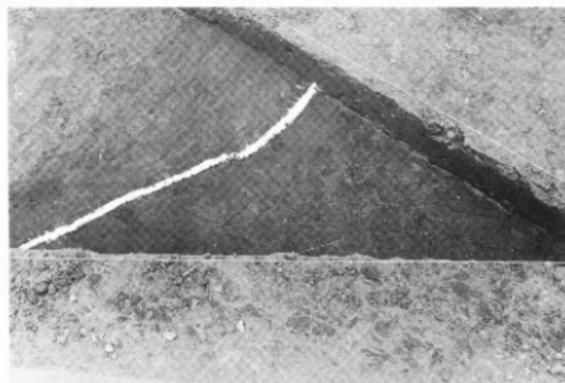


S I-19 遺物出土状況

S I - 20 完掘状況



S I - 20 確認状況



S B - 01





SB-01 (1) (南から)



SB-01 (2) (西から)



SD-01 周 辺

SD-01
S1-08 を切っている状況



SD-01 確認状況

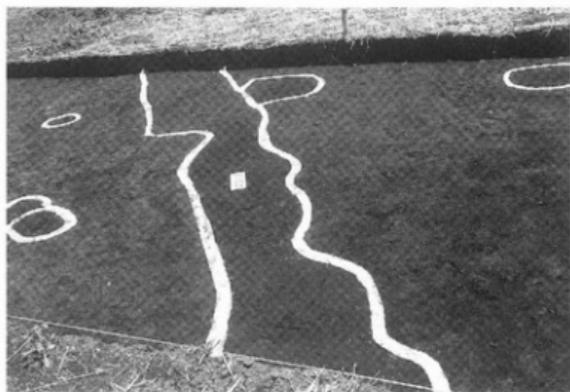


SD-01 試掘坑内





S D - 02 完掘状況



S D - 02 確認状況



S A - 01 (1) (北西から)



S A - 01 (2) (北から)



S A - 01 (3) (南東から)



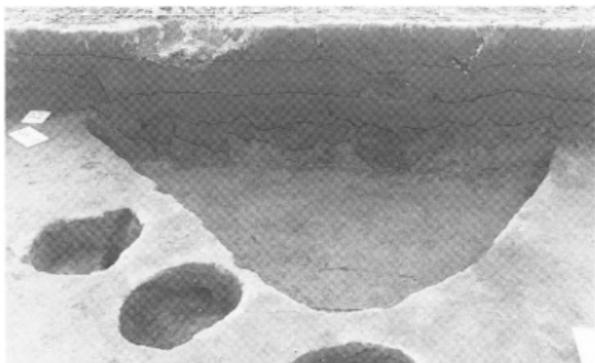
S K - 01



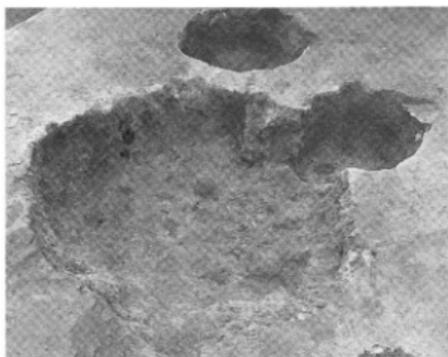
S K - 01 (左)
S K - 02 (右)



S K - 02



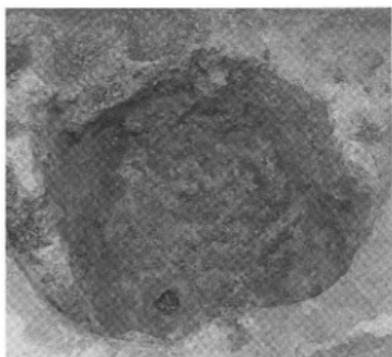
S K - 03



S K - 04



S K - 05



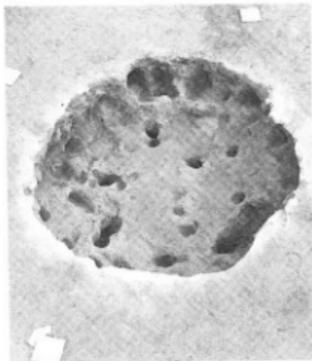
S K - 06



S K - 07



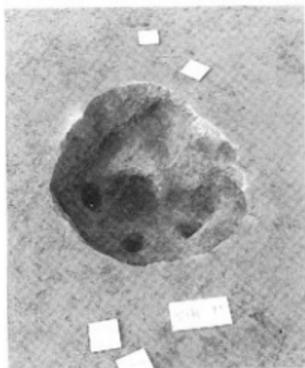
SK-08



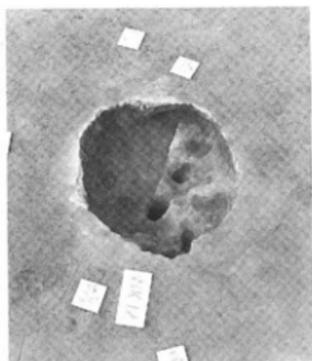
SK-09



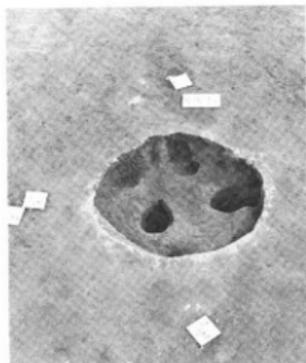
SK-10



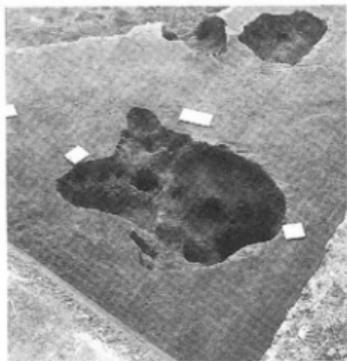
SK-11



SK-12



SK-13



SK-14



SK-15 (手前)



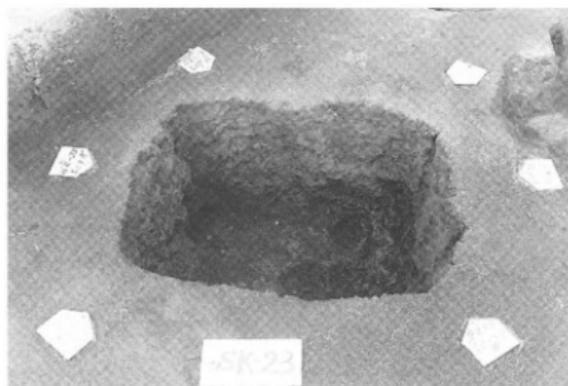
SK-16



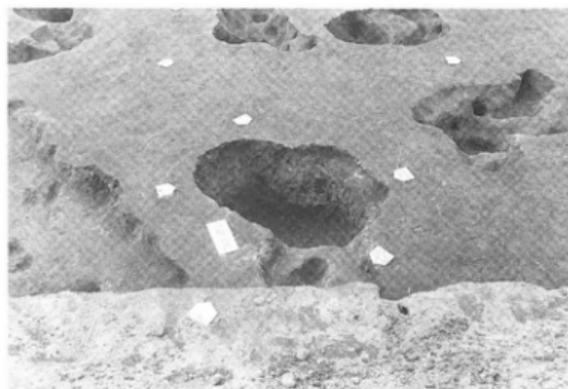
SK-20



SK-21



SK-23



SK-26



S X - 01



S X - 03



泉崎遺跡



切掛遺跡



南館内東遺跡

南館内西遺跡



専行寺古墳石室跡

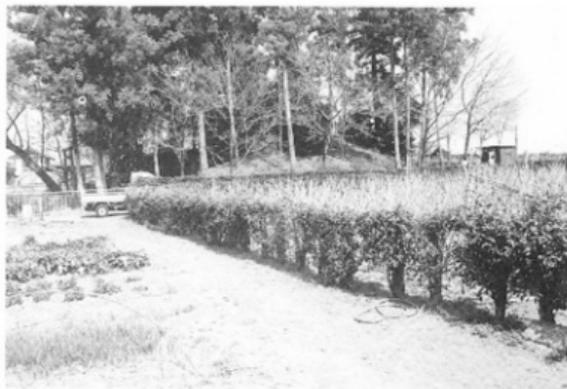


専行寺古墳石室跡 (右)





東郷遺跡



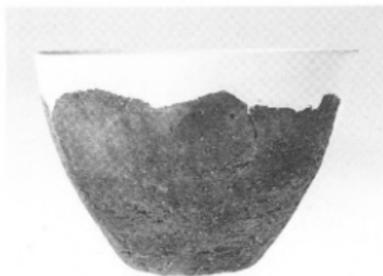
桜塚古墳



桜塚古墳



01 - 1



01 - 4



01 - 6



01 - 5



01 - 8



01 - 7



01 - 10



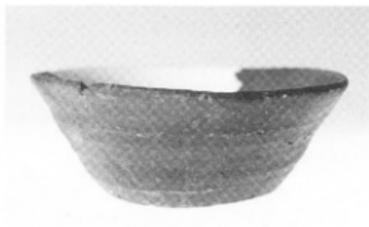
01 - 17



01 - 18



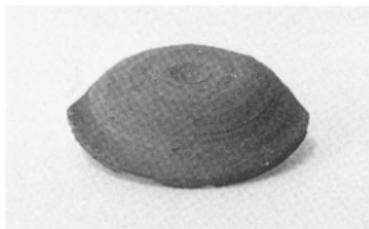
01 - 19



01 - 20



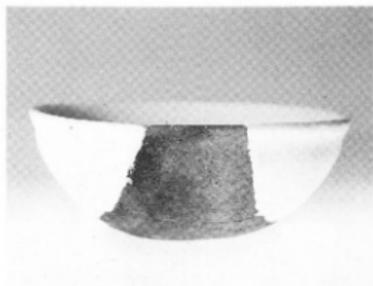
01 - 22



01 - 23



01 - 25



02-1



02-2



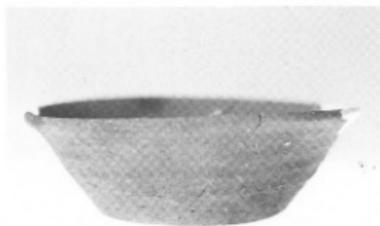
02-4



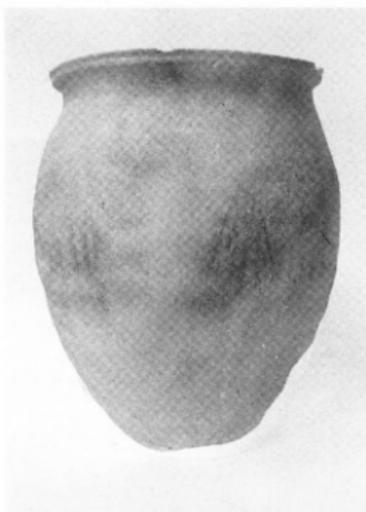
03-1



03-3



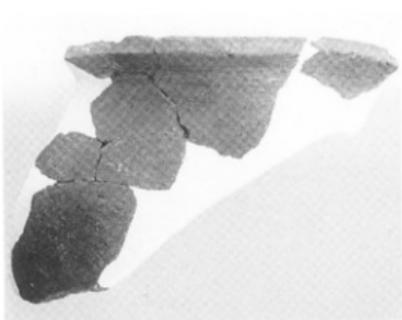
03-2



03-5



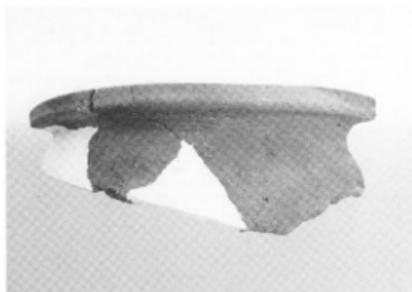
03-4



04-1



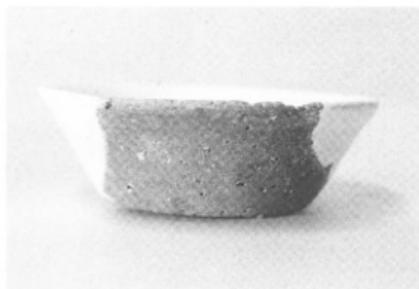
04-2



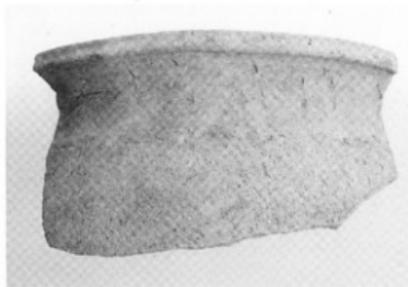
04-3



04-10



04-25



05-1



05-3



05-4



05-6



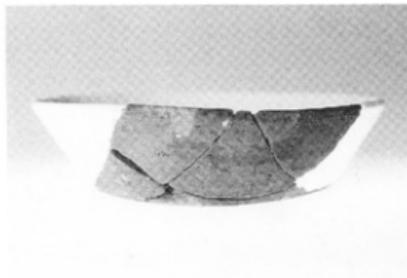
06-7



06-3



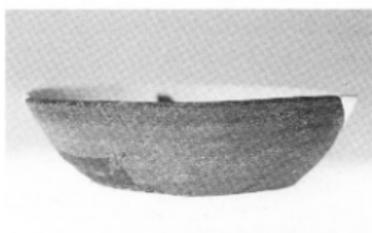
07-1



07-2



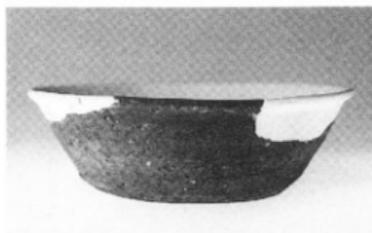
07-3



07-4



07-5



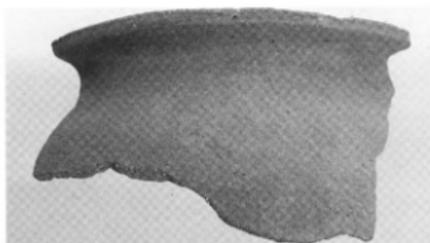
07-6



07-10



07-11



07-14



08-1



08-4



08-5



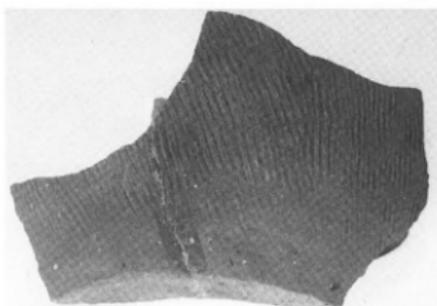
08-10



08-12



08-14



08-17



09-1



09-5



09-6



09-8



09-9



09-10



09-12



09-13



09-15



09-17



09-24



09-26



09-27



09-28



10-1



10-2



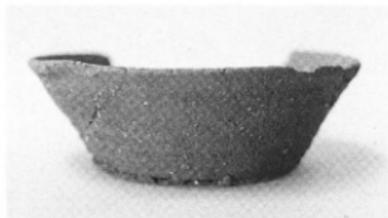
11-1



11-5



11-11



11-7



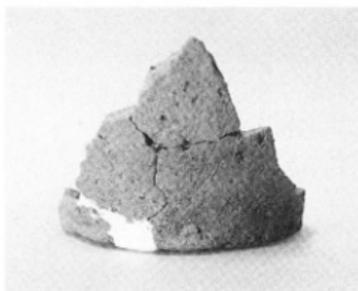
11-8



11-10



11-14



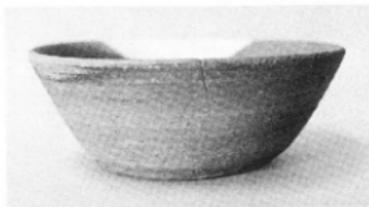
11-15



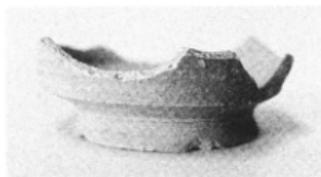
12-1



12-2



12-6



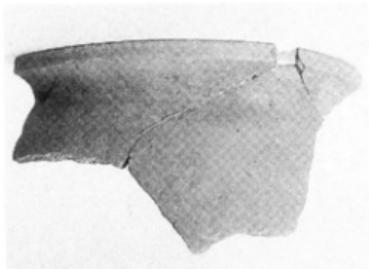
12-10



12-11



12-13



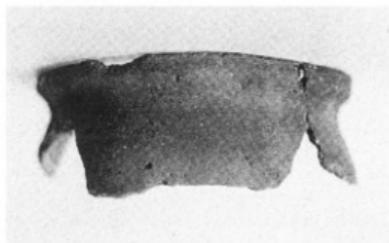
12-18



12-19



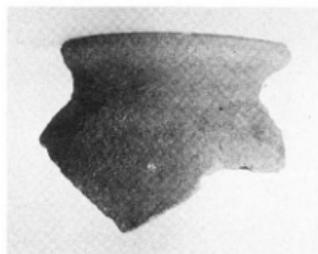
12-22



12-26



13-1



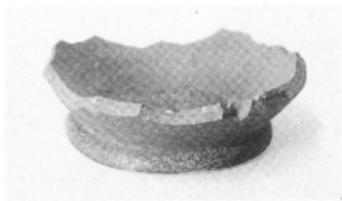
13-4



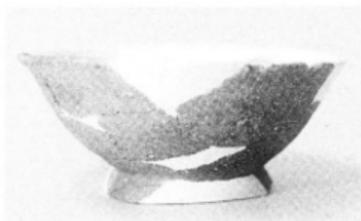
13-9



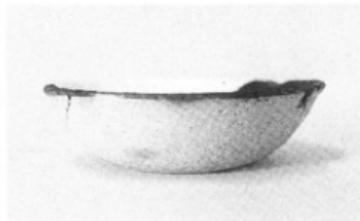
13-10



13-12



14-1



14-2



14-3



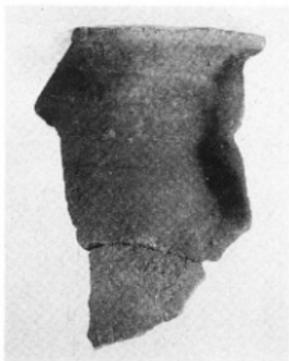
14-4



14-5



14-8



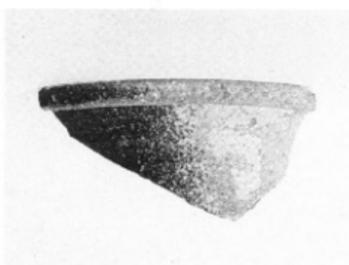
15-3



15-4



15-7



15-12



15-16



15-18

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第3集

古稲荷遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管埋設工事地内

平成5年9月10日 印刷

平成5年9月30日 発行

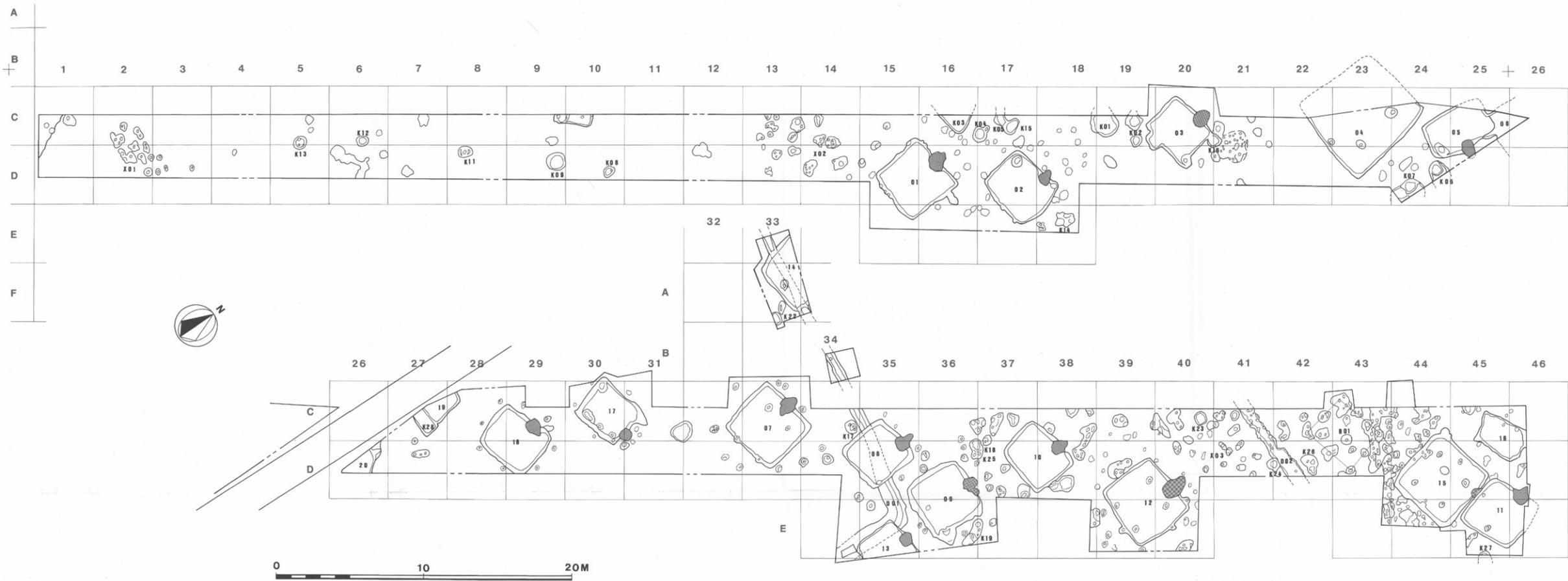
発行 関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会

関城町教育委員会

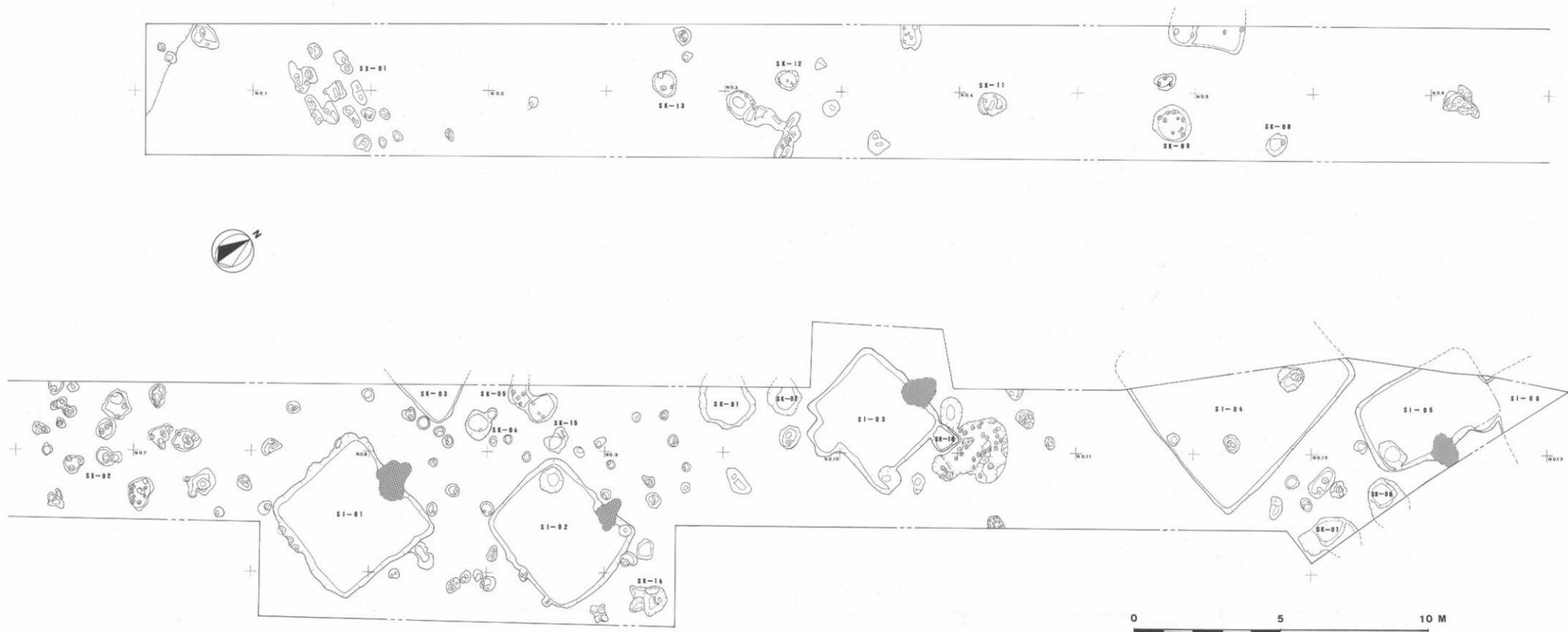
印刷 石崎印刷株式会社



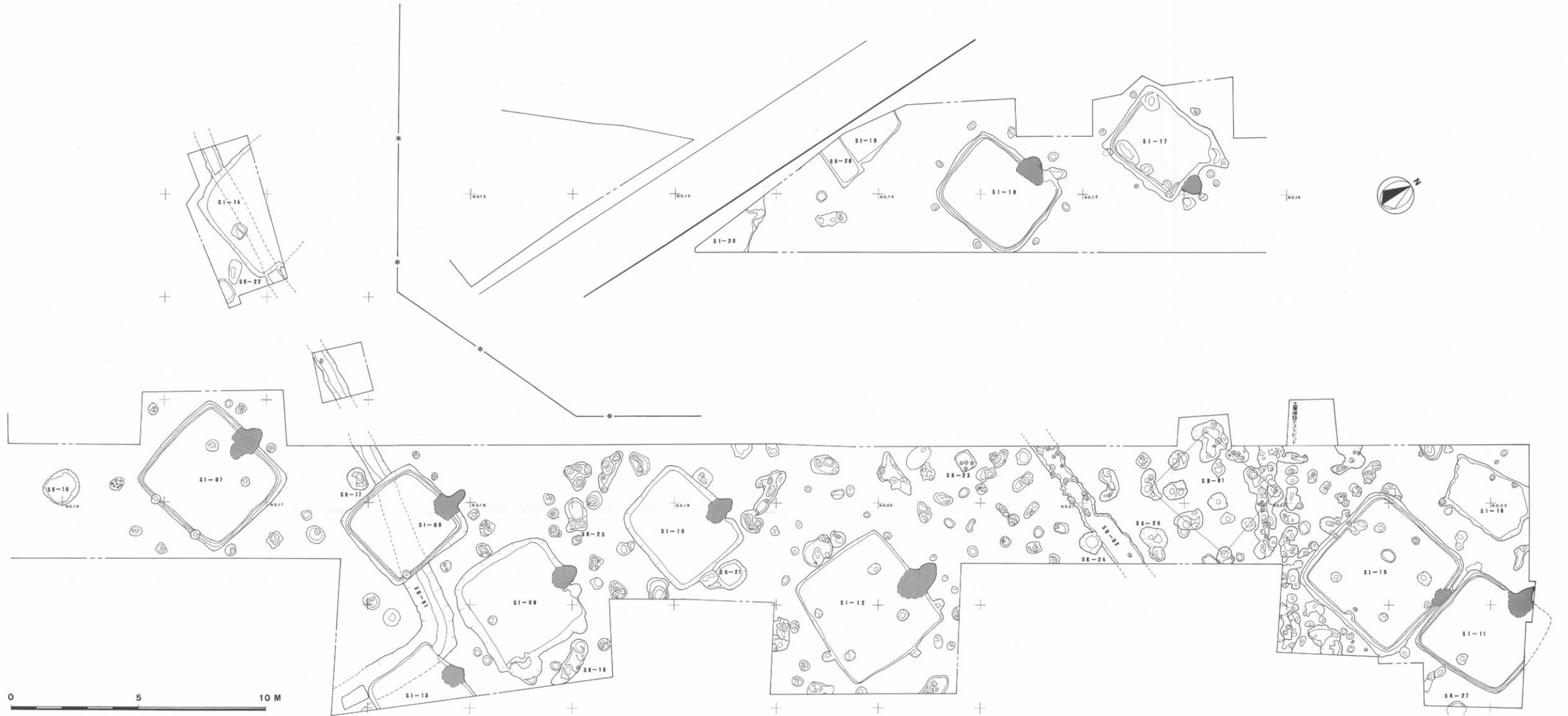
付図1 古稻荷遺跡周辺地形実測図



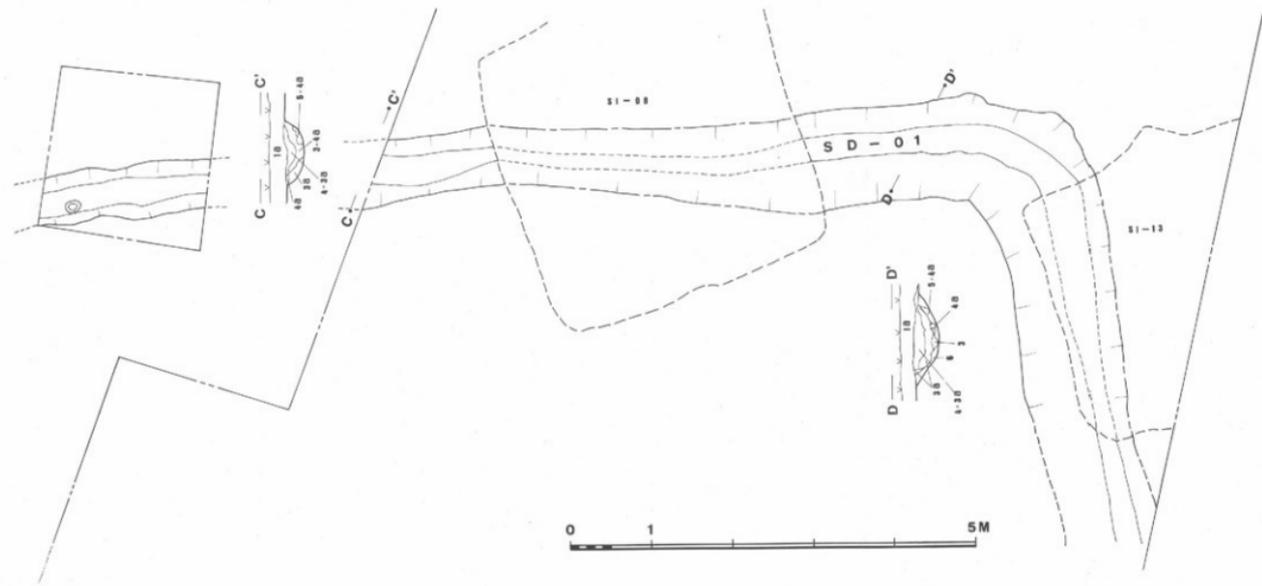
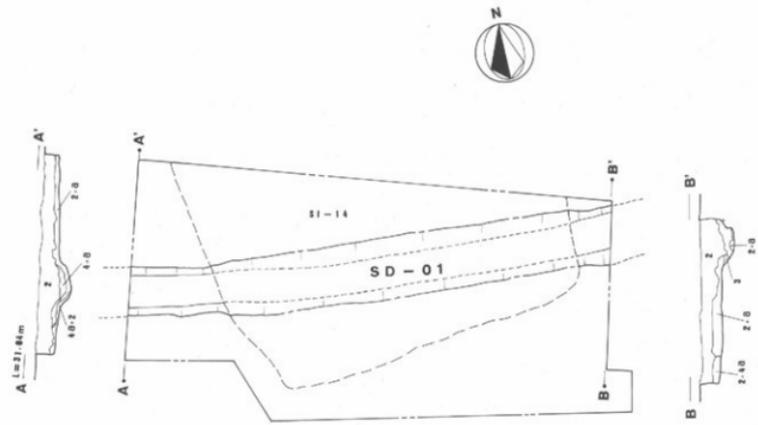
付図2 古稻荷遺跡グリット図



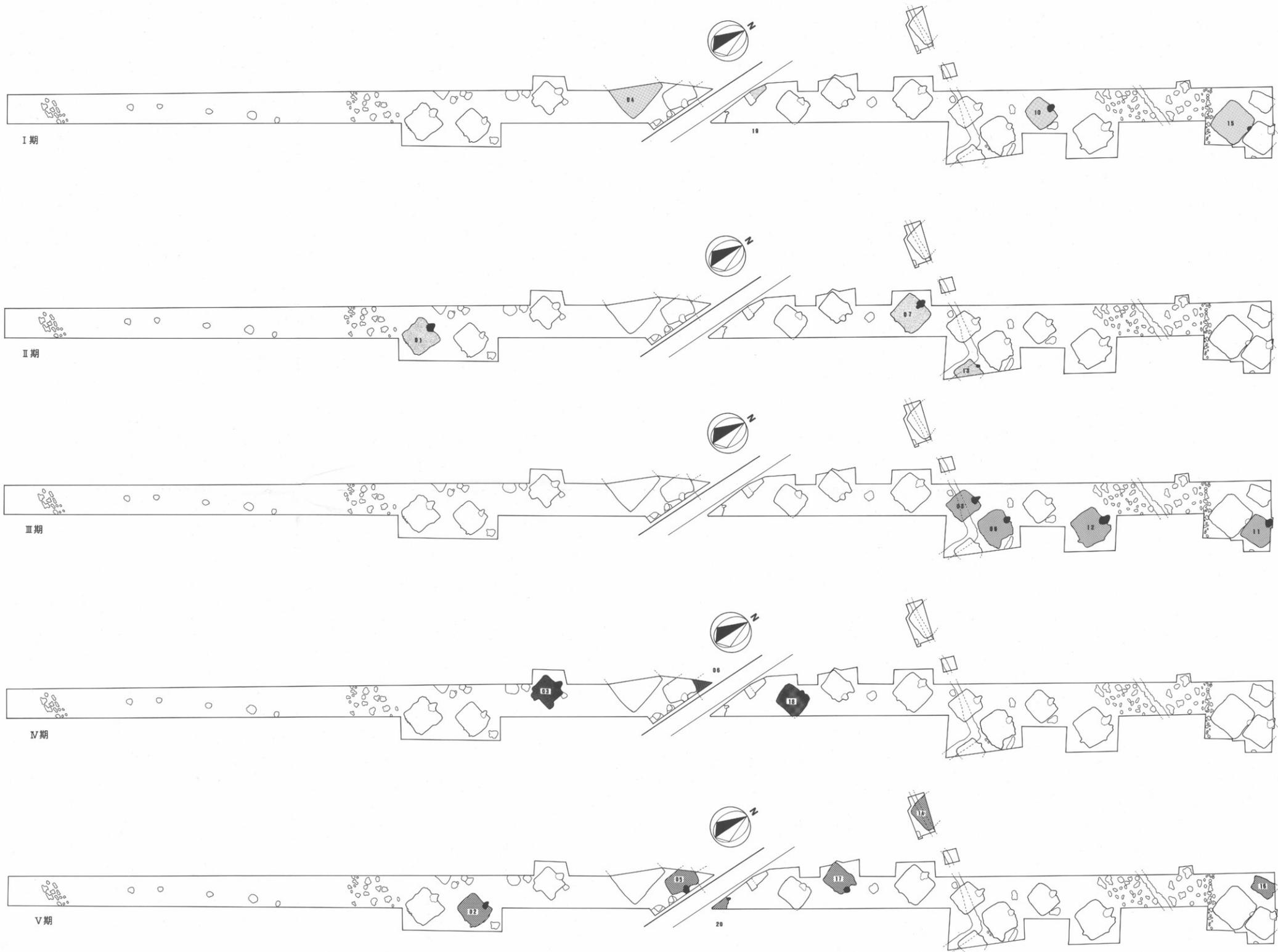
付図3 古稲荷遺跡B調査区遺構全体図



付図4 古稲荷遺跡C調査区遺構全体図



付图5 SD-01实测图



付図6 古稻荷遺跡時期別遺構図